
魔法少女リリカルなのは 蒼炎の守護神

T E

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 蒼炎の守護神

【Nコード】

N2506K

【作者名】

TE

【あらすじ】

これは、JS事件から数カ月後の少し落ち着いてきたときの物語

あらすじ

これは、JS事件から数カ月後の少し落ち着いてきたときの物語

機動六課がJS事件を解決してから数カ月、平穏な日々を過ごしていた。

そんなある日、聖王教会騎士カリムから一件の依頼が来る

その依頼からJS事件に匹敵するほどの大事件になることはそのとき誰も知るはずがなかった

リリカルなのはstrickers・hackのコラボです。楽しんでもらえれば嬉しいです。

ちなみに・hackでは一部のキャラと設定しか使わない思います。

精一杯頑張りますので是非読んで見て下さい

始まり

ここはミッドチルダ中央区画湾岸地区 古代遺失物管理部「機動六課」本部隊舎である

機動六課は数カ月前に起きたJS事件を解決した部隊であり「奇跡の部隊」とも呼ばれている

そんな部隊の訓練場に1人の女性と4人の少年少女がいた

「ハイ。今日の訓練はここまで、それぞれ今日の問題点と次のフォーメーションなどをレポートにして明日まで提出すること、いいね」

白い制服を着ている女性は高町なのは一等空尉、機動六課スターズ分隊長である

JS事件解決に貢献した1人

「はい！！」

トレーニング服を着た少年少女達は左からオレンジ色の髪をした少女はスターズ分隊のティアナ・ランスター二等陸士

青色の髪をした少女は同じくスターズ分隊のスバル・ナカジマ二等
陸士

桃色の髪をした少女はライトニング分隊のキャロ・ル・ルシエ二等
陸士

赤色の髪をした唯一の少年ライトニング分隊のエリオ・モンディア
ル三等陸士である

この4人はJS事件で活躍したFW陣である

なのは「それじゃ解散」

場所は変わって部隊長室

そこには2人の女性とその隣にいる妖精のような小人がいた

「いや、平和やな」

「そつだね。あれからなんも起きてないからね」

「いいことです」

「けどな」

「「？」」

「暇で退屈やな」と思つてな」

今の発言にズルツとすべる。ちなみに今発言した女性は機動六課を建てた張本人の八神はやて部隊長である

部隊長がそんなこと言つていいのだろうか

「はやてちゃん、不謹慎ですよ！！」

はやてに注意している小人はリインフォース？空曹長である
そしてはやてのユニゾンデバイスでもある
怒っているようだがちつとも怖くないむしろ可愛く見える

はやて「あはは、ごめん、ごめん」

「けど、はやてのその気持ち少しわかるかな」

この金髪の女性は機動六課ライトニング分隊長のフェイト・T・ハラウオン

J S 事件解決の貢献した1人

リイン「もう、フェイトさんまでえ」

はやて・フェイト「あはははは！」

ブブブブブ

平穏な会話から一つの通信が入る

「失礼します、八神部隊長」

映像に出た青年は部隊長補佐のグリフィス・ロウランである

はやて「どうしたんや？グリフィス君？」

グリフィス「はい、聖王教会騎士カリムから通信が入っています」

はやて「わかった。繋いでえな」

グリフィス「了解しました」

一旦映像が消えまた映る

「久しぶりね。はやて」

映った女性は聖王教会騎士団 騎士カリム
機動六課の後見人の1人

はやて「久しぶりやね。シスターシャツハも久しぶりです」

シャツハ「お久しぶりです、騎士はやて」

はやてが挨拶した女性はカリムの秘書的役割を勤めるシャツハ・ヌエラである

はやて「それでカリム、どうしたん？急に何かあったんか？」

カリム「ええ…、実は受けて欲しい任務があるの」

カリムは深刻そうな顔で言う

はやて「その任務内容は？」

カリム「それは

怖いものは怖い？

朝の訓練が終わりシャワーを浴びたFW陣は廊下を歩いていた

スバル「朝の訓練さ、いつもより軽くなかった？」

エリオ「そうですね、なんかあつたんでしょうか？」

キャロ「任務かなにかあるんじゃないでしょうか？」

ティアナ「そうかもしれないわね」

ピンポンパンポーン

ティアナ達が話していると一つの放送が流れる

はく各分隊長とFW陣は部隊長室に集合して下さいく

ティアナ「噂をすればね」

スバル「何だろうね、ティア！」

ティアは少し呆れたように、スバルは子供のようにはしゃいでいた

ティアナ「ウツサイ、このバカスバル！はやく行くわよ！」

そついいティアナは部隊長室に向かう

スバル「あつ！！待ってよティア〜！！」

スバルはティアを追いかけるため走り出す

そんな2人を見て笑いながら追いかけるエリオとキャロなのであった

なのはやフェイト、スバルたちは部隊長室に集合し、整列していた

はやて「どつやら集まったようやね。今日集まってもらったのは緊急任務についてや」

ティアナ「緊急任務ですか？」

はやて「そや、その任務内容は」

ゴクリ

はやて「迷子犬の探索や」

「」

全員がハアツといたげな顔をしてはやてを見る

フェイト「ちょっ、ちょっとなにいつてるのはやて!?!?違っでしょ!?!?」

フェイトが慌てたようにつつこむ

はやて「いや、なんか重たい空気やったから和ませよう思っつてな」

なのは「ニヤハハハ」

なのはヤスバルたち苦笑している

逆に変な空気になってしまったのは言っつてもない

はやて「まっ、まあ冗談はこの辺にして本題に入るか?」

ライン「最初からそうしてくださいです」

ため息をつきながら言っつライン

はやて「コホン、今回の緊急任務はロストロギア回収任務や」

エリオ「ロストロギア回収って　まさかレリックですか!？」

エリオは緊張した顔で聞く

はやて「違つとも言えないしそうとも言えないんや」

なのは「どういうことなの?はやてちゃん」

はやて「実はやな、そのロストロギアは第28管理外世界グリーマと
いうところの遺跡にあるらしいんやけどまだ誰も見たことがないら
しいんや」

キャロ「誰も見たことがない?」

はやて「そや、何回か他の局員や聖王教会の騎士たちが回収に向か
つたらしいんやけど、全滅したらしいんや」

ティアナ「ぜつ、全滅ですか!？」

はやて「せやから、戦力の高いうちら機動六課が呼ばれたんや」

なのは「なるほどね、だけど何で全滅しちゃたの?何か強いモンス
ターや罫が仕掛けられていたの?」

はやて「いや、そういうのではなくてやな?」

なのは「それじゃ、なんなの?」

はやて「それはやな　」

なのは「それは？」

はやて「幽霊のせいらしいんや」

「
」

またか、とはやての発言に冷たい視線を送るなのは達

はやて「ちよつ、止めてえな。その痛い子を見るような冷たい視線を！！これは本当のことなんよ！」

なのは「けど、はやてちゃんさつきも同じようなことしてたしねえ？」

FW陣「はい」

はやて「ガーン　。。。(泣)」

なのはだけではなくFW陣にもそんなことを言われて落ち込むはやて

フェイト「けどそれは本当のことなんだよ。みんな」

エリオ「そうなんですか、フェイトさん？」

はやて以外のみんなはフェイトのほうをみる

フェイト「うん、全滅した局員たちから聞いた話なんだけどね。その局員たちは全員こう言っているの”早く逃げないと蒼炎を纏った幽霊が来る”てね」

ティアナ「何なんですか？それは？」

リイン「どうやら、任務で言った局員たちは全員それしか言えないように魔法をかけられているようです」

なのは「なるほどね、ということは」

はやて「回収を邪魔する魔導師がいるちゅうことや！！」

復活したはやてはガバツと椅子から立ちそういった
ちなみに自分よりフェイトやリインの話のほうが真面目に聞いていたことにショックを受けダメージを受けていたいたのは秘密だ

はやて「つつわけで、今から一時間後1400時各自、準備して集合やー！」

全「了解!!」

スバル「」

会議が終わりティアナたちと歩いているスバル
なんだか元気がないようだが？

エリオ「どうしたんですか？スバルさん？」

キヤロ「顔色悪いですよ？」

そんなスバルに心配し声をかける2人

スバル「フェツ!？ううんなんでもないよ、なんでも!？ちよつと
お腹すいたな」

明らかに動揺しているスバル

ティアナ「あんだ、もしかして幽霊が怖いんじゃないの？」

面白半分に聞いてみるティアナ

スバル「そっそそそそんなわけないじゃん。なっとなななに

つてるの？ティア。わつ私は幽霊なんか、こつ怖くなんてないよ！
？それに幽霊なんかいるわけないじゃん！！バカだなくティア」

明らかに隠せてないスバルに苦笑するエリオとキャラ

ティアナ「スバル、後ろに」

スバル「えっ？」

ティアナの言葉に恐る恐る後ろをしてみるスバル、しかし後ろには
なにもなかった

スバル「だっ、だからティア、私は幽霊なんか怖くなんて

」

スバルは隣にいるはずのティアナのほうを向いたのだがそこには、
にっこりと笑っている白い着物を着た女性が立っていた

スバル「イツ、イヤ~~~~！？」

スバルはもの凄い速さで逃げていった

エリオ「ティアさん。なにしてるんですか？」

そうこれはティアナの得意魔法の一つフェイクシルエットである。
簡単に言えば幻術魔法だ

ティアナ「なんか面白そうだな〜と思ってね」

実際はスバルにバカ扱いされたのが少しムカツときたため脅かした

のである

エリオ「あはは、あれキャラロどうしたの？」

キャラロは立ったまま動かない。エリオは近づいて様子を見ると

エリオ「ティ、ティアさん、大変です！？キャラロが立ったまま気絶してます！？」

そうキャラロはエリオの隣にいたためティアナが幻術を使ったのを気づかなかつたのだ

ティアナ「えっ！？キャラ、キャラ大丈夫！？」

キャラロが目を覚ますのはそれから数十分後だったとか

探検、探索

第28管理外世界グリーマ・レーヴ

文化レベル0のなにもない世界

はやて「そんな世界に最近になって遺跡が発見されその中には推定Sランクのロストロギアがあるのがわかったそうなんや」

フェイト「けど、なんで今頃になって発見されたんだろう?」

なのは「そうだね、そんなロストロギアがあるのならすぐ気づくはずなのにね?」

「それは、今調査中なんだよ。なのは、フェイト、はやて」

3人が会話している中、声をかけたのは

なのは「あつ、クロノ君」

フェイト「久しぶりだね、義兄さん」

はやて「ほんまに久しぶりやな?クロノ君」

そうこの青年はクロノ・ハラウオン時空管理局本局 次元航空部隊
提督

そしてフェイトの義兄でなのはとはやてとの仲も深い

クロノ「そうだな。それにフェイト、義兄さんは止めてくれって言ってるだろっ?」

フェイト「あっ、ごめん。クロノ」

クロノの忠告に素直にしたがうフェイト

はやて「まあ、別にいいやんか、そのくらい。クロノ君もまんざら悪くないやろ?」

はやてはニヤニヤ笑いながらクロノを見る

クロノ「そんなわけないだろ、はやて。君は相変わらずだな」

クロノは腕を組ながらため息をする

なのは「ニヤハハハ」

フェイト「それにしてもこの任務の担当がクロノなんてびっくりしたよ」

はやて「そうやな。カリムからはなんも知らされてなかったかな」

クロノ「僕もびっくりしたよ。けど、どんなところよりも頼もしく感じるよ」

クロノは笑いながらそう言う

なのは「ありがとう、クロノ君。私たちも精一杯頑張るよ!」

なのはは、両手を握りしめガッツポーズをする

クロノ「期待してるよ。そろそろ時間だからブリッジに集合してくれ」

ちなみにここは、クロノが担当している艦船「クラウディア」である

なのは・フェイト・はやて「了解!!」

ここは艦船「クラウディア」のブリッジ

そこには機動六課のメンバーが揃っている

スバル「ねえ、ティア。なんでヴィーダ副隊長とシグナム副隊長はいないの？」

ティアナ「あんなねえ、今日の朝、なのはさんが”今日副隊長たちは本局のほうに出張している”って言ってたじゃない」

スバル「あれ？そうだったっけ？」

ティアナ「ちゃんと聞いてなさい、このバカスバル！」

情けないスバルに一発叩くティアナ

スバル「ううう、ごめんティア」

クロノ「そろそろいいかな？」

クロノは苦笑しながらスバルとティアナに問いかける

スバル・ティアナ「しっ、失礼しました!？」

スバルとティアナはすぐに謝る

これを見て本当に大丈夫なのだろうかと少し不安になるクロノであった

クロノ「それでは、任務内容の説明に入る」

全「はい!！」

全員先ほどとは違い真面目な顔をしている

クロノ「任務内容はロストギアの回収だがそのロストロギアがある遺跡には、おそらくニアSランクの魔導師またはモンスターがいる可能性がある。そのため、まずは先行隊としてまずは、スターズ分隊から出動してもらおう」

なのは・スバル・ティアナ「はい!！」

クロノ「そしてライトニング分隊とはやて部隊長は遺跡の外で待機・周辺の調査だ」

フェイト・はやて・エリオ・キャロ「はい!！」

クロノ「それでは、ロストロギア回収任務を開始する!！」

全「了解!!」

第28 管理外世界グリーマ

遺跡周辺

なのは「ここが例の遺跡か」

フェイト「結構、綺麗だね」

はやて「そうやな、遺跡って言うより教会みたいやな」

ティアナ「そうですね、周りは他の場所とは違って緑がありますし

」

スバル「綺麗だね。ギン姉に見せてあげたいよ」

キャロ「空気もおいしいです」

エリオ「確かこの中に地下へと繋がる穴があるんですよね？」

フェイト「そうだよ。とりあえず入ってみよう？」

はやて「そうやね。入ってみよか？」

遺跡の中

スバル「うわ〜〜!!」

リン「すごいです〜!!」

そこはまるで聖堂のような神秘的な場所だった

なのは「本当にすごいね」

フェイト「そうだねびっくりしちゃたよ」

はやて「ここに来てからびっくりすることばかりやな〜」

エリオ「あつ、皆さん。こっちに階段がありますよ」

エリオに呼ばれ向かうとそこには石でできた台座がありそのすぐ下に階段があった。

なのは「どつやらここのようなね」

はやて「そうやね、それじゃ予定通りにスターズ分隊は地下へロス
トロギアの回収、私とライトニング分隊はここと周辺の調査や!!」

全「了解!!」

スターズside

地下通路

なのはたちは今の所はなにも起きず順調に進んでいる

スバル「なにもないね、ティア？」

ティアナ「そうね、畏らしき痕跡も見当たらないわね」

なのは「うん。それに”蒼炎を纏った幽霊”も出てこないね？」

スバル「なっ、なのはさん！ゆっ、幽霊なんてなにかの見間違えですよ！」

スバルは今まで忘れていたらしく急に顔が青ざめる

ティアナ「スバル！あんたちよつと落ち着きなさい！幽霊なんているわけないじゃない！」

ティアナはスバルを落ち着かせるため声をかける

スバル「そうだよね、いるわけな《あああああ！！》いよね。

えっ？」

急に不気味な声が響き渡る

なのは「なに今の声？」

スバル「まっ　まさか本当に幽霊！？」

ティアナ「ちょっとスバル離れなさい!!」

スバルは恐怖のあまりティアナにしがみつく

なのは「レイジングハート（RH）」

なのははレイジングハートを構える

RH『エリアサーチ』

（作者は英語が全くわからないため日本語で記入します）

なのは周りの様子を探る

RH『魔力反応が一つこちらに向かって来ます』

なのは「スバル、ティアナ来るよ!」

スバル・ティアナ「はい!」

2人はデバイスを構え戦闘態勢に入った

スターズ分隊 side . . . end

ライティング分隊 & amp . はやて side

遺跡周辺

今、はやてたちは二組に別れて行動している

フェイトとはやては周辺を、エリオとキャロは遺跡の中を調べています

フェイト「」

フェイトは不安げな表情をしている

はやて「どうしたん？」

フェイト「うん、エリオとキャロは大丈夫かな？って思ってね」

はやて「フェイトちゃんは相変わらずの心配性なんやな？」

苦笑しながらフェイトを見るはやて

フェイト「だって」

はやて「あの子たちは、もう立派なストライカーや だから大丈夫」

フェイト「うん、そうだよね」

はやての言葉にフェイトは明るい表情になった

はやて「フェイトちゃんはまず、その親バカぶりをなんとかせなあかな？」

はやてはニヤニヤ笑いながら言った

フェイト「もう、はやてっいたら／＼／＼」

遺跡の中

キャラ「エリオ君、そっちはどう?」

エリオ「こつちにはなにもないよ、キャラ」

エリオとキャラは遺跡の中を隅々まで確かめている

キャラ「あっ、エリオ君!ちょっと来て!」

キャラがなにか見つけたらしくエリオを呼ぶ

エリオ「どうしたの?キャラ」

キャラ「うん、これ見て?」

エリオはキャラが指差した所を見る。そこは地下へと続く階段のすぐ近くにある台座であった

エリオ「なにか書いてあるね?」

キャロ「うん。なんて書いてあるかわかる？ エリオ君？」

エリオはもう一度書いてある文字を試みる

エリオ「うん、僕にもわからないや？ 一応フェイトさんに連絡してみよう」

キャロ「うん、そうだね！」

エリオがフェイトに通信を入れようとした

そのとき

ドガーン！

エリオ・キャロ「!?!」

いきなり地下のほうから爆発音が聞こえた

キャロ「エリオ君!?!」

エリオ「うん、急ぎよう!?!」

エリオとキャロはすぐにフェイトとはやてに通信を入れた

ライトニング分隊 & amp; はやて side . . . end

蒼炎の幽霊

地下通路

今なのはたちは蒼炎の幽霊と交戦中

なのは「レイジングハート!!」

RH「アクセルシューター」

スバル「マツハキャリバー!!」(MK)

MK「ロードカートリッジ」

スバル「リボルバー」

ティアナ「クロスミラージュ」(KM)!!

KM「イエス、マスター」

ティアナ「クロスファイヤー」

「「シュート!!」」

ドガン!

3人の魔法は見事に直撃した

しかし

スバル「うそ!？」

ティアナ「いったいどうなってるのよ!？」

なのは「確かに直撃したはずなのに」

そう、なのはたちはさっきから何度も魔法をぶつけているのだが蒼炎の幽霊はかすり傷どころか汚れすらついていない

「蒼炎球」

蒼炎の幽霊は蒼炎の塊を無数にだしなのはたちに襲いかかる

なのは「レイジングハート!！」

RH『プロテクション』

なのはは蒼炎の幽霊の攻撃を受け止める

スバル「ウオオオオオ!！」

「!？」

スバルはすぐに蒼炎の幽霊の後ろに回り込み蹴り飛ばす
はず
だった

スバル「えっ!??って うわあ!？」

スバルの蹴りは空を切った。そしてスバルはそのまま勢いが止まら

ず壁に激突した

ティアナ「スバル！」

スバルは頭さすりながらすぐに立ち上がった

スバル「大丈夫だよ、ティアア！　あの、なのはさん！！」

なのは「どうしたの？スバル？」

スバル「あいつの正体がわかったかもしれません！」

場所がかわって遺跡の階段前

エリオたちの通信をきいて飛んで来たフェイトとはやて、詳しい話を聞いていた

はやて「なるほど、その大きな音を聞いてから念話や通信を入れても返事がないちゅうわけやな？」

エリオ「はい！！」

キャロ「おそらく敵と交戦中だと思っんです！」

フェイト「どうするはやて？」

フェイトの問いにはやては手を顎にあて考える

はやて「まあ、なのはちゃんがいるから大丈夫やと思うんやけど
」
そう考えていると

リン「はやてちゃん!!すぐにそこから離れて下さい!その階段
から膨大な魔力反応です。こちらに向かっていますです!!」

はやて「なんやて!?!」

いきなりのことで戸惑うはやて達

フェイト「エリオ、キャロ!!そこから離れて!!」

エリオ「はい!!ストラダ(ST)!!」

ST『ソニックムーブ』

エリオはキャロの手を掴み階段から離れるすると

ドガン!!

まるで火山の噴火のような勢いで階段から蒼炎の火柱立った

はやて「なっ、なんやこれ!?!」

あまりのことに呆然とするはやて

火柱はすぐになくなり消えた

フェイト「はやて!!」

はやて「うん！エリオ、キャロ！ウチらは、なのはちゃんの援護に向かう。2人はここで待機、そして、このことをクロノ提督に伝えておいてえな!!」

エリオ・キャロ「了解!!」

フェイトとはやては猛スピードでなのはたちのもとへと急ぐ

地下通路

なのは達は蒼炎の幽霊の攻撃をくらってしまっていた

なのは「スバル！ティアナ！大丈夫!？」

どうやらなのはなんとか防ぎきれていたようだがバリアジャケットはボロボロであった

スバル「はい」

ティアナ「だ　大丈夫です」

そうは言ってるが2人共モロにくらったらしく立っているのがやっ
とだ

「あああああ！！！」

蒼炎の幽霊は次の攻撃のため構える

なのは「クッ！」

なのははスバルたちの前に立ち構える

「蒼炎球」

蒼炎の幽霊が攻撃魔法唱えようとしたが

「フリーレンフェッセルン（凍てつく足枷）！！！」

パキキーン！

蒼炎の幽霊はその声が聞こえたと同時に凍ってしまふ

なのは「この魔法は！？」

はやて「なのはちゃん、大丈夫かいな！？」

なのは「はやてちゃん、フェイトちゃんも！！！」

フェイトはすぐになのはのもとへ向かう

フェイト「なのは、大丈夫？それにスバルとティアナは！？」

なのは「大丈夫だよ、フェイトちゃん。2人はそこにいるよ」

はやて「大丈夫かいな2人共？」

はやては2人の状態を聞く

スバル「なっ、なんとか」

ティアナ「大丈夫　あっ！？八神部隊長、前！！」

はやてがティアナに前を向いた瞬間、凍っている蒼炎の幽霊から蒼炎が噴き出る

フェイト「なっ！？」

パリーン！！

氷がわれて蒼炎の幽霊が現れる

なのは、フェイト、はやてはデバイスを構える

「ガアアアア！！」

蒼炎の幽霊は叫んだ瞬間蒼炎の塊となり、奥に行ってしまう

スバル「　これって？」

ティアナ「逃げた　のかしら？」

フェイト「そのようだね？」

―安心している中はやては2人の様子を見て

はやて「　ここからは私とフェイトちゃんそしてなのはちゃんの
三人で任務を続けるで！2人はエリオたちと合流し、そこで待機や」

ティアナ「えっ!？」

スバル「そんな!？」

はやての言葉に愕然とする2人

なのは「しょうがないよ、2人共立っているのがやっつとでしょ？そ
れに、これから何が起きるのかわからないからね？」

フェイト「エリオたちが上で待機してるからそこでしっかり休んで
ね？」

なのはとフェイトは2人を説得する

はやて「わかった？2人共」

スバル「はい!!」

ティアナ「わかりました！」

はやて「そんじゃ、行くで2人とも!!」

なのは・フェイト「了解!!」

なのは、フェイト、はやての三人は蒼炎の塊を追いかけるところに奥へと向かう

そしてこれからはたちは一人の青年と出会う

この出会いは運命だったのであるだろうか？

そしてこの出会いが大きな事件になるとは誰も知らない

出会い（前書き）

え〜、この小説を見て下さっている閲覧者様

前書きを書くのは初めてですので変なところがあってもスルーをお願いします

そして次の話から主人公が出て来ます

もちろん、hackのあの人は

わかる人にはわかっていますよね

さらに敵も出て来ます

名前とか色々変わっていますがそこそこは気にせず楽しんでいただけたら幸いです

それでは続きをどうぞ

出会い

?????side

地下最深部

さっきまでなのはたちと戦っていたはずの蒼炎の幽霊がいた

しかしさっきまでの殺気は感じず穏やかな感じである

そして足元にはミッド式でもベル力式でもない見たことのない魔法陣らしきものがある

すると先程なのはたちが追いついた蒼炎の魂が身体の中に入る

「フウ、今回の人達はもの凄い実力者みたいだ」

ため息をつきながらしゃがみこむ

「正直追いつくのは難しい　1対1に持ち込めるならなんとかするんだけど」

”考える人”のポーズして考えている

「それにしてもあのタイミングで援軍なんて運が悪すぎだよ」

立ち上がりストレッチを始める

「まあ、一々文句言っても仕方ないか」

ストレッチも終わり準備完了し、顔を叩き気合いを入れる

その瞬間

なのは「時空管理局の者です！武器を捨て投降してください！」

ここでなのはたちが到着

「 タイミング良すぎじゃない？」

「??? side . . . endなのは「時空管理局です！武器を捨て投降してください！」

最深部に着いたなのはたちはすぐに乗り込みデバイスを構える

「 タイミング良すぎじゃない？」

何か言っているがここはスルーするなのはたち

なのは「あなたはさっきの!？」

フエイト「 あなたが管理局の魔導師たちに被害をあたえた人ですか？」

フエイトは問いかける

「管理局の魔導師？ ああ、最近、ここにある大事な本を盗みに来た人達のことかな？」

はやて「本？ それはどこにあるんや？」

「どこ？つてあそこにあるけど」

と素直にその本がある場所を指差す

そこには遺跡の階段前にあった台座の上に一冊の本が置いてある

なのは はやてちゃん、フエイトちゃん！

フエイト うん、あれはもしかしなくても

はやて ロストロギアや！

なのはたちは本来の目的であるロストロギアを見つけることができたが

「すまないけど、あれを渡すわけにいかない」

なのはたちに立ちふさがるように前に立つ

なのは「どうしてですか？あれはとても危険な物なんですよ！」

「危険な物だからこそ、あれはここに置いておかなければならないんだ」

はやて「ごごじゃ、いつ暴走するかわからないんやで?」

「いや、その心配はまずないよ。これはあそこから動かしてしまったら封印がとけてしまう仕組みになっているんだよ!」

フェイト どう思う?」

はやて 嘘付いてる可能性もあるけど

なのは 私は信じるよ。顔は薄暗くてよく見えないけどあの人の目を見ると信じたくなくなっちゃうの

フェイト フフツ、なのはもなんだ。実は私も同意見なんだ

はやて なのはちゃんもフェイトちゃんも私と同意見なんやね

なのは そうみたいだね。それじゃ

なのはたちは話がまとまったらしくなのはが一步前にでる

なのは「わかりました。あなたの話を信じます」

「えっ!? 本当!?!」

フェイト「はい。その代わりに詳しいことを私たちに教えて下さい」

「うーん 話したくないけど 仕方ないか」

そのとき、なのはたちは気づいていなかった

真の敵はすぐ側にいることを

「いや、話を通じる人たちでよかったよ!」

はやて「それはこっちのセリフやで? うちらはあんさんのことを”蒼炎を纏いし幽霊”で聞いていたんやで? どんな化け物やと思ったで?」

「僕ってそんな風に見られていたの? ちょっとショックだよ」

なのは「ニヤハハハ。けどあんなに殺気を出しながら襲われたら誰でもそう思っちゃうよ?」

なのはは笑いながらそういう

「あ、僕の”影”って何故か怖く見えるんだよね」

納得したように頷く

「フェイト」影?」

フェイトはなにそれといった表情で首を傾げる

「うん。僕的能力なんだけどそれは後で教えてあげるよ」

フェイト「うん」

なのは「あっ、そっだー!」

ポンと手を叩くのは

「「どうしたの?」

なのは「あなたのお名前教えて!」

はやて「そっいえば聞いてなかったなあ」

なのはの言葉に頷くはやて

「そっいえば言っけなかつたね?僕の名前は」

フェイト「名前は?」

「ジョン!!スミス!」

何故かガッツポーズをしながらいうジョン?

なのは「それじゃ、ジョ」「ちなみに偽名だよ」「んってフエエ!?!」

はやて「偽名かいな!?!」

なのはは盛大に驚き、はやてはすぐにツッコム

ナイスリアクションにナイスつつこみ

「ハツハハハハ！面白いね、君たちは？それにこんなに笑うのも久しぶりだよ！」

盛大に笑っている

なのは「ムウ~~~~ヒドいよ~！」

なのはは頬を膨らませばながは怒っている
なんだかもう任務っていう雰囲気ではなくなっている

「ゴメン、ゴメン。僕の本当の名前は」

フェイト「名前は？」

「僕はカイト。カイト＝グランツ。これは本当だよ？」

なのは「それじゃこっちからも自己紹介するね。カイト君」

なのははまだ怒っているのか機嫌が良くない

フェイト「うん。私はフェイト・T・ハラオウンです。よろしくね、カイト」

はやて「うちは、八神はやてや。よろしくな、カイト君」

なのは「そして私は高町なのはだよ。よろしくね」

カイト「うん。よろしく」

あらかた自己紹介も終わった

フェイト「それじゃ、早速なんだけど話を聞かせて欲しいんだけど？」

フェイトはカイトに話を要求する

カイト「わかった。それじゃ」

はやて「あつ、ちょっと待って」

はやてがカイトを止める

カイト「何かな？」

はやて「あんな、外に仲間を待機させとるんやけど、今の状況を伝えたいんやけどええか？」

カイト「うん、いいよ。ちょっと待ってて」

そういうとカイトは手からモニターを出しなにかを打ち込んでいる

カイト「これで外と連絡できるはずだよ」

はやて「ありがとな」

はやては外で待機しているティアナに通信を繋ぐことにだが

はやて「なっ!?!」

はやてが見たものとは?

時間は少しさかのぼる

FW陣side

なのはたちと別れたスバルとティアナは無事にエリオとキャロと合流した

そして今はキャロに回復魔法してもらっている

スバル「イタタツッ!」

キャロ「あっ、ごめんなさい。大丈夫ですか?」

スバル「うっ、うん。平気平気!」

スバルは笑顔で答える

エリオ「それにしてもスバルさん達にここまでダメージを与えるなんて

キャロ「とても強い相手だったんですね

ティアナ「ええ、あのまま隊長達が来なかったら私とスバル
下手したらなのはさんまで撃墜されていたわ」
下

エリオ「そつ」

キャロ「そんな」

なんだか暗い雰囲気になるFW陣達

スバル「大丈夫！！次戦うときは絶対に勝てるよ！！」

スバルは元気よく立ち上がりグツと手を握りしめる

エリオ「そつ、そうですよ！」

キャロ「次はきつと勝てます！」

エリオとキャロもスバルと同じように手を握りしめる

ティアナ「はあく、あんたね そんななんの根拠もないことを言うもんじゃないわよ」

ティアナは呆れたようにいうとスバルは少しシュンと落ち込む

ティアナ「 まあ、最初から負ける気でいたら勝てるものも勝てないものね？そうね、次は勝てるわよ！」

ティアナは笑顔でスバルたちについて

スバル「ティアア~~~~！！」

スバルは感激のあまりティアナに抱きつく

ティアナ「ちよっ、ちよつと離れなさい。バカスバル！」

スバル「照れなくてもいいのに」

ティアナ「照れてな〜い!!」

エリオ「アハハ」

キャロ「フフフ」

そんなスバルとティアナのやりとりで元気を取り戻す

そんなときに一つの通信が入る

ティアナ「あっ、クロノ提督!!」

そう通信はクロノからであった。FW陣達はすぐに敬礼をする

しかしなんだかクロノの様子がおかしい

クロノ「君たち!!はやくそこから撤退するんだ!!」

クロノはとても慌てている

スバル「撤退!?!」

ティアナ「どういうことですか!?!」

スバルたちは急な撤退命令に驚く

クロノ「君たち以外の魔力反応が現れたんだ。調べてみたらオーバースランクの」

ティアナ「クロノ提督!？」

急に通信が途絶える。繋ごうとしても繋がらない

ティアナ「いったい何が」

ドカーーン!!

FW陣「!？」

ドアが急に吹き飛ぶ

そしてそこから1人の男が現れる

その男は白の仮面とマントを付けている

ティアナたちはその男と目を合わせた瞬間悪寒がはしる

ティアナ「みんな!来るわよ、構えて！」

スバル「わかった！」

エリオ・キャロ「はい！」

ティアナのかけ声とともにスバル達はデバイスを構える

「ガルバジーク」(GZ)「

剣型のデバイスらしきものをだす

それは長さがその男ぐらいありその男以上の威圧感をだしている

GZ『ナイツオブデストロイ』

ティアナ「なっ!?!」

スバル「うわあああああ!?!」

無数の斬撃がティアナ達を襲いかかりその瞬間、ティアナ達の悲鳴が響き渡った

FW side . . . end

混沌帝王

遺跡最深部

なのはたちは繋げた映像を見て愕然となる

なのは「そつ、そんな!?!」

フエイト「エリオ、キャロ!?!」

カイト「これは、酷い」

映っていたのは至る所に傷痕がある遺跡の中、そして体中傷だらけで倒れているFW陣達であった

はやて「誰か!?!誰か応答してや!?!」

必死に呼びかけるはやて

ティアナ「八神 部隊長」

なのは「ティアナ!?!」

返事したのはティアナであった
しかし意識が朦朧として虫の息状態であった

はやて「一体なにがあつたんや!?!」

ティアナ「 八神部隊長 気をつけて下さい そつちに S

ランク オーバーの 魔導師が 「

はやて「なんやて!？」

カイト「高町!!後ろ!!」

なのは「えっ?」

カイトの叫び声でなのはが後ろを向いた

そこには白の仮面とマントをした男が今にもなのは斬りかかろうと
剣を振りかぶっていた

フェイト「なのは!？」

ザシュ!

なのは「えっ?」

なのは斬られると思いとっさに目をつぶっていた

しかしいつまでたっても痛みが来ない

恐る恐る目をあけてみる、なのはは自分の目を疑った

なのは「カ、カイト 君?」

それは左腕が斬り落とされ血だらけになっているカイトであった

フェイト「カイト!!」

はやて「カイト君!!」

フェイトとはやてはカイトのところへかけつける

カイト「やっぱりまだ体が鈍ってるや。反応が遅れた」

カイトは痛がった様子に見えず余裕の表情だ

はやて「カイト君!!大丈夫なんか!？」

カイト「うん!この程度は大したことないよ!!」

心配するはやてに笑顔を向けるカイト

フェイト「けど左腕が斬られているんだよ!？」

カイト「アハハ、僕はただの人間じゃないんでね。まあ、見ててよ」

そういうとカイトは斬られた自分の左腕を拾い上げ傷口につける

カイト「蒼炎の光」

カイトの左腕に蒼炎が纏った

はやて「こっ!？」

フェイト「これは!？」

2人は驚いた

カイトの左腕に纏った蒼炎が消えたと思ったら左腕はきれいにくっついていた

「なるほど、貴方は神の加護を受けし者でしたか」

フェイト・はやて「!?!」

2人は声をしたほうを向く

そこには少しマントが焦げている仮面の男がいた

カイト「やっぱりあの程度の攻撃では、やられないか?」

「正直私も驚いていますよ。まさかあのタイミングで庇っただけではなく、反撃してくるとはね」

はやて「あの一瞬でそんなことが!?!」

フェイト「私でも反応できなかったのに!?!」

2人は驚きが隠せない

カイト「そんなことはどうでもいい。それより何故、貴様がその剣を持っている!」

カイトは仮面の男が持っている剣を指差す

「やはり知っていましたか。この”魔剣ガルバジーク”を」

フェイト「魔剣」

はやて「ガルバジーク？」

「すみませんが、遊んでいる暇はありませんのでね」

仮面の男は剣を地面に突き刺す

カイト「ヤバい！？みんな飛べ！！」

フェイト「えっ？」

その瞬間カイト達の足元黒い手が飛び出す

「デモンズハンド」

フェイト「なっ！？」

はやて「しもつた！？」

フェイトとはやては黒い手に掴まれ身動きできなくなる

カイトはなのはの手をつかみ回避した

カイト「くっ、しまった！」

「やはり貴方は避けましたか」

カイト「高町、僕は奴の相手をする。その間に2人を助け出すんだ、いいね！」

なのは「ちよつと待ってカイト君」

なのはは深刻な顔をしながらカイトを止める

カイト「どうしたの？」

なのは「私があの人を相手をするよ」

カイト「止めといた方がいい高町。今の君では相手にならない」

カイトはなのはの意見をすぐに却下する

なのは「大丈夫だよ！体の怪我は見た目ほど酷くないよ！」

カイト「駄目だ」

なのは「なんで!？」

カイト「その理由がわからないなら、行かせるわけにはいかない」

カイトはそう言うと仮面の男に突っ込む

なのは「」

なのはは納得できていないがフェイトとはやてのもとへと向かう

カイトside

カイトと????は武器を構えながら向かい合う

カイト「おい、貴様！その剣がどれほど恐ろしいものか、わかって
いるのか？」

「わかってますとも、これは”天災の剣”とも云われていますからね」

仮面の男はにっこりと笑いながら答える

カイト「それだけじゃない！それは”天災の剣”でもあり」

「冥王を復活させるための鍵でもある、でしょうか？」蒼炎の守護
神”・黄昏の騎士団団長”カイト”グランツ君」

カイト「!?!」

「フッフ、何故知っているんだと顔にかいていますよ？カイト君」

カイト「貴様 一体何者だ!!」

カイト今までにない怒気をだしている

「私はヘルバ。ヘルバ”エルディ」

そついうと仮面の男は仮面を取る

カイト「なるほど、それならそれを持っているのも納得がいく。」

混沌帝王ヘルバ”、だが貴様はあのとき死んだはず、何故生きてい
る？」

ヘルバ「フッフ、あのときは本当に死ぬかと思いましたよ」

うんうんと頷くヘルバ

ヘルバ「おっと、昔話している場合じゃありませんね」

ヘルバは武器を構える

カイト「僕がそんな簡単に通すと思う？」

カイトも武器を構える

ヘルバ「そうですね、まともになり合えばただじゃすまないでしょう。しかしまともじゃない手を使ったらどうでしょうか？」

ヘルバの魔力が上昇する

カイト「これは　まさか!？」

カイトはヘルバの企みに気づき、走り出す

ヘルバ「ガルバジーク！」

GZ『ナイツオブデストロイ』

ヘルバの攻撃はカイトではなくのはたちに向けられる

カイトside...end

なのはカイトに言われた通りにフェイトとはやてのもとへ向かう

なのは「フェイトちゃん、はやてちゃん大丈夫!？」

なのははすぐに2人を助け出した

フェイト「ありがとう、なのは」

はやて「助かったわ」

なのはに礼をいうフェイトとはやて

なのは「ううん。それよりも早くカイト君の援護に」

なのはがカイトの援護に行こうとしたそのとき

RH『マスター、高ランク殲滅魔法がきます』

なのは「くっ」

なのはは攻撃に備えるため防御の姿勢をとる

カイト「高町退いて!!」

カイトがなのはの前に現れる

カイト「高町早く2人を連れて逃げる!!」

カイトはなのはにそういうがなのはの様子がおかしい

なのは「 やだ」

カイト「えっ?」

なのは「やだ やだやだやだやだやだ!!」

なのはなにを思ったのかヘルバの魔法に突っ込む

フェイト「なのは!!」

はやて「なのはちゃん!!」

カイト「くっ ハラオウンに八神!!高町は僕が追う。君達はここから離れるんだ!」

フェイト「えっ!?!でも」

はやて「 了解や!なのはちゃんを頼むで」

苦汁の選択だったのであろう、悔しそうな顔をするはやて

フェイト「はやて うん!なのはをお願いします!」

フェイトもはやての意志を尊重しカイトに任せることに

カイト「うん、任せて!!」

カイトはすぐになのはを追うが

カイト「あっ！ハラオウン、八神！！言い忘れたことがあった！」

いつの間にか戻ってくるカイト

フェイト「どっ、どうしたの？」

カイト「もし流れ弾がきたら防がず、避けるんだ！いいね？」

はやて「わかったで！」

カイト「よし！！”蒼炎舞”！！」

カイトは蒼炎を纏いなのはを追う

なのは「私は逃げちゃいけない　逃げちゃいけないんだ！」

なのははそう言いながらデバイスを構える

なのは「レイジングハート！！」

RH『ロードカートリッジ』

なのは「デイバインバスターー！！！！！！」

なのはのデイバインバスターがヘルバのナイツオブデストロイが激

突するが

デイバインバスターがまるで煙のように掻き消された

なのは「そんな!?!」

そのまま無数の刃がなのはを襲いかかる

RH『プロテクション』

とっさに防御魔法を使う

パキイン

それも糸も簡単に破られなのはに一発当たってしまった

なのは「くっ!?!」

そのまま無数の刃が襲う

その直前、なのはの目の前に蒼炎の塊が現れる

なのは「あっ!?!」

ボワアと爆発したかと思いきやそこから蒼炎を纏ったカイトが現れる

カイト「蒼炎舞”百花繚乱”」

次の瞬間カイト達のまわりにあつた無数の刃は全て消滅する

カイト「くっ!?!」

カイトはいきなり膝をつく
どうやらヘルバのナイツオブデストロイは完全には防ぎきれなかつたようだ

カイトの体には無数の傷がある

なのは「カイト君!? 痛っ!?!」

なのはも足に怪我を負い動けない

ヘルバ「やっぱりね、君なら絶対に助けに行くと思いましたよ」

なのは「えっ!?!」

なのは声がしたほうを見るとそこには台座の上に座るヘルバがいた

ヘルバ「あなたもバカですね。この”黄昏の碑文”よりもその女たちを選ぶなんてね。まあ、予想通りでしたがね」

カイト「くっ (ヤバい、ダメージをもらいすぎた。”蒼炎の光”を使ってもその間に黄昏の碑文が)」

ヘルバが黄昏の碑文と呼ばれる本に触れた瞬間、いきなり光り輝いた

はやて「なんなんや、これ!?!」

カイト「封印が解放されてしまったんだ どうしよう? ハラオウン」

フェイト「どうしようっていわれても」

光が収まりカイトたちが見たものは

はやて「なんやあれ!？」

カイトたちが見たもの

ヘルバ「とうとう手に入れましたよ。”A I D A”を!！」

ヘルバの前には”黄昏の碑文”といわれる本

体のまわりには黒い泡が浮いている

なのは「アイ」

フェイト「ダ？」

呆然と見ているのはとフェイト

カイト「やはり狙いは、それだったか」

カイトは深刻な顔をする

ヘルバ「フッフ、これで例の計画がはかどりますよ」

はやて「計画ってなんや!！」

はやてがヘルバに問いかける

ヘルバ「教えてあげたいのは山々なのですが、こちらも忙しい。また今度教えてさしあげますよ。お嬢さん」

そっぴいながら転移魔法を使おうとする

カイト「油断したな、ヘルバ！」

ニヤツと笑うカイト

ヘルバ「なっ!?!しまった!?!」

ヘルバは後ろ振り向くと蒼炎の塊が浮いている

カイト「蒼炎の影」

そっぴいとなのはたちの前にいたはずのカイトが蒼炎の塊から出てくる

カイト「夢幻繰武」

カイトがヘルバに無数の斬撃をくらわす

カイトの夢幻繰武をくらったヘルバは吹き飛ばされるが着地する

ヘルバ「今のは少し危なかったですよ」

余裕の笑みをするヘルバだが

カイト「これが何かわかるかな？」

そういうとカイトはなにかをヘルバに見せる

ヘルバ「 やられましたね 」

カイトが持っているのは黄昏の碑文

カイトは攻撃の合間に取り返していたのだ

カイト「これを盗られるわけにはいかねえな、いかねえよってな」

ヘルバ「まあ、いいでしょう。目的のものは手に入りましたからね」

宙に浮かぶヘルバ

ヘルバ「それでは私は失礼しますが、あなたたちにプレゼントを差し上げましょう」

ヘルバは自分の手から黒い塊を出す

カイト「くっ　　！」

カイトは武器を構える

ヘルバ「Present for you」

ヘルバは黒い泡を放つ

カイト「させるか！！」

カイトは黒い泡に攻撃するが

カイト「なに!?!」

黒い泡はカイトを避けるように分裂しなのはたちに向かう

カイト「みんな、逃げろ!?!」

カイトは叫ぶ

はやて「フェイトちゃん!?!」

フェイト「うん!なのは!」

フェイトは怪我をしているなのはを連れて行くために手を掴む

なのは「

しかしなのははその手を振りほどく

フェイト「なのは!?!」

なのはの行動に驚くフェイト

なのは「レイジングハート!?!」

なのははレイジングハートを構える

はやて「なのはちゃん!?!なにしてるんや!?!」

フェイト「そっだよ、なのは！！早く手を」

なのは「うるさい！！」

フェイト・はやて「！？」

なのはが怒鳴ったことに驚くフェイトとはやて

なのは「私は逃げない！！逃げるわけには行かないの！！」

そっいうとなのはは黒い泡に突っ込む

フェイト・はやて「なのは「ちゃん」」

なのは「デイベインシューター！！」

なのはは黒い泡に攻撃するがすり抜ける

なのは「えっ！？ きゃああああ！！」

黒い泡がなのはを襲った黒い泡に襲われたなのはは倒れる

ヘルバ「それでは、頑張つて下さいね。”蒼炎の守護神”君」

そっいうとヘルバはいなくなる

カイト「チッ！」

カイトは急いでなのはたちのところへ向かう

なのは「アアアアアアアア!!」

非常に苦しむなのは

フェイト「大丈夫、なのは!!」

フェイトはなのはに話しかける

はやて「なのはちゃん!!」

はやてもなのはのもとへ向かおうとするがカイトに止められる

はやて「カイト君?」

カイト「ハラオウン!!高町から離れるんだ!!」

カイトは必死に叫ぶ

フェイト「えっ!?!」

フェイトはカイトの発言に驚く

そのときであった なのはに異変が起きたのは

なのは「ハアアアア!!」

フェイト「きゃ!?!」

なのは急にフェイトを吹き飛ばす

そしてなのはのまわりには先程のヘルバのように黒い泡が浮いている

カイト「ヘルバめ こんなプレゼントいらないよ」

はやて「カイト君。なのはちゃんに一体なにが起きたんや?」

カイト「高町はAIDAに侵食されてしまったんだ」

はやて「それって!?!」

急に桜色の魔力弾がカイト達を襲う

フェイト「バルディッシュ(BD)」

BD『ディフェンサープラス』

フェイトがそれを防ぐ

はやて「フェイトちゃん!!無事やったか」

フェイト「うん。けど、大変だよ、はやて。なのはのリミッターが解除されてる」

はやて「なんやて!?!」

予想外なことに驚くはやて

カイト「5分だけ時間を稼いで欲しい、そうすれば高町を止めることが
とができる準備が調う」

逃げない理由（前書き）

私は逃げない

みんなを守るために

みんなと笑うため

後悔をしないために

そして

1人ぼっちにならないために

逃げない理由

はやて「 わかったで！いくでフェイトちゃん！！」

フェイト「うん！」

はやてとフェイトは時間を稼ぐためなのはそのところへ向かう

カイト「それじゃ始めるぞ！！」

カイトは”黄昏の碑文”を取り出す

そして手をかざしなにか詠唱を始める

カイト「我は女神アウラより生み出されし騎士であり、蒼炎を受け継ぐものなり

今この時より封印されし八相の力を解放し全てを守る源となれ」

詠唱が終わると黄昏の碑文が光だしカイトを包む

フェイト&はやて side

フェイトとはやては時間を稼ぐためなのはと交戦中

フェイト「プラズマランサー」

フェイトのまわりに無数の金色の魔力弾が現れる

フェイト「ファイア」

魔力弾はなのはに向け発射された

なのは「 アクセルシューター」

無数の桜色の魔力弾が現れる

なのは「 シュート」

なのはのアクセルシューターはフェイトのプラズマランサーにぶつ
け相殺する

なのは「
」

なのはのまわりに無数の短剣が現れる

はやて「ブラッティタガー」

無数の短剣がなのはにあたる

なのは「
」

なのはは防御魔法で防ぐ

はやて「さすがは”エースオブエース”のなのはちゃんやね。二つ

名は伊達やないで」

フェイト「うん。攻撃は全て防がれるし、私たちの動きを読んで正確に攻撃してくる」

なのは「 デイバインバスター」

なのははすぐに反撃する

BD『ソニックムーブ』

フェイトは高速移動魔法で避ける

そしてそのままなのはの背後へ回り込む

フェイト「ライトニングバインド！」

フェイトは捕縛魔法でなのはの動きを封じる

はやて「来よ 白銀の風 天よりそそぐ矢羽となれ」

そしてはやては高ランク砲撃魔法の詠唱をしている

なのは「

そんな状況でも平然としているなのは

はやて「フリースヴェルグ！」

魔法は放たれなのはに直撃する

あまりの威力に砂埃がまう

フェイト「ちょっと、やりすぎじゃない?」

はやて「けどリミッター解除してるなのはちゃんか相手ならこれくらいせなあかんと思ったんやけど?」

しゃべっている中、煙が晴れる

なのは「」

そこには無傷のなのはが立っている

フェイト「そんな!?!」

はやて「あれをくらって無傷やなんて!?!」

あまりのことに愕然とする

その瞬間

フェイト「!?!」

はやて「しもつた!?!」

なのはに捕縛魔法をくらう

なのは「スターライトブレイカー セット」

RH『カウントします』

なのはの最大砲撃魔法を放とうとする
しかもなのはの魔力光が桜色ではなく黒で凶々しい

” 10 ”

” 9 ”

” 8 ”

” 7 ”

カウントが続く中バインドを解こうとするがびくともしない

はやて「せっ、せばいで」

フェイト「解けない!?!」

” 4 ”

” 3 ”

フェイト「あっ あ」

はやて「」ここまで　　なんか「

” 2 ”

” 1 ”

RH『カウント終了』

とうとうカウントが終わる

なのは「　スターライトブレイカー」

フェイトとはやては黒い光に包まれた

フェイト&はやてside・・・end

カイトside

光に包まれたカイト

目を開けるとそこはなにもない白い空間

カイト「　　」

辺り見わたすカイト

カイト「ここは一体」

「お久しぶりですね。蒼炎を受け継ぐ者よ」

どこから声が聞こえる

カイト「この声は」

カイトの前が光り出す
すると1人の少女現れる

カイト「女神アウラ」お久しぶりです」

カイトはアウラと呼ぶ少女に片膝をつけながら挨拶をする
それはまるで騎士が王女に忠誠を誓っているようだ

アウラ「頭を上げて下さい、カイト。それに敬語も止めて下さい」

カイトは言われた通りに頭を上げる

アウラ「まさかまた会うことになるとは思いませんでした」

カイト「本当にごめん。僕の油断から起きてしまった」

再び頭を下げるカイト

アウラ「いいのです。これも運命だったのでしょう」

カイト「だけど」

アウラ「あなたは今あの力　八相と腕輪の力が必要なのですよね」

カイト「　うん」

アウラ「　八相の力　使う者の気持ち一つで　救い　滅び　どちらにでもなる」この言葉覚えていきますよね？」

カイト「僕とアウラが初めて出会ったときの言葉だね」

アウラ「そして全ての物語が始まる鍵でした」

アウラはカイトの目の前に立つ

アウラ「あなたに八相の力を託します」

カイト「なっ！？／／／／／／／」

アウラはカイトにキスをする

アウラ「私はどんな形にしるあなたに会えて嬉しかった。　私はいつでもあなたを見守っています。頑張って下さい」

そしてアウラは光になって消えその光がカイトの体に入る

カイト「　アウラ。ありがとう！」

カイトside . . . end

なのはのスターライトブレイカーが放たれ至る所が穴だらけこれにくらったフェイトとはやてが生きてる可能性は絶望的だった

なのは「 !? 」

驚きの表情を見せるなのは

そこには無傷で立っているフェイトとはやて

その2人の前に立っているのは三爪の双剣を持つカイトだった

フェイト「カイト!!」

はやて「遅いで、カイト君。死ぬかと思ったで」

気が抜けたのか座り込むフェイトとはやて

カイト「よく頑張ったね、2人共」

カイトは2人の頭を撫でる

フェイト「////////」

はやて「／／／／／」

撫でられて顔を赤らめる2人

カイト「それじゃ、行ってくる」

カイトはなのはを救うため歩き出す

フエイト「カイト、なのはを」

はやて「頼んだで！！」

カイト「うん！！」

カイトはゆっくりとなのはのところへと向かう

なのは「デイバインシューターフルパワー」

黒い魔力弾が無数に現れる

カイト「高町の魔力とAIDAが混じり合っている。ヤバい状態だ」

なのはのデイバインシューターを見て状況確認するカイト

なのは「シュート！！」

なのはのデイバインシューターがカイトを襲う

カイト「舞武！！」

四方から来るデイバインシューターをカイトが舞うように動き斬り刻む

フエイト「すごい」

カイト「蒼炎舞」

カイトは蒼炎を纏う

カイト「高町。君はA I D Aに何を見せられた。何を言われた」

カイトは構える

カイト「君に憑いた害虫を僕が追い出す!!」

カイトはなのはに突っ込む

なのは「デイバインバスター」

突っ込むカイトに容赦なく攻撃する

カイト「」

デイバインバスターがカイトに直撃する

なのは「!？」

しかしカイトは怯むことなくそのままなのはに突っ込む

なのは「アアアアアアアア！」

なのはの拳が黒い泡を巻きつける

カイト「ハアアアア！」

カイトの双剣となのはの拳がぶつかりあう

次の瞬間2人のまわりが白い空間に包まれた

辺りが薄暗い遺跡の中ではなく目に映ったのは

1人の女の子であった

その女の子は小学低学年ぐらいの身長で髪は茶髪でツインテール

カイト「ここが高町の心の中」

私は1人だった

私が小さい頃お父さんが入院するほどの大怪我をした

そのためお母さんは店で大忙し、お兄ちゃんはお店の手伝い、お姉ちゃんはお父さんの看病とみんな大忙しだった

私は小さかったから何もできず家でお留守番とても悲しかった

だけど小学生になって友達ができ魔法と出会った

その友達と魔法は私にとってかけがえのないものとなった

そして私は11歳くらいのとき私は任務で大怪我をする

医者にはもう魔導師を続けるのは難しいと言われた

私は絶望した

そして気づいた

私に魔法がなくなったら何も残らない
全てが失ってしまう

私は怖かった

1人になるのが

だから必死にリハビリをした

完治した私はすぐに仕事に復帰した

みんなはまだ休んだほうがいいと言ってくれた

けど私は休むわけにはいかない

私にとってそれは逃げることだから

カイト「
」

カイトはなのはの心の声をきく

小さいなのはがカイトの前に立つ

なのは「私は1人になりたくない だから私は逃げたくない！」

カイト「だから君が無理していいっていつのか？また同じことを繰り返してしまっても？」

なのは「」

黙り込みながらうなずくなのは

カイト「ふざけるな！そんなことして誰が喜ぶんだ！」

カイトはなのはの肩をつかむ

カイト「」1人になりたくない”？君の仲間はそんな簡単にいなくなってしまう人だった？違うよね？」

なのは「」

黙り込むなのは

カイト「今の君は誰も信用してない一匹狼だ。それじゃあ、誰ひとりとしてついて来ない。思い出すんだ！今までやって来たこと、培って来たことを！」

なのは「 あっ!？」

カイトはなのはを抱きしめる

カイト「もし君が1人になりそうなとき 近くに必ず僕がいる。僕が絶対に 高町を1人にはしない!!」

なのは「カイト君」

なのははカイトの目を見る

それはどんなものでも暖かく包んでくれそうな優しい目

カイト「泣いてもいいんだよ 甘えてもいいんだよ」

カイトは優しい笑顔をなのはに向ける

なのは「うっ うわああん!!」

なのはは大きな声でなく

今までのしかかった重荷がなくなり解放されたフェイト「なのは！カイト！」

はやて「何ちゅう威力や!!」

カイトとなのはがぶつかりあったときに生じた光に驚くフェイトとはやて

そしてその中からカイトとなのはの影が見える

フェイト「!？」

フェイトは驚く

見えたものはカイトとなのはが攻撃したさい交差したまま停止している

カイト「」

なのは「」

しばしの沈黙が広がる

なのは「うっ」

フェイト「なのは!?!」

なのはがゆっくりと倒れる

しかしカイトがなのはを受けとめる

カイト「ハラオウン、なのはをお願いします」

カイトはなのはをしょい上げフェイトに預ける

カイト「さて、仕上げだ」

はやて「えっ? あっ!?!」

カイトが右腕をあるところに向ける

それを見たはやてはその方向を見てみるとそこには黒い泡AIDAが浮かんでいる

カイト「データドレイン！」

ビュウウウー！

その瞬間、カイトの右腕から金色の光線を放つ

AIDAに”データドレイン”と呼ばれる技が直撃する

その瞬間カイトの右手首から金色の8枚の花弁のようなものが現れる

放たれた光線はカイトの右腕へと吸収される

そしてAIDAから黒い粒子が噴き出し消滅する

はやて「やったんか？」

フェイト「よかった」

カイト「」

カイトは立ったまま動かない

フェイト「カイト？」

フェイトはカイトの異変に気づきなのははやてに任せカイトの隣に立つ

カイト「つ」

フェイト「”つ”？」

カイト「つかれた」

フェイト「ええええええ！？／／／／／／／」

カイトは疲労のため、気を失いフェイトに倒れ込む

ドサツ！

フェイトはカイトを支えきれず押し倒されてしまう

フェイト「はやて！助けてえええ／／／／／／／」

顔を真っ赤にするフェイト

はやて「ははは」

これはまだ始まり

機動六課とカイトの物語はまだ序章に過ぎない

キャラ紹介

名前：カイト「グランツ」

年齢：不明（見た目は19〜20歳）

身長：不明

体重：不明

容姿：ほぼhackのカイトと一緒に、体つきは細く見えるが、実際はかなりしほりこまれている

性格：めんどくさがりだが結構世話好き
暇があれば周りをぶらついたり鍛錬している
なにか良いモチーフを見つけると絵を描きたくなる

趣味：鍛錬、絵を描く

魔力ランク：A A A +

魔導師ランク：S（蒼炎舞発動時SS+）

武器：虚空ノ双牙

蒼炎舞発動時三爪の剣になる

レアスキル：蒼炎

使うと全てのパラメーターが上がる

何百年の間、黄昏の碑文と一緒に封印されていたカイト
しかしJS事件の影響で封印が解かれた

このキャラは・hackの主人公のカイトをベースにして考えました。

技名もほとんどが・hackからそのまま書いています。

年齢が不明なのは、何百年の間、黄昏の碑文の守護神と一緒に封印されていたからという設定だからです

名前：ヘルバ「エルディ

年齢：不明（見た目は25〜28歳くらい）

魔力ランク：SS

魔導師ランク：S

武器：魔剣ガルバジーク

元々はしゃべらないのだがヘルバがガルバジークを扱いやすくするために改造したそれくらい強力な剣

天災の剣とも言われる

なにかの封印の鍵らしいがそれが何なのかまだわからない

このキャラはhackのヘルバを男にした感じですよ（ヘルバファンの人、ごめんなさい）

最初はカイト以外出す気はなかったのですが話が進められなかったので出しました

なぜ女から男にしたかというところ　なんとなくです

これを見てくださってくれた皆さん方、応援お願いいたします

黄昏の碑文とAIDA（前書き）

僕は無力だった

そんな僕に一人の少女に出会い絶対的な力をもらう

しかし僕は知らなかった

その力が

世界を滅ぼすほどの力があるなんて

黄昏の碑文とAIDA

カイト「んっ」

先程の戦いで気を失ったカイトが目を覚ます

カイト「ここは」

カイトは起き上がろうとする

カイト「あれ？」

しかしカイトの体は動かない
まるでなにかにつかまれているようだ

カイト「（まさか これは、ちまたで有名な金縛り？）」

そんな意味分らないことを考えているとカイトは恐る恐る横を見
てみる

なのは「スウ スウ（・・） ZZZ」

本当につかまれていた
なぜか隣で寝ているのはに

カイト「（なんだこりゃあ~~~~!?)」

心の中で叫ぶカイト

カイト「（何故僕の直ぐ隣になのはが寝ているの!?!）」

何故なのはカイトの隣で寝ているのかというと約2時間前にさかのぼる

なのは「あれ　　ここは　医務室？」

なのはが目を覚まし起き上がる

なのは「んっ?　　あっ!?!」

なのははベッドから下り隣を見るとそこには違つベッドでぐっすりと眠っているカイト

なのは「　カイト君」

なのははベッドの隣に立ちカイトの顔を見る

”カイト「もし君が1人になきそうなとき　近くに必ず僕がいる。僕が絶対に　高町を1人にはしない!?!」”

なのは「//////////」

なのはあの戦いするとき言われたことを思い出し顔を赤らめる

”カイト「泣いてもいいんだよ　甘えてもいいんだよ」「”

なのはそのままカイトのベッドに潜り込む

カイトの顔を見て

なのは「甘えてもいいんだよね？／＼／＼／＼／」

そう呟くとカイトの腕を抱きしめながら眠り込んでしまったのだった

カイト「ヤバい！何故かわからないけどやばい気がする！！」

カイトは悪寒を感じとり、なんとか脱出を試みる

なのは「あっ　んっ　んん　」

カイト「ヤバい、理性がもたない！？」

脱出失敗

カイト「どうする！！どうするよ、僕？」

ここで選択肢

1　脱出を試みる

2 受け入れて一緒に寝る

3 叩き起こす

4 その他

カイト「1はさつき試みたし、2は僕の理性がもたない。3は高町に悪いし下手したら僕が殺される、その前に4のその他って何!? 作者しつかりしてよ!」

もうネタ思いつかなかったからカイト、お前に任せたby 作者

カイト「どんだけ、無責任!? だったらこんな選択肢を出すなよ、作者!」

そんなこと言っていると

プシューと医務室のドアが開く

カイト「ハラオウン?」

フェイト「カイト!! よかった、起きたんだ」

なのはと一緒に寝ているカイトを見てフェイトは喜んだ表情が一変する

カイト「ハラオウン、ちょうどよかった。助けてくれ」

カイトはフェイトの顔を見て青ざめる

フェイト「カイト」

カイト「はっ、はい!?!」

フェイト「なんで、なのはと一緒にベッドで寝ているのかな?」

いつの間にかデバイスを構えているフェイト

カイト「いやっ 待って、ハラオウン!!!これは誤か」

フェイト「バカ~~~~!!」

カイト「ギャアアアア!!!」

部屋は光に包まれた

カイト「」

フェイト「大丈夫?」

カイト「そう思うんだっ たら魔法を放たないで欲しかったよ」

フェイト「だつて」

なのは「ニヤハハハ」

あの後なのはに事情を聞いたフェイト

カイト「高町も何で僕のベッドに潜り込んだの？」

なのは「えっと　それは　／＼／＼」

クロノ「お話し中のところ失礼するよ」

ドアからクロノが入る

カイト「あなたは？」

クロノ「僕はこの艦の艦長をしているクロノ・ハラオウンだ。よろしく、カイト」
「グランツ」

カイト「よろしく。　んっ？ハラオウンって」

フェイト「うん、そうだよ。私のお義兄さん」

カイトの疑問にフェイトが答える

カイト「なるほど　って艦？」

クロノ「ああ、ここは戦艦クラウディアだ」

カイト「そうではなくて！何故、僕がそんな所に？」

はやて「それはやなあ、カイト君が倒れた後、酷い怪我やったから、ここに運んだんやで」

はやてがクロノの後ろからひょっこりと出てくる

カイト「 どうせそれだけじゃないんでしょう？ クロノ艦長」

カイトが真剣な表情でクロノにいう

クロノ「話が早くて助かるよ。君には聞きたいことがいくつかあるんだ」

カイト「やっぱりね。いいよ、何から何まで教えるよ。僕が知っている範囲までだけどね」

クロノ「それじゃ、いくつか 君が持っているあの本は何なんだい？」

手から本を出すカイト

カイト「これは”黄昏の碑文”。八相と腕輪の力が封印された本だよ」

なのは「八相？」

カイト「八相。それは女神アウラより生まれた力だ。その力は8つあってそれ一つ一つに星一個破壊する力を持っている」

なのは「ええ!？」

はやて「星一個を破壊する力が」

フェイト「その本の中に」

カイト「うん」

驚きを隠せないなのは、フェイト、はやて

クロノ「それでは、なぜそんなものが、今頃になって発見される？」

カイト「それは僕が聞きたいよ。本当は結界によってあの教会は見えなくなっていたはずなのに」

クロノ「なるほど、その結界で今まで発見されなかったのか」

カイト「あのさ、最近膨大な魔力が解放されたり使われた事件とかなかった？恐らくそれに感化され破壊されたと思うんだけど？」

なのは「えっ？」

フェイト「それって」

はやて「多分」

クロノ「あれ”だろうな」

なのは「たちがいう”あれ”とはまだ記憶に新しい”JS事件”であるそのときに起動された”聖王のゆりかご”これには膨大な魔力が使われていた

カイト「　　どうやらあるみたいだね？」

なのは「フェイト・はやて」

なのはたちはあのときのことを思い出し暗くなる

カイト「えっと ごめん、次行こう！次！」

重い雰囲気になえきれなくなるカイト

クロノ「そつ、そうだな。それでは、次の質問だ。なのはに取り憑いて暴走させた”AIDA”というものについてだ」

カイト「”AIDA”それは人の怒りや恨みなどの負の想念によって生まれた生命体だ」

なのは「”負の想念”」

カイト「しかもAIDAは人に取り憑き、人の心を覗く」

フェイト「”人の心を覗く”？」

カイト「AIDAは人の心を覗き成長する。そして取り憑いた奴に悪夢を見せる」

クロノ「”悪夢”？」

カイト「人の心の奥底にある望みを見せ、弄び、依存させ 最期には全てを奪う。そんな悪夢だよ」

なのは「」

実際に経験したなのはは思い出し震えていた

そのときなのは頭にカイトの手が置かれ撫でられる

なのは「あっ／＼／＼／」

カイト「そんな悪夢も救うことができる、でしょ？」

カイトは笑顔をなのはに向ける

なのは「うん／＼／＼／」

フェイト「はやて」・・・」

なのはとカイトが仲良くしているところを見てなぜか胸がモヤモヤするフェイトとはやてだった

クロノ「確かAIDAは魔法が効かないんだっただな？それでは君はどうやって倒したんだ？」

カイト「それは僕の持っている武器と腕輪だよ」

カイトは腰から出現した双剣を取り出す

はやて「どこから出てきたんや!？」

フェイト「デバイスを持ってた様子はなかったのに」

クロノ「それは？」

カイト「虚空ノ双牙」女神アウラから授かった神器です。これには聖なる光を纏っている、そのおかげでAIDAを斬ることができ

る」

クロノ「聖なる光」？」

カイト「僕も詳しいことはわからないけど僕にはなぜか見えるんだ」

はやて「ウチらは何も見えへんけどな？」

はやてはじつくりと虚空ノ双牙を見る

フェイト「確かカイトは”データドレイン”という技を使ってたよね。それは？」

カイト「それが腕輪の力だよ」

なのは「腕輪？そんなものはどこにもないけど？」

カイト「これも普通の人には見えないけど僕には見えるんだ。そして”データドレイン”は当たった相手の細胞組織を分解し吸収する力だ」

クロノ「分解だと！？そんなものがもし人間に当たったら」

カイト「うん　あなたの考えている通りのことか」

なのは「フェイト・はやて」？」

話が見えない3人

クロノ「つまりそれをくらったら体の細胞組織が改変され大変なこ

とになる 下手したら死ぬ」

なのは「 この技をカイト君以外に使う人はいる？」

なのはがカイトに聞く

カイト「いや いないけど？」

カイトの答えを聞くと

フェイト「なら」

はやて「安心だな」

カイト「えっ？」

予想外の反応にびっくりするカイト

フェイト「だって」

はやて「うん」

なのは「カイト君は」

なのは・フェイト・はやて「私たちを助けてくれたから！」

カイト「」

クロノ「フッ」

カイトは驚きの発言に言葉が出ない

クロノは相変わらずだなと思いき笑い出す

クロノ「それでは最期の質問だ」

カイト「はい？」

クロノ「機動六課に民間協力者として入ってくれないか？」

カイト「はっ？」

またもや予想外のことには驚くカイトだった

それよりも、それ質問じゃないのでは？と密かに思ったのだった

模擬戦！

ロストロギア回収任務から数日後

怪我をした機動六課のメンバーは今日から復帰することになっている

部隊長室

「本当に申し訳ございません、主はやて」

「あたしたちが、本局に行ってなければこんな事には」

部隊長室ではやてに謝っているピンク色の髪でポニーテールの髪型をした女性と赤色の髪をした少女がいた

はやて「いいんよ、シグナム、ヴィータ。本局に呼ばれて行ったんやし」

リン「そうですよ！仕方ないですよ」

シグナム「いえ、我ら主を守るヴォルケンリッター。如何なる理由があろうと主を守れなかったのは事実です」

ヴィータ「本当にごめん、はやて」

はやてはヴィータの頭を撫でる

はやて「謝らなくてええんやって、ウチもリンもこのとおり無事なんやし。シグナムも」

リイン「そのとおりです!!」

笑顔でシグナムとヴィータを見る

シグナム「わかりました、主はやて」

ヴィータ「うん」

はやて「ほんじゃ、そろそろ行くか？」

シグナム「はい」

ヴィータ「うん!!」

リイン「行くです」

はやてたちは廊下に出る

シグナム「主はやて」

歩いているとシグナムがはやてに話しかける

はやて「なんや？」

シグナム「確か今日民間協力者として六課に入ってくる者がいると聞きましたか？」

はやて「そうやで。どうかしたんか？」

シグナム「いえ、別に」

ヴィータ「はやて、シグナムは今日入ってくる奴がどのくらい強いのか気になってんだよ。バトルマニアだからな」

ヤレヤレと首を振るヴィータ

シグナム「なにか言ったか？ヴィータ？」

ヴィータ「”バトルマニア”って言ったんだよ！このおっぱい魔人
！！」

シグナム「貴様！我が剣の錆にしてやるつか」

ヴィータ「上等！」

デバイスを手に取る2人

はやて「はい！！2人とも喧嘩止めてえな」

手をパンパンと叩き注意をするはやて

シグナム「すみません、取り乱しました」

ヴィータ「ごめん、はやて」

リン「相変わらずですね」

はやて「うふふ」

思わず笑い出すはやて

シグナム「主、それでどういった者なのですか？／＼／」

羞恥心からか顔を赤らめて話題を戻すシグナム

ヴィータ「そうだな。実際、あたしも気になるよ。はやてとなのはを助けてくれた奴らしいからな」

はやて「そうやで とても優しくて頼りになる人なんや」

シグナム「そうですか、それは楽しみです」

ヴィータ「そうだな」

ライン「こんな楽しそうなはやてちゃんを見るのは久しぶりです」

はやて「そっ、そんなことあらへんよ／＼／」

訓練場

今、復帰したFW陣がなのはの訓練を受けている

なのは「それじゃ朝の訓練はここまで」

F W陣「はい!」

F W陣が訓練場から出ようとする

なのは「あつ、みんなちょっと待って」

なのはが引き止める

ティアナ「なんですか?」

なのは「みんなはちょっとここで待っていてくれないかな?」

スバル「どうしてですか?」

なのは「うん。八神部隊長が紹介したい人がいるんだって」

キャロ「紹介したい人?」

エリオ「それって今日入ってくる民間協力者のことでしょうか?」

なのは「うん そうだと思っよ」

なぜか機嫌良いなのは

スバル「(なのはさん、なんか機嫌良いね)」

ティアナ「(そうね。なにかあったのかしら?)」

エリオ「（良いことがあったんじゃないでしょうか？）」

キャロ「（私もそう思います）」

ティアナたちが念話で話していると

フェイト「みんなお疲れ様」

キャロ「フェイトさん！！」

エリオ「お疲れ様です！！」

元気よく挨拶をするエリオとキャロ

ティアナ「フェイトさんも八神部隊長からここに来るように言われたんですか？」

フェイト「うん。そろそろ来ると思っよ？」

スバル「どんな人が来るのかな」

目を輝かせるスバル

なのは「うーん スバルとティアナは会ったことがあると思っよ？」

ティアナ「えっ！？」

スバル「本当ですか？」

身に覚えがない2人は驚く

なのは「うん。だって「みんな」お待たせ」あっ、はやてちゃん

フェイト「シグナムにヴィータにリインも」

シグナム「どうやらもう怪我は良いようだな、テストロッサ」

ヴィータ「よお」

リイン「はいです」

はやて「ごめんな、みんな待たせてしもうたかな？」

なのは「ううん、ナイスタイミングだよ。みんな集合」

FW陣「はい!!」

FW陣はなのはたちの前に整列する

はやて「みんなはもう知っと思うけど今日民間協力者が来ます。その人を紹介するで」

リイン「カイトさん出てきて下さいです」

リインが呼んでも出てくる気配がない

なのは「来ないね？」

フェイト「どうしたんだろ？」

ヴィータ「なんだ？遅刻かよ？」

そう言ってるとはやてが何故かニヤニヤと笑っている

リン「なぜ笑っているんです？」

なのは「はやてちゃん、もしかして」

フェイト「またなんか企んでるでしょ？」

はやて「えっと、あの その」

なのはとフェイトに迫られたじろぐはやて

シグナム「むっ？なんだあれは？」

シグナムがなにかに気づく

スバル「ティアナあれって!？」

ティアナ「まさか !？」

それは蒼い炎、蒼炎の塊が浮いていた

エリオ「なんですか、あれ？」

キャロ「キレイですね」

スバルとティアナはあのときのことを思い出す
自分たちを圧倒的な強さで負かしたあの蒼炎の騎士のことを

エリオとキャロは見えていなかったのでよくわかっていない

スバル「みんな逃げ」

スバルが蒼炎から遠ざけようとした瞬間

ピカッと蒼炎が光り出す

シグナム「なに!?!」

ヴィータ「なんだ!?!」

エリオ「うわっ!?!」

キャロ「キャッ!?!」

光がおさまるとそこには1人の双剣を持った男性がいた

シグナム「貴様、何者だ!」

デバイスを構えるシグナム

「俺か?」

ヴィータ「そうだ!!!」

「フツ、俺の名前は正義の味方”ぴろし3”！！あつ、ちなみにぴろし3の”3”は数字の3だからな！」

と言いながら左手を腰に当て右手を天に指すように上げてポーズをとっているぴろし3？

最後にはキラーンと歯を光らせる

「
」

1人だけ大爆笑のはやて
それ以外のメンバーは啞然としている

ぴろし3「 あれ？」

なのは「 あれ？」 じゃなくい！」

フェイト「なにやってるの！？カイト！」

なのはとフェイトが怒りがなら迫って来る

カイト「えっ？だって八神に”普通の紹介じゃつまらへんから派手に登場してや！”って言われたから」

なのは・フェイト「
」

なのはとフェイトは無言ではやてのほうを向く

はやて「ハッ、ハハハハ」

笑ってごまかそうとするはやて

なのは・フェイト「はやて(ちゃん)」

はやて「はい!」

なのは・フェイト「少し 頭冷やそうか?(黒)」

はやて「いやあああああ」

なのはとフェイトのお仕置きを見てFW陣は震えていた

はやて「 それでは今日から民間協力者として六課に入るカイト
「グランツ君や」

頭を冷やされたはやては気を取り直してカイトを紹介する

カイト「今日から民間協力者として六課の手伝いをするカイト」
「グランツです。よろしく」

エリオ「僕はライトニング分隊エリオ・モンディアルです。よろしく
お願いします」

キャロ「同じくライトニング分隊キャロ・ル・ルシエです。よろし

カイト「あの ごめん！」

スバル・ティアナ「えっ」

頭を下げ謝るカイトに驚くスバルとティアナ

カイト「あの時は使命だったとはいえ、君達に怪我をさせてしまった 本当にごめん！」

再び頭を下げ謝るカイト

ティアナ「あつ、頭を上げて下さい（汗）」

スバル「そうですよ！もう気にしてませんから（汗）」

頭を下げるのを慌てて止める

カイト「 ありがとう」

笑顔でお礼をいうカイト

スバル・ティアナ「//////////」

スバルとティアナはカイトの笑顔にみとれてしまう

カイト「どうしたの？顔が赤いけど？」

ティアナ「いつ、いえ!？」

スバル「なんでもありません!？」

なのは・フェイト・はやて「

それを見ておもしろくおもわない人物が3人ほどいた

なのは「それじゃ今からカイト君はFW陣と模擬戦をしてもらうよ」

カイト「えっ？模擬戦？」

なのは「うん みんなにカイト君の実力を見せてもらいたいの」

カイト「（正直、嫌だな） 僕はかまわないけどナカジマ達はいいの？」

カイトがチラツとスバル達を見る

ティアナ「私達は大丈夫です」

スバル「まだ全然動けません」

エリオ「なのでよろしくお願いします！」

キャロ「よろしくお願いします！」

元気よく答えるスバル達

フェイト「決まりだね」

はやて「そつやな」

なのは「早速始めるから準備して」

FW陣「はい!!」

カイト「はあ」

やる気満々のなのは達を見てため息をつくカイトであった

訓練場のステージは市街地で設定されカイトとFW陣は準備を終え
始めの合図を待つ

なのは「それじゃいくよ〜レディー」

虚空ノ双牙を出し構えるカイト

それと同時にデバイスを構えるFW陣

なのは「ゴー!!」

合図とともに動き出すFW陣

スバル「ハアアアア！」

スバルは地面を思いつきり叩き砂埃をたてる

カイト「（なるほど視界封じか）」

フウウと息をはく

エリオ「でえやあああ！」

エリオが砂埃を利用し後ろから切りかかる

ガキイン

しかしカイトはそれをなんなく受け止めるが

エリオ「なっ！？目を瞑って」

そうカイトは目を瞑りながらエリオの一撃を受け止めていた

カイト「ハアッ！」

カイトはそのままエリオをはじき飛ばす

スバル「うおりやああああ！」

スバルはカイトの真上から殴りかかる

カイト「甘い！」

スバル「えっ！？」

スバルが気づいた時いつの間にか投げられている

なんとか着地するスバル

その間に砂埃は晴れる

砂埃が晴れた瞬間無数の魔力弾が浮いている

ティアナ「いつけえええ！」

ティアナのかけ声とともにカイトに襲いかかる

カイト「舞武！」

ズバババババツ！

カイトは目にも止まらぬ剣捌きで全て切り落とす

ヴィータ「すげえな、あいつ」

シグナム「ああ　ただ者ではないな。あの剣捌きも素晴らしいな」

あまり褒めたりしない2人が珍しく賞賛している

それほどカイトの動きがすごいということがわかる

カイト「」

スバル「はあはあ　」

エリオ「はあはあ　」

数分間攻め続けているスバルとエリオは息が乱れている

カイトは息一つ乱さずただ受け流すのみだった

カイト「どうしたのかな？　終わり？」

スバル「くっ！」

エリオ「（スバルさん）」

エリオが念話で話しかける

スバル「（どうしたの？　エリオ）」

エリオ「（なんかおかしくくないですか？）」

スバル「（なにが？）」

エリオ「（僕達が攻め続けているにも関わらずカイトさんは一度も

反撃してきません。なにか狙っているのではないのでしょうか？」

スバル「（細かいことは後！今はティアナの作戦通りにカイトさんを攪乱させて隙を見つけよう！）」

エリオ「（はい！！）」

念話を終えた2人は再びカイトに襲いかかる

ティアナ「なかなか隙を見せないわね」

キャロ「ブーストをしている2人にも関わらず　すごいです」

ビルの屋上で隠れながらカイトの隙を捜すティアナとキャロ

キャロ「あゝ　ティアさん」

ティアナ「なに？キャロ？」

キャロ「今気づいたのでですけど、カイトさん　スタートしたときの場所から全く動いていない気がします」

ティアナ「えっ！？」

キャロに言われカイトの足下を見てみるとカイトの足下には円が描かれている

はやて「すごいな、カイト君」

フェイト「うん、あの円から一歩も出てないよ」

リイン「凄すぎです」

シグナム「それほどFW達とグランツとの差があるということだな」

状況を冷静に判断し感想を言う

ティアナ「まるで化け物ね」

ティアナが呟いていると

キヤロ「テイ、ティアさん！あれ！？」

ティアナ「！？」

キヤロに言われ見たものは蒼炎の塊

カイト「見つけた」

ボワアツ！

スバル「えっ！？」

エリオ「き、消えた！？」

カイトがそう呟いた瞬間、スバルとエリオの前から消える

カイト「やあ、ルシエにランスタ」

キャロ「えっ！？」

ティアナ「くっ！！」

するとティアナとキャロの目の前に現れた蒼炎からカイトが現れる
ティアナはすぐクロスミラーージュを構える

カイト「遅い！」

ティアナ「キャツ！？」

カイトはティアナの懐に入り斬りつけ弾き飛ばす

キャロ「くっ！フリード！」

すると上から白い竜が現れる

カイト「なに!?!」

さすがのカイトも驚く

キャロ「ブラストフレア!」

ドカーン!

フリードの火球がカイトにぶつかる

カイト「うおおおお!」

だが、何事もなかったかのように爆風の中からカイトが現れフリードに向かう

カイト「爆裂脚!」

フリードの顔目掛けて蹴りつけた

その瞬間蹴りつけたところから爆発が起きフリードはよろめく

キャロ「フリード!?! あっ!?!」

キャロがフリードに目を奪われた瞬間カイトがキャロの後ろに回り剣を突きつける

カイト「なにか言うことは?」

キャロ「まっ　参りました」

この瞬間ティアナとキャロのリタイアが決まった

なのは「ティアナとキャロ、リタイア」

スバル「なっ!?!」

エリオ「そんな!?!」

なのはの放送聞き驚くスバルとエリオ

カイト「ナカジマ、モンディアル」

スバルとエリオは振り向く

そこには腕を組んで立っているカイトがいた

カイト「さあ、第2ラウンドといこう」

スバル「いくよ、エリオ!」

エリオ「はい、スバルさん!」

2人はカイトを囲むように移動する

カイト「来い!」

スバル「行きます!!」

スバルはジグザグに動きながらカイトに接近する

スバル「でりやああああ!!」

カイト「蒼炎舞」

ドーン!!

スバル「!?!」

スバルの渾身を込めた一撃がカイトに当たるが微動だにしなかった

カイト「良い一撃だね、蒼炎を纏っていなかったら吹っ飛ばされていたよ」

そういつたカイトはスバルの腹を蹴り上げる

スバル「くっ!!」

蹴り飛ばされ宙に舞うスバル

カイトはスバルに追い討ちするが

エリオ「ハアアア!!」

エリオがカイトの隙を狙いストラダーの噴射機能を利用し突進する

カイト「」

カイトの背中に当たる寸前、カイトは体をねじらせ避ける

エリオ「!?!」

カイトはただ避けるだけではなくエリオの足を掴みスバルのほうへと投げつける

エリオ「うわっ!?!」

スバル「きゃっ!?!」

ぶつかったスバルとエリオはそのまま地面に墮ちる

スバル「いたたた」

エリオ「大丈夫ですか、スバルさん？」

スバル「うん、大丈夫！」

お互いの状態を確認しながら立ち上がる

カイト「おゝい！」

スバルとエリオはカイトの声が聞こえた方を向くと

スバル「えっ？」

エリオ「な　なんですか？　あれ？」

2人が見たもの、それは蒼炎を纏ったカイト

だけではなくま

るで巨大な隕石のような無数の蒼炎が浮いていた

はやて「なんや、あれ!？」

なのは「すごすぎるよ」

フェイト「」

シグナム「なんという奴だ!？」

ヴィータ「ありえね!？」

なのは達もあまりにも凄い事に驚愕する

カイト「いくよ!ついさつき思いついた、新技!」

なにかとんでもないことを言いながら手を下に下げる

カイト「蒼炎流星弾!」

無数の蒼炎がまるで流星のように降りそそぎスバルとエリオに襲いかかる

スバル・エリオ「うわああああ!？」

降り止んで残ったものは気絶しているスバルとエリオ、そして市街地だったはずの場所が焼け野原となっていた

カイト「
」

それを見たカイトは

カイト「 や やりすぎた
」

ただそう呟くしかなかった

脅威再び（前書き）

????

ここはどこかの洞窟

そこには先日の任務でなのはたち機動六課を襲い黄昏の碑文を解放させた人物ヘルバ＝エルデイがいた

ヘルバは何やらモニターを見ていた

ヘルバ「やはり黄昏の碑文をとられたのは痛かったですね」

そういいながらヘルバは一つのガラス張りのカプセルに向かう
そのなかには一人の女性がいた

ヘルバ「ふふふ」

ヘルバはカプセルの下にあるボタンを押す

すると彼女の下から黒い泡、AIDAが出てくる
AIDAは彼女の体に入る
その瞬間ガラスが割れ彼女が出てくる

「ここは？」

彼女は顔上げ周りを見渡す

ヘルバ「実験は成功ですね」

ヘルバは彼女の前に立つ

「誰かしら？ それに私は死んだはずよ？」

ヘルバ「私の名はヘルバ＝エルディ。あなたを生き返らせた者ですよ」

「ふーん そう」

ヘルバ「驚かないのですね？」

「そうね 私は実際にこう生き返ってるわけだしね それで、私に何をさせる気かしら？」

ヘルバ「話が早くて助かりますよ 早速ですが君には連れてきて貰いたい人達がいるんですよ」

「ふーん 場所は？」

ヘルバ「君にとって嬉しい場所ですよ」

ジェイル・スカリエッティの作品 戦闘機人がいる海上隔離施設です」

脅威再び

カイト「」

カイトは現在部隊長室で正座をしている
その目の前には

なのは・フェイト・はやて「」

笑う悪m ではなく天使達がいた

カイト「（こんな黒いオーラを出す天使がないよ！これじゃまるであく）」

なのは「カイト君？（黒笑）」

カイト「はい！！！」

フェイト「なんで怒られているか、わかってる？（黒笑）」

カイト「えっと その」

はやて「訓練場は全壊、直すには一週間以上かかるそつや、明日からどこで訓練すればええんやろかな？」（黒笑）」

カイト「すみませんでした~~~~~！」

思わず土下座するカイト

なのは「どっしょうかな〜」

はやて「土下座程度で許されるほど世の中甘くないでえ?」

ニコニコ笑いながらカイトを見下ろすのはとはやて

フェイト「なのは、はやて。もういいんじゃないかな?カイトも反省してるようだし」

カイトはそのときフェイトが女神のように見えたという

はやて「 そうやな 修理代はクロノ君が払うわけやし 」

払うのはクロノかよ 哀れなりクロノ

カイト「それじゃ「ただし!」!?!」

ホツとしたカイトにはやてがわりこむ

はやて「カイト君はウチの言うことをきいて貰うで!」

カイト「 僕のできる範囲なら 」

はやて「「まずー!」」

ーっ?いくつかあるのかよと思いはやてを見る

はやて「ウチら機動六課のメンバーのことを名前で呼ぶこと!」

カイト「 へっ!?!? 」

啞然とするカイト

はやて「カイト君、いつもウチらのことを名前じゃなく名字で呼ぶやん？他人行儀みたいで嫌やわ」

なのは「それは私も思ってたよ」

フェイト「うん、私も」

なのはとフェイトもはやての意見に賛同する

カイト「 わかったよ、なのは、フェイト、はやて」

カイトは微笑みながらなのはたちの名前を呼ぶ

なのは「／／／／／／／／／／」

フェイト「／／／／／／／／／／」

はやて「／／／／／／／／／／」

カイトの微笑みを見たなのは達は数分間、硬直してしまっ

カイト「なのは、フェイト、はやて、どうしたの？」

カイトの声かけで我に帰るなのは達

はやて「何でもあらへんで／／／それじゃ次や次！」

顔を赤くしながらいうはやて

カイト「なに？」

はやて「カイト君にはFW陣の訓練の手伝いをしてもらうので」

カイト「何で？」

はやて「これから戦うはずのAIDAの対策法や戦い方を教えて欲しいしFW陣はカイト君の動きを見て学んで欲しいと思ったからや」

カイト「なるほど、確かにそれならAIDAと戦う時は楽になるしFW陣の実力が上がって一石二鳥ということが」

はやて「そうや！いいアイ」だが断るよ！」「ア なんやて!？」

フェイト「どうして?カイト」

はやての言うことを断るカイトに理由を聞く

カイト「なぜなら」

なのは「なぜなら？」

カイト「めんどくさいから」

なのは「フェイト・はやて」

なのは達は無言になりながらカイトを見る
すると

ガチャン

なのはがカイトにレイジングハートを突きつける

カイト「あゝなのはさん？」

なのは「カイト君 それは私と一緒に教導したくないということなのかな？」

カイト「いやっ、決してそういう訳では」

なのは「それじゃいいよね？（黒笑）」

カイト「はいっ！もちろんです！」

カイトはなのはの笑顔を見て思わず敬語になり何故か敬礼する

はやて「それじゃ次で最後や」

カイト「 やつとか」

少しやつれているカイト

はやて「今日カイト君は」

カイト「」

はやて「ウチの部屋に泊まってもらっついで」

なのは・フェイト」「

はやての問題発言に部隊長室は静まりかえる

カイト「はい？」

はやて「今”はい”っていうたな？これから部屋に案内するから付いて「ちよつと待った〜！」ちっ〜！」

はやてはそういいながらカイトの手を掴み部屋を出ようとするが、
なのはとフェイトがはやての肩を掴み止める

はやて「なんや？」

なのは「”なんや？”じゃないよ！」

フェイト「そうだよ、はやて！〜どういうことなの？しかも舌打ちした！」

はやて「実は急やったからカイト君の部屋が用意できなかったんや」

なのは「だったら私たちの部屋でもいいんじゃないかな？」

はやて「なのはちゃん達の部屋はもう2人いるからダメや」

カイト「あの 僕に 決定権は？」

なのは・フェイト・はやて「ない！！！」

カイト「そんな〜」

カイトの叫びはむなしく響き渡るのだった

数十分の言い争いの結果、結局はやての部屋に泊まることになった
カイト

そんなカイトはとあるところに向かっていた

カイト「ここか」

カイトはコンコンとドアを叩く

「どつぞ〜」

カイトはドアを開け中に入る
そこにはいろいろな機械や道具などが置いてあった

カイト「失礼します。僕は今日から民間協力者として入ったカイト
「グランツです。ここはデバイスルームで間違いないでしょうか？」

「はい　そうですよ」

カイトの質問になんの隔てもなく答えるメガネをかけた女性

カイト「ということはおあなたがシャリオ・フィニーノさんですか？」

シャーリー「はい　私はロングアーチスタッフ兼デバイスマスター
のシャリオ・フィニーノです。みんなは”シャーリー”と呼んでま
すので気軽に呼んでください」

カイト「わかったよ。シャーリー」

シャーリー「はい。それでカイトさんはどういったご用件でしょうか？」

カイト「うん、お願いがあるんだ」

次の日

壊れた訓練場になのは達が集まっている
だがスバル達はなぜか震えている

スバル「ティア」

ティアナ「なっ、なによ」

スバルはちらつとなのはとフェイトの方へと向く

なのは・フェイト「（黒）」

なにか黒いオーラを放つ2人がいた

スバル「なんで　なのはさんとフェイトさんは　あんなに機嫌が悪いの？」

ティアナ「そんなの私も知らないわよ」

エリオ「ぼっ、僕達も」

キャロ「わからないです」

はやて「ふうん　ふうん」

鼻歌を歌っているはやて

シグナム「打って変わって、主はやては機嫌がいいな」

ヴィータ「そうだな」

しばらくして

カイト「みんなお待ちせ」

カイトが歩いてくる
すると

なのは「カイト君」

フェイト「昨日はどうだったのかな？」

2人が笑顔で昨日のことを聞いてくる
目は全く笑っていないが

カイト「どうだったって　別になにもなかったよ」

はやて「せやで、ただ一緒にベッドで寝ただけやもんや」

「!?!」

はやての発言に全員が驚く

カイト「ちょっと、はやて!?!」

ガチャン!

カイト「」

カイトの顔が青ざめる

そこにはデバイスを構えるのはとフェイト

さらに

シグナム「貴様」

ヴィータ「はやてになにをした?」

後ろにはデバイスを構えるシグナムとヴィータ

カイト「落ち着いて!僕はなにも」

な・フェ・シ・ヴ「天誅!」

カイト「ギヤアアアア!」

なのは「それじゃカイト君、私達をここに呼んだのはなんでなの？」

カイト「」

返事がない　まるで屍のようだ（笑）

カイト「」（笑）「じゃないよ！」

ガバツと起き上がるカイト

フェイト「どっ、どうしたの？カイト」

カイト「いつ、いや何でもない。それじゃ、まずFW陣にはこれを返しておくよ」

そう言ってスバル達に何かを渡した

スバル「これって」

エリオ「僕達のデバイスですね？」

カイト「うん、そうだよ」

ティアナ「なんでカイトさんが持っているんですか？」

カイト「実は昨日、ラインからスバル達のデバイスはデバイスルームで調整中って聞いてね。ちょうどいいと思ったから」

エリオ「何がちょうどいいんですか？」

カイト「君達のデバイスにちょっと手を加えるためにね」

キャロ「手を加えるって？」

キャロは不安げな顔をする

カイト「あつ、大丈夫。基本的な所は何も変わってないよ。ただあのプログラムをインストールしたんだ」

シグナム「あるプログラム？」

ヴィータ「なんなんだ、それ？」

シグナムとヴィータが聞いてくる

するとカイトは黄昏の碑文を手から出す

カイト「それはこれさ」

そう言ったとき黄昏の碑文が開きそこから宝石のようなものが出てくる

はやて「なんやそれ？」

リイン「キレイです」

カイト「これは”ウイルスコア”っていう特殊なプログラムだ」

スバル「へえ〜」

ティアナ「でもどういったプログラムが加わるんですか？」

カイト「いい質問だ！これをインストールすればAIDAに抵抗することができるんだ」

フェイト「そんな都合のいいものが？」

カイト「これはあくまでも”抵抗できる”だけ　これからAIDAについて詳しいことを話すからちゃんと聞いててね！」

カイトはみんなにAIDAについて一通り話す

シグナム「なるほどな。それを使えばお前のようにAIDAにダメージを与えることができるということか」

カイト「うん」

ヴィータ「でもなんで、アタシら隊長陣のデバイスにはしなかったんだ？」

カイト「それは時間帯が夜遅くてな。みんなの休む時間を優先したんだ」

フェイト「そんなの気にしなくてよかったのに」

カイト「いや、そういう訳にはいかないよ。ここには無茶しそうな人達ばかりなんだから休めるときにしっかり休まないかね」

カイトは真剣な顔でそういう

なのは「そんなことないと思うけど」

はやて「いやいや、なのはちゃんがその1人なんやで?」

はやてがそういつとみんなはうんうんと頷く

なのは「フエツ!?!みんな酷いよ!」

カイト「よしっ!それじゃ早速AIDA対策の訓練を始めよう!」

FW陣「はい!」

すると一本の通信が入る

シャーリー「八神部隊長!」

シャーリーからだったがなにか様子がおかしい

はやて「どうしたんや?」

シャーリー「昨日カイトさんに付けてもらったAIDAサーチ機器に反応が!」

カイト「えっ!?!」

急なことに驚くカイトとなのは達

はやて「場所は?」

シャーリー「そこは　！？海上隔離施設です！」

スバル「えっ！？」

エリオ「そこって！？」

キャロ「ルーテシアちゃんや戦闘機人さん達がいるところ」

スバル達は驚きが隠せない

なのは「みんな急いで出動するよ！！」「ダメだ！」　えっ！？」

出動と声をかけるなのはを止めるカイト

カイト「今、なのは達隊長陣はまだウイルスコアをインストールしていない。その状態でAIDAと戦うのは危険だ。だから僕1人で行く」

フェイト「そんなそれこそ危険だよ」

はやて「そうやで！そんなのウチが認めへん！」

1人で行くと言い出すカイトを止める

スバル「それじゃ！！」

ティアナ「私達が行きます！」

フェイト「えっ！？」

エリオ「僕達のデバイスにはちゃんとインストールされているので大丈夫です！」

キャロ「お願いします」

カイト「 はやて、僕1人じゃなきゃいいんならFW陣を連れて行くけどいい？」

その瞬間スバル達の表情が明るくなる

はやて「 わかった、それならええで！ウチらもインストールが終わったらすぐ駆けつけるで！」

カイト「うん！それじゃFW陣行くよ！」

FW陣「了解！」

海上隔離施設

ここは別名、更生保護施設で改善の見込みのある犯罪者に更生プログラムを受けてもらう施設

「あ~~~~~ 暇ッスね」

「おい、ウエンディ。うるせえよ」

今、赤紫色の髪で語尾に「ッス」を付けてしゃべっているのがウエンディ

そのウエンディに注意をしているのはノーヴェ

ウエンディ「だってオットーとディードは聖王教会に研修中だし、ルーお嬢とアギトはお母様のところに行ってるッス。話す相手が一気に居なくなっつてつまらないッスよ」

ぶーぶーと文句を言うウエンディ

ノーヴェ「いちいち、うるせえんだよ。このバカが!!」

ウエンディ「あー、バカって言うほうがバカなんスよ!!」

ノーヴェ「なんだと!!」

2人は低レベルな言い争いをする
よっぽど暇なのであろう

「止さないか、2人共」

低レベルな言い争いをする2人の前に銀色の髪をした背の低い女の子が現れる

ノーヴェ「チンク姉!」

チンク「仲がよいのはかまわんが喧嘩はダメだぞ」

「喧嘩するほど仲がいい」

「ははっ、そうかもね?」

チンクの後ろから現れたのは茶色の髪でリボンで髪を止めている少女はデイエチ、薄緑色の髪をした少女はセイン
今ここにいる少女達はJS事件の主犯ジェル・スカリエツティが
開発した戦闘機人である

チンク「それにもうすぐ姉上が来る。我慢するんだな」

ウエンディ「ホントスか!？」

パアツと明るくなるウエンディ

ノーヴェ「また来るのかよ。暇な奴だぜ」

ふうーとため息をするノーヴェ

ウエンディ「またまた、ホントは嬉しいくせにッス」

ぶつぶと笑うウエンディ

ノーヴェ「んだと!!」

チンク「またか」

チンクが呆れていると

「みんな元気にしてる?」

今、入り口から入ってきてチンク達に話しかける紺色ぼい髪をして
いる管理局の服を着た女性はギンガ・ナカジマ

ちなみにスバルの姉である

チンク「姉上」

ウエンデイ「ギン姉！！」

セイン「ギンガ姉さん、いらっしやーい」

デイエチ「こんにちは」

ノーヴェ「なんだ、来たのかよ」

そんなチンク達の挨拶？に

ギンガ「ウフフ、元気そうよかったわ」

微笑むギンガであった

海上隔離施設の外

「ここがそうね」

そこにはA I D Aを纏った女性が立っていた

「ふふふ」

そして彼女は海上隔離施設に入っていく

ウエンディ「ギン姉、今日は何しに来たんスか？」

ギンガ「今日は私、休みだったから遊び来たんだ」

笑顔で答えるギンガ

ノーヴェ「けっ、やっぱり暇だったんじゃねえか」

セイン「まあまあ、せっかく来てくれたんだし」

チンク「そうだぞ、ノーヴェ。すまないな、姉上せっかくの休日だ
というのに」

チンクはノーヴェの言動について謝る

ギンガ「ううん、いいの。私が好きで来たのだもの」

にっこりと笑いながらギンガはなにかを取り出す

ディエチ「ギンガさん、それは？」

ギンガ「これはみんなのお土産のケーキよ」

ウエンディ「ホントスか!？」

ギンガのお土産を見るとウエンディは目を輝かせる

ノーヴェ「はしたねえな、ヨダレでてるぞ。汚ねえな」

ウエンディ「そんなこといいながら実はケーキがうれしくせに」
笑)

ノーヴェ「そつ、そんなことねえよ」

と言っているがノーヴェの目先はケーキに向いている

ギンガ「ふふふ、それじゃ用意するわね」

そう言ってケーキを用意しようとしたときであった

ビー！ビー！

突如アラームが鳴りだす

セイン「なんだ？」

ギンガ「これは」

すると一人の男性の管理局員が入ってくる

「ギンガ陸曹！」

ギンガ「何があったの!？」

「侵入者です！現在外で応戦中です」

ギンガ「わかりました。私もです！」

そう言って走り出したギンガ

「了解！お気を付け下さい　このようにね」

ギンガ「えっ」

目の前にいた男が急に女に変わる

そして女は手にAIDAを纏いギンガの懐に入り込む

そして

ギンガ「キャアアア！！」

時間を少しさかのぼり

現在カイト達はAIDA反応した海上隔離施設に向かうためヘリに乗っている

カイト「ヴァイス、後どのくらいで着く？」

今、ヴァイスと呼ばれた男はロングアーチスタッフ兼ヘリパイロットのヴァイス・グランセニック陸曹である

ヴァイス「後、10分ぐらいだ」

スバル「後、10分」

エリオ「大丈夫でしょうか」

キャロ「心配です」

ティアナ「下手したら着いたときにはもう」

スバル「ティアー!!」

ティアナの発言に怒るスバル

ティアナ「下手したらよ、下手したら!!」

エリオ「ふっ、2人共」

キャロ「止めて下さい」

睨み合う2人を止めようとするエリオとキャロ
すると

カイト「2人共落ち着いて」

そう言いながら2人の頭を撫でる

スバル「えっ? / / /」

ティアナ「あっ／＼／」

カイト「2人が焦ったて何も始まらない。大丈夫きつとみんな無事だよ」

カイトは笑顔で2人を落ち着かせる

スバル「はい／＼／」

ティアナ「すみません／＼／」

カイト「とはいえ後、10分か」

と考え込むカイト

スバル「フリードに乗っていくのはどう?」

キャロ「無理です フリードに乗れるのは最大で3人ですし、それだったらこのヘリの方が速いと思います」

エリオ「隊長達みたいに飛んで行けばいいんですけど」

とはいえ、ここにいるメンバーは空を飛ぶ魔法使うことができない

カイト「俺は飛べないこともないけど 苦手なんだよ」

カイト達がうーんと考えていると

カイト「 あっ!」

エリオ「どうしました？」

カイト「ヴァイス、ハッチを開けてくれ!!!」

ヴァイス「わかった」

そう言うとハッチが開く

スバル「何するんですか？」

カイト「これだよ！」

そう言うと手から蒼炎の塊を出す

キャロ「それはあの時の」

ティアナ「もしかして」

カイト「蒼炎の影”さ、これなら数分で着く」

エリオ「それじゃなんでもっと早く使わなかったのですか？」

エリオが質問すると

カイト「忘れてた」

「」

呆れた表情をしているスバル達

カイト「よ、よし！それじゃ行くぞ！」

ごまかすように蒼炎の塊をハッチの外に出す
それは真っ直ぐと海上隔離施設に向かう

カイト「（間にあってくれ）」

姉妹の絆

海上隔離施設

謎の女からA I D Aをくらったギンガはそのまま倒れてしまう

ウエンディ「ギン姉!？」

チンク「貴様何をした!」

怒鳴りながら睨みつける

「あら、久しぶりに会ったのにそれはないんじゃない?チンク?」

チンクの名前を呼びながら振り向く女性

その女性を見たときチンク達は驚いている

セイン「ドゥーエ」

デイエチ「姉様」

ノーヴェ「なんであんたがここに」

チンク「あなたは、あの時の事件で死んだはずでは」

そう、この女性は戦闘機人NO.2ドゥーエ

JS事件の渦中に死亡しているはずなのだ

ドゥーエ「ふふふ、私はみんなに会うために幽霊になってきたのよ」

ウエンディ「マジッスか!？」

ドゥーエ「う・そ」

と笑いながら答えるドゥーエ

チンク「」

セイン「ウエンディ」

ディエチ「それは」

ノーヴェ「ねえだろ」

チンク達から冷たい目を向けられるウエンディ

ウエンディ「みんなヒドいッス〜!」

ドゥーエ「ふふふ」

笑っていたドゥーエが黙り出す

ディエチ「ドゥーエ姉？」

ドゥーエ「これを」

ドゥーエは何かを投げ渡す

チンク「これは」

セイン「私達の」

ノーヴェ「武器」

ウエンディ「どういづつもりッスか？」

チンク達は意味が分からないといった表情をする

ドゥーエ「それを持って私と一緒に来てもらいたいの」

チンク「どこにですか？」

ドゥーエ「私を生き返らせた人のところよ。大丈夫、悪いようにはしないわ。だから さあ」

ドゥーエはチンク達に手を差し伸べる

チンク「 申し訳ありません。姉上」

セイン「そのお願いは聞けないよ」

ディエチ「私達を救ってくれたギンガさんやゲンヤさん」

ノーヴェ「そして機動六課の奴らに」

ウエンディ「示しがつかないッス」

チンク達は真剣な顔をして言う

ドゥーエ「あなた達ならそう言つと思つたわ けど」

ドゥーエの手からAIDAが纏う

ドゥーエ「私も 退けないのよ」

そしてドゥーエはAIDAをチンク達に放つた

チンク「みんな散開しろ!!」

セイン「うん!」

デイエチ「了解」

ノーヴェ「わかった」

ウエンディ「了解ッス!」

ドゥーエによつて放たれたAIDAはチンクに向かう

ノーヴェ「チンク姉!!」

チンク「くっ!」

AIDAがチンクにあたると思われた

ズバァン!

セイン「なっ!?!」

急にAIDAが斬りきざまれ弾け飛ぶ

ドゥーエ「あなたが”蒼炎の守護神”ね」

チンクの前に現れたのはカイトであった

カイト「君、大丈夫?」

カイトがチンクのほうへ向き無事が確かめる

チンク「ああ、大丈夫だ」

ノーヴェ「チンク姉!」

ノーヴェ達が近くによる

チンク「私は大丈夫だ、それより」

デイエチ「あなたは?」

デイエチが急に現れたカイトに名前を聞く

カイト「僕は機動六課の世話になっているカイト”グランツ”。よろしく」

挨拶をしたカイトはドゥーエのほうへ向きながら

カイト「もうすぐスバル達来る。それまで下がって」

ウエンディ「スバル達がツスカ！」

セイン「けれど」

チンク「カイト殿に任せておけ」

ノーヴェ「チンク姉？」

チンク「今の我々では武器を持っていたとしても、恐らく足手まといになるだろう、だから任せるんだ」

セイン「うん」

ディエチ「わかった」

チンクの言葉に了解するノーヴェ達

カイト「大した洞察力だね。お嬢ちゃん」

関心しながら言うカイト

チンク「お嬢ちゃん」ではない。私はこの中で一番上だ、つまり姉だ」

カイト「そっ、そうなんだ。それは悪かった（そうには見えない）」

心の中では驚くカイト

ドゥーエ「そろそろ、いいかしら？」

ドゥーエが腕を組みながら待っている

カイト「待つてくれるなんて優しいんだね？」

ドゥーエ「白々しい、そんな隙見せなかつたくせに」

笑いながらいうドゥーエ

ドゥーエ「それに、ヘルバ様にあなたとは戦うと言われてるのよ」

カイト「”ヘルバ様”ねえ」

ドゥーエ「ふふ、それじゃ失礼するわね」

そう言いながらドゥーエの体にAIDAが纏う

ドゥーエ「後、気をつけてね」

そのまま消えるようにいなくなる

カイト「（気をつけて？なにを）」

そう考えていると

スバル「カイトさん」

スバル達が到着する

エリオ「皆さん怪我はありませんでしたか？」

そうエリオがいうと

ディエチ「そつだ、ギンガさんが」

スバル「ギン姉が!？」

それを聞くと慌ててギンガのところに向かうスバル

カイト「（まさか!?!）スバル!?!その子から離れるんだ!」

何かに気づいたカイトがスバルを止める

スバル「えっ?」

カイトがスバルに声をかけたときにはすでにギンガの目の前にいた

ティアナ「!?!スバル、後ろ!?!」

スバル「えっ!?!」

スバルがティアナに言われ前を向き直し見たものはいつの間にかバリアジャケットを着てデバイスを構え殴りかかるうとしてるギンガだった

ギンガ「アアアアア」

MK『プロテクション』

とっさにマツハキャリバーがバリアをはり防いだ

ギンガ「アアア！」

しかしギンガのデバイスからAIDAが飛び出しスバルのバリアを破壊しようとする

スバル「くっ」

なんとかAIDAを弾き飛ばすことができた

カイトがインストールしたプログラムが効いているようだ

だがすぐさまギンガはAIDAを腕に纏い鋭い槍のようにしスバルに襲いかかる

スバル「くっ！ なっ！？」

また同じようにバリアで防ごうとしたのだがぶつかった直後にバリアにヒビがはいる

ティアナ「スバル！！」

カイト「させるか！！」

そう言うとカイトは手を地面につける

カイト「蒼炎陣」

その瞬間スバルの足元から蒼炎が噴き出しスバルを覆うように囲む

ギンガ「ガア！」

ギンガはすぐに離れ間合いをとる

カイト「スバル、平気か!？」

カイトはスバルのもとに行き様子を聞く

スバル「」

黙り込むスバルにカイトはスバルの目を見る

その瞬間スバルの目が一瞬にして黒くなる

カイト「くっ!？」

スバル「ウオオオオ」

カイトが驚いているときスバルが思いつきり殴りかかるようにする

カイトはなんとか受け止めたがスバルの力が強いのかそのまま弾き飛ばされる

カイト「くそっ!!間に合わなかった」

ティアナ「そんな スバルまで」

悔しそうな顔をするカイトとティアナ

エリオ「でも、どうしてスバルさんが？ちゃんとインストールされていたはずなのに」

カイト「言った筈だよ」あくまで抵抗できるだけ” 体の中に入られたら精神破壊が始まり破壊されたらAIDAに取り憑かれ操られる」

キャロ「そんな」

不安な表情になるFW陣

カイト「だが そのために僕がいる」

ニカツと笑いながら話しかけるカイト

カイト「どんな時、場所であろうと僕が必ず駆けつけ助け出す！
とは言っても取り憑かれた後に駆けつけた奴に言われても説得力ないかな？」

ハハハと苦笑するカイト

ティアナ「そんなことはありません！」

エリオ「そうですよ！」

キャロ「カイトさんと一緒にいるとなんだか安心感があります！」

うんうんと頷くティアナ達

カイト「ありがとう　それじゃ、あの2人を悪の手先から助け出すよ！」

ティアナ・エリオ・キャロ「了解！」

カイトは武器を取り出しスバルとギンガの方を向き構える

カイト「後、僕を呼ぶ時は好きに呼んでいいよ。タメ口でも構わない」

キャロ「えっ？」

エリオ「何故ですか？」

カイトの言葉に疑問に思う2人

カイト「それはね」

ティアナ「？」

カイトは顔だけ向けながら話し出す

カイト「僕と君達は戦場で戦ういわゆる戦友であり仲間。仲間同士、固くなるしい言葉は必要ない。でしょ？」

エリオ「戦友　仲間」

エリオは嬉しそうに呟く

ティアナ「わかったわ、カイト！」

キャロ「私もです！」

エリオ「僕もです!!！」

カイトの言葉に気合いが入りデバイスを構える

カイト「それじゃ、行こう！」

ティアナ「ええ！」

キャロ「はい！」

エリオ「了解です！」

カイト「僕はあの髪の長い子の相手をする。ティアナ達はスバルを
」!

ティアナ「わかったわ！」

エリオとキャロも頷く

カイト「よし！ ハアアアアア！」

カイトはスバルとギンガを離れさせるためギンガを弾き飛ばそうと
した

ガキーン！

カイト「なに！」

だがそれはスバルとギンガに防がれる
そのまま後ろに跳び間合いをとるカイト

カイト「くっ！」

キャロ「大丈夫ですか？」

カイト「大丈夫。しかし 厄介だ」

ティアナ「そうね 見事なコンビネーションね」

エリオ「けど、どうします？これでは離せさせることができません
よ」

カイト「 よしっ！僕とティアナとエリオが2人の動きを封じ込
みその瞬間キャロが捕縛魔法を使う、 いい？」

ティアナ「わかったわ！」

エリオ「はい！」

キャロ「わかりました！！！」

カイト「 行くぞ！」

カイトのかけ声とともにカイト・ティアナ・エリオは2人のもとに
向かいキャロは捕縛魔法を詠唱を始める

カイト「ハアッ！」

ギンガ「アアア！」

エリオ「ヤアアア！」

スバル「ガアアア！」

カイトとエリオは得意のスピードでスバルとギンガを錯乱させる

その動きは一寸のズレがなくまるで2つの雷のようだ

それだけではなくカイトはエリオの動きに合わせる一心同体のように

エリオ「（すごい！）」

スバルとギンガが離れようとすれば

ティアナ「させない！」

ティアナがクロスミラーージュで対応する

カイト「ナイス、ティアナ！」

ティアナ「カイト、余所見しない！」

注意しながらも嬉しそうな表情をするティアナ

そんなカイト達の連携プレーに身動きできなくなったスバルとギンガ

カイト「キャロ！今だ！」

キャラ「はい！」

カイトの合図と同時にキャラの捕縛魔法を発動し見事にスバルとギンガを捕まえる

ティアナ「よしっ！」

エリオ「やった！」

カイト「GOOD JOB！キャラ！」

カイトは親指をビシッと立てながら笑う

キャラ「はい」

キャラもカイトと同じように親指を立てながら返事をする

エリオ「カイトさん、次はどうするんですか？」

エリオが次の指示を聞こうとすると

ティアナ「！？エリオ！」

急にスバルから膨大な魔力が放出される

エリオ「これは！？」

キャラ「戦闘機人モード！？」

その瞬間スバルはエリオの目の前に現れる

エリオ「なっ!?!」

スバル「IS発動!」振動破砕”!」

”振動破砕”とは攻撃対象を超振動させ、内部から破壊する能力である

ただでさえ危険な能力なのにさらにAIDAの力が加わっている
喰らえばただではすまない

キャロ「エリオ君!」

エリオは思わず目を瞑る

しかし衝撃が来ない、目を開けてみると

エリオ「カイトさん!」

そこには蒼炎を纏ったカイトがスバルの攻撃を防いでいた

カイト「危なかった。もし素手で防いでいたら今頃、手が木っ端微塵だったよ」

思わずそんな光景を想像して震えるカイト

カイト「蒼炎”独楽車”」

カイトはまるで独楽のように体を回しスバルを弾き飛ばす
スバルはそのままギンガにぶつかり倒れる

カイト「 スバル、ギンガ 行くぞ！」

ゆっくりと立ち上がるスバルとギンガのところに向かい

カイト「ハアアアア！！」

2人とぶつかった瞬間光が3人を覆う

カイト「ここは ギンガの精神世界」

カイトが目を開けてみるとそこは、なのはの時と同じ白い空間

そして目の前には青い長髪で後ろにリボンを付けた少女が立っていた

私達は普通の人間ではない

私達は戦い破壊するために産み出された戦闘兵器”戦闘機人”

私達とはある研究所で管理局に保護された

現在私達のお父さん、ゲンヤ・ナカジマ

そして保護者を名のりだしてくれた私達のお母さん、クイント・ナカジマ
もしこの人達が保護してくれなかったら今頃どこかの研究所で実験
体にされていただろう

私達は保護されたときお母さんとお父さんは私達に”私達は今日か
ら家族だ”って言うてくれた

私はとっても嬉しかった

戦闘機人である私達に嫌な顔一つせず本当の家族のように接してく
れた。嬉しかった、楽しかった

けど

そんな幸せな日々は続かなかった

お母さんクイント・ナカジマが亡くなった

殉職だった

しかも戦闘機人事件の捜査だった

私はとても悲しんだ、苦しんだ。それはスバルもだと思う

だって私達のせいで死んでしまった、そのようなものだ

お父さんはお母さんの葬式の時泣いてなかったけどきつと心の中
では泣いていた

だから私はこれ以上お父さんを悲しませるわけにはいかない

そのために私は管理局に入った

だって

お父さんは私達を恨んでいるから

カイト「」

カイトはギンガの心の声を聞いて黙り込む

ギンガ「私はお父さんにこれ以上恨まれたくない、だから私は戦うの」

ギンガは下を向きながらそう言う

カイト「それが 自分のできる償いだとそう思うの?」

ギンガ「そうです」

カイト「その自分達を恨んでいると言うのはお父さん本人から聞いたの?」

ギンガは首を横に振る

カイト「君は本人にも聞かずそう思っているのか」

ギンガ「　だってそうじゃない！自分の大切な人が他人のせい
で死んでしまったらそう思うのが普通じゃない！」

ギンガは大きな声でそう言った

カイト「　バカか君は　？」

ギンガ「なっ！？」

カイト「本人にも聞かず”自分を恨んでいる”だと思いがりもい
い加減にしろ！」

ギンガに向けて怒鳴るカイト

ギンガ「だって　」

カイト「だっても糞もない！君がやっているのは　裏切りだ」

ギンガ「えっ！？」

カイト「君も言ってたじゃないか、”私達は今日から家族だ”と
その家族を信じず言い出さない、それは裏切りじゃないのかな？」

ギンガ「違う！私は　」

否定するがそれ以上言い出せないギンガ

カイト「だったら話してみるんだ、結果がどうであれ君は今より、
前へ進める」

ギンガ「」

黙り込むギンガ

カイト「 だったらまず後ろにいる人に聞いてみればいいよ」

ギンガ「えっ？」

ギンガはカイトに言われ後ろを向くとそこにはギンガより背が低い女の子がいた

ギンガ「スバル？」

スバル「ギン姉」

カイト「スバルはギンガと一緒にここに来ていたみたいだね」

しばしの沈黙

スバル「ギン姉 お父さんは私達のことを恨んでなんていないよ」

ギンガ「そんなはず」だって！」「！？」「」

スバル「私聞いたんだ。お父さんがお母さんのお墓の前で」

数年前

クイント・ナカジマの墓前

そこには一人の花束を持った男性ゲンヤ・ナカジマがいた

ゲンヤ「クイント、任務とはいえお前が死ぬなんて思ってもいなかったよ」

ゲンヤは墓に向かって話しかける

ゲンヤ「ギンガやスバルは俺のことを気にかけて明るく振る舞ってくれてるよ。情けない父親だよな」

そう言いながら苦笑する

ゲンヤ「それにな、管理局の上の奴らがなギンガとスバルを引き取るうと言いだしたんだ」

花束を置き

ゲンヤ「俺はこう言ってやった”ふざけるな！！”ってね。ギンガとスバルは俺とクイントの大切な大切な家族だ。引き渡すなんて絶対にしない」

ゲンヤは手を合わせ拝む

ゲンヤ「俺はギンガやスバルが立派になって飛び立つまで必ず一緒にいる。必ずな」

そう言うとゲンヤは

ゲンヤ「また来るよ。今度は大切な家族を連れてな」

ギンガ「お父さんが そんなことを
」

スバル「私はそれを聞いてとても嬉しかった。だから私はお父さんが大好き！ ギン姉は？」

ギンガ「私も 私もお父さんが 大好き」

ギンガは涙を流している

カイト「まだ 怖い？」

ギンガ「 少し
」

カイトの質問に声が小さいながらも答えるギンガ

カイト「だったら僕も着いて行くよ！」

ギンガ「 本当に？ あっ
」

カイトはギンガの頭に優しく手を置く

カイト「もちろん
」

ギンガ「ありがとう」

スバル「ギン姉 あっ!？」

近くで見ていたスバルにカイトはギンガと同じように頭に優しく手を置く

カイト「もちろん スバルも来るよね？」

ニコツとスバルに笑いかける

スバル「うん」

カイトの笑顔を見て嬉しくなったスバルは笑顔になりながら返事をする

カイト「それじゃ、帰ろうか？」

ギンガ「はい」

スバル「うん！」

2人はカイトに抱き付く

その瞬間カイト達の回りに光が覆う

ティアナ「なんなの、この光!？」

ティアナ達はカイトがスバル達にぶつかった瞬間に出た光に驚いている

ノーヴェ「おい!この光は何なんだ？」

エリオ「僕にもわかりません けど」

デイエチ「けど？」

キャロ「今カイトさんはスバルさんとギンガさんを救っているんだと思います」

セイン「そっか」

ティアナ達が光を見ながらそう言っていると

チンク「むっ!?!光収まっていくぞ」

チンクの言葉にみんなが光の方へ向く

ティアナ「スバル!カイト!ギンガさん!」

そこにはカイトの腕に包まれて眠っているスバルとギンガ

キャラ「よかった。本当に」

ほっと一安心したティアナ達
すると

「みんな、大丈夫！」

ティアナ達は声の方を向くと

ティアナ「八神部隊長！」

エリオ「なのは隊長にヴィータ副隊長！」

キャラ「フェイトさんにシグナム副隊長！」

フェイト「エリオにキャラ！よかった無事で！」

すぐさまエリオとキャラのもとへ向かうフェイト

エリオ「はい。僕達は大丈夫です」

なのは「ティアナ、今の状況は？」

ティアナ「はい！今、AIDAに取り憑かれたスバルとギンガさんをカイトが無事救出しました」

はやて「なるほど」と言うことはまだ終わってないんやな」

ティアナ「えっ？」

キャロ「どういことですか？」

カイトがスバルとギンガを助け出したことですでに終わっているものだと思っているティアナ達はよくわかっていない

カイト「シグナム、上！」

シグナム「レヴァンティン（L.T）」

L.T「エクスプロージョン」

シグナムは上に跳ぶ

上には黒い泡AIDAがあった

シグナム「紫電一閃！」

シグナムはAIDAを叩つ斬る

AIDA「」

AIDAは奇声を挙げながら正体を現す

ウエンディ「なんスかあれ!？」

なのは「あれが」

はやて「AIDAの正体や」

ティアナ「あれが」

見たことのあるのは、フェイト、はやて以外のみんなは驚いている

その際にヨロヨロと逃げ出そうとするAIDA

ヴィータ「逃がすか！アイゼン（GA）」

GA『コメントフリーゲン』

ヴィータの目の前に大きな鉄球が現れる

ヴィータ「いつけえ！」

ヴィータはグラーファイゼンで鉄球を打つ

鉄球はそのままAIDAにあたる

カイト「ティアナ！エリオ！2人をお願い！」

カイトが2人を預けた後AIDAの前に立つ

カイト「後は僕に任せて！」

そう言うとカイトは右腕をAIDAに向ける

カイト「データドレイン！」

カイトのデータドレインがAIDAにあたる

AIDA「」

AIDAはそのまま消滅する

フェイト「やったね！カイト！」

フェイトはカイトのもとへ向かい声をかける

カイト「」

しかしカイトの返事がない

フェイト「カイト？」

フェイトはカイトの顔を見ようと回り込む

カイト「」

カイトはグラツと崩れるように前に倒れる

フェイト「えっ？えっ？えっ？キャアツ！？」

前回と同じようにフェイトに倒れ込むカイト

フェイト「あわわわわ！？／／／／／」

はやて「なははは またかいな」

呆れた表情をするはやて

なのは「」

なのははジッと睨みつけている

フェイト「／／／／／／／／」

フェイトもまんざら嫌でもないようだ

なのは「フェイトちゃん 今助けてあげるからね」

フェイトの様子に気づきすぐに助け出すなのは

フェイト「あっ」

フェイトは名残惜しそうな表情だった

エリオ「どうかしたんですか？フェイトさん？」

そんなフェイトを心配して声をかけるエリオ

フェイト「えっ！？ううん、何でもないよ！」

フェイトはそう言いながらカイトを見る

フェイト「（何なんだろう？ドキドキが止まらない）」

フェイトの本当の気持ちに気づくのはもう少し後のこと

はやて「それじゃみんな、カイト君達を病院に連れて行くで！」

「了解！」

とある洞窟

ドゥーエ「只今帰りました。ヘルバ様」

ヘルバ「ああ、見ていましたよ。なかなかの働きでした。ですが

」

ドゥーエ「！？」

ヘルバはドゥーエを殴りつける

ヘルバ「戦闘機人達を連れて来れなかったのはいけませんね？」

ドゥーエ「申し訳ありません。ヘルバ様」

頭を下げ謝るドゥーエ

ヘルバ「まあ、いいでしょう。その分あなたに働いてもらいますよ

┌

ヘルバは洞窟の中央にある壁版を見る

ヘルバ「冥王復活のためにね アハハハハハハハ！」

訓練と予言

カイト「ここは？」

カイトは今周りにはなににもない白い空間にいた

カイト「イタツ!？」

急にカイトの右腕に痛みが走る

カイト「くっ　　なっ!？」

右腕を見てみるとカイトの右腕に亀裂が走っている

亀裂からピキパキと音をたてながら破片が崩れ落ちる

カイト「うっ　　うわあああ!？」

カイト「はっ!」

カイトが再び目を開けてみるとそこには白い天井だった

「起きましたか？」

カイトは声が聞こえた方へと顔を向ける
そこには金髪で管理局の制服の上に白衣を着た女性がいた

「大丈夫？あなた2日も眠っていたのよ？」

カイト「あの あなたは？」

シャマル「私は機動六課所属医務長のシャマルよ。よろしくね」

ウィンクしながら挨拶をするシャマル

カイト「は、はい よろし く？」

起きて挨拶しようとしたが体が動かない

カイト「（なんだこれは まさか！？これがちまたで噂の金縛り
？）」

意味のわからないことを考えていると

シャマル「ふふふ モテモテねカイト君」

ニヤニヤ笑いながら指をさすシャマル

カイト「へっ!？」

カイトは指をさされたほうへ向くと

スバル「くう」

ギンガ「すう」

カイトの片腕ずつ掴みながら眠っているスバルとギンガ

カイト「」

放心状態のカイト

シャマル「ちなみに私が来たときにはすでにその状態だったから私にはわからないわよ？」

カイトの疑問に思ったことを先に答えられてしまう

カイト「とっ、取り敢えず、脱出しないと」

カイトは無理やり起きようとするが

ギンガ「うん」

スバル「嫌っ！」

だがものすごい力でベッドに引き戻される

再び起きようとするが1mmたりとも動かない

カイト「戦っているときにも思ったけどなんて力なんだ！それに嫌っ！」じゃないよ！

シャマル「あらあら」

カイト「」あらあら」じゃない。助けて下さいよ、シャマル！」

んなどこ誰かに見られたら」

シャマル「もう遅いわよ」

カイト「へっ？」

カイトはギギギとブリキ人形のように反対側を向く

なのは・フェイト「」

黒いオーラを出しデバイスを構える2人

カイト「あの　その　これは誤解　」

なのは・フェイト「問答無用！」

カイト「ぎやああああ！」

カイトがなのはとフェイトに吹っ飛ばされている頃

はやては一人の女性と会っていた

はやて「それで急に呼び出したのは何故なんや？カリム」

そう、はやてが会っていた女性とは聖王教会騎士カリムであった

カリム「ええ　実は新たな予言が出たのです　」

はやて「なんやて！？ホンマかいな？」

カリムが言う予言とはプロフェーティン・シュリフテンという古代ベルカのレアスキル。その性質は一種の未来予知能力であり、来る未来の出来事を古代ベルカ語による詩文として表記する事である。

カリム「はい　　これです」

カリムは一つの紙を見せる

蒼い炎を纏いし者と混沌の帝王が戦うとき

混沌の帝王は黒き魔を使い世界を滅ぼし冥王を蘇えさせる

世界を守りし者達は世界を滅ぼし冥王と戦う

世界を守りし者達は少しずつ危機に陥る

蒼い炎を纏いし者は再誕を使い世界を滅ぼし冥王を滅し平和になる
だろう

はやて「見てみる限りでは悪くない　　むしろ良い予言やな」

カリムの予言を見てほっとするのはやて

カリム「ええ だけど」

はやて「？」

カリム「この蒼い炎を纏いし者とは一体？」

はやて「ふふふ」

カリムの悩む顔を見て笑うはやて

カリム「どうかしたの？はやて？」

はやて「うちはその正体を知ってるで」

ニヤツと答えるはやて

カリム「本当！？」

驚いた表情をするカリム

はやて「ホンマやで！しかもその人は機動六課にいるんや」

カリム「ならばはやて、お願いがあります できればその人とお話をしたいのです」

はやて「構わへんで。それじゃ明日連れて来るで」

カリム「ごめんなさい。明日は無理なの 出来れば一週間後、この時間に」

はやて「わかったで」

そう言いながら席を立つ

カリム「あっ！？はやて！」

はやて「なんや？」

カリムがはやてを呼び止める

カリム「その人はどういう御方なのでしょう？」

はやて「その人はな」

ドアに向かっていたはやては振り返り

はやて「とても強くて優しく、どんな時でもすぐに駆けつけてくれるヒーローみたいな人や」

そんなはやての言葉と表情を見て

カリム「そうですか、それは楽しみです」

そう言いながら笑顔になる

その頃、そのヒーローは

カイト「」

屍となっていた

カイト「」

現在カイトは訓練所のど真ん中にいた

そしてカイトの横にはなのはとフェイト、目の前にはFW陣がいた

なのは「それじゃ訓練を始めるよ！」

FW陣「はい！」

カイト「ちよつと待って〜！」

カイトが大きな声で止める

フェイト「どうしたの？カイト？」

カイト「訓練するのはかまわないし、一週間の修理が必要だったはずの訓練所が直っているのもなにもいわない」

ひと息いれて

カイト「だけど、なんで僕まで訓練に参加しなくてはならないの？」

なのは「なんでって」

フェイト「カイトが」

なのは・フェイト「医務室で暇そうにしていたからだよ」

FW陣「」

なのはとフェイトは笑ってはいるが目が笑っていない
それを見たFW陣は震えていた。もちろんカイトもである

カイト「だからあれは誤か」「カイト（君）」「はい!!！」

なのは・フェイト「手伝ってくれるよね?（黒笑）」

カイト「もちろんであります!」
「と言つても思った?。」

ビシツと姿勢を正し敬礼するカイト
だがカイトはうつすら笑みを浮かべながら走り出す

スバル「あつ!?!」

ティアナ「逃げた!」

カイト「ふっ」
「これは逃げるのんじゃない」
「戦略的撤退だ!」

カイトはすでに出口の近くにいた

なのは「ふふふ」
「カイト君」

フエイト「甘いよ」

次の瞬間

ジャキン！

カイトが戦略的撤退？に成功したかと思われたのだが

シグナム「どこに行くつもりだ？」

ヴィータ「逃がしはしねえよ」

出口付近に待機していたらしくシグナムは首もとに、ヴィータは背中にデバイスを突きつけていた

カイト「あの、これは逃げるのではなく 用事があるから部屋に帰ろうかな、なんて思ったりして」

それを一般的には逃げるといふ

カイト「うるさい！黙れ作者！」

シグナム「何を呟いている？」

ヴィータ「いいから行くぞ」

そのまま首根っこ掴まれ引きずられるカイト
ザマアミロ（笑）

カイト「チクシヨウ、覚えとけよ作者」
結局訓練に参加する

ことになったカイト

なのは「カイト君、早速なんだけどスバル達に訓練をしてもらいたいんだけど」

カイト「訓練って言われても どうすればいいの？」

ヴィータ「うーん あの時の模擬戦で思ったことを教えてくれればいいんじゃないか？」

カイト「ふむ、なるほど。 ?どうしたの？スバル、エリオ？」

カイトはスバルとエリオが震えているのに気づく

スバル「なっなんでもないよ ないです！」

エリオ「はい！」

明らかなんでもありそうな様子の2人

実は2人はあの模擬戦でかなりのトラウマとなっていた

カイトは見なかったことにしてとある箱を取り出す

その箱は上に穴が開いていてそこから4本の棒があった

ティアナ「なにそれ？」

カイト「さすがに4人全員を一気に教えるのは面倒もとい大変だからさ、この棒を引いて棒に書かれた番号で順番を決める」

いつ用意したのかは置いて棒を引くスバル達

エリオ「あっ！僕は1番です」

スバル「私は2番」

キャロ「私は3番です」

ティアナ「」

何故か黙り込みブルブル震えているティアナ

カイト「どうかした？ティアナ？」

ティアナ「」どうかした？」じゃないわよ！」

バキッ！

カイト「へブシッ!?!」

カイトはティアナに殴られる

フェイト「どっ、どうしたの？ティアナ？」

ティアナ「これを見てみて下さい！」

そう言いながら棒をフェイトに見せる

フエイト「こつ、これは」

棒に書かれたものは

”これを引いた者は王様に胸を揉まれる”

なのは「カイト君」

フエイト「カイトってそんな人だったなんて」

みんなが冷たい目でカイトを見る

カイト「イタタ 何なの なんだ、これは！？何でこんなことが書いてあるの？てか、王様って？」

シグナム「どういうことだ？」

カイト「実はこのくじは、はやての部屋から借りてきたものなんだけど」

「」

一同が沈黙とかす

訓練と予言 エリオ編

カイト「そっ、それじゃあ、始めようか」

カイトは空気を変えるために訓練を始める

カイト「えっと最初は誰だっけ？」

エリオ「はい！僕です！」

カイト「よし！エリオは僕に付いて来て。スバル達はなのは達に見てもらおうように」

スバル「うん！」

キャロ「はい！」

ティアナ「わかったわ」

スバル達の返事を聞いて

カイト「それじゃ、なのは。頼んだ！」

なのは「うん！任せて」

フェイト「カイト、エリオをよろしくね？
あっ、やっぱり私も
ついて行ったほうが」

フェイトのスキル過保護が発動する

エリオ「大丈夫ですよ！フェイトさん！」

フェイト「でも」

エリオは平気と答えるがそれでも食い下がるフェイト

カイト「大丈夫だよ、フェイト。そこまでキツイ訓練はしない予定だから」

カイトは笑顔で言う

フェイト「カイトがそこまで言うなら」

カイトの笑顔に見惚れながらも承諾するフェイト

カイト「よし！行くよ、エリオ！」

エリオ「はい！！カイトさん！」

カイトとエリオは訓練所の奥へと向かった

なのは「それじゃ、私達も始めようか？」

スバル・ティアナ・キャロ「はい！」

フェイト「」

今だに見惚れているフェイト

なのは「ほら！フェイトちゃん、行くよ！」

フェイト「えっ！？あっ、なのは！？」

なのはは機嫌悪そうにフェイトの手を引っ張り連れて行った

カイト「うーん　ここらでいいかな？」

カイトが立ち止まった所は何の変哲もない広野

カイト「よし！ここで訓練を始めるよ！」

エリオ「はい！　あの　」

カイト「？　どうした？」

エリオ「　　お願いがあるんです　　／／／」

なんだか恥ずかしそうにしゃべるエリオ

カイト「なんだ？」

エリオ「それはですね　えつと／＼／」

カイト「？」

エリオ「　カイトさんのこと”兄さん”って呼んでいいですか？」

カイト「　へっ？」

カイトはエリオの言葉を聞いて固まってしまっ

カイト「　どうしたの、急に？」

固まっていたカイトは取り敢えず理由を聞く

エリオ「えつとですね　カイトさんと一緒にいると暖かい気持ち
なるんです。　兄さんと一緒にいるのはこんな感じなのかなって

」

カイト「でも何で？エリオにも家族や兄弟がいるだろう？」

エリオ「それはですね

」

エリオは色々と自分の過去について話してくれた
プロジェクトFによって生み出された人造生命体でフェイトによっ
て救い出され管理局の保護を受けたことなど

カイト「　そうだったんだ　10歳少年騎士にもそんなことが

ごめん　言い出しにくかったよね　」

エリオ「いえ　むしろ話してスッキリしました」

カイト「そっか エリオ、僕は前にも言ったよね？”僕を呼ぶときは好きに呼んでもいい”ってね」

エリオ「じゃあ」

カイト「ああ 早速訓練を始める。いいね エリオ？」

カイトはエリオに微笑んだ

エリオ「はい！”兄さん”！」

エリオはその微笑んだカイトを見て笑顔になる

その瞬間カイトとエリオの絆は深まったのであった

カイト「早速だけど、エリオには足りないものがある。それはなんだかわかる？」

エリオ「うーん 経験ですか？」

カイト「悪くない答えだけど、それは時間が解決してくれる」

エリオ「」

再び考え出すエリオ

カイト「それじゃ、ヒントをあげる」

カイトは4枚の紙を取り出す

その紙には文字が書かれている

1枚目は”力”

2枚目は”スピード”

3枚目は”反射神経”

4枚目は”大人の階段”

エリオ「」

カイト「どうしたの？」

エリオ「いえ」

エリオは4枚目の紙を見て混乱する

カイト「あつ！ちなみに4枚目の紙は関係ないから」

それじゃ、なんで出したんですか？、という疑問を心の奥にしまい込んだエリオは

エリオ「”力”ですか？」

1枚目の”力”を選ぶ

カイト「ファイナルアンサー？」

エリオ「」

なるほど無理に4枚したのはそのためか

カイト「ファイナルアンサー？」

エリオ「ふあ、ファイナルアンサー」

エリオは仕方なさそうに答える

ドルルルルルルル！

どこからかそんな効果音が流れ

カイト「

」

長えな、おい！

エリオ「 「残念！」 痛っ！」

違ったらしく”残念！”というかけ声とともにデコピンされるエリオ

カイト「これでエリオは僕に訓練を見てもらう権利が無くなりました。すぐに次の人を呼んできなさい」

エリオ「ええっ!?!」

デコピンされるだけではなく訓練を見てもらえないと言われて驚く
エリオ

メチャメチャ理不尽である

カイト「まあ、それは冗談だよ。エリオの足りないもの、それはこれ」

カイトは紙をエリオに渡す

エリオ「これは!?!」

書かれている紙は”スピード”だった。

確かにフェイトやカイトと比べられると劣っているが自分の長所はスピードだと少なからず思っている

エリオはこれを見て少しショックを受ける

エリオ「 フニユ!?!」

カイトがエリオの頬を引っ張る

カイト「言うておくけど、僕が言うてるスピードは移動速度のことじゃないよ」

エリオ「えっ?」

カイト「僕が言うてるのは、突きの速さだ」

エリオ「突きの速さ」

エリオは繰り返すようにいう

カイト「そう　エリオ、試しに僕に突きを放ってみる」

そう言いながら双剣を構える

エリオ「はい！ストラダー！！」

ST『セットアップ』

エリオは赤色のバリアジャケットを着て槍型のデバイスを構える

カイト「来い！」

エリオ「行きます！」

ST『ソニックムーブ』

エリオは高速移動魔法でカイトを錯乱させる

エリオ「（ここだ！！）」

エリオはカイトの後ろに回り込み突きを放とうとしたが

エリオ「なっ！？」

突く寸前でカイトの双剣がストラダーの矛先で止められていた

カイト「せいっ！」

カイトはそのままエリオを弾き飛ばす

エリオ「くっ」

エリオはなんとか着地する

カイト「わかつたかな、エリオ？突く前までの速さは合格点だけど、その後の突く動作にいくまでが遅いんだ」

エリオ「なるほど」

納得はするものの簡単に止められたことに落ち込むエリオ

カイト「そんなに落ち込むことはないよ、エリオ。君の歳でここまでのレベルなら普通の敵なら初見で見抜かれることはない
”普通の敵”ならね」

エリオ「」

カイト「そんな顔しなくても大丈夫、それを克服するために訓練するんだからね！」

カイトはエリオの頭を撫でながら言う

エリオ「はい！」

カイト「それじゃ、訓練内容を説明する。そしてその訓練には必要

なものがある　　これだ」

カイトはどこからか何かを取り出す

エリオ「　紙とハサミ？」

カイト「ちなみに紙はさっきの奴だ　　ちょっと待ってね」

カイトはそう言うとハサミで紙を切り出す

カイト「よし出来た！」

数分後、適当に切った無数の紙屑が出来た

エリオ「？」

よくわからず首を傾げるエリオ

カイトはその紙屑を一握りする

カイト「エリオ、今から君の目の前にこの紙屑を散らす、その瞬間、デバイスで全部突き抜くんだ。魔法は禁止、いいね？」

エリオ「はい！！！」

エリオはデバイスを構える

カイト「行くぞ　　それっ！」

エリオ「ヤアアア！」

エリオはデバイスで宙に舞った無数の紙屑を突くが一つも当たらない

カイト「 どうした？一つも当たってないよ？」

エリオ「くっ もう一度お願いします!!」

しかしそれから何度も挑戦するが結局当たるところか、かすることすらできなかった

エリオ「ハアハア ー」

カイト「 ー」

カイトは手から黄昏の碑文を取り出す

ブン!

カイト「来い!メイガス!」

エリオ「!?!」

すると黄昏の碑文が光だし槍が現れる

その槍はカイトの身長より大きく、騎士が馬上で扱うような大槍

カイト「エリオ、僕が手本を見せる。だからよく見てるんだ!」

そう言いながら紙屑を一握りしながら槍を構える

カイト「そらっ！」

カイトは紙屑をエリオの目の前に散らす

カイト「ふう ハア！！」

ズバツ！！

エリオ「うわっ！？」

宙に舞った紙屑が全てバラバラになる

エリオ「 すごい 」

カイト「これは一朝一夕で出来るものじゃないから 1ヶ月で出来たらご褒美をあげるよ」

カイトはエリオの頭を撫でながら言う

エリオ「頑張ります！」

カイト「僕は次の人を見に行くからエリオはそれを続けてくれ。それと終わったら、ちゃんと片付けする事！」

エリオ「はい、兄さん！」

カイトがエリオのよい返事を聞いた後なのは達のもとへ向かう

エリオ「よし！頑張ろう！」

そう心に決めながら訓練を再開するエリオだった

訓練と予言　スバル編

エリオの訓練を終えなのは達のもとへ向かったカイトなのだが

カイト「　これは？」

スバル・ティアナ・キャロ「　」

なのは達の訓練でボロボロになって倒れ込んでいるスバル達がいた

なのは「あっ！おかえり、カイト君！」

その分何故かスッキリした顔をしているのはがカイトのもとへ駆け寄る

カイト「なのは　」

カイトが急になのはの肩を掴む

なのは「えっ！？どうしたの？カイト君／＼／」

カイトに肩を掴まれ少し顔が赤くなるなのは

カイト「やりすぎだ！」

ビシッ！

なのは「フェツ!?!」

なのはのおでこにデコピンを喰らわす

なのは「なにをするの?カイト君!」

カイト「なにをするの?」じゃない。やりすぎだよ!これじゃ俺の訓練が受けられないじゃないか!」

ボロボロのスバル達を指差しながら言うカイト

なのは「大丈夫だよ!あれくらいなら」

カイト「ホント?」

「」

スバル達に聞くも返事がない
まるで屍のようだ

なのは「大丈夫　だよね(黒笑)」

「はい!?!大丈夫です!?!」

カイト「」

カイトがなのは達のやりとりを見て呆れていると

フェイト「カイト!」

フェイトがカイトに声をかける

カイト「なに？フェイト？」

フェイト「エリオは？」

フェイトはエリオがいないことに気づきカイトに聞いてみた

カイト「今、課題を与えて自主練中だよ」

フェイト「エリオどうだった？」

カイト「そうだね、筋は良いよ。僕の与えた課題をクリアしたらエリオはさらに強くなる」

フェイト「ホント！よかった」

カイトのエリオに対する好評価に安心するフェイト

カイト「フェイト」

フェイト「なに？」

カイト「いや なんでもない」

そう言いながらカイトはなのは達のもとへ向かう

フェイト「？」

カイト「えつと、次は誰かな？」

スバル「私です」

スバルはヨロヨロと手をあげる

カイト「大丈夫？」

スバル「大丈夫です」

カイト「（そうには見えないよ）わかった。行こうか　はい」

スバル「えっ？」

カイトはヨロヨロのスバルに手を伸ばす

カイト「ほら、早く行くよ？」

スバル「はっ、はい／＼／」

スバルは顔を赤くしながら手を繋ぎ奥へ向かった

なのは「それじゃあ、私達も訓練再開しようか（黒笑）」

ティアナ・キャロ「」

カイト「ここに来る途中、悲鳴らしきものが聞こえたような気が

したような　　気のせいかな？それじゃあ、スバルの訓練を始めよう」

スバル「はい」

今だにヨロヨロなスバル

立っているのがやっとでありそうだ

カイト「　　仕方ないな。スバル、じっとしててね？」

スバル「えっ？えっ！？／＼／＼」

カイトはスバルの頭に手を置く

カイト「蒼炎の光」

ポワァッ！

スバル「うわぁ！？」

スバルの頭に置いた手から蒼炎が噴き出しそのままスバルの体を覆う

スバル「（あれ？熱くない？むしろ　暖かい）」

蒼炎が消える

カイト「どう？体が軽くなったでしょ？」

スバル「えっ？　　そういえば」

カイトに言われ体を動かしてみる

スバル「すごい！なんで？」

不思議そうな顔をしてカイトを見る

カイト「蒼炎の光”は自分のみならず触れば他の人でも怪我や疲労を回復できるんだ」

スバル「すごいんですね！」

カイト「まあ、デメリットもあるけど　　よし！さっさと始めるよ」

スバル「えっ？　　はい！」

最初の言葉は小さくて聞き取れなかったが気にしないことにしたスバル

カイト「いきなりだけど、自分の長所と短所を10字以上11字以内で答えて」

スバル「えっ！？えっと　あの　うーん　」

カイトの無茶苦茶な質問に真剣に考えるスバル

カイト「いや　スバル。冗談だから　普通に答えて」

スバル「うん　　そうだね　　長所はパワーと突破力かな　　短所はうん　　」

長所は答えて短所が答えられなかったスバルを見てカイトは

カイト「へへえ、スバルは短所がない完璧超人なんだね。凄いな」

スバル「えっ！？違うよ！けど思いつかなくて　　」

慌てて否定するスバル

カイト「わかってるよ。自分の長所・短所を答えるのは難しいからね」

と笑いながら言うカイト

スバル「カイト、酷いよ！」

スバルは少し怒りながら言う

カイト「ごめん、ごめん。代わりに僕が答えるよ。まず長所だけどスバルの言う通り”パワーと突破力”これは僕もそう思う」

スバル「えへへへ／／／」

カイトに褒められて照れるスバル

カイト「短所は　　バカなところ」

スバル「　　（；.；）」

シヨックなあまり涙目になるスバル

カイト「スバル、一応冗談だから泣かないで」

スバル「一応なの？」

カイト「次はちゃんと答えるから、そんな顔しないでよ、スバル」

スバル「うゝゝゝゝ」

スバルはカイトの冗談に我慢できず拗ねている

カイト「今度、何でも言うこと聞くからさ」

その言葉にピクツと反応するスバル

スバル「ホント!？」

カイト「う、うん」

スバルの気迫に圧されるカイト

スバル「絶対だからね」

カイト「うん」

なんとか機嫌を直したが嫌な予感がするカイト

カイト「それじゃあ、短所だけどスバルは直線的すぎるところ

だね」

スバル「直線的？」

カイト「そう。スバルはよく敵の畏にはまったり、攻撃しても避けられることが多いでしょ？」

スバル「うっ」

心当たりがありすぎるスバルは何も言い返せない

カイト「それはスバルの動き、攻撃がわかりやすいからなんだ。そのため相手に動きが先読みされてしまう」

スバル「なるほど！」

スバルは手をポンと叩きながら納得する

カイト「その分スバルの姉、ギンガは冷静沈着で状況判断も早い。そして正確で的確な鋭い攻撃はスバルにはできない芸当だろう」

スバル「」

カイトの言葉に落ち込むスバル

カイト「しかし！」

スバル「!？」

カイト「スバルはスバル、ギンガはギンガだ。気にする必要はない

ことだよ！」

スバル「私は私　？」

カイト「そう！　スバルにしかできないことを特別に教える！」

スバル「それは？」

カイト「それは　　短所を長所にかえることだ」

スバル「短所を長所に？」

よくわからず首を傾げるスバル

カイト「うん　直線的なのをもっと直線的にすればいい。想像してみても、敵に罠を仕掛けられても罠を破壊し、敵に避けられてもそのまま押し切ってしまう自分の姿を」

スバル「　」

目を瞑りながら想像してみるスバル

カイト「どう？」

スバル「無茶苦茶ですけど　　カッコイイです！」

目をキラキラ輝かせながら言うスバル

カイト「でしょ！僕もそう思ったよ」

ニコニコ笑いながら同意するカイト

カイト「それじゃあ、そうなるための訓練方法を説明する」

カイト「それはこれだ！」

カイトが取り出したものそれは一本のヒモらしきものだった

スバル「その約15cmくらいで赤と青の混ざったカラフルなヒモは何に使うんですか？」

カイト「詳しい説明をありがとう。これは2本ある。自分の足首辺りに付けるんだ」

スバルはカイトにヒモをもらい足首に付け始める

スバル「ミサंगाのようなものだね？」

カイト「そうだね 付け終わったらデバイスを起動しよう」

スバル「うん？マツハキヤリバー！」

MK「セットアップ」

スバルは籠手型とローラーブレードのデバイスを装着し青が基調のバリアジャケツトを着た

グン！

スバル「うわぁ！？」

スバルは急にガクツと膝を着いてしまう

カイト「どうだ？体が重くなつたでしょ？」

スバル「うん　どうなってるの？」

ゆっくりと立ち上がったスバル

カイト「そのヒモは魔力が触れると付けている者に約2倍の重力がかかるようになってるんだ。デバイスを解除してみて」

スバル「うん」

MK『ジャケット オフ』

スバルはデバイスを待機モードに戻す

スバル「ハア　ハア」

数分しかたっていないのに息が切れるスバル

カイト「その状態を1日4時間保てるようにするんだ。そうすればスバルの力がぐんと上がる！わかった？」

スバル「うん！わかったよ！」

スバルは両手を握りしめながら答える

カイト「それじゃ、僕は次に行くからスバルは続けてくれ。だけどやりすぎて倒れないように！スバルも無理しそうだからね」

少し心配な表情をするカイト

スバル「大丈夫！」

カイト「なに？ 今の間は」

無理しそうなスバルが心配だがなのは達のところへ向かうカイトだった

訓練と予言　　キャラ編

カイト「　」

カイトは再びなのは達のいるところへ来たのだが

なのは「　」

ヴィータ「　」

ティアナ・キャロ「　」

ティアナとキャロがまたボロボロになりながら倒れている
しかも口から魂らしきものまで出ている

そして、またスッキリした顔をするなのは
その隣には顔が青ざめているヴィータ

フェイト「あつ！カイト！」

カイト「フェイト　一体なにがあつたの？」

カイトはこの惨劇をフェイトに聞いてみる

フェイト「えつとね　カイトがスバルと”手を繋いで”行った後、
なのははヴィータと一緒に模擬戦を始めたの。その結果があれ」

カイト「　」

なぜか”手を繋いで”を強調して言う
よく見てみるとフェイトの機嫌も悪そうに見える

カイト「まったく」

カイトはため息をつきながらティアナとキャロの目の前にしゃがみ込む

ティアナ「カイト」

キャロ「交代ですか？次は私です」

カイトに気づいたティアナとキャロは立とうとするが立てないようだ

カイト「ティアナ、キャロ、おとなしくしててね”蒼炎の光”」

ボワアッ！

ティアナ「え？なっ!?!」

キャロ「キャッ!?!」

ティアナとキャロの頭に手を置き”蒼炎の光”を使うカイト

なのは「なにやってるの!?!カイト君!?!」

ヴィータ「なんのつもりだ!テメエ!」

知らないなのは達は蒼炎に覆われたティアナとキャラクを見て驚く

カイト「よく見てみてよ？」

シグナム「なっ！？」

フェイト「傷が！？」

みるみるうちに傷が治るのを見て驚く

ティアナ「すごい！」

キャラク「傷だけではなく疲れまでなくなってます！！！」

自分の状態を確かめて驚く2人

なのは「どうなってるの？カイト君？」

カイト「知りたいなら前話を見てみよう！」

ヴィータ「いや、意味わかんねえし！！！」

カイト「これで、もう大丈夫だよな？」

キャラ「はい」

ティアナ「だっ、大丈夫です／＼／＼」

傷も疲れも吹っ飛んで元気よく返事をするキャラ
しかしティアナは顔を赤らめている

その原因はカイトの手が今だにティアナとキャラの頭についている
からだ

なのは・フェイト「」

なのはとフェイトが羨ましそうな顔をして見ている
それだけではなく黒いオーラが出ている

カイト「」

なのは「あっ！／＼／」

フェイト「えっ！？／＼／」

カイトがなのはとフェイトの前に立ち頭を撫でる

カイト「これでいいかな？」

カイトはそう言いながら微笑む

なのは「うん」

フェイト「へへっ」

まるで子供のような無邪気な笑顔をするのはとフエイト

カイト「（また、あんな風になつたら大変だしね）」

そう思いながら歩き出す

ヴィータ「なっ！？おい！／／／／」

シグナム「何をする！？／／／／」

カイトは何故かヴィータとシグナムの頭まで撫でる

カイト「あっ！ごめん！つい 嫌だったかな？」

すぐに手を戻すカイト

シグナム「いや／／／」

ヴィータ「別に／／／」

カイト「ならよかった！」

そう言いながらティアナとキャロの前に立つ

カイト「次はキャロだったよね？」

キャロ「はい！！」

元気よく返事をするキャロ

カイト「よし！行こう」

カイトとキャロは訓練場の奥へ行った

ヴィータ「（なんだ？あいつに撫でられてからドキドキが止まらねえ）／／／／」

シグナム「（何なのだこれは？）／／／／」

なのは・フェイト「」

頬を赤らめるヴィータとシグナムを見て黒いオーラを出す2人

ティアナ「あゝ　なのはさん？」

なのは「　ティアナ　訓練再開しようか？（黒笑）」

フェイト「なのは　私も手伝うよ？（黒笑）」

ティアナ「イヤアアア！！」

カイト「また悲鳴が聞こえたような　気にしない気にしない！」

キャロ「アハハ」

カイト「そういえばあの竜はどうしたの？」

カイトは辺りを見渡す

キャロ「フリードならここに」

キャロはフリードのいるところに指差す

カイト「あっ！」

キャロが指差したのは自分の帽子だった

よく見てみると小さく縮こまつてるフリードがいた

キャロ「どうやらあの模擬戦でやられたときに」

カイト「ああ」

カイトは模擬戦のときフリードを蹴り飛ばしたことを思い出す

キャロ「ほら！フリード！」

キャロがフリードをカイトの前に出すが

フリード「」

フリードはカイトと目を合わせた瞬間震えだしてしまう

カイト「えっと、フリード　あの時は本当にごめん。急に現れた

からびっくりして手加減出来なかつんだ」

そう言いながらフリードの頭を撫でようと手を伸ばす

フリード「!!」

ボツ!

キャロ「あっ!?!」

カイトの伸ばした手に炎を吹くフリード

カイト「」

カイトは動じずフリードの頭に手を置く

カイト「恐くないよ?僕はフリードと仲良くなりたいたんだ」

フリードはカイトの手や目を見る

カイトの手は酷い火傷を負っていた

しかしカイトの目は真っ直ぐで優しい目でフリードを見る

フリード「 キュクル」

フリードはカイトの気持ちに心に通じたのかカイトの手を舐める

カイト「はは、くすぐりたいよ!フリード」

キャラ「カイトさん　フリード　よかった」

そんな光景を見てホッとするキャラだった

カイト「フリードと仲良くなれたところで、キャラ！自分の役割”フルバツク”について言ってみて」

キャラ「確か　前衛の支援に勤めて前衛の行動を把握し、時には大威力の攻撃魔法で敵に決め手となる攻撃をぶつけるポジションです」

カイト「そのとおり！大威力の攻撃魔法はフリードがしてくれる」

フリード「キユクル！」

フリードは元気よく返事をする
ちなみにカイトの頭の上にいる

カイト「その分キャラは支援に専念できるが、前衛の全ての動きを把握するのは難しいでしょ？それを解決できる魔法を教えたいと思う」

キャラ「はい！！」

カイト「その名も　”シンクロ・アイ”」

キャラ「”シンクロ・アイ”？」

カイト「そう これは相手が見ている風景を自分も観ることができ
る」

キャラ「確かにその魔法を使えば状況確認が楽になりますね」

カイト「だけど、この魔法は対象の相手と心が通じてないと発動し
ない魔法なんだ。だから竜召喚士であるキャラは心が通じあってい
るフリードとまずはやってみて」

キャラ「はい！行くよ、フリード！」

フリード「キユク！」

キャラはカイトに教えてもらった呪文を詠唱し始める

キャラ「”シンクロ・アイ”！」

カイト「どうだ？」

キャラ「 うっすらとですが私とカイトさんの姿が見えます 」

カイト「すごい！一回で成功するなんて。キャラとフリードの心が
通じあっている証拠だね！」

カイトはキャラとフリードの頭を撫でる

キャラ「えへへ」

フリード「キユク」

褒められて喜ぶキャラとフリード

カイト「それじゃ、フリードを移動させているんな風景を見てらん」

キャラ「はい。フリード！」

フリード「キュクル」

フリードは空を飛んで移動する

カイト「どう、キャラ？感想は？」

キャラ「はい、フリードのしている風景が見れて嬉しいです」

カイト「慣れてきたら両目から片目だけにして両方見れるようにするんだ」

キャラ「はい、わかり あれ？」

カイト「どうした？」

カイトはキャラの様子に気付き聞いてみる

キャラ「いえ、なんだか砂埃が立っているところが あっ！？
なのはさんとフェイトさんがティアさんと模擬戦を」

カイト「えっ！2対1で？」

キャロ「はい」

カイトはそれを聞いて走り出す

カイト「キャロはそのまま続けて。僕はなのは達を止めて、そのままティアナの訓練に入るから」

キャロ「はい、わかりました！ あっ！なのはさんのデイバインバスターがティアさんに」

カイト「あーもう！あっ！後、人で試すときはちゃんと確認を取ってからにするように！」

キャロ「わかりました！」

キャロの返事を聞いて、なのは達のもとへ全力疾走するカイトだった

訓練と予言 ティアナ編

ティアナ「ハア ハア」

ティアナは現在、なのはとフェイトと模擬戦中
なんとか幻影魔法で時間を稼いでいる

フェイト「これで 最後！」

フェイトが最後に残ったティアナの幻影を斬る

ティアナ「もう全部消された つっ!？」

ティアナの目の前に桜色の魔力光

なのは「見つけたよ、ティアナ」

RH『ディバインバスター』

なのははティアナが隠れていた木ごと吹き飛ばす

ティアナ「くっ！」

ティアナはなんとか避けるが追い詰められる

なのは「よく頑張ったけど」

フェイト「ここまで だよ」

2人はデバイスを構える

ティアナ「うう」

ティアナがもうダメだと諦めかけた瞬間

ドドドドーン！

なのは「わっ!?!」

フェイト「キャッ!?!」

いきなり天から無数の魔力弾が降り注ぐ

カイト「何やっているんだ？なのは、フェイト?」

カイトがティアナの後ろから現れる

なのは「カイト君!?!」

フェイト「いきなり酷いよ、カイト!」

ボロボロになつて座り込んでいるなのはとフェイト

カイト「酷いよ”じゃない!ティアナがまたボロボロじゃないか!」

なのは「私達もボロボロだよ!」

カイト「自業自得だ!しかも、なのはのディバインバスターがもう

少しで当たるところだったよ!」

よく見てみるとカイトの服が少し焦げている

フェイト「あはは」

カイト「とりあえず今からティアナの訓練に入る。なのはとフェイトはそこで反省するんだ。”蒼炎の鎖”」

そう言うとなのはとフェイトの体に蒼炎でできた鎖が巻きつく

なのは「ニヤア!?!なにこれ?」

フェイト「解けない　しかも少し熱い!」

カイト「行くよ、ティアナ」

ティアナ「え、ええ」

カイトとティアナは、なのはとフェイトを置いてそのまま立ち去る

なのは「あ　んっ　カイト君　」

フェイト「う　あっ　カイト　」

なのは・フェイト」「ごめんなさ〜〜〜い!!」

カイト「さて、始めよう」

ティアナ「ええ　けど、なのはさん達はいいのかしら?」

カイト「いいんだよ!少しは頭を冷やしてもらわないと、ティアナもそう思うだろ?」

さすがのカイトも少し頭にきたようだ

ティアナ「確かにそうかもね。　それで、私にはどんな訓練をするのかしら?」

カイト「その前にティアナ、さっきの模擬戦で疲れたでしょ?」あれ”やるうか?”

”あれ”とは”蒼炎の光”のことである

ティアナ「いいえ　別に平K　」

”平気”と言おうとしたが急に黙り込む

カイト「そう?なら、はじ「ちょっと待って!」なっ、なに!」?

急に大声で止めるティアナに驚くカイト

ティアナ「やつ、やっぱり疲れてるみたいだからお願いするわ／＼」

何故か顔を赤らめて言うティアナ

カイト「そう？それじゃ ” 蒼炎の光 ”」

蒼炎がティアナを包み込む

ちなみに手は頭に置いている

ティアナ「(やっぱり 暖かい まるで兄さんのような)」

蒼炎が消える

カイト「これでいいね？」

カイトはティアナの頭から手を離す

ティアナ「あっ」

カイト「？ どうしたの？」

ティアナ「なっ、なんでもないわ／＼」

顔を赤らめながら否定するティアナ

カイト「？ それじゃ、今度こそ始めよう」

その頃のなのはとフェイトは

シグナム「一体何をしてるのだ？高町、テストロッサ？」

ヴィータ「どうせ、やりすぎて怒られたってところじゃね？」

なのはとフェイトを探しに来ていたシグナムとヴィータ

なのは「シグナムさんにヴィータちゃん！ちょうどよかった！助けて、外れないの！！」

ヴィータが鎖を外そうとするが外れない

ヴィータ「あー悪い、なのは 外れねえや」

なのは「フェエ！？この鎖、熱いの！なんとかして！」

必死に訴えるなのは

シグナム「そう言われてもな むっ？どうした、テストロッサ？」

シグナムがさつきから喋らないフェイトに声をかける

フェイト「これ 気持ちいい」

なのは・シグナム・ヴィータ」

フェイトの危ない発言に言葉を失う3人

なのは「ヴィータちゃん！シグナムさん！早く外して！？」

ヴィータ「フェイト、しっかりしろ！」

シグナム「テストロッサ、そっちの道には行っではいけない！」

数分後なんとか外れ危ない道に渡らずにすんだフェイトだった

ティアナ「それでどんな訓練をするのかしら？」

カイト「まあ、落ち着いて。ものには順序というものがあるからね。まずは僕がティアナに対する評価を言うよ」

ティアナ「私の評価？」

カイト「うん。まずティアナの役割”センターガード”は陣形の中
央に立って誰よりも早く中・遠距離を制し、正確な援護射撃と前衛
指揮を行うんだけど　これはほとんどできていると思う。指揮に
あたっては、なのは以上かもしれない」

ティアナ「本当に!？」

信じられないといった表情をするティアナ

カイト「うん　　だけど、なのはの方がまだまだ上な理由がわかるかな？」

ティアナ「　　魔力量　かしら？」

カイト「　　惜しいけど違う」

ティアナ「　　それじゃなんなの？」

カイトに答えを聞くティアナ

カイト「　　それは火力だよ」

ティアナ「火力？」

カイト「そう!どんな戦局でも一発で変えてしまう　　そんな必殺技がね」

確かに、なのはは威力の高い攻撃魔法が多い

それは、なのはだけではなくフェイトはやて、ましてやスバルすら持っている

ティアナ「けど、それは魔力量が多いからできるからで　　少ない私には　　」

カイト「大丈夫!そんなティアナに良いものがあるから」

そう言ってティアナに何かを渡す

ティアナ「なに？この石ころ？」

それは橙色の石だった

カイト「石ころって これは”真紅の太陽石”って言って魔力消費を最小限に減らしてくれる貴重な物なんだぞ」

ティアナ「真紅って橙色よ？これ」

カイト「それは魔力を込めてみればわかるよ」

ティアナがカイトに言われ魔力を込めてみる

ティアナ「あっ！赤くなった！」

”真紅の太陽石”は橙色から真紅に変わる

カイト「これが”真紅の太陽石”って言われる由縁だよ」

ティアナ「なるほど けどいいの私なんかに渡して？」

そう言うとカイトが急にティアナの前に立ち

カイト「バカちゃん！」

ビシッ！

ティアナのおデコを突つつくカイト

ティアナ「何するのよ！」

カイト「ティアナ、自分のことを”なんか”なんて言うてはダメだよ、僕はティアナ”だから”渡したんだ」

ティアナ「！？ そう あ、ありがと／／／」

ティアナは嬉しくも恥ずかしいのか小さな声でお礼を言う

カイト「ん？何か言った？」

ティアナ「なっ、何でもないわよ／／／」

そう言つて顔を背けるティアナだった

カイト「ティアナが素直にお礼を言ってくれたところで次の話に入るっ」

ティアナ「なっ！？聞こえているじゃない／／／」

ティアナの発言をスルーし話しを続けるカイト

カイト「ティアナは実際、攻撃魔法は少ないでしょ？」

ティアナ「うっ ええ」

本当のことなので渋々同意するティアナ

カイト「だから、僕の知っている銃型の武器にしか発動できない攻撃魔法を教えようと思う！」

ティアナ「えっ？でもカイトって確か双剣だったわよね？」

そう言われたカイトは”黄昏の碑文”を出す

カイト「来たれ 再誕！コルベニク！」

カイトがそう唱えると”黄昏の碑文”が一丁の銃に変わる
その銃はライフルほどの大きさで先には剣が付いている

ティアナ「銃剣ね」

カイト「そのとおり。ティアナはあんまり驚かないんだね？」

似たようなことをエリオにもして驚いていたので驚かないティアナを見て不思議に思うカイト

ティアナ「もう、大抵のことでは驚かないわよ」

カイト「さすがだね それじゃ始めるよ」

カイトは一步前に入る

そして銃剣を天にかざす

ティアナ「」

ティアナもそれを黙って見守る

バン！バン！バン！

カイトはそのまま天に向けて魔力弾を三連射する

ティアナ「　なによ？なににも起きないじゃない？」

ティアナは数秒たつてもなににも起きないことに不安を感じる

カイト「慌てない、慌てない　見ててね？」

カイトは銃剣で目の前にある林を差しながら指を鳴らす

ドドドーン！

その瞬間天から先程放った魔力弾が降り注ぐ
だが

ティアナ「　何？　これはさっきなのはさん達に　けど威力が全然違う」

これはなのは達に放った魔法と一緒にであった
しかしティアナは威力が違うのに驚く

何故かと言うと、なのは達の時は地面が少しへこむだけだったのが、
今のは銃剣で差していた林が吹き飛んでいた

カイト「どうしのかな、ティアナ？大抵のことでは驚かないんじゃないかな？」

ティアナ「うるさいわね／＼／＼こんな見たら驚くのもじょうがないじゃない！それで、これは一体どうなってるの？」

少し慌てながらカイトに仕組みを聞くティアナ

カイト「これは加速式操作型攻撃魔法だよ」

ティアナ「加速式」？

聞いたことのない単語に首を傾げるティアナ

カイト「これは僕が適当に付けた名前なんだけどね」

お前が付けたのかよ！？しかも 適当

カイト「これは上空に魔力弾を放ち対象に降り注ぐ技なんだけど、とりあえずやってみよう」

ティアナ「わかったわ」

ティアナはクロスミラーージュを構える

ティアナ「ハア！！」

ティアナはカイト同じように魔力弾を三連射する

ティアナ「ふっ！」

そして上空から魔力弾が降り注ぐがカイトのようにはいかず木の枝が少し折れた程度だった

ティアナ「」

カイト「ティアナ、何でこんなに違うか、わかる？」

ティアナ「魔力「違」う！」それじゃ何？」

ティアナの答えにすぐ割り込むカイト

カイト「次は2人でやってみるよ」

ティアナも黙って構える

カイト「行くよ！」

カイトの合図で2人は魔力弾を放つ

ティアナ「！？　これは!？」

カイト「わかった？　何が違うのか？」

ティアナ「　高さ？」

ティアナがそう呟く

見てみるとティアナの魔力弾は目で確認できるがカイトの魔力弾は目で確認できない程高い所にあった

カイト「そう この技は高ければ高い程威力が増す ちなみに使っている魔力はティアナと一緒だよ」

ティアナ「そんな」

ティアナは魔力弾のコントロールが少し得意だったのだが、カイトと圧倒的な差があることに落ち込む

カイト「そんな落ち込む必要はないよ？ たった数十分であそこまで高い所に放てるのはすごいことなんだよ？ 僕なんか最初は数年かけてもティアナより低かったんだ。正直、僕の方が落ち込むよ」

カイトは笑いながらそう言う

ティアナ「そうね これからよね」

真剣な眼差しで頷くティアナ

カイト「ちなみに、これを修得出来ればいろんな戦局に役立つ特にチームで戦う時とかな」

ティアナ「そうね ふあ！？」

顎に手を添えながら考え込んでいるティアナにカイトがティアナの頬を掴む

ティアナ「ふあにふうるのふよ！（なにするのよ！）」

カイト「そんな堅い表情をしていると修得出来るものも出来ないよ

！笑顔、笑顔
」

カイトは笑顔で言いながら手を離す

ティアナ「 カイトの強さが少しわかったような気がするわ
」

頬をさすりながら呟くティアナだった

カイト「 それじゃ、今回はここまで！ 戻るよ！」

カイトがそう言って歩き出す

ティアナ「 えっ？ 私はまだ出来るわよ？」

歩き出すカイトを呼び止めるティアナ

カイト「 ティアナ、今何時かわかるかい？」

ティアナ「 もうこんな時間！？ 」

ティアナが訓練を始めた時間が朝の11時30分くらいなのだが現在は、午後の1時前になるうとしていた

カイト「 これ以上は体に悪い なにより腹が減ったろ？」

ティアナ「 私は別に
」

ぐう~~~~

ティアナ「／／／／」

急にお腹に手をあてながら顔を赤くするティアナ

カイト「ははは！体は正直なようだね！」

ティアナ「うっ、うるさいわね／／／」

カイトとティアナは戻る途中、訓練しているスバル達を呼びなのは達のもとへ戻った

ヴィータ「おっ？帰ってきたぞ？」

なのは「あっ！カイト君！？」

フェイト「カイト！」

カイト達が戻って来たのを見て走って来るのはとフェイト
2人は少しお冠のようだが

カイト「どうしたの？」

なのは「」どうしたの？」じゃないよ！酷いよ！あの鎖とても熱かつたんだよ！」

フェイト「そうだよ！私なんてもう少しで危険な道を歩もうとしちゃったよ！！」

カイト「そんなの知らないよ！」

カイトがなのはとフェイトの文句を一蹴していると

はやて「みんな、こんなとこにいたんか？」

スバル「八神部隊長」

シグナム「主、聖王教会から今お帰りで？」

はやて「うん。カリムやシャツハからみんなによろしくとっていったで」

シグナム「そうですか」

なのは「それで、はやてちゃんはどうしてここに？」

なのはは訓練場に滅多にこないはやてに理由を聞く

はやて「一つはカイト君に用がね。そしてもう一つは」

フェイト「もう一つは？」

はやて「仕事をサボって訓練している人達にお仕置きをっと思つて

な（黒笑）

「

カイト以外みんな黙り込んでしまう

はやて「 早く仕事に戻らんかい！」

「はい!？」

なのは達は急いで仕事に戻る

カイト「はやて

はやて「なん !?」

はやてはカイトに呼ばれ振り向いた瞬間顔が青ざめる

はやてが見たものは一本のくじ

それがなんなのかは”訓練と予言”をもう一回見よう

カイト「はやてにもお仕置きが必要のようだね？」

はやて「イヤアアアアア!？」

ひとときの平和 その1

機動六課部隊長室

はやてのお仕置きが済んだ後

カイト「なるほど、その聖王教会の騎士カリムって人が僕と話がしたいと？」

はやて「そうや。けど、カリムも忙しくてな 会うのは一週間後なんやけど ええか？」

少し不安そうな表情をするはやて

カイト「うん、問題ないよ！」

はやて「そか？よかつたわ〜」

カイトのよい返事を聞いてホッとするはやて

はやて「あっ！そや、カイト君！」

カイト「？ なに？」

はやて「カイト君の部屋についてなんやけど 「また、はやての部屋というのはなしだよ？」 チッ！」

カイト「ちよっと！」

はやての舌打ちにツッコムカイト

はやて「冗談や冗談！」

はははと笑い出すはやて

カイト「なんだよ。今の間は」

はやて「そつ、そんなことはええねん！カイト君の部屋の話や！

実は部屋が空いてなくてな？エリオが2人部屋で1人で住んでいるんやけど、カイト君はそこでええかな？」

カイト「別に構わないし、むしろ助かるよ。また、女の方は困るからね」

ハアとため息をつくカイト

はやて「さすがのカイト君も女の人と寝るんはキツいか？欲情して襲ってまつかもしれへんしな？」

うふふとニヤニヤと笑いながら言うはやて

カイト「そうだね。ここには、綺麗な人がたくさんいるから」

はやて「えっ！？／＼／＼」

カイトの予想外な答えを言い出し顔が赤くなる

はやて「そつ、それじゃ、あのおときも？／＼」

”あ のとき” というのはカイトがはやての部屋に泊まったときのことだが　それは暇な時にでも書くとして

カイト「出来れば書いて欲しくはないよ　」

はやて「カイト君？」

カイト「いや、なんでもない　　そうだね、あ のときも緊張してよく眠れなかったからね」

はやて「ということは、ウチも”綺麗な人”に入っとるん？／／／／」

”綺麗な人”と言う単語を言い、また顔を赤くする

カイト「何言ってるの、当然じゃないか」

はやて「！？／／／／」

平然と答えるカイトだがはやてはポツと頭から湯気が出る

はやて「それじゃ　　」

カイト「？」

はやて「なんで襲ってくれなかったんや／／／／／」

カイト「何言ってるの／／／／／！？」

暴走したはやてから逃げて来たカイト

現在、庭のベンチで一休み

カイト「はやて 急にどうしたんだろつか ん？」

カイトが前方に何かがあることに気づく

そこには、青色の大きな犬と、その犬を枕代わりにして寝ている女の子がいた

カイト「」

カイトはどこかから画用紙と鉛筆を取り出し、何かを始める

「おい そのお前」

急に誰かがカイトに念話で話しかけてくる

カイト「なに、犬さん？」

驚く様子もないカイトも念話で返事する

「やはり、気付いていたか」

カイト「まあね、誰かのかはわからないけど使い魔か守護獣ってところでしょう？」

カイトは画用紙を見たまま答える

ザフィーラ「その通りだ。我は主はやて、シグナム達を守る盾の守護獣ザフィーラだ。後、我は犬ではなく狼だ」

カイト「そうなんだ、ごめん」

ザフィーラ「構わない お前が主はやてが言っていたカイト「グラ」ンツだな？何をしているのだ？」

カイト「ああ、これ？いや、ザフィーラと一緒に寝ている女の子が微笑ましい光景だったからつい絵を描きたくくなって 駄目だったかな？」

ザフィーラ「うるさくしなければ平気だ」

カイト「そう？ありがとう」

カイトが念話でそう言った後、再び絵を描き始める

数分後

カイト「よし！こんなもんか？」

出来たらしくカイトは鉛筆をベンチに置く
その瞬間欠伸が出る

カイト「少し寝ようかな すう」

5秒とかからずに寝るカイト 早すぎだろ

カイトが寝て約10分後

「うん」

ザフィーラと一緒に寝ていた女の子が起きる

ザフィーラ「起きたか？ ヴィヴィオ？」

ヴィヴィオ「うん。おはよー、ザフィーラ」

少し眠そうだが元気よく挨拶するヴィヴィオ

ヴィヴィオ「？ ねえ、ザフィーラ？ あの人誰？」

ヴィヴィオは会ったことのないカイトを見てザフィーラに聞く

ザフィーラ「最近来たカイトと言う男だ」

ヴィヴィオ「ふん」

ヴィヴィオは何を思ったのかトテトテと歩き出しカイトの近くに立つ
その瞬間カイトの膝から一枚の画用紙が落ちる

ヴィヴィオ「？ うわあ！ これヴィヴィオとザフィーラだ 見てザ
フィーラ！ とても上手だよ」

ザフィーラ「ふむ 確かに」

ヴィヴィオとザフィーラはカイトが描いた絵を誉めていた

カイト「ふぁ ん？」

気配を感じてなのか起きるカイト

ヴィヴィオ「あつ、起こしちゃた？」

カイト「いや、平気だよ 君は？」

ヴィヴィオ「私、ヴィヴィオ」

にこつと笑いながら自己紹介するヴィヴィオ

カイト「僕はカイト！よろしくね」

カイトも同じように自己紹介する

ヴィヴィオ「この絵、カイ兄が描いたの？」

ヴィヴィオはカイトにカイトが描いた絵を見せる

そしてカイトの呼び方がいつの間にか”カイ兄”になっている

カイト「そうだよ。あつ 嫌だったかな？」

ヴィヴィオ「ううん！！嫌じゃないよ この絵、とても綺麗で暖かい」

カイト「！？」

ヴィヴィオの言葉を聞いたとき少し驚いた表情をしたカイト

ヴィヴィオ「？ どうしたの？」

カイト「いや、なんでもない！ その絵、あげるよ」

ヴィヴィオ「えっ？ ホント？」

カイトの言葉に目を輝かせて言うヴィヴィオ

カイト「うん、僕の絵を誉めてくれたお礼」

ヴィヴィオ「へへっ 早速ママに見せてくる〜」

ヴィヴィオは元気よく走り出す

ザフィーラ「走ると転ぶぞ、ヴィヴィオ！ それではなカイト」

カイト「うん」

ザフィーラもヴィヴィオを追って行った

カイト「 ” 綺麗で暖かい” か」

その後、ヴィヴィオに絵を見せてもらったのはがカイトに言い寄って来たのは別の話

夜

カイトは、はやてにエリオの部屋がある地図と鍵を渡され向かっている

カイト「うーん？ここかな？」

カイトは部屋にたどり着きドアの前で立っていた

カイト「確かはやてがエリオに僕が来ることを言い忘れたって言うてたからな　少し脅かそうかな」

カイトがニヤリと笑いドアに手をかけて

ドーン！

カイト「エリオ元気

かぁ！？」

カイトがドアを思いつ切りドアを開けエリオを驚かしたつもりだったが

スバル「えっ？」

ティアナ「カイト？」

そこには、エリオではなくティアナとスバルがいた
替えの最中で2人共、下着姿だった

しかも着

カイト「なななっ！？／／／」

ティアナ・スバル「！？／／／」

呆然としていた2人は自分達の姿を思い出す

ティアナ「なっ、何見てるのよ！！」

カイト「グボオハ！？」

カイトはティアナに殴られぶっ飛ばされる

カイト曰わく、その一撃は世界を狙えるほどの一撃だったとか

カイト「すみませんでした！」

カイトは現在、目の前にいるティアナとスバルに土下座して謝っている最中だ　　情けない奴（笑）

カイト「誰のせいだと思うのさ、誰の！！」

スバル「カイト？」

ティアナ「誰と喋ってるのよ！！」

カイト「なんでもありません！本当にすみませんでした！」

再び頭を下げ謝るカイト

スバル「ティア？もう許してあげよう？元々は八神部隊長のせいだし」

スバルが救いの手を出す

ティアナ「そうね　けど私達の下着姿を見たのはカイトが悪いのよ」

スバル「うーん、確かにそうだけど」

カイト「お詫びに何か1つだけ言うこと聞くから」

カイトのその言葉にピクツと反応する

スバル「本当に？」

カイト「う、うん。だけど2人で1つだからね！それに今だけ！」

嫌な予感がしたカイトは条件をつける

スバル「どうする、ティア？」

ティアナ「うーん　そうね　ちょっと待ってなさい！」

ティアナとスバルが相談するためカイトから離れる

スバル「ねえ、ティア？こっぴつのはどう？」

「

ティアナ「なっ!?　それはちょっと / / / /」

カイト「何の話しているんだろっ?」

数分後

スバル「決まったよ!カイト」

カイト「結構、早かったね」

ティアナ「そう?それじゃ言っわよ?」

カイト「」

カイトはゴクリと喉を鳴らす

ティアナ「カイトは今日、私達の部屋に泊まってもらっわ!」

カイト「ええっ!?!?」

予想外な一言に驚くカイト

スバル「さらに寝るときは一緒にベッドで寝てもらっからね」

カイト「待つて!何だよ、それ!」

ティアナ達の願いにツツコムカイト

ティアナ「しょうがないでしょ？もう夜も遅いし今からエリオの部屋に行っても迷惑よ」

カイト「うっ　百歩譲って泊まるとして、なんで一緒のベッドで寝なければならないだよ！そもそも、2人のベッドは二階建てじゃない！」

スバル「大丈夫　ギリギリ3人入れるくらいの広さだから」

カイト「そういう問題じゃない！」

この後、結局ティアナ達と一緒にのベッドで寝ることになったカイト

翌日、部隊長室で悲鳴が聞こえたらしい

「イヤアア~~~~~」

ひとときの平和 その2

カイト「ふっ！はっ！りゃあー！」

カイトは今訓練場で1人で訓練中
ちなみに今の時刻は朝の6時

シグナム「むっ？先客か？」

シグナムは日課である早朝訓練をしに来たのだが既に誰かがいること
とに気づく

シグナム「あいつは グランツか」

カイト「」

カイトはどうやらシグナムに気付いていないらしく無心に剣を振っ
ている

シグナム「ふむ」

シグナムはジッとカイトの動きを観察している
カイトの動きはまるで”蝶のように舞い時には蜂のように刺す”
この言葉がピッタリな動きである

シグナム「レバアンティン」

LT『シュベルトフォルム』

シグナムは急にデバイスを剣型にする
そしてそのままカイトの背後から斬りかかる

ガキーン！

カイト「シグナム？なにすんの、急に？」

カイトは全く振り向かず、剣を後ろにしてシグナムの剣を受け止める

シグナム「さすがだな　いつ気づいた？」

カイト「そうだね　シグナムが僕の制空圏に入った辺りかな？」

シグナム「制空圏」？」

聞いたことのない言葉に首を傾げる

カイト「簡単に言えば間合いのことだよ　ところで起きるの早いね、シグナム。自主練かい？」

シグナム「そうだが　お前はいつからここに入るんだ？」

カイト「12時からかな」

シグナムはカイトの答えに驚く

シグナム「6時間もやっているのか？」

カイト「うん まあ 日課みたいなもんし」

シグナム「それでは体を壊すぞ」

カイト「平気だよ。昔に比べたら何てことない。昔なんて寝る間も惜しんで一日中、訓練をしていた時もあったから」

シグナム「」

少しだが暗くなるカイトを見て黙り出すシグナム

カイト「あれ？なんで暗くなるんだい、シグナム」

シグナム「 グランツ」

カイト「なっ、なに!？」

急に睨みつけるシグナムに驚くカイト

シグナム「明日からはこの時間に2人で訓練をするぞ」

カイト「えっ!？」

シグナム「1人より2人の方が効率良いからな。そして今日みたいに12時から1人するのは駄目だぞ？ちゃんとこの時間に来るんだ！ わかったな？」

カイト「う、うん」

シグナムの気圧されるカイト

シグナム「よし！それではなグランツ」

シグナムは満足そうな顔をしてそのままどこかに行ってしまった

カイト「なんだったんだらうか？」

カイト「」

場所は再び訓練場、なのはの訓練を終えたFW陣
カイトは今、その訓練を終えたFW陣

エリオ「ハアツ！！」

スバル「ウオオオ！！」

キャロ「」

ティアナ「ヤアツ！！」

と一生懸命に訓練をしているのだが

カイト「 エリオ、力みすぎ、力を抜いて。スバルは飛ばしすぎ、ペースを下げて。キャロはもっと魔力を集中させて。ティアナは雑になってるよ、もっと丁寧」

「はい！」

カイト「ふう」

カイトが一通り指摘をしてベンチに座ると

フェイト「お疲れ、カイト」

フェイトがカイトの隣に座り飲み物を渡した

カイト「ありがとう、フェイト！」

カイトがフェイトに貰った飲み物を飲む

フェイト「カイト 大変でしょ？なのはの訓練の手伝いだけじゃなくてみんなの訓練も見てください」

カイト「別に平気だよ 無理矢理とは言え僕も了解しているんだし、午後は暇だしね」

飲み物を飲み干したカイトは笑顔で答える

フェイト「そう、よかった」

カイトの笑顔を見てフェイトも笑顔になる

カイト「そろそろ時間かな。おーい！今日はここまで、戻ってご飯にしよう！」

ティアナ「ええ、わかったわ」

スバル「うん！」

キャロ「はい！」

エリオ「はい」

何故か元気がないエリオ、それにフェイトが気づく

フェイト「どうしたの？エリオ？」

エリオ「いつ、いえ！なんでもありませんよ。フェイトさん」

フェイト「嘘言わないで、エリオ。なんか悩み事があるなら言ってみて？」

エリオ「本当になんでもありませんから！」

フェイト「」

エリオ「いえっ あの その」

フェイトにジッと睨み付けられ戸惑うエリオ

カイト「 エリオ、訓練がうまくいかないから悩んでんじゃないか？」

フェイト「そうなの？」

エリオ「はい」

実際の所、エリオは今だに紙屑を一枚も当てたことがない、普通なら1ヶ月かけても当てるのは難しいらしい
カイトは3日で出来たらしいが

カイト「うーん　それじゃあ、コツを教えてあげるから付いて来て」

カイトがエリオの頭を撫でて奥に向かう

エリオ「はっ、はい！！兄さん！」

エリオは嬉しかったらしく笑顔でカイトについて行った

フェイト「仲　良いんだな　」

カイト「まず、エリオに質問がある」

エリオ「なんですか？」

カイト「紙屑を突くとき何を考えてる？」

エリオはうーんと考えて

エリオ「当てることですけど」

カイトはエリオの答えに溜め息をつく

カイト「やっぱり それじゃ当たらない訳だよ」

エリオ「えっ！？何故ですか？」

カイト「エリオ、もう1つ質問。自然は好きかな？」

エリオ「好きですけど」

もうカイトの質問の意味がよくわかっていないエリオ

カイト「なら自然と1つになるんだ」

エリオ「自然と1つに？」

カイト「そうだ、見ててね」

カイトは槍メイガスを取り出し構える

エリオ「こっ、これは!？」

カイトを見て驚きたじろぐエリオ

カイトは構えを解く

カイト「エリオ、何を感じた？」

エリオ「兄さんの周りに　まるで猛火のような　すごい気迫を感じました」

カイト「自然と1つに」と言ったけど簡単に言えばイメージするんだ」

エリオ「イメージ」

カイト「そう！自分にもっとも近い自然とイメージするんだ」

エリオ「僕の近い」

エリオはデバイスを構え目を瞑る

エリオ「ハアッ！！」

ズババツ！

カイトが紙屑を落とした瞬間エリオが無数の突きを放つ

カイト「うん！よくやったよ、エリオ」

エリオ「ホントですか！」

カイト「見てみなよ？」

カイトがエリオが斬った紙屑をエリオに見せる

エリオ「ホントだ！やりましたよ！兄さん！」

エリオは子供のように　つか子供だが大はしゃぎする

カイト「エリオがイメージしたのは　”雷”だね？」

エリオ「はい！僕の魔力変換資質が電気なのでイメージし易かったです」

カイト「エリオ、まだ喜ぶのは早いよ。これはまだ通過点にすぎない。目標はこれの倍以上だからね」

エリオ「　はい」

カイトの言葉に少し落ち込むエリオ

カイト「　まあ、それでもよくやったよ　ご褒美にジュース奢るから早く戻ろう」

カイトが笑顔でそう言つと隊舎に向け歩き出す

エリオはそんなカイトを見てパアッと明るくなる

エリオ「はい！！」

訓練を終えたカイトとエリオ

今は食堂で食事中

カイト「それにしてもよく食うよね スバル」

スバル「ふえ？ふおう？（え？そう？）」

今スバルが食べていたのはパスタだが、他にサラダやスープ、牛丼もあつた。しかも全部大盛

ティアナ「スバル！ちゃんと飲み込んでから喋りなさい」

エリオ「けど、兄さんは」

キャラ「それだけですか？」

エリオとキャラはカイトの前に置かれている物に少し驚く

ティアナ「あんたホントにそれだけで平気なの？」

ティアナもそれを見て呆れる

ちなみに置かれているのは水一杯とパン一切れだけだった

カイト「まあね。僕の体は普通じゃないから あんまり腹は減らないんだよ」

カイトはそのままパンを口に入れ水で流し込んだ

ヴィヴィオ「カイト兄」

後ろからヴィヴィオが呼びかけていた
その隣には、なのはもいた

なのは「ここで一緒に食べてもいいかな？」

スバル「はい！もちろんです！」

ティアナ「どうぞ、どうぞ」

ティアナ達はなのはとヴィヴィオが入れるように席を空ける

なのは「ありがとう　ほらヴィヴィオ」

ヴィヴィオ「うん」

ヴィヴィオはカイトの隣でその隣に、なのはが座った

なのは「カイト君はもう食べ終わったの？」

カイト「今さっきね」

ティアナ「水とパンだけですけどね」

カイトが”余計なことを”と言いたげな目で睨むがティアナは知らん顔でソツポを向く

なのは「また！？駄目だよカイト君！ちゃんと食べなきゃ！」

カイト「だから、僕は食事を取らなくても平気なんだって！」

なのは「それでも駄目なものは駄目なの！」

この会話は六課に来てからずっと続いている。飽きないものだ

ヴィヴィオ「カイト兄、ちゃんと食べなきゃダメ〜だよ」

カイト「ヴィヴィオまで」

ヴィヴィオにまで注意されたじろぐカイト

なのは「それじゃ、今日の夕飯はシヤマルさんが作った料理にする？」

カイト「それはちょっと勘弁してほしいな」

なのはが言った瞬間、カイトは顔を青ざめ震えながらそう呟く
「一体何があったのだろうか？」

なのは「じゃあ、今日の夕飯はちゃんと食べてもらっつからね」

ヴィヴィオ「ね〜」

カイト「わかったよ」

シヤマル「うっつ 酷い」

こっそり見ていたシャマルが陰ながら泣いていたとか

夜、カイトは何故か隊舎の廊下を歩いていた

カイト「うーん　なんで自動販売機が隊舎にしかないんだろうか、
普通、宿舎にあるべきだと思うけど」

カイトがそんなことを呟いていると

カイト「ん？こんな時間に明かりが　」

そこは隊員オフィス、普通ならみんな寝ている時間帯である

カイトは様子を見るため中に入ってみると

カイト「あつ、ヴィータ！」

カイトが見たのは疲れたのか机で寝てしまっているヴィータだった

カイト「よっぽど疲れていたんだね。どうしようか　起こす訳には
いかないし　」

カイトがうーんと考える

カイト「あつ！そつだ！」

カイトはゆっくりとヴィータの横に立ち起こさないように椅子を引く

そしてカイトはそのままヴィータを抱っこする
ちなみにお姫様抱っこだ

近くにあったソファーにヴィータを寝かせる

カイト「よし！後は」

カイトは部屋から毛布を持って来てヴィータにかぶせる

カイト「このまま、ほっとく訳にもいかないし」

カイトはヴィータの隣に座り寝ることにした

ヴィータ「うーん ヤベエ、寝ちまった あれ？なんでアタシはソ
ファーで寝てるんだ ！？」

自分の隣にカイトが寝ていることに気づく

ヴィータ「まさか コイツ アタシをここまで」

ヴィータはカイトが自分を運び毛布をかけてくれたことに気づく

カイト「すう すう」

ヴィータ「何なんだよ お前は / / /」

カイトの寝顔を見て顔が赤らめるヴィータ
そしてヴィータは自分にはかけられている毛布がカイトにはないこ
とに気づく

ヴィータ「これじゃ お前が風邪ひいちゃうだろうが じゃあね
えな / / /」

ヴィータはカイトにくつつき、そのまま毛布を一緒にかぶる

ヴィータ「(暖けえな) / / /」

ヴィータはそう呟きながら眠ったのだった

朝

カイト「ふあ よく寝た んっ？」

起きたカイトは何故か腕に抱きつきながら寝ているヴィータに気づく

カイト「なっ、何故 「それはウチも聞きたいな？」」

カイトはその瞬間悪寒が走る
そこには笑顔だが目が笑ってないはやてがいた
もちろん黒いオーラ付き

カイト「イヤ これは 「うーん カイト」 ちょっと、ヴィータ！
？」

訳を話すため立とうとするがヴィータが離してくない

はやて「カイト君の　　ロリコ〜ン！」

カイト「イヤアアアアア！」

カイト「　　」

エリオ「兄さん、大丈夫ですか？」

スバル「いや、エリオ。どう見ても大丈夫そうには見えないよ」

ティアナ「そうね」

カイトはあの後シグナムとの朝練は遅れてしまい怒られて叩つ斬られ、訓練はヴィータと話そうとするとヴィータの顔が赤くなり何故か襲つて来る

キャロ「本当に大変ですね」

カイト「まあ、これくらいなら平気　オッ？これおいしい」

カイトはそういいながらご飯を食べる

ティアナ「呆れるほどのタフさね　　」

カイト「 ははは！まあな んっ？どうしたヴィヴィオ？」

カイトは隣で一緒に食べていたヴィヴィオがこちらに向いていることに気づく

ちなみにヴィヴィオは、なのはが仕事で出かけているためカイトが世話をしている

ヴィヴィオ「それ、おいしい？」

カイト「おいしいよ、食べるかい？ほら」

カイトがヴィヴィオの皿にハンバーグを置く

ヴィヴィオ「うー！」

カイト「どうしたのヴィヴィオ？」

ヴィヴィオ「あー！」

カイト「 あー」？

ヴィヴィオのしたいことがよくわからないカイト

スバル「多分食べさせて欲しいんですよ」

カイト「 そうなのかい？」

そうカイトが聞くと

ヴィヴィオ「うん」

カイト「しょうがないな。ほら、あーん」

ヴィヴィオ「あーん」

笑顔になりながらハンバーグを食べるヴィヴィオ

カイト「おいしいかい？」

ヴィヴィオ「うん」

キャロ「」

カイトとヴィヴィオの微笑ましい光景をジッと見ているキャロがいた

ティアナ「どうしたの？キャロ？」

スバル「もしかして、キャロも食べさせて欲しいの」

キャロ「あっ！いえ、別に　／／／」

図星のようで顔が少し赤くなる

カイト「そうなのか？ホラッ！」

キャロ「えっ？」

カイトはキャロの目の前にハンバーグを差し出す

カイト「どうした？」

キャロ「いえ それじゃ」

カイト「おいしいか？」

キャロ「はい／＼／」

スバル「よかったね、キャロ」

カイト「そうだ。お前らも食うか？」

ティアナ「えっ？／＼／」

カイト「ついで、ついで！ホラッ！」

カイトはスバル、ティアナ、エリオという順番で食べさせる

カイト「おいしいか？」

エリオ「はい」

スバル・ティアナ「／＼／／」

はやて「後でウチもしてもらわへんな」

ふふふと黒いオーラを出しながら笑うはやて

フェイト「」

そんなはやてとは違いなんか不安そうな表情をするフェイト
はやて「どうしたん？フェイトちゃん？」

フェイト「えっ？ ううん なんでもない」

そう言いながらカイト達の方を向くフェイトだった

ある洞窟

ヘルバ「さて、そろそろ始めましょうか。ドゥーエ」

ドゥーエ「はい。次の場所は」

ヘルバ「いえ、今回はこちらから出向くのではなく出向いてもらいましょうか　そして今回はターゲットもいますよ」

そしてヘルバは上空にモニターが現れる
そこに映っていたのは1人の女性

ヘルバ「プロジェクトFの産物」がね
」

部隊長室

フエイト「えっ？本局から、急な依頼？」

はやて「そうなんよ 手が空いてないからやれって無理矢理な
たくつム力つくわ」

顎に手を乗せ愚痴を言うはやて

フエイト「しょうがないよ JS事件からそんなに経っていないわ
けだし」

はやて「それでも頼み方あるっちゅうねん まあ、ええわ。今な
のはちゃんが仕事でいないからライトニング分隊に行ってもらっけ
ど ええか？」

フエイト「うん それじゃあすぐに向かうね」あっ！そうやフエイ
トちゃん！「んっ？なに？」

部隊長室から出ようとしたフエイトを呼び止めるはやて

はやて「カイト君にもついて行ってもらうか？」

フエイト「えっ？」

はやて「なんか心配やし、カイト君がついて行ってくれれば百人力
やで？」

そう言われたフェイトは一瞬悲しい表情になったがすぐに笑顔になり
フェイト「ううん！大丈夫だよ」

はやて「そか？なら頼んだで！」

訓練場

カイト「ん？ 了解。おい！ヴィータ、ヴォン！」
「ってうわあ！？」

カイトがヴィータに話しかけた瞬間デバイスで叩かれそうになる

ヴィータ「あっ 悪い つい でなんだよ？」

カイト「うん。フェイトがライトニング分隊で任務があるらしいからエリオとキャラコを呼んで欲しいんだって」

ヴィータ「そうか オイツ、エリオにキャラコ！今すぐフェイトの所に行け、任務だ！」

エリオ・キャラコ「了解！」

エリオとキャロは走ってフェイトの元へと向かった

スバル「そう言えばヴィータ副隊長？」

ヴィータ「なんだ？」

スバル「なんで副隊長はずっとカイトの側にいるんですか？」

そうカイトが話しかけた後、ヴィータとカイトの距離がやけに近い所に立っていた

ヴィータ「そつ、それは」

ヴィータがチラッとカイトの方を向くと

カイト「？」

カイトがそれに気づき首を傾けるがすぐニコツと微笑む

ヴィータ「！？／／／うっ　オリヤヤー！！」

ヴィータは急にカイト向けてにデバイスを振り回す

カイト「なっ、いきなりなに！？」

ヴィータ「うるせえ！／／／」

逃げるカイトに暴走したヴィータが追いかけてどこかに行ってしまった

ティアナ「何があったのかしらね」

スバル「うん。 気になるね」

黒いオーラをだしなが笑うスバルとティアナだった

ドーン！

カイト「ギャアアアア！」

第55管理外世界シフ・ベルグ

エリオ「なんだか不気味な世界ですね」

キャロ「そうだね まるでお伽話に出てくるような恐い世界だね」

少し緊張した表情をして言うエリオとキャロ

シグナム「しかし、何もなかったはずの世界から急に出現するなんてな」

フェイト「まるでカイトと出会った時みたい」

そう話していると

エリオ「あっ！あれでしょうか？」

エリオの言葉でみんなが注目するとそこには一つ佇む大きな館があった

シグナム「本当に不気味な所だな」

フェイト「そうだね それじゃ私とエリオが中に入るからシグナムとキャラは外で待機ね」

キャラ「はい！フェイトさん」

シグナム「了解した」

フェイト「うん。それじゃ、行こう！エリオ！」

エリオ「はい！！！」

フェイトはエリオの良い返事を聞いた後、館の中に入って行った

機動六課の隊舎

スバル「ハアア~~~~暇だね。ティア」

ティアナ「あんたね 今は工作中よ！口より手を動かさない！また書類が残るわよ」

スバルが「ハ〜イ」と気の抜いた返事をしてティアナに怒られているとはやてが入って来たしかもなんだか悩んでいるようだ

ヴィータ「どうしたんだ？はやて？」

はやて「いやな、任務の状況を本局に伝えようとしたんやけど、そんな任務依頼していません」って言われてしもつてな」

ヴィータ「なんだよ、それ？」

はやて「ウチもようわからへんのや」

はやてが「うーん」と考えているとカイトが入ってくる

カイト「それは変な話だね。どこの世界に行ったの？」

はやて「シフ・ベルグ」つう所やで」

カイトはそれを聞いて表情が一変する

カイト「（そこつて …！）はやて！！今すぐそこに向かおう！！」

はやて「どうしたんや急に？」

カイト「ヘルバの罠の可能性がある！フェイト達が危ない！」

はやて「なんやて！？ わかった！ウチはライトニング分隊に連絡する！他のメンバーはすぐに出動や！」

「了解！」

カイト達がヘルバの罠だと気づく10分程前

館の中

エリオ「中には何にもありませんね」

フェイト「そうだね 置物とか、ましてやドアすらないね あ
のね、エリオ ちょっといいかな？」

先頭を歩いていたエリオは振り向く

エリオ「なんですか？」

フェイト「えっとね カイトについてなんだけどね 最近エリ
オ カイトのことを兄さんと呼んでいるけど なんて？」

エリオ「そうですね 「

うーんと腕を組んで考えるエリオ

エリオ「あまり深く考えたことはなかったんですけど、兄さんはどんな窮地に立たされても諦めず立ち向かう騎士みたいな人で僕の憧れなんです」

フェイト「そう「そして」？」

エリオ「フェイトさんと始めて出会った時みたいな暖かい優しさを感じました！」

エリオは笑顔でそう言う

フェイト「そう」

エリオ「フェイトさん？」

笑顔で頷くフェイトだがその笑顔はほんの少し寂しそうだ
そんなフェイトを見ておかしく思うエリオ

フェイト「ううん！ それじゃ行こう、エリオ」

フェイトはそのまま歩き出してしまっ

エリオ「あっ？待って下さい！」

エリオは走ってフェイトを追いかける

館の外

キャラ「」

シグナム「どうした、キャラ？」

さつきから黙り込んでしまっているキャラ

キャラ「フェイトさん達大丈夫でしょうか」

シグナム「大丈夫だろう、テストロッサも着いてるしな」

キャラ「でも」

シグナム「それに エリオもまだまだ未熟だが騎士だ そう簡単にはやられはしないだろう それはお前がよく知っているだろう？キャラ」

シグナムがキャラに微笑んで言う

キャラ「はい そうですよね」

それを見て笑顔になるキャラ

シグナム「全くテストロッサに似なくていい所まで似てしまっただな」

ハアと溜め息をするシグナム

するといきなり通信が入る

キャロ「あっ！八神部隊長！」

シグナム「どうかしましたか？」

はやて「大変や！この任務は畏や！」

キャロ「畏！？」

シグナム「どういことですか？」

ドガン！

シグナム・キャロ「！？」

館の奥から爆発音が聞こえる

キャロ「フェイトさん、エリオ君！」

はやて「待つんや、カイト君が来るのを「僕ならここにいるよ」！」
早っ！？」

カイトがいつの間にか2人の後ろにいた

はやて「カイト君いつの間にかそっちに行ったんや？」

あまりにも早く着いたカイトに驚くはやて

カイト「説明している暇はないけど敢えて言うなら僕には不可能はないってことかな！」

はやて「いや、意味わからへんし！」

シグナム「主！漫才をしているばあ　「誰が夫婦漫才や！！」言っ
てません！」

なんだか本当に漫才のようになっていくカイト達　緊張感が全くない

キャロ「あの　皆さん　？」

はやて「はっ！こんなことしとる場合やあらへん。3人ですぐフェ
イトちゃん達を追いかけるんや」

シグナム「わかりました！」

キャロ「了解です！」

カイト「よし！行こう！」

カイト達は館の中へ入って行った

少し時間をさかのぼり

館の中

フェイトとエリオは大きな扉の前にいた

フェイト「どうやらここのようなだね、エリオ」

エリオ「みたいですね」

フェイトとエリオは扉を開け中に入る

エリオ「 なにもありませんね」

そこには何も無い広間だった

フェイト「ううん！奥になにかある」

奥に行つて見てみるとそこにはなんの変哲もない石壇に1つの黒い
宝石らしきものがあつた

エリオ「何でしょうか？これ？」

エリオがその宝石に近づくと

フェイト「待って、エリオ。私が見るよ」

フェイトはエリオの代わりに宝石に触れる
その瞬間だった。宝石が急に姿が変わる

フェイト「これは!？」

エリオ「フェイトさん!？」

姿が変わった宝石がフェイトに巻きつく

フェイト「これは A I D A ! ? エリオにげ」

エリオ「フェイトさーん!？」

叫んだ時には既に A I D A に取り込まれ倒れるフェイト
そしてしばしの沈黙の後フェイトが立ち上がる

エリオ「フェイトさ 「バルディッシュ」 ! ?」

B D 『ブラズマスマツシャー』

立ち上がったフェイトの手に膨大な魔力が集まる

フェイト「ファイア!」

そしてフェイトの魔法がエリオを襲う

エリオ「わああああ!？」

ドガンー!!

エリオ「くっ!」

だが、エリオは高速魔法で紙一重で避けていた

エリオ「フェイトさん！目を覚まして」

フェイト「」

BD『ハーケンフォーム』

フェイトのデバイスがまるで鎌のようになる

エリオ「どうすれば」「エリオ、大丈夫か？」
「この声は兄さん！？」

エリオが振り向くとカイト達がいた

シグナム「エリオ、後ろだ！」

エリオ「えっ!?!？」

エリオが後ろを向いた瞬間フェイトが目の前にいた

ガキーン！

カイト「エリオ、目の前にいる敵から目を離しちゃダメだ」

カイトがフェイトの一撃を受け止める

キャロ「そんなフェイトさんが」

驚きを隠せないキャロ

シグナム「気を抜くな 今のテストロッサは敵だ 構えろ!!」

シグナムの合図で構えるカイト達

フェイト「ブラズマランサー ファイア」

無数の魔力弾がカイト達を襲う

カイト「はあ!!」

カイトがそれを全て弾き飛ばす

シグナム「駄目だ! グランツ その魔法は」

その瞬間弾き飛ばした魔力弾が戻ってくる

カイト「なっ!!? グワア!!」

見事に直撃するカイト

エリオ「兄さん!?!」

キャロ「エリオ君、危ない!!」

エリオ「!?!? くっ」

フェイトがエリオに斬りかかるがなんとか防ぐ

シグナム「紫電一閃！」

上からシグナムがフェイトに斬りかかる
しかしフェイトは凄く速く避ける

エリオ「ありがとうございます。シグナム副隊長」

シグナム「礼はいい、集中しろ　　とはいえテストロッサのあの
速さなんとかしなければ　　なっ!？」

エリオ「これは!？」

キャロ「フェイトさんがいっぱい　　」

シグナム達が見たのは回りを囲む何人もいるフェイトだった

シグナム「違う　　これは残像だ」

そうこれはAIDAに取り憑かれパワーアップしているフェイトは
あまりの速さのため残像が見えてしまっている

エリオ「一体どうすれば　　僕に1つだけ案がある」　　兄さん!」

キャロ「大丈夫ですか？」

吹っ飛ばされたカイトが復活する

シグナム「それで案とは？」

カイト「これはエリオとキャロがいないと無理な作戦だ　　できる

？」

エリオ「はい！！やります！」

キャラ「必ず成し遂げてみせます！」

カイトがそう言つとエリオとキャラが即答する

カイト「わかった！作戦は僕が突っ込んで来たフェイトを弾きエリオがそのままとどめを刺す、いいね？」

それを聞いて驚くシグナム

シグナム「無茶だ！グランツはともかく、エリオにあの速さに着いていけないぞ」

カイト「そうだね　けれどキャラのシンクロ・アイもあるし、エリオはちゃんと僕の訓練をすっかりやって来た。だから　僕は2人を信じる！」

シグナム「　　私は何をすればいい？」

カイト「え？」

シグナム「だから私は何をすればいいか聞いている」

少し睨みつけるように言つ

カイト「うん。シグナムはキャラの護衛を頼むよ　　よしエリオ

！気合い入れて行こう！」

エリオ「はい！」

カイトとエリオは準備にかかる

シグナムはキャロのもとへ向かう

キャロ「あの　シグナム副隊長？」

シグナム「なんだ？」

キャロ「よく納得なされましたね？根拠のないことは好きじゃないのに」

キャロにそう言われるとシグナムは目を瞑る

シグナム「ああ　しかしグランツの目を見ると何故か信じてみたくなる。ヴィータがあんなになつく理由が少しわかったよ」

シグナムはフツと笑う

キャロ「　その気持ちよくわかります」

そう言うとキャロは詠唱を始める

カイト「みんな来るよ！」

カイトの掛け声でみんなが構える

フェイト「オーバードライブ　真・ソニックフォーム」

そう言うとフェイトのバリアジャケットとデバイスが変化する
その姿は前の時よりかなり軽装だ
デバイスは鎌から双剣になった

カイト「 凄い格好だ」

思わず見とれてしまうカイト

シグナム「油断するな！あれはテストロツサが速さを求めて出来た
スタイルだ！」

カイト「確かに速くはなるけど一撃でもあたら致命傷 諸刃
の剣だね。けれどエリオは気にしないでやるんだ！失敗しても僕が
なんとかする」

エリオ「はい、兄さん！」

フェイト「」

するとフェイトは動き出す

キャロ「」シンクロ・アイ」

キャロも同時に魔法を発動する

シグナム「なんという速さだ 全く見えない」

さっきの残像の時とは違い姿が全く見えない

カイト「キャロ！」

キャロ「カイトさん、後ろです！」

ガキーン！

なんとカイトはあの速いフェイトの一撃を防ぐ
だがすぐフェイトは次の動きに入る

シグナム「あの速さを本当に受け止めた！どうなっている？」

シグナムは少し驚いた表情を見せる

キャロ「カイトさんが教えてくれた魔法”シンクロ・アイ”でフェイトさんの視線を見ることが出来たんです」

カイト「まあ、親子であるフェイトとキャロにしかできないことだ
けどね」

キャロ「カイトさん、真正面からです！」

カイト「ウオオ！」

キーン！

フェイト「!?!」

カイトはフェイトを弾き飛ばした

カイト「今だ！エリオ！」

エリオ「はい！ストラダー！」

ST『ソニックムーブ』

エリオは高速魔法でフェイトの後ろに回り込む

フェイト「」

しかしフェイトは弾き飛ばされた勢いそのままエリオに攻撃しようとする

カイト「フェイトに見せてやるんだ！エリオの新たな技を！」

エリオ「迅雷！サンダーレイン！」

フェイト「!?!」

エリオはフェイトに攻撃し吹き飛ばした

その技はまるで豪雨のように降り注ぐ雷のような突きの連続技

キャロ「フェイトさん!?!」

シグナム「大丈夫だ、キャロ。あれくらいならテストアロツサは平気だ」

シグナムがそう言うとフェイトはゆっくりと立ち上がる

エリオ「やっぱりまだ未完成だった」

悔しがるエリオ

カイト「いや、たった数日でよくやったよ。後は任せて」

カイトはみんなの前に立つ

フェイト「」

BD『ロードカートリッジ』

ガシャ！ガシャン！

フェイトは2発をカートリッジする

カイト「蒼炎舞」

ボワアッ！

カイトはそれと同時に蒼炎を纏う

フェイト「トライデント」

カイト「蒼炎」

フェイトは手を突きだしカイトはフェイトに向け走り出す

フェイト「スマツシャー！」

カイト「火炎車！」

ドガン！

フェイトの魔法とカイトにあたる

エリオ「兄さん！」

シグナム「！？ あれは」

カイト「フェイトおおお！」

砂埃からカイトが飛び出す

フェイト「！？」

フェイトは魔法を放った衝撃で動けない

カイト「フェイト！今 君を助ける！」

カイトとフェイトがぶつかり合った瞬間2人に光が覆う

必要とされるために

カイト「　これは　」

カイトは少し驚いていた
今まで入って来た精神世界はいつも白くて何も無い場所だったのに
今回は真っ暗で何も見えない

カイト「　ん？あれは　扉？　」

カイトはしばらく歩いた後、一つの扉を見つける
カイトは警戒しながらも扉を開ける

カイト「　これは！？　」

扉を開けた後、光が覆う
目を開けた瞬間今までいた場所が一変しどこかの戦艦の中でブリッジのようだ
そしてそこには何人か人がいた
その何人かは見覚えがある人物だった

カイト「あれは小さい頃のなのは？それにクロノも　背低い　真ん中あたりにいるのはフェイトかな？それにあのモニターに映っているのは　」

フェイト達はカイトが見えていないのかモニターを見るそこには一人の女性がいた

クロノ「プレシア・テストロッサ！　」

カイト「!？」 テスタロッサ” ということはあの人はフェイトのお母さん？」

カイトがクロノの言葉に驚いているが誰も気づかない

カイト「ここはフェイトの記憶から成っている空想世界」

カイトはここがどこなのか理解すると黙り込んでしまう

プレシア「あなたにはガツカリしたわ、フェイト。あなたはアリシアの代わりにはなれなかった。あなたはアリシアが生き返るまで私を慰める人形でしかなかったわ あなたにはもう要はないはどこへなりと消えなさい！」

フェイト「!？」 嫌 嫌々嫌々嫌々！！」

フェイトは頭を抱え込み膝をつく

なのは「フェイトちゃん」

フェイト「なのは」

なのはがフェイトに話しかける
フェイトの表情が少し和らげる
しかし

なのは「あなたはプロジェクトFで生まれた人造魔導師 人間
じゃないなの。だから私あなたと友達になるなんて絶対に嫌だ」

フェイト「えっ」

フェイトはなのはが何を言っているのかわからなかった、いやわかりたくなかった

クロノ「わからないか？わかりやすく言っと　君はもう必要ないんだよ」

そう言っとフェイトの目の前にプレシアが現れる

プレシア「消えなさい！」

フェイト「えっ？」

プレシアの一言でフェイトの足元が急に崩れる
下は暗闇しかない奈落だった

フェイト「イヤアアア！」

フェイトはそのまま奈落の底へ落ちてしまった

カイト「フェイト！　！？　動けない」

カイトは奈落に落ちるフェイトを見て走り出そうとするが何故か動けない

後ろを見てみるとそこには地面から這い出たAIDAの触手がカイトの手足に絡みつく

カイト「邪魔をするな！」

カイトは絡みつかれた手足から蒼炎を出し焼き尽くす

カイト「フェイト、今行くよ!」

カイトはなんの躊躇もなく奈落の底へ飛び込む

フェイト「」

フェイトは今落ちている深い深い奈落の底へ翼をなくした天使のよう
うに

「フェイト!フェイト!」

瞑っていた目を開けるそこには落ちている自分に必死に声をかける
カイトだった

カイト「フェイト!」

フェイト「カイト」

カイト「フェイト、掴まるんだ!」

カイトが手を伸ばすがフェイトが一向に掴もうとしない

カイト「フェイト?」

フェイト「もういいよ、カイト 私もう疲れたよ」

カイト「なっ、何言っているんだ!？」

フェイトの言葉に驚くカイト

フェイト「私ね、みんなに必要とされる そんな人になりたかった だから頑張った けど私を必要としてくれる人はもういない だから もういいの 疲れちゃったよ」

カイト「それじゃ、エリオとキャロはどうするんだ!」

フェイト「あの子達は私がいなくても大丈夫だよ。カイトもいるしね だから 私は消えるの」

そう言った瞬間フェイトの横からAIDAの触手が現れフェイトを襲う

カイト「させない!」 蒼炎” 虎輪刃”

カイトの手から円型の手裏剣らしきものを出し投げる
それはAIDAを斬り刻み消滅させる

カイト「フェイト!誰が君のことが必要だと言った!」

フェイト「えっ?」

カイト「必要とされるために頑張った? 違う!必要とされるのは頑張つてされるものではない そもそもそんなもの必要なの?それともフェイトは、なのは達と一緒にいるのは必要とされるた

めなのかい？」

フェイト「それは違う！私は」

カイト「一緒にいたいから　だよな？もちろん、それはなのは達も一緒さ。ただ　一緒にいるだけでもいいんだよ」

カイトは手を伸ばす

カイト「それはフェイトもわかっているはず　でしょ？」

フェイト「うん」

フェイトは涙を流しながら手を伸ばしカイトの手を掴む

カイトはそのままフェイトの手を引っ張り胸に押しつける

カイト「しっかりと掴まって！」

フェイト「うん！」

カイト達の状況は奈落の底へ落ちているかなりヤバい状況である

フェイト「カイト、上には行かないの？」

カイト「どこに行っても同じさ。ここは簡単に言えばAIDAの腹の中　しかも完全に閉じこめられたから出口はない。普通ならこのまま落ち続けるかAIDAに呑み込まれるかだけだ」

まさに絶望的な状況にありながらフェイトは笑っている

フェイト「普通なら”でしょ?”」

カイト「その通り!」

カイトがその言葉を聞いて笑顔になる

その瞬間フェイトもろとも蒼炎を纏うカイト

カイト「出口がないなら作ればいいんだ!」

カイトはそのまま下に落ち勢いをつける

カイト「蒼炎”三爪炎痕”!!」

ズババツバアン!

カイトは3つの凄い威力の斬撃を放つ

すると斬撃を放った瞬間空間に亀裂が入る

カイト「フェイト!あそこに飛び込むよ!」

フェイト「うん　って!カイト!?!?!」

カイトが急にフェイトをお姫様だっこをする

カイト「もう限界でしょ?ゆっくり休んで」

カイトがフェイトに微笑みながら言う

フェイト「うっ、うん／＼」

顔赤くしながら返事をするフェイトをみた後、カイトは亀裂に突っ込む

パリーン！

亀裂を破壊した瞬間光が空間を覆った

シグナム「ムッ！光が収まっていくぞ！」

光が収まったその先にはフェイトにお姫様だっこをしているカイト

エリオ「フェイトさん！兄さん！」

キャロ「よかった」

無事であるカイトとフェイトを見てホッとするエリオとキャロ
しかしシグナムは鋭い目つきで回りを見渡す

シグナム「気をつける まだ終わってない」

シグナムに言われ思い出すフェイトに取り憑いたAIDAのことを

カイトは直ぐにシグナム達と合流する

エリオ「兄さん！フェイトさんは！」

カイト「大丈夫。少し眠っているだけだよ」

シグナム「グランツ、AIDAはどこだ？気配は感じるが姿が見えない」

いつもなら姿を現すはずのAIDAがいないのだ

カイト「いるよ 目の前に 蒼炎球」

カイトがいきなり何も無い所に蒼炎を放つ

だが何も無いはずが途中で爆発が起き何かが急に現れる

エリオ「なっ!?!」

キャロ「なんですか？あれは！」

エリオ達はAIDAの姿を見て驚く

それもそのはず今まで微生物のような姿だったのに今回は全長30mはありそうな巨大な魚の姿をしていた

シグナム「グランツ あれもAIDAなのか？」

今まで見たことのない姿に啞然となるシグナム

カイト「そう あれはA I D Aの第二段階”H e l e n”」

エリオ「えっ？A I D Aにも種類があるんですか？」

カイト「うん。ちなみに微生物みたいなのは”A n n a”だよ その話は後、シグナム、フェイト達を連れてここから出るんだ」

カイトはシグナムにフェイトを渡してそう言う

エリオ「そっ、そんな!？」

キャロ「私達も一緒に戦います！」

カイトの言葉に反対するエリオとキャロ

カイト「ごめん 今回はみんなを戦わせる分けにはいかないんだ」

シグナム「何故だ？お前みたいに倒すことは出来ぬがダメージを与えることが出来るはずだ」

カイト「それは !？ みんな後ろに跳んで！」

トトトトン！

カイト達が後ろに回避した瞬間、大きな魔力弾が飛んで来た

カイト「くっ 説明してる時間がない！早く行くんだ！」

カイトはそう言いながらHellenに突っ込む

エリオ「どうします？シグナム副隊長」

シグナム「エリオとキャロはテストロッサを連れて戻れ。私はここに残る」

エリオ「そっ「早く行け！」 はい」

反論を許さないシグナムに負けエリオはキャロと一緒にフェイトを連れ出す

カイト「くっ！速い」

Hellenは図体がでかい割にはかなり素早い
そのためカイトの攻撃が全くあたらない

カイト「どうすれば うわっ!？」

Hellenが急に泡のようなものをカイトに向け噴き出す

カイト「ハアッ！」

カイトはすぐに泡を吹き飛ばすが

カイト「なにっ!？」 グッ!」

吹き飛ばした瞬間、H e l e n がタツクルしてくる

カイトはなんとか受け止めるがギリギリで支えるので精一杯だ

カイト「くそ 重い 「ウオオオ!」 シグナム!？」

上からシグナムが斬りかかる

ガキーン!

シグナム「!？」 ウッ!」

しかしシグナムの一撃は斬り裂くどころか1?たりとも斬れていない
そしてシグナムはH e l e n の頭になぎ飛ばされる

シグナム「くっ なっ!？」

なぎ飛ばされたシグナムに容赦なくタツクルしてくるH e l e n

シグナム「しまった!」

ぐしゃっ!

シグナム「？」

シグナムは衝撃に備え目を瞑ってしまっていたしかし、いつまで待っても衝撃が来ないそのかわりに顔に何かが飛び付いたシグナムは、付いたものを手で拭いてみると

シグナム「これは 血？ ！？」

シグナムが前を向き見たものは、シグナムを庇い背中で受け止め、口から血が出ているカイトシグナムに付いたものはカイトの血だった

カイト「蒼炎”爆裂脚”」

カイトはすぐ振り向きHeleenを蹴り飛ばす

カイト「いいの もらっちゃった」

シグナム「グランツ お前どうして？」

カイト「何が？」

と言う感じで首を傾ける
血を吐きながら

シグナム「何が”って」

カイト「それよりも シグナム」

真剣な顔でシグナムを見るカイト

シグナム「なんだ」

カイト「シグナムも早く　ここから離れて　エリオ達と合流するんだ」

シグナム「　わかった」

シグナムは悔しそうな顔をしている

ただでさえ苦戦していたカイトに自分のせいで負傷させてしまったこれ以上居ればただの足手まといになると感じたシグナムは黙って離れる

カイト「シグナム　ごめん」

カイトは苦しそうに、申し訳なさそうに謝る

シグナム「」

シグナムは無言で行ってしまった

カイト「本当にごめん　今の僕にはあの力を制御できない　巻き込む訳にはいかないんだ」

Helenn『　umm　』

Helennが奇声をあげながらカイトの目の前に現れる

カイト「 ”憑神”^{アバタイ}発動 ”

カイトがそう言った瞬間、赤いオーラがカイトを包む

Helenn『 『

Helennの様子がおかしい、まるで火に怯える獣のようだ

カイト「ハアッ！」

次の瞬間、オーラを払いのけカイトが出てくる

だが、その姿はいつもの穏やかな雰囲気と違い、まるで死神のように冷たい目をして殺気を纏ったような雰囲気

そしてカイトがニヤツと笑う

カイト「お前に”死の恐怖”を見せてやる」

館の外

フェイトを連れたエリオとキャロはなのは達と無事合流した

なのは「と云うことは今、中にいるのはカイト君とシグナムさんだけなんだね？」

エリオ「 はい 今の僕達では無理と言われて 」

ティアナ「けど、いつものアイツならそんな事言わずに戦わせてく

れるのに」

ヴィータ「それほどやべえ奴らしいな」

スバル「ですね あっ！シグナム副隊長！」

スバルが館から出て来たシグナムを見つけるとみんなシグナムのもとへ駆け寄る

キャロ「シグナム副隊長、カイトさんは？」

シグナム「」

ヴィータ「シグナム？ どうした？」

シグナムの様子がおかしいことに気づいたヴィータは訳を聞いてみる

シグナム「ああ」

シグナムはさっきまでのことをなのは達に話した

シグナム「手助けするつもりが足手まといになってしまった」

シグナムは悔しさのあまりに歯を食いしばる

なのは「シグナムさん」

ドカーン！

なのはがシグナムに話しかけようとした瞬間、急に屋根が吹き飛ばすバル「えっ？何！？」

キャロ「屋根が」

そして爆風から何かが飛び出す

ヴィータ「なんだ？あのでけえ魚！？」

エリオ「あれが、さっき話したAIDAの第二段階”Helen”です！」

なのは「あれが」

なのは達がHelenを見ていると

ティアナ「ちよつと　カイトはどうしたの！？」

エリオ「わかりません。近くには　あっ！」

エリオが爆風の中からもう一つの影が出て来たのに気づいた

なのは「　カイト　君　？」

ヴィータ「何だよ　　ありゃ　　」

なのは達は唾然とする

爆風から出て来たのは確かにあれはカイトだった

だが、いつもと違う雰囲気のカイトに驚いてしまった
しかもいつも使用している虚空の双牙ではなく、カイトの身の丈に
倍する月魄の如き大鎌だった

カイト「オラオラオラオラッ！」

カイトはその大鎌でH e l e nを何度も何度も鬼神の如く斬りつける

ティアナ「凄い」

エリオ「けど」

キャロ「怖い」

なのは達は今のカイトの姿を見てただ怯え見てるしかなかった

H e l e n「」

H e l e nが口からレーザーを出しカイトに放つ

しかしカイトはそれを簡単に弾き飛ばす

カイト「そろそろ終わりにしてやるよ」

カイトはH e l e nに突っ込む

カイト「死ヲ刻ム影」！」

急に肩を震わせながら笑い出すカイトに怯えるのは達
そして笑い終わると

カイト「次はお前らだ」

「!?!」

なのは達は見てしまう

いつもの澄んだ青い目がまるで地獄の業火のような真っ赤な目だった
なのは達は直感で危険を感じ離れようとするが

シグナム「なっ、なに!?!」

ティアナ「かつ 体が」

スバル「動か ない」

まるで蛇に睨まれた蛙のように動けない

カイト「消えな」

カイトが目の前にいたなのはに大鎌を振り上げる

ポッ!

カイト「っ?!? グアアアア!」

なのは「!?」

急にカイトの体が蒼炎に包まれる
その瞬間大鎌が消えカイトは膝をつく

カイト「はあ はあ みんな」

なのは「カイト君!」

蒼炎が消えた後カイトは元のカイトに戻っていた
それがわかったなのは達はカイトの下へ駆け寄る

ヴィータ「おい!大丈夫なのか?」

ティアナ「しつかりしなさいよ、カイト!」

下を向いていたカイトはゆっくりと前を向き

カイト「みんな 迷惑かけて ごめ ん」

カイトはなのはに倒れこむ

エリオ「兄さん!?!」

キャロ「なのはさん!カイトさんは!」

なのは「大丈夫 気絶してるだけだよ」

なのはの言葉を聞いてホッとするエリオ達

シグナム「それにしても さっきのは」

なのは「わからない けど、まずはカイト君とフェイトちゃんを連れて帰ろう」

なのはの意見に賛同して帰るなのは達
しかし空気は重苦しいものだった

あの時のカイトは何だったのか疑問は深まるばかりであった

そして上空でそれを見る不穏な影があった

ヘルバ「憑神」 面白いものが見れました。そして」

ヘルバはニッコリと笑う

ヘルバ「カイトはグラントの”弱点”もね。ふふふ」

ヘルバは消える

不穏な言葉を呟きながら

憑神と蒼炎（前書き）

コワセ

コロセ

スベテヲ

アノトキノヨウニ

死の恐怖ヲ

憑神と蒼炎

カイト「はっ 僕は」

カイトが起きた場所はまたもや機動六課の医務室

カイトは自分の手を見ながらあの時のことを思い出す

カイト「やっぱり 暴走したのか」

手を握りしめ、そう呟いているとドアが開く音がする

フェイト「」

そこには林檎と果物ナイフを皿に乗せ立っているフェイトだった

カイト「 やっ やあ フェイト」

カイトは少し戸惑いながらも挨拶をする

フェイト「カイト!」

フェイトは嬉しさのあまり持っていた皿を落としカイトに飛びつく

カイト「えっ? うわあ!?!」

フェイトに抱きつかれたカイトはそのままベッドに倒れる

フェイト「よかった!よかったよお もう起きないのかもと思

って心配したんだよ!」

カイト「むーんー」

カイトは今喋りたくても喋れない状況である

何故かと言うとカイトはフェイトの豊満な胸で顔を抑えつけられていた

嬉しい状況ではあるのだが

カイト「（いつ、息ができない！）」

カイトは必死にフェイトの背中を叩くがフェイトは全く気づかない

シグナム「テストarovsa。グランツの様子は」

突然医務室に入って来たシグナムはフェイトがカイトを抱きしめているのを見て呆然としている

フェイト「あっ！ごめん、カイト／／／」

シグナムが来たことでフェイトは今自分が何をしているのかを気づきすぐカイトを離す

カイト「はあはあ 苦しかった はっ!？」

カイトは鋭い視線と殺気を感じその方を向くと

シグナム「」

シグナムがデバイスを出し仁王立ちしていた

カイト「えつと あの シグナム さん？」

恐る恐る声をかけてみる

シグナム「何か言い残すことはあるか？」

シグナムがデバイスを取り出しカイトに向けている
鋭い殺気とともに

カイト「待つて 僕はなにも」

シグナム「問答無用！」

カイト「ギヤアアアア！！??？」

はやて「うーんと カイト君。なんかさっきより怪我増えてへんか？」

カイトが起きたと報告を受けたはやて達は見舞いに来たのだがボロボロなカイトを見て驚く

カイト「聞かないで下さい」

シグナム「」

フェイト「ははは」

はやては3人の様子がおかしいことに首を傾けるが気にしないことにした

はやて「? まあ、ええ。早速なんやけどカイト君には聞きたいことが山ほどあるんやけど ええか？」

カイト「うん 僕もみんなに話したいことがあるし」

はやてはみんなに見えるようにモニターを映す

はやて「まずはAIDAについてや。AIDAには何種類かいるらしいんやけど、この2体以外にもいるんか？」

カイト「僕が知っている限り全部で3体いる。名前は”Oswald” どのなのは覚えてないんだ」

はやて「? なんでや？」

カイト「わからない なんか怖い思いにあったのは覚えてるんだけど」

うーんと腕を組んで考えるカイト

はやて「まあ、思い出せへんのならしゃあないよ 次 なんやけど」

はやては黙り込みながら映像を変える
そこには大鎌を持ったカイトの姿だった

カイトもそれを見て黙り込んでしまう

はやて「このカイト君の姿は一体何なんや？」

なのは「うん　まるで何かに取り憑かれたような」

カイト「似たようなものだよ　あれは”憑神”を発動し暴走した姿」

フエイト「”憑神”？」

聞いたことのない単語に首を傾げるフエイト

カイト「憑神は”黄昏の碑文”に封印されている八相の力を操っている状態のことだよ」

なのは「確か”八相”って星1つを破壊するほどの力があるんじゃない？」

シグナム・ヴィータ「!？」

スバル・ティアナ・エリオ・キャラ「ええっ!？」

知らなかったメンバーは驚きを隠せない

カイト「あれ？言っただけじゃなかったかな？」

ティアナ「知るわけないでしょ！」

キャラ「それでは、あの大鎌はなんですか？」

カイト「あれは憑神したときに具現化した武器だよ。憑神状態の時じゃなくても出せるけどね」

そう言ったカイトを見てティアナは何かを気づく

ティアナ「　　そう言えばあんた、私の訓練の時、一回銃を出さなかつた？」

エリオ「そう言えば僕の時にも槍を出しましたよ」

しばしの沈黙

カイト「　　ははははー！」

ティアナ「笑って誤魔化すな~~~~~!!」

カイト「と言うのは「冗談で”憑神”発動時よりかは威力は劣る」

キャロ「そつ、そつなんですか」

カイトの言葉を聞いて一安心する

カイト「うん。　　せいぜい六課の隊舎を消滅する程度かな？」

スバル「いやいや、十分にやばいよ!？」

さらっと危ない一言にツツコミをいれるスバル

はやて「そんじゃなんで暴走したんや？」

カイト「それは僕がまだ八相の力を扱いきれてないからだよ。八相達にも心がある。心が通じ合わなければ体を乗っ取られてしまうんだ」

リイン「まるで私やアギトのユニゾンみたいですね」

ふわふわと飛びながら言うリイン

カイト「そっ、そうだね」

はははと笑うカイト

ヴィータ「おい カイト」

ヴィータが急にひょっこりと目の前に出て来る

カイト「なっ、なに？」

ヴィータ「お前 嘘ついてるだろ？」

ヴィータの一言を聞いてビクツとなるカイト

カイト「なっ、何言ってるのさ！そんなわけないじゃないか？」

ヴィータ「やっぱりな お前が嘘つくとき鼻がひくひく動くんだよ」

カイト「えっ!?!」

思わず手で鼻を隠すカイト

ヴィータ「嘘だよ、バーカ!」

カイト「しまった!?!」

簡単な嘘に騙されるカイトを見てなのは、フェイト、はやては前に出る

なのは「カイト君」

フェイト「どどういうことか」

はやて「説明してくれるかな」

カイト「それは その えっ!?!」

なのは、フェイト、はやては涙目&上目遣いでカイトを見ている

カイト「 わかったよ」

観念して話すことにしたカイトを見ていつきに笑顔になり喜ぶ3人

カイト「えっと 全部が嘘って言う訳じゃないんだよ。ただ発動する場合、万全な体調と蒼炎の力が必要なんだ。もし2つとも満たしてなかったら暴走してしまうんだ」

そう蒼炎は無限に使えるわけではなく魔力のように制限がある

フェイト「それじゃ、私のせいで待て」 シグナム？」

フェイトが話す途中に割り込むシグナム

シグナム「グランツ。お前が任務に入る前の体の状態はどうだったのだ？」

「！？」

そうカイトと出会ってからカイトはなんの惜しみなく蒼炎を使っていた

それだけではなく体も任務の度に傷だらけになり倒れてしまっているそんなカイトの体調が万全な筈がないのだ

カイト「確かに万全って訳ではなかったけど」

そしてシグナムは追い討ちの一言を言う

シグナム「それではあの”蒼炎の光”と言う技はどうなのだ？それを使った後のお前の表情が歪んでいたのだが？」

スバル「あつ！」

急に何かを思い出したのか声をあげる

はやて「どうしたんや？」

スバル「はい。実は私、訓練をしてもらう前に使ってもらったんです。それで終わった後に”デメリットがある”って呟いていたよう

な？」

それを聞いたなのは達は一斉にカイトの方を向く

フエイト「カイト どういうこと？」

なのは「デメリット」ってなんなの？」

なのは達はジッとカイトを睨みつける

カイト「言わなきゃ駄目？」

「駄目！」

カイトはため息をつき観念したかのように話し出す

カイト「自分以外に使うと治した傷や疲れの約50%を僕が受け持つんだ」

それを聞いたなのは達は驚く

特に実際に使ってもらったスバル、ティアナ、キャラは顔が青ざめる

エリオ「そんな 兄さん 体は大丈夫なんですか？」

カイト「平気だよ、少し休めばすぐ治るさ！今だっってもう完全回復さ！」

笑いながらガッツポーズをするカイト

シグナム「そうには見えないな シャマル！」

シャマル「はい 行くわよカイト君」

カイト「へっ？ ちょっと！ うわっ！ 引きずらないでよ！ せめて歩かせて！」

シグナムに呼ばれたシャマルがカイト医務室の奥に強制連行された

はやて「シグナム、どういうことや？」

シグナム「グランツの体を調べます」

フェイト「けど、あんな無理矢理」

シグナム「では、手遅れになってもいいと？」

フェイト「それは」

なのは「そうだね とりあえず待とう」

10分後

医務室の奥からシャマルだけが出てくる

はやて「シャマル、どうやった？」

シヤマル「 身体機能の約70%が停止していたわ あれで動けるなんて 」

それを聞いたなのは達は愕然とする
迷惑をかけてしまっている、足手まといだと

なのは「 このままじゃ駄目だね 」

フェイト「 そうだね 」

はやて「 カイト君の足手まといやなく支えになってあげるんや! 」

3人の言葉に全員が頷く

なのは「 それじゃ、みんなで強くなるようにガンバロー! 」

「 おー! 」

このときなのは達は強くなることを誓った
カイトを護るために

意気投合し盛り上がっている中はやてがあることに気づく

はやて「そういえばシャマル、カイト君は？」

なのは「あっ！」

フェイト「そういえば」

みんなもカイトがないことに気づく

シャマル「ああ、カイト君はね」

回想

シャマルによって強制連行されたカイト

カイト「ちょっと！一体何をするつもりなの！」

シャマル「何ってカイト君の体を調べさせてもらうのよ」

シャマルはいつもと違い真剣な顔をして言う

カイト「別に調べなくても僕はいつでも元気全壊だよ！」

シャマル「いや、全壊しちゃ駄目でしょ」

カイト「とにかく僕は断ります」

そう言うと出口に向け歩き出した

シャマル「させないわよ　　ザフィーラ」

カイトの目の前に銀髪で犬耳が付いた男がカイトを捕まえる

カイト「えっ、君はあの狼のザフィーラ!？」

ザフィーラ「この姿で会うのは初めてだったな」

ザフィーラはそのままカイトをシャマルの下へ連れて行く

シャマル「もう、逃げちゃ駄目でしょ」

カイト「うっつ　こんなことされたら逃げたくもなるよ!」

ザフィーラに捕まえられながらも暴れるカイト

まるで注射を嫌がる子供のようにだ

シャマル「カイト君は、はやてちゃん達を悲しませたいの?」

カイト「えっ?」

シャマル「あなたがもし無理をして取り返しのつかないことが起きてしまったら　はやてちゃん達は悲しむわ　もちろん私も　」

カイト「　わかったよ。だけど結果は秘m「えいつ　「うっ!」?」

カイトがシャマルに何かされ倒れ込む

ザフィーラ「シャル　やりすぎではないか？」

シャル「いいのよ　これくらいしないと」

手元にある注射器を持ちながら笑うシャルだった

そしてカイトは意識を失う中「　えいつ　　じゃないよ！」と思うのであった

シャル「という訳なの」

全員「　」

シャルの話聞いた全員は黙り込んだ人や怯えている人もいる

シャル「どうかしましたか？」

はやて「　」どうかしましたか？”　じゃ　　あらへんわ〜〜！！！！」

スパーン！

シャル「キヤアア！？」

後日、なのは達は医務室ではシャマルに逆らうのは止めようとして
誓ったのであった

もちろんカイトもである

訓練！

シヤマルによつて眠らされたカイトは今だに寝ていた

カイト「うーん　はっ！　ここは誰？私はどこ？」

カイトは意味不明なというか古いギャグを言う

カイト「　なんだ　誰もいないのか　」

少しがっかりしながら言うカイト

シグナム「起きたようだな　」

声が聞こえた方を向くとそこにはドアの前に立っているシグナムだった

カイト「シグナム　何かよう？」

シグナム「ああ　だが、その前に詫びておくことがある　すまなかつた　」

急に頭を下げた謝るシグナム

カイト「えっ！？どうしたの急に、無理矢理診察したことなら怒ってないよ　」

シグナム「それもあるが先刻の任務のことだ　」

カイト「？ あのとときシグナム何か僕にしたっけ？」

カイトは身に覚えがないようだ

シグナム「私がグランツの言うことを聞かず残り、あまつさえ迷惑をかけてしまった」

カイト「あゝ！あのことか！」

あのことはカイトがシグナムを庇い助けたことのようなのだ

カイト「別に僕は気にしてないよ？」

シグナム「しかし、そのせいで死にかけてしたのは事実だ」

シグナムは歯を食いしばりながら言う

カイト「いやいや、そんなことないよ！あのとときしてなかったら奴に一撃を当てられなかったかもしれないし、だから気にしないでよ！」

カイトは笑いながら言う

シグナム「それでは私の気がすまん！なんでもするから言うてくれ！」

カイトはそれを聞いた瞬間、キラーンと目が光る

カイト「なんでも？」

シグナム「なんでもだ！」

カイト「それじゃあ、毎日してる朝練は無しで」

シグナム「それは 駄目だ」

カイトはズルツと転けそうになる

カイト「シグナム」

シグナム「それ以外だ！」

カイトはうーんと考え込んでいる

シグナム「決まったか？」

カイト「ちよつと待って」

シグナム「決まったか？」

カイト「だから早いつて そうだね。 だったらどこかご飯
が美味しい店に連れて行ってくれないか？」

このお願いをした理由は今かなり腹が減っていたかららしい

シグナム「そんなことでいいのか？」

カイト「うん。いいよ」

シグナム「そうか それでは本題に入ろう」

やっとかと思いたため息をつくカイト

シグナム「我々に鍛錬をつけて欲しい」

カイト「へっ？」

予想外な一言に啞然としている

カイト「今　なんて？」

シグナム「我々に鍛錬をつけて欲しい」

再び聞いたカイトは同じ答えを聞いてため息をする

カイト「他を探して下さい」

即答するカイト

シグナム「グランツ以外誰に頼めど？」

カイト「そもそも、みんながこれ以上強くなってどうするのさ？」

シグナム「決まっている　貴様を護るためだ！」

カイトはそれを聞いて啞然とする

カイト「僕を護るため　」

くっくつと笑い出すカイト

シグナム「何故笑う？」

カイト「なんでもないよ　気持ち嬉しい　けれど　いや、だからこそ断るよ」

シグナム「何故だ？」

カイト「理由はないよ、強いて言うなら　護られるのは苦手なんだ」

シグナムはそのときカイトの目を見て思った
なんて悲しい目なんだろうかと
しかしシグナムも譲れない

シグナム「だが、なんとしてでもやってもらうぞ」

カイト「だから嫌だって！」

シグナム「では、どうすればやってもらえる」

一歩も引かないシグナム
どうすればいいか考えるカイトは何かを思いつく

カイト「　　だったら」

シグナム「だったら？」

カイト「僕にキスしてくれたらやってあげるよ」

シグナム「なに！／＼／」

カイトの言葉に驚き顔を赤らめる

これを言ったカイトはもちろん本気ではない

プライドの高いシグナムがそんなことするはずがないと確信していた

シグナム「わかった」

カイト「へっ？」

していたはずだった

カイトは驚きのあまり開いた口が閉じない

しかもシグナムはカイトの座っているベッドに近づく

シグナム「それでは　　するぞ／＼／／」

カイト「ちょ、ちょっと待って、シグナム！」

強引にキスしようとするシグナムを止めるが

カイト「うわぁ！？」

シグナム「なっ！？」

勢い余ってカイトはシグナムを押し倒す形となっていた

カイト「ご　ごめん／＼／」

シグナム「いや　／＼／」

つつい見つめ合ってしまうカイトとシグナム
だが、そんな時間はすぐに崩れ去る

ヴィータ「おい シグナム。カイトはどう だ」

様子を見に来たヴィータが現れた

それを見たヴィータはデバイスを構える

カイト「 ヴィータ これは誤解です」

ヴィータ「潰れる!!」

ドコン!

カイト「またあああ!？」

カイトはヴィータに叩き潰された後そのまま引きずられ訓練場に連
行された

カイト「えーっと なんで僕はここにいて縛られているの?」

なのは「それはカイト君が逃げない為だよ」

フェイト「それに逃げたとしても、ここなら魔法を使っても大丈夫
だしね」

なのはとフェイトはニツコリと笑う

その笑顔はカイトにとっては恐ろしいものでしかなかった

それだけではなく、はやてやシグナム、ヴィータは無言でデバイスを構えている

しかも笑顔で

はやて「それで？カイト君はウチらに訓練をしてくれる気になったんか？」

カイト「」

ここでもし”NO”と言ったらどうなるかわかったもんじゃない

カイト「ちょっと待って！僕はスバル達の訓練も受け持っているんだけど」

ヴィータ「ほとんど見てるだけじゃねえか」

カイト「そつ、それにみんなも仕事があつて大変でしょ？」

シグナム「それは問題ない。グランツが見ている間には終わらせる」

カイトの言い分をすぐに解決される
もう諦めるしかないだろう

カイト「 わかったよ、わかりましたよ！やりますよ」

半分やけになりながら承諾するカイト

はやて「カイト君　ウチらはな遊び半分で言ってる訳やないんやで？」

カイト「えっ？」

急に真剣な顔をするはやて達を見て戸惑うカイト

なのは「私達はカイト君に護られてばかりで本当に感謝してるの」

フエイト「けどそのたびに傷ついてるカイトを見たくないし、足手まといになりたくないの！」

ヴィータ「だから、お前を護れる力が必要なんだ」

シグナム「無理矢理なのはわかっている　お前が戦っている間ただ見ているのは嫌なのだ！」

カイトはそんななのは達の覚悟を知り、笑い出す

カイト「わかったよ。だがその前にやって欲しい事がある」

そう言うとカイトは黄昏の碑文を取り出しその中から緑色の宝石が出る

はやて「それは確か”ウイルスコア”やったな？」

カイト「これをみんなのデバイスにまたインストールしてもらおう。もちろんスバル達のもね」

フェイト「なんで？それはもうインストールしてるよ？」

カイト「A I D Aには何種類かいるのは教えたよね？」

カイトの言葉に頷くのは達

カイト「その分、能力や力が異なる。それはウイルススコアも同じなんだ」

シグナム「そうか　そういうことだったのか」

シグナムは何かに気づく

はやて「なるほどな！」

フェイト「カイトが戦わせなかった理由がわかったよ」

なのは「どづいうこと？」

ヴィータ「　」

どうやらなのはとヴィータ以外は気づいたようだ

カイト「つまり、今ではH e l e n以上のA I D Aには抵抗することができないんだ」

ヴィータ「あっ！そうか」

なのは「？」

ヴィータは気づいたがなのは気づいてないようだ

カイト「 エー ではみんな理解したところで「ちょっと待って！
なに？」

なのは「私はまだわかってないよ！」

カイト「 ヴィータでさえわかったことがわからないのはにこれ
以上説明しても時間の無駄かと 」

なのは「ひどいよー！！！」

ヴィータ「てめえ、カイト！そりゃ、どついう意味だよ！」

結局なのはにもわかるように説明したが理解するのに10分ほどか
かったらしい

カイト「よし ウィルスコアのインストールが終わって、スバル達
の訓練も終わったからなのは達の訓練を始める。その前に1つ言っ
ておくよ 」

はやて「なんや？」

カイト「ぶっちゃけ、みんなに教えることはない！」

胸を張って言い切るカイト

フェイト「ど、どうして？」

カイト「だって、殆ど自分の動きを完成させてるからそこから色々と言っわけにはいかないんだよ　もしやったらゴチャゴチャになって混乱してしまうからね」

なるほどと、納得するフェイト

ヴィータ「それじゃどうすんだよ？」

カイト「そうだね　僕がみんなに出来ることはAIDAの対策方法と”秘奥義”くらいかな？」

うーんと頭を搔くカイト

シグナム「”秘奥義”とは？」

カイト「僕が昔AIDAと戦った時とかによく使っていた技のことだよ」

はやて「ということはそれを使えるようになれば強くなれるんじゃない？」

フェイト「それはどうかと思うけど」

カイト「けど殆ど難しい技だから修得するしないでは結構違つと思っよ？」

なのは「それじゃ、それから始めよう！」

ヴィータ「よし！やってやるぜ！」

気合いを入れるのはとヴィータ

カイト「始めるのはいいけど順番はどうする？」

そうカイトがいうと

「私（だ／や）！」

声を揃えていった

この後順番を決めるための言い争いが勃発したのは言うまでもない

訓練！ フェイト編

カイト「よし！行こうか？」

フェイト「うん」

なのは・はやて・ヴィータ・シグナム」

結局、言い争いを見かねたカイトはジャンケンで決めるように言い聞かした

結果は見ての通りフェイトが勝ったようだ

その表情はとても嬉しそうだ

そしてなのは達はとても悔しそう いや、悔しがっていた

カイト「次に誰がするのか、決めといてね？」

そう言ったカイトは訓練場の奥へフェイトと共に向かった

カイト「それじゃ、始めたいんだけど フェイト 離してくれな
いかな？」

今フェイトはカイトの手を握っていた

フェイト「えー！」

カイト「これじゃ始められないよ」

フェイト「わかった」

フェイトは渋々カイトの手を離す

カイト「けどさ 本当にやるの?」

フェイト「えっ?」

どうして?、と言いたそうなフェイト

カイト「僕なんかのためにそこまでする必要ないんじゃないか? それに「なんかじゃない!」 えっ?」

フェイト「カイトは”なんか”じゃないよ!カイトは私を救ってくれた! 私だけじゃない なのは、スバル、ギンガ、機動六課のみんなもカイトのおかげで救われているの だから自分のことを”なんか” って言わないで?」

少し涙目でカイトを見るフェイト

カイト「ごめん。変なこと言って」

そう言いながらフェイトの頭を撫でる

フェイト「うん / / /」

カイト「気を取り直して、さっそく教える技の説明に入るけどフェイトは3種類の形態があったよね？」

フェイト「うん。斧・鎌・剣の3つだよ？」

カイト「それじゃ鎌の秘奥義を教えるようかな？鎌のデバイスはフェイトしかないし？」

フェイト「うん！いいよ！どんな技？」

フェイトが聞くとカイトは黄昏の碑文を取り出す

カイト「来い 来いよ 僕はここにいる スケェイス！」

黄昏の碑文からあの時の大鎌が出る

フェイト「それって」

カイト「大丈夫！憑神は発動してないから」

フェイト「それでもちよつと心配かな」

フェイトはあの時映ったカイトを思い出す少なくともあんな状態になったのは自分のせいでもあると思っているフェイト

カイト「大丈夫 あんな事はもう絶対起きないよ」

フェイト「本当に？」

カイト「僕は嘘がつけないからね」

フェイト「ふふっ それもそうだね」

そう言うと2人して笑い出すのであった

カイト「説明すると言ったけど僕は説明が苦手だから見て覚えてもらおうよ」

フェイト「うん！」

前半部分の言葉が少し気になったがスルーするフェイト

するとガジェットドローンが現れる

その数は約数十体

カイト「それじゃ行くぞ！」

カイトはガジェットドローン？型に突っ込む

カイト「ハアッ！」

カイトは？型を大鎌で上になぎ払う

その勢いでカイトを一回転するがその瞬間魔法陣が浮かび上がる

しかもその魔法陣は？型の回りにいた？型、？型の下にまで展開されている

その広さは半径約50m

そしてカイトは上になぎ払った？型に追い討ちをかけるように上になぎ払う

そのままなぎ払った？型を通り越し下を向きながら大鎌を振り上げる

カイト「環伐乱絶閃」！

大鎌を振り下ろした瞬間下の魔法陣からまるで悪魔の巨爪のようなものが何本も飛び出し？型に突き刺さる
しかもその大きさは高層ビル一つ分はある

カイト「ハアッ！」

カイトのかけ声と共に巨爪は魔法陣の端に向かうように散らばり、回りにいた？型、？型もろとも破壊した

フェイト「すつ 凄い」

あまりの威力に唾然とするフェイト

カイト「どうかな？」

フェイト「どうもごうも　凄すぎるよ」

カイト「うーん　やっぱり難しいかな？」

カイトは大鎌を戻す

フェイト「ううん！頑張るよ！」

そう言いながらデバイスを出すフェイト

カイト「あつ、魔法陣だけどこれは別に俺みたいにしなくてもいいからね？」

フェイト「どういうこと？」

カイト「僕は悪魔の巨爪をイメージして作ったけど、フェイトは自分のイメージでやってること」

フェイトはしばらく考えて頷いた

フェイト「わかった　行きます！」

フェイトはカイトと同じようにやっては見るのだが

フェイト「”環伐乱絶閃”！　あれ？」

フェイトは途中まで出来ていたが最後の魔法陣を解放で失敗してしまっ

カイト「うーん　出力不足かな？魔法陣も小さいし　まあ、初めてにしては上出来かな」

フェイト「ホント？」

カイト「もちろん」

フェイト「ありがとう」

フェイトはカイトに褒められて嬉しそうだ

カイト「それじゃあもう少し続けてみよう！」

フェイト「うん！頑張るよ！カイトのために！」

それから数十分後

カイト「そろそろ時間みたいだし、次で最後にしよう」

フェイト「そうだね！」

そう言うとフェイトは出現したガジェットの前に立ちデバイスを構える

フェイト「すう　行きます！」

フェイトは深呼吸した後、ガジェットに突っ込む

フェイト「はあああああああ！」

ズババァン！

フェイトは着々と攻撃が決まる

そして最後の魔法陣が空中に吹き飛ばされたガジェットの下に展開される

フェイト「環伐乱絶閃！」

ガガガガガァン！

数十分前とは違い、カイトのようにはいかななくても雷を纏った魔力爪が魔法陣から現れ、ガジェットを突き刺す

フェイト「ふう カイト、どうかな？」

カイト「凄いよ、フェイト！たった数十分でここまでできるなんて！」

フェイト「そ、そうかな？／／／」

カイトに褒められ顔を赤らめるフェイト

カイト「うん！それじゃあ行くところか？みんなも待ってるだろうし」

フェイト「うん」

訓練を終えた2人はなのは達の下へ戻った

訓練！　　なのは編

カイト「　　」

フェイト「　　」

訓練を終え戻って来たカイトとフェイト
2人はある光景を見て呆然としていた

なのは「ジャンケン！」

はやて「ポン！」

ヴィータ「あいこで！」

シグナム「しよっ！」

今だにジャンケンをしていたなのは達

カイト「まだ、決まってなかったのか　　」

フェイト「どうする、カイト？このままだと日が暮れちゃうよ？」

カイトはそれは言いすぎだろう、と思ったが実際になりそうなので
止めることに

カイト「みんな、とりあえずこれを引いて」

なのは「それは？」

カイト「くじだよ。この中に当たりがあるから、それを引いた人が次にするよ」

なのは「うん！」

ヴィータ「わかった！」

シグナム「了解した」

はやて「」

なのは、ヴィータ、シグナムは同意するものの、何故かはやては黙
り、しかも青ざめている

はやて「カイト君 それって まさか」

カイト「うん！はやての部屋から持って来たよ！」

それを聞いた瞬間、さらに青ざめるはやて
一体そのくじには何が？

カイト「それじゃあ引いて！」

なのは達は棒を選び一斉に引いた

ヴィータ「なんも書いてねえ」

シグナム「ハズレのようだな」

はやて「」

カイト「 どうやらはやてもハズレのようだね 」

カイトははやての様子を見てニヤニヤする

バキツー！

なのは「 」

何やら鈍い音が響いた

その音にみんなが振り向く

そこには折れた棒を手に持つ黒いオーラが出ているなのはの姿があった

フェイト「 どうしたの、なのは？ あっ！？」

フェイトはなのはの持っている棒を見て驚く

それは

” 管理局の白い悪魔の真似をしなさい ”

さらには『 全力全開！スターライトブレイカー！ ” か ” 少し 頭
冷やそうか？ ” のどちらかを言うこと』と書いてある

なのは「はやてちゃん　これは　どういうことかな？」
はやて「いや　その」

カイト「自業自得だね」

はやて「そんな！カイト君助け」頭　冷やそうか？「なのはちゃん、
ちよつと待ってえな！？」

なのは「全力全壊！スターライトブレイカー！」

はやて「いやああああ！？」

ヴィータ「結局、全部言っでんじゃん　しかも字が違ってたし」

シグナム「そうだな」

フェイト「うん」

止めるのを諦めた3人はそう呟いた
ちなみにカイトはこれじゃあ、本当に悪魔だな、と密かに思ったの
であった

カイト「よし！早く始めようか　　なのは　　まだ怒っているの？」

なのは「
はやてに制裁をくだしたなのは
だが、今だに機嫌が悪いらしく黙り込んでしまっ

カイト「あの僕も悪かったって思ってるよ？　けど、なんか面白
そうだったから」

なのは「」

さらに、黙り込んでしまうなのは
カイトがどうしたもんかと考えていると

なのは「カイト君　ありがとうね」

カイト「えっ？」

怒られると思ったカイトは少し驚く

なのは「あのお時のお礼をまだ言っていなかったから」

カイト「 ああ あの時 」

なのは「 私の心の奥そこで悩んでいたことをカイト君は解決してくれた 私を絶対に1人にしないで言うてくれた 私はとっても嬉しかったんだ 」

笑顔で言うなのは

カイト「 そうなんだ 」

なのは「 だから私はカイト君の力になりたいの！どんな些細なことでもいい！だから私 私達はカイト君を護りたい！」

真剣な目で言うなのは

カイト「 なんで 今それを？」

なのは「 なんとなく かな？」

カイト「 そっか 」

なのは「 にははは 変かな？」

なのはが首を傾けて聞く

カイト「 ううん ありがとう 」

カイトはなのはの頭を撫でる

なのは「 うん / / / / 」

なのはの決意を知ったカイトは訓練を始めるが

カイト「正直、なのはに何を教えたらいいかわからない！」

なのは「ニャア！？急にどうしたの？」

急に叫び出すカイトに驚くなのは

カイト「だって、僕はなのはみたいな砲撃魔導師ではないんだよ？
どちらかと言えば接近戦だし」

なのは「それはそうだけど」

カイト「だから教えることはないよ！　だから次行こう」

カイトがそう言いながら歩き出そうとするが肩を捕まれる

なのは「カイト君　それはないんじゃないかな？」

そこには黒いオーラを出すなのはだった
しかもデバイスを構えている

カイト「ア アー ソウイエバ ナノハサンニ ピッタリナマホ
ウガアツタナー」

なのは「ホント?よかった」

怯えながら答えるカイトを見て笑顔になるなのは

カイトはその時なのはをからかうのは控えようと思ったのであった

なのは「それで?何を教えてくれるの?」

カイト「ちよつと待ってね」

カイトは黄昏の碑文を取り出す

カイト「僕に 護るための力を イニス!」

そこには白が基調で先端部分には花のような形をしている杖が現れる
大きさはカイトと同じくらいである

なのは「カイト君 それって」

カイトが出した杖を見て少し不安そうな顔をするなのは

カイト「んっ？大丈夫だよ 何も起きないよ」

安心させるように笑顔で言うカイト

なのは「ならいいんだけど」

カイト「早速、教えるけどなのはは魔法をあてる時どうしてる？」

なのは「えっ？ バインドで動きを止めるか敵を誘導させるって感じかな？」

カイト「ふむ それが理想的な当て方だね。さすがは”不屈のエアースオブエース”」

カイトに褒められたなのはは少し顔を赤らめ照れている

カイト「必要ないかもだけど、これは僕が時間稼ぎに使うんだけど
それでいい？」

なのは「うん」

カイトの問いに笑顔で答える

カイト「それじゃ行くよ」

カイトはイニスを構える

ガジェットドローンが数体現れる

カイト「 惑乱の蜃気楼」

キイイン！

カイトがイニスを天に掲げた瞬間、鼓膜が破れそうな音がする

なのは「何 これ」

なのはも思わず耳を塞ぐ

なのは「あれ、カイト君？」

音が止んだ後、なのはの目の前にいたはずのカイトがいなくなっていた

なのは「カイト君！どこ？」

なのははレイジングハートで魔力探知をしても反応がなかった
それはガジェットドローンも同じようでお口お口している

なのは「はっ（。。（まさか逃げたんじゃ」

なのはがそんなことを考えていると

カイト「火炎流星弾！」

いきなりガジェットドローンの頭上から無数の炎が降り注ぐ

なのは「ええっ!?!」

ガジェットドローンは一瞬にして破壊された

カイト「こんなものかな？」

なのは「わあっ!?!」

カイトがなのはの背後から現れる

なのは「カイト君、びっくりしたよ!」

カイト「ごめ」

なのは「!?!」

カイトが喋っている途中消えるようになってしまった

カイト「んごめん」

なのは「えっ? え〜!?!」

再びなのはの背後から現れるカイト

そして次の瞬間だった

辺りにはカイトが何人もいた

しかも手を振っている

なのは「」

なのはは開いた口が閉じなかった

なのはが驚いていると目の前にいるカイト以外いなくなってしまった

カイト「なのは、大丈夫？」

なのは「うん けど、どうなってるの？ 今のは幻術？」

なのはは一体何が起きたのかわからず混乱していた

カイト「似たようなものだね。正確にはあれは蜃気楼だよ」

なのは「蜃気楼？あの光の屈折で出来るあれ？」

カイト「そう 蜃気楼で姿眩ませたり、さっきみたいに分身を見せたりする事が出来る」

なのは「それじゃさっきの音は？」

カイト「あの音が蜃気楼を見させるために必要なものなんだ」

そう言うとカイトはイニスをなのはの目の前に向ける

カイト「なのは レイジングハートを」

なのは「えっ？うん？」

なのはカイトに言われ待機状態のレイジングハートを差し出す

カイト「惑乱の調音」

なのは「！？」

いきなりレイジングハートが浮かび上がって光り出す

RH『ダウンロード コンプリート』

レイジングハートがそう言うのと光が収まりなのは手のひらに戻る

なのは「カイト君。一体何したの？」

カイト「さっきの音をレイジングハートに取り組んだんだよ けど取り組んだからって使えるものじゃない。ちゃんと訓練しないと使うことができない あっ！レイジングハートには影響ないはずだから大丈夫だよ」

なのは「うん それじゃやってみるね」

なのはレイジングハートを構えるとガジェットドローンが現れる

なのは「惑乱の塵気楼」

キイイイーン！

カイト「」

ガジェットは何も起こらずなのはに突っ込んでくる

だがガジェットは急に動きが鈍くなる

なのは「レイジングハート！」

RH「スターライトブレイカー」

なのは「シューート！」

なのは上空からスターライトブレイカーを放つ
ガジェットは跡形もなくなる

なのは「うーん やっぱりカイト君みたいにはいかないな」

カイト「」

カイトは正直驚いていた

まさかあんな簡単に使えるようになるとは思ってもいなかった

なのは「どうかなカイト君？ちゃんと出来てたかな？」

カイト「うん 出来てたよ さすがはなのはだよ！」

なのは「か、カイト君！？／／／」

カイトは嬉しさのあまりなのはの頭を撫でていた

カイト「なのはは大丈夫かな、次の人に行こう！」

なのは「えっ、もう!？」

訓練を始めてまだ十分も経っていないため不満が残るなのは

カイト「うん!今回は技を見せて少しやってもらって、その様子でこれからの訓練内容を決めるつもりだったからね」

なのは「えっ それってもしかして 次の訓練からは時間制で教えるの?」

カイト「そうだよ。そこは効率良く教えないとね」

カイトは当然のようにそう答える

なのは「そ、そうなんだ」

カイト「?」

なのはは何故か少し落ち込んだ表情をする

何故かと言うと

なのは「(それじゃあカイト君と2人っきりの時間が少なくなっちゃうよ)」

と言うことだ

確かに今回のでなのはの訓練時間は少なくなる
それは良いことではあるのだが、なのはにとってはあまり良いこと
ではないのだ

ぼんぼん！

なのは「ふえっ！？／／／」

そんなことを考えているときいきなりカイトがなのはの頭に手を置く

カイト「それじゃあ良くできたご褒美に飲み物でも奢るよ」

なのは「　　ありがとう　／／／」

カイトの笑顔をみた瞬間、どうでも良くなったなのは
カイトの力になれるなら大したことはない

なのは「でも　もっとご褒美が欲しいな　」

カイト「えっ、何かな？」

なのは「それはね　　」

それでも、もう少し甘えたいなのははご褒美をねだるのだった

訓練！ シグナム編

ヴィータ「おっ！帰って来たぞ」

フェイト「お帰りなのはカイト」

シグナム「」

カイトとなのはが戻って来たのを確認したがした瞬間、3人の表情が険しくなる

何故かと言うとなのはがカイトの腕にしがみついていたからだ

フェイト「何してるの？なのは？」

ヴィータ「なんでカイトにしがみついてやがる」

シグナム「不埒だぞ」

3人揃ってなのはに文句を言う

なのは「ふふん！カイト君がよく出来たご褒美に抱きついて良いて言ってくれたの」

カイト「ちょっと、なのは！僕はなのはに飲み物以外にもご褒美が欲しいって言われたから何が良いかって聞いたら”戻るまで抱きつけて”って」

ヴィータ「それで了承したと」

カイト「う、うん　はっ!？」

ガシャン!

ヴィータの何やら目に見えない覇気を感じ、戸惑いながらもそう答える

すると背後から何か嫌な音が聞こえたので振り返ってみる

フェイト「　カイト　」

そこには金色のしに　閃光　フェイトがいた

カイト「な、なに?」

フェイト「なのはにはご褒美をあげて私にはくれないんだ」

カイト「　フェイト、その　それは「それに私の頭を撫でてくれたんだよ　しかもカイト君から　」な、なのはさん!？」

カイトが返事に困っているときにはなのはが横から火に油を注ぐ

ガチャン!

カイトはこの音を何度も聞いている

この音は地獄の片道切符だ

ゆっくりと後ろを向くとバルディッシュをハーケンフォームにしているフェイトの姿だった

フェイト「ひどいよ カイト 私の時にはそんなことしてくれなかったのに 少し反省しようか？」

ガチャガチャン！！

シグナム「テストアロッサ 私も手伝おう」

ヴィータ「アタシもやってやる」

シグナムとヴィータもデバイスを起動させている
黒いオーラを纏いながら

カイト「待って 待って下さい！ 少し話を」

フェイト・シグナム・ヴィータ「吹き飛ばせ！」

ドカーン！

カイト「ぎゃあああああ！」

フェイト達によって星にされたカイト

ちなみにはやては

はやて「
」

なのはのスターライトブレイカーを喰らい屍と化していた

シグナム「
」

カイト「
」

結局、次の訓練者はシグナムとなったのだが空気が重い

シグナム「 おい グランツ
」

カイト「
」

シグナムが声をかけても無視するカイト
どうやら少し怒っているようだ
もちろん、さっきのお仕置きについてのことだ

シグナム「すまなかった あるときはつい頭に血がのぼって

カイト「」

謝ってもなお怒って無視するカイト

シグナム「あの だからな？そんなに機嫌を悪くだな
えっと」

戸惑って混乱し始めるシグナム

カイト「ぷっ」

シグナム「？」

カイト「あははははは！」

急に笑い出すカイト

カイト「冗談だよ、シグナム

シグナム「はっ？」

いきなりで意味がわかっていない様子だ

カイト「僕はそんな事じゃ怒らないよ。ちょっと、シグナムを無視

していたらシグナムがどんな反応をするか、見てみたくなっちゃったんだよね」

シグナム「なっ!」

カイト「いや〜!シグナムが慌てる姿はなかなか”シャキン!”」

カイトが笑っていると急に首筋に剣型のデバイスが突きつけられる

シグナム「私が何だって?」

シグナムが恐ろしい顔をしながらカイトに問いかける

カイト「いや〜 その」

カイトは平然としようとしているが内心はかなり慌てている

シグナム「どうした?答える?」

カイト「なかなか”可愛いな”って」

シグナム「なっ!?!?!」

”可愛い”という言葉に顔を赤くするシグナム

シグナム「き きき きき!」

カイト「”き”?」

シグナム「貴様〜〜！」

シグナムがカイトにデバイスを振り回す

カイト「ちよつと！何するのさ！？」

シグナム「黙れ！」

カイト「うわあああああ！？」

シグナム「すまない 取り乱した」

カイト「いや 大丈夫」

取り乱したシグナムによって少しボロボロにされたカイト

カイト「と、とりあえず始めようか？」

シグナム「あ、ああ」

カイト「よし！それじゃシグナムに教える技を披露するよ！」

そう言ったカイトは黄昏の碑文を出す

カイト「行くよ ”マハ”！」

黄昏の碑文から現れたのは薔薇の蕾のような護拳をあしらった華麗

な刀

シグナム「それはレイピアに近いものだな？

なかなか良い刀だ

」

カイト「うん ありがとう」

すると目の前に無数のビルが現れた

カイト「それじゃ、行くよ」

シグナム「むっ？ガジェットでやるのではないのか？」

カイト「うん そっちの方がわかりやすいと思ってね」

そう言うとカイトはマハを構える

カイトは深呼吸をして落ち着かせる

カイト「はあああああ！」

カイトがビルに向かって跳ぶ

カイト「 ” 閻魔大車輪” ！」

ズバァン！ガガガガガァン！

カイトが凄い勢いでビルを斬りつける

シグナム「なっ!?!」

カイトが地面に足が着いた時には無数のビルはガレキの山となっていた

シグナム「なんという威力だ」

カイト「威力は最低限落としてあるけど、僕が本気でやれば山一つは破壊できる」

シグナム「もはや自然破壊だな」

そう言いながら苦笑するシグナム

カイト「うーん これ口で教えるのは難しいんだよ。それに僕はあまり使わないからどこに注意すればいいのかよく覚えてないし」

シグナム「む? そうなのか、なかなか使えそうな技のようだが」

カイト「まあ、僕は基本は双剣だからね」

カイトがそう言うとシグナムは腕を組みながらなるほど、っと呟く

シグナム「ではグラントツはどのようにして教えるつもりなんだ?」

カイト「うーん 正直、僕が習得したときの教え方が一番手っ取り早いんだけど、あまりオススメしたくないんだよね」

カイトは腕をシグナムと同じように組ながらそう言う

シグナム「構わん、私はお前に追いつくのならば、どのような訓練をも承けよう」

カイト「わかった」

チャキン！

シグナムの返事を聞いたカイトはシグナムに向けマハを構える

カイト「構えるんだ シグナム」

シグナム「何のつもりだ？グランツ」

いきなり自分に向け構えるカイトに睨みつけるシグナム

カイト「僕に教えてくれた人はあんまり喋るのが得意じゃなくて、頭より体で覚えるって言ったんだよ あときは地獄だった」

カイトは苦笑しながらそう言う

シグナム「なるほど いいだろう、来い！」

シグナムは剣型のデバイス レバアンティンを構える

カイト「おう！」

カイトは訓練兼模擬戦を開始する

10分後

シグナムと模擬戦を開始して2人は

カイト「それじゃ 最終確認だ いつでもいいよ！」

シグナム「ああ 行くぞ！」

シグナムはカイトに突っ込む

シグナム「閻魔大車輪」

シグナムは円陣を描くように何度も何度もカイトを斬りつける

カイトは寸前の所で受け止める

シグナム「はあああ！」

カイト「うわあ!?!」

カイトはあまりの猛攻に吹き飛ばされ、そのままビルに衝突する
しかもビルが崩れ生き埋めにされる

カイト「ぬおりゃああー！」

カイトはすぐにガレキを吹き飛ばし脱出する

カイト「はあはあ」

シグナム「大丈夫か？」

カイト「うん、平気　ひととおり教えたからもついいかな　行こう？」

シグナム「わかった」

カイト「あつ！　そういえばさ、シグナム聞きたいことがあるんだけど？」

戻る途中カイトが話しかける

シグナム「なんだ？」

カイト「何で僕の体の調子が悪いってわかったの？」

シグナム「簡単なことだ　何回、グランツと模擬戦をしてきたと思っっている？　少しの変化ぐらいすぐにわかる」

シグナムはふつと笑いながら答える

カイト「そっか」

シグナム「迷惑だったか？」

カイト「まさか？むしろ感謝してるよ」

シグナム「そうか」

そう答えると再び歩き出す

カイト「そうだ！何かお礼がしたいな」

シグナム「気にするな。私は別に礼が欲しくてしたわけではない」

カイト「それはもちろんわかってるよ！それでも僕はシグナムにお礼がしたいんだ！」

それでも礼がしたい、と言うカイトに戸惑うシグナム

シグナム「急に言われてもな」

カイト「何でもいいよ？」

シグナム「では」

暫く経つと急に顔が赤くなる

シグナム「抱きしめてくれ／＼」

カイト「えっ？」

カイトは予想外のお願いに固まる

シグナム「はっ!? い 今のは無しだ 忘れてくれ!」カイト「
あっ!シグナム!」

シグナムは走って先に行ってしまった

シグナム「(私は何故、あんなこと言ってしまったのだろうか)
」

走りながらそう考えるシグナムであった

訓練！ ヴィータ編

なのは・フェイト・ヴィータ「」

なのは、フェイト、ヴィータは何故か機嫌が悪い
何故かと言うと

カイト「あの シグナム？」

シグナム「／／／」

カイト「シグナムってば！」

シグナム「うるさい！今は近づくな／／／」

さつきから、カイトが話しかけると顔を真っ赤にして逃げるシグナム
明らかにおかしい2人

なのは「あの シグナムさん」

シグナム「むっ？な なんだ？」

ヴィータ「カイトと2人つきりで何があったんだ？」

そうなのはとヴィータが聞くと

シグナム「いや 別に何もなかったが」

シグナムはそう言うが今の2人にはそんな嘘は通じなかった

ヴィータ「嘘だな？」

なのは「何で嘘をつくのかな？シグナムさん？」

シグナム「うっ」

シグナムが2人に迫られているとフェイトはカイトの前にいた

フェイト「あのね、カイト。訓練のとき、シグナムと何があったの？」

カイト「えっ？うーん やっぱり あれのことなのかな？」

フェイト「あれって？」

カイト「うん、僕が何かお礼をしたいなっていったんだけど、そのときに言ったシグナムの「紫電一閃！」うわあ！？」

シグナムがいきなりカイトに斬りつける

カイト「なにすんだよ！？」

シグナム「そのことは忘れてくれと言ったはずだ！／／／」

カイト「だからって斬りつけて来ないでよ！」

シグナム「黙れ！こうなったら痛みでさっきのことを全て忘れさせてやる！覚悟しろ！」

カイト「そんな無茶苦茶な!？」

シグナムは再びカイトに斬りつけようとするがカイトはすぐに逃げ出す

フェイト「あんなシグナム初めてみたよ」

ヴィータ「アタシもだ」

なのは「後で何があったのか聞かないと」

そんな2人を見て黒いオーラを出しながら睨みつけ、そう決めるのだった

シグナム「忘れるおおお！」

ドーン!!

カイト「ぐぼおあ!!」

ちなみにはやては

はやて「うーん　白い悪魔が」

うなされていた

カイト「はやてがまだ気絶をしているから次はヴィータの番だね」

ヴィータ「おうー！」

ヴィータは、やる気満々ですでにデバイスを起動させている

カイト「そういえばヴィータの武器はそのトンカチだったね？」

ヴィータ「トンカチじゃねえよ！せめてハンマーで言え」

カイトが暫く考えると

カイト「うーん、ヴィータに教えられる技が見つからない」

ヴィータ「はあ？何でだよ！？」

カイト「だって僕、ハンマーなんか使ったことがないんだよ」

カイトがそう言つとヴィータは悲しそうな顔になる

カイト「ちよっ、ちよっと待ってね！なんかないか考えてみるから！？」

何かないかと真剣に考えるカイト

カイト「うーん」

どうやらまだ見つからないようだ

ヴィータ「もういいよ、カイト ないならしょうがねえさ」

カイト「まっ、待ってくれ！もう少しで思い付きそうなんだ」

カイトがそう言うと、ふとヴィータのデバイスを見る

カイト「 そうですねヴィータのデバイスは いくつか形態があったよね」

ヴィータ「あ、ああ そうだけどそれがどうした？」

カイト「そのどれかに突起物がついた形態はあるか？」

ヴィータ「あるけど こんな感じだぜ？」

GA『ツェアシュテールングスフォルム』

ヴィータはデバイスを变形させる

それを見たカイトは震え出す

カイト「それだよ、それがあればヴィータにぴったりな良い技を教えることができるよ！」

ヴィータ「わっ、わかったから手を離してくれ！ 気持ち 悪くなる」

カイトは思わずヴィータの肩を掴みガクガクと揺らしていた

カイト「あっ！ごめん、ごめん」

カイトはすぐに離す

ヴィータ「たくっ」

カイト「後は必要な物があるから少し待っててね」

暫くして戻って来たカイト

ヴィータ「遅えな 何してんだ？」

カイト「お待たせ！」

ヴィータ「何やってたんだ？」

カイト「ちよつと、これを貰いに」

そう言つてカイトが見せたのは剣型の武器しかもかなりの大型だ

ヴィータ「それは簡易デバイスだな？」

しかも量産型で魔力さえあれば誰でも扱える

カイト「うん！シャーリーに用意してもらったんだ」

ヴィータ「ふーん　それで？どうすんだ、それ？」

シャーリーの名が出た瞬間少し機嫌が悪くなるヴィータ

カイト「決まってじゃないか、ヴィータに教える技を見せるために使うんだ」

ヴィータ「けど、アタシの武器は大剣じゃないぜ？」

カイト「わかってる。けど、これはヴィータにぴったりの技だよ」

そう言うとカイト達の前にガジェット？型が現れる

カイト「後、一回しか出来ないと思うからしっかり見といてね」

ヴィータ「？　わかった」

ヴィータはカイトの言ったことをよく理解出来なかったが了解する

カイト「行くよ！」

カイトはガジェットに突っ込む

カイト「おらあ！」

カイトはまず大剣で槍のように突き刺す

ガジェットは怯み動きが止まる
カイトはそのまま跳び上がる

ヴィータ「なっ！？なんだ、あの魔法陣？」

カイトが跳び上がった瞬間、魔法陣が現れる
その魔法陣はミッド式でもベルカ式でもない

カイト「秘奥義 重装甲破”！」

カイトの大剣が魔法陣に触れた途端、大剣のスピード、威力が上が
りガジェットを真つ二つにする

ドガン！

ヴィータ「うわあ！？」

しかも大剣が地面に着いたとき、まるで核兵器が爆発したかのよう
に大爆発する

ヴィータ「なんだ これ」

大爆発によってできた砂埃が晴れ見てみるとそこには半径50mは
ありそうな大きな穴が開いていた

するとヴィータの前にカイトが現れる

カイト「どう、ヴィータ？凄いでしょ？」

ヴィータ「ああ だけどな」

カイト「？」

ヴィータ「やりすぎた、バカ！」

カイト「ぐはあ！？」

カイトはヴィータに殴られてしまった

殴られた後はヴィータにコツテリと叱られた

ヴィータ「たつく、お前は何回訓練場を壊せば気が済むんだ？」

カイト「はい すいません」

ちなみにカイトは土下座中

ヴィータ「あれ？そういえば大剣はどうしたんだ？」

ヴィータはカイトが持っていたはずの大剣が無いことに気づく

カイト「これだよ」

そう言うとカイトはあるものを見せる

ヴィータ「まさか その刀身がない奴はあの大剣の柄なのか？」

カイト「あまりの威力に耐えきれなくて粉々になっちゃたんだよ」

ヴィータ「すげえ」

あまりのことに驚きを隠せない

カイト「本当はあまりオススメしないけど、僕はヴィータとグラーフアイゼンなら耐えられると思うている！」

ヴィータ「!？」

カイト「できるかい？」

カイトがヴィータに聞くと

ヴィータ「当たり前だ！やってやるぜ！」

ヴィータの良い返事に笑顔になるカイトだった

ヴィータと訓練を始めて数十分

カイト「よし、こんなもんかな？今回はここまでにしよっ」

ヴィータ「おう」

カイトは余裕の表情をしているのだがヴィータはかなり疲れている

ようだ

カイト「大丈夫かい？この技はかなりの体力と魔力を使うからね」

ヴィータ「大丈夫だよ このくらい」

そうは言うもののかなり無理をしている

カイト「ヴィータ、ちょっと来て。あれを使うよ」

そう言うとカイトはヴィータの頭に手を伸ばす

ヴィータ「それは駄目だ！」

カイト「えっ！？なんでだ？」

ヴィータ「あれはお前に負担をかける」

自分の手を振り払い否定するヴィータに驚くカイト

ちなみに、あれというのは他人に使うと自分にダメージをくらう”蒼炎の光”である

カイト「そんなの気にしなくてもいい「いけない！」」

ヴィータ「お前がそんなんだから、みんなが心配するんだよ！少しは自覚しやがれ！」

カイト「うっ」

ヴィータ「もつとさ　アタシ達を頼ってくれよ　アタシ決めたんだよ　はやてもものはも　ついでにお前もアタシが必ず守るって」

ヴィータは真剣な目でカイトを見つめる

カイト「ありがとう、ヴィータ。ついででも嬉しいよ」

カイトはヴィータの頭をそつと撫でる

ヴィータ「撫でんなよ／＼」

文句を言いながらも払おうとしないヴィータ

カイト「とはいえ疲れているのは事実だから　よし、あのベンチで休もうか？」

カイトは前にあつたベンチを指差す

ヴィータ「ああ」

2人はベンチに座つた

ヴィータ「ふうー」

カイト「大丈夫？」

ヴィータ「大丈夫」

すると隣にいたヴィータが頭をカイトの膝に乗せた

カイト「ヴィータ!？」

ヴィータ「／／／」

起きてはいるようだが恥ずかしくて返事が出来ない

カイト「まあ、いいか そうだ」

カイトはどこからか画用紙と鉛筆を取り出す

ヴィータ「う、うーん」

カイト「あつ、起きた?」

カイトが覗き込むようにヴィータを見る

ヴィータ「うわっ!?!／／／」

ゴチン!

カイト「痛っ!?!」

ヴィータ「つう〜!」

ヴィータは目の前にカイトの顔が近くにあったためびっくりし頭を上げたから見事にカイトの頭とぶつかってしまった

ヴィータ「わ、悪い／＼／」

カイト「ううん、平気だよ！もう大丈夫なら、行こうか？」

ヴィータ「ああ　んっ？その画用紙は何だ？」

そう言われたカイトはすぐに隠す

カイト「こ、これは何でもないよ！さあ、早く行こう」

ヴィータ「あっ、おい！　何なんだ？」

少し慌てて戻っていったカイトにおかしいと思いつつも戻るヴィータだった

訓練！ はやて編

カイト「ただいま」

なのは「あつ！カイト君」

シグナム「戻ったか」

フェイト「2人共大丈夫だった？大きな音が何度かしたけど」

なのは達は帰って来たカイト達を出迎える

カイト「大丈夫だよ、フェイト。相変わらず心配性だね」

カイトがそう言いながら笑い出す

なのは「ヴィータちゃん、ちょっといいかな？」

ヴィータ「なんだ？」

なのは「カイト君と何かあった？」

ヴィータ「な、何がって？」

シグナム「お前と2人っきりの時に何か不埒なことはなかったかと聞いている」

なのはが話していた途中でシグナムが割り込む

ヴィータ「べつ、別になんもなかったよ！なあ、カイト？」

カイト「えっ？ あっ、ああ」

いきなり振られたカイトは少し戸惑いながらも答える

フェイト「ふーん」

なのは「ホントかな？」

シグナム「正直に言った方が身のためだぞ？」

カイト「そんなこと言われても ……！？」

なのは達に言い迫られているとその後ろにいたヴィータを見るとすごい剣幕でこつちを見る
まるで、言つなよ！と言わんばかりに

カイト「いや、なにもなかったよ」

すると背後に怪しい影が現れる

はやて「ほーう！それじゃあ、この絵はなんやらかな？」

それは、はやてだった

しかも笑顔であるのだが黒いオーラを出している

カイト「それは！？」

カイトがしまったという顔をする

フェイト「何？それ？」

なのは「見せて見せて！」

シグナム「私にも見せて下さい」

「！？」

なのは達はその絵を見た瞬間、はやてと同じように黒いオーラを出す

はやて「ヴィータ　なかなか楽しいことしてるんやな？」

ヴィータ「????？」

一体、何故あの画用紙で怪しまれているのかわからないヴィータ

はやて「見てみ？」

ヴィータ「！？」

はやてに見せられた画用紙を見てみるとそこにはカイトの膝で寝ていたときの自分の寝顔であった

なのは「どういふことかなカイト君」

フェイト「何もないうって言ってたよね？」

シグナム「どうなるかわかっているな？」

カイトがブチキしているなのは達を見て青ざめていると

ヴィータ「テメエ アタシが寝ている間に」

はやて「頭 冷やそうか？」

カイト「そんな〜！？」

今日1日だけで何回も不幸な目に遭うカイトであった

ヴィータ「」

なんだかんだいいながらもカイトが描いた自分の絵を大事そうに持っていたヴィータだった

ドガン！

カイト「うわああああ！？」

なのは達にぶっ飛ばされているカイトを無視しながら

カイト「　それでは、最後は、はやてだね？」

ボロボロなカイトがはやてを見る

はやて「そやで！何を教えてくれるん？」

カイト「うん、はやてに教えるのはそこまで難しい技じゃない」
はやて「えっ？そうなんか？」

カイトの言葉を聞くとはやては少しがっかりした表情をする

カイト「だけど、この技はどんな局面でも活用できる。　まあ、見
てもらえばわかるよ」

カイトがそう言うとガジェットが現れる

カイト「来たれ聖なる光　敵を貫き破壊せよ」

カイトが詠唱を唱えていると突き出していた左腕に無数の光弾が現
れる

カイト「　オルレイザス」

ヒュンヒュン！

その瞬間、左腕にあった光弾が放たれ一つになり直線上にいたガジ
エットに向かい貫いたのだが

はやて「　　なんや？何も起きへんで？」

そう貫いたはずなのだがガジェットのアーマーは傷一つ付いていないのだ

カイト「まあ、よく見てみてよ」

そう言われてはやてはガジェットを見てみると

ドガーン！

はやては急に爆発したガジェットを見て驚く

カイト「どう？」

はやて「一体どうなっているんや？ガジェットには傷は付いてなかったんやで？」

カイト「この魔法は外部を全く傷つけず内部のみを破壊するんだ。けど、直線には行かないのが欠点なんだ。それでもこの魔法はかなり使える」

カイトは再び手を突き出して詠唱を唱える

カイト「はやて、向こうのビルの奥側に行ってみてね」

はやて「うん！」

はやては言われた通りにビルの奥側に行った
見てみるとそこにはガジェットがいるだけであった

カイト「オルレイザス」

ヒュンヒュン！

はやて「これは!?!」

はやては驚いた

カイトの放たれたオルレイザスはビルを貫通してガジェットに当たる

ガジェットはそのまま破壊されたがビルは何事もなかったかのように立っている

カイト「このように無機物な物に当たってもダメージを喰らわない

ガジェットみたいな機械兵器は別だけどね?」

はやて「なるほど、これなら障害物があっても気づかれずに攻撃出来る訳やな?」

カイト「その通り。よし頑張ってこれを修得しよう!」

はやて「おー!」

カイトの言葉に元気良く返事をするはやてだった

訓練が始まって数十分後

カイト「だいぶ良くなってきたね」

はやて「でも、カイト君みたいに光弾は大きくないし、威力はガジエット？型をなんとか破壊出来るくらいやで」

そう言いながら落ち込むはやて

カイト「まあ、確かにそうだけど、どんなことでも一朝一夕で出来るものなんてないんだよ。はやてだって部隊長になるまでかなりの努力をしたり、魔法も使えるようになるまで一生懸命頑張って練習したでしょ？それと一緒にだよ」

カイトはそう言いながらはやての頭を撫でる

はやて「　　そうやね／＼／ウチ、頑張るよ」

カイト「それじゃあ、もう少し続けようか？」

はやて「うん！やるで！」

はやてはカイトの問いに元気良く答える

カイト「ふう〜 この辺にして帰ろうか？」

はやて「そうやね！ ホントはまだ続けたいけど、みんなも待ってるかな」

カイトとはやてはなのは達の下へ歩き出した

カイト「そういえば、はやて。ちょっと聞きたいことがあるんだけどいい？」

はやて「どうしたん？」

カイト「ヴィータから聞いたんだけど、みんなに俺の”蒼炎の光”を使わせないように言ってるらしいけど何で？心配とは言え少しなら全然平気だよ？」

はやて「蒼炎の光だけじゃなくて”蒼炎舞”も禁止やで？」

カイト「えっ!?!」

カイトは予想外なことに驚く

はやて「何でやあらへん！カイト君の身体機能は約30%しか動いておらへんのやで？だからカイト君が完全復活するまでは絶対に禁止や！」

カイト「それじゃあ、AIDAが来たらどうすればいいのさ？」

はやて「それは私達がAIDAを弱らせてカイト君がとどめを刺すって感じで」

カイト「もし、Heien以上のAIDAが来たらどうするの？」

はやて「」

何も言い返せなく黙り込んでしまうはやて

カイト「だから僕は両方とも僕が使いたい時に使う。それでいいよね？」

はやて「わかった けど ”蒼炎” を使う時はAIDAが来た時や！」

はやては泣きそうな顔をしてカイトに言う

カイト「わかったよ」

はやて「そして”蒼炎の光”は今日からこの事件が解決するまでの間は3回だけや！これも絶対やで！」

カイト「」

それを言われた時不安げな顔になる

はやて「返事は？」

カイト「はい！わかりました！」

はやての禍々しい顔にすぐ答えたカイトだった

カイト「 後、もう一つ聞きたいことがあるんだけど? 」

はやて「 なんや? 」

カイト「 聖王教会の騎士カリムだったかな? その人と会って話をするんじゃないか? 」

はやて「 それなら問題あらへん。カリムには予定を延ばしてもらうことにたんよ 」

カイト「 そうなんだ。それは少し悪いことしちゃったかな? 」

そう言つと少し悩んだ顔をするカイト

はやて「 しょうがないやんか、カイト君の体調が悪いのやからな。休息も必要やで? 」

カイト「 僕は平気なのに 」

そうカイトが呟いていると

はやて「 なんか言つたか? 」

カイト「 いえっ! ? なんでもないです! はやてには感謝してます! 」

はやての言葉に再び怯えるカイト
情けない

はやて「うんうん、それでええんや」

嬉しそうな顔をしているはやて

カイト「さらに、もう一つ。何ではやて達は僕のためにそこまで？」

はやて「そんなん決まってる。カイト君は大事な友達で仲間や！大切な人を助けるのに理由なんかいらへん！」

カイト「そっか　ありがとう」

カイトは、はやての言葉を聞いて微笑む

はやて「　それに　もう二度と大切な人を失いたくあらへん」

カイト「えっ？」

カイトは、呟いたはやてを見ると悲しそうな顔をしていた

はやて「あっ！？何でもあらへんよ！ほらっ！早く行くで！」

そう言うとはやては、走り出してしまっ

カイト「えっ！？ちよっと！待ってよ！」

???

ここはヘルバのアジト

ヘルバ「だいぶ魔力が集まりましたね」

ヘルバは目の前にある壁画を見てそう言うとモニターが現れる

ドゥーエ「ヘルバ様」

ヘルバ「ドゥーエですか。どうですか？その後の様子は？」

ドゥーエ「はい。何の問題なく侵入出来ました」

ヘルバ「そうですか、それはなりよりです。今回の作戦が成功すれば私の悲願が達成されるかもしれませぬ。頑張ってくださいね？」

ドゥーエ「了解致しました」

そう言うとモニターが消える

ヘルバ「もうすぐ　もうすぐです」

冥王ケルヌノスの復活の時が
「

鈍く光り出す壁画を見ながらそう呟いたヘルバだった

聖王教会

なのは達の訓練を開始してから数日後、カイトは、はやて・リイン・シグナム・ヴィータ・シャマル ついでにザフィーラとともに聖王教会に向かっている

カイト「 ねえ、はやて」

はやて「なんや？」

カイト「何で、シグナム達がついて来てるの？シグナムは車の運転だからわかるけど うわっ!？」

そう言うのと急に後ろからカイトの首が引っ張られる

ヴィータ「なんだ、カイト？アタシ達は邪魔者だって言うのか？んっ？」

カイト「そう言う訳じゃないけど少し気になってさ。後、首にしがみつかないでよ。危ないじゃないか」

カイトがヴィータにそう言っていると

はやて「それがな、カリムがシグナム達を連れてきて欲しい言うてな？それで来てもらったんや」

カイト「ふーん んっ？どうした、リイン？嬉しそうな顔して」

カイトがそう言いながら目を上に向ける

ちなみにリインはカイトの頭の上にいる

リイン「はい どんな形とはいえ、久しぶりにみんなでお出かけが出来てとても嬉しいのです」

シヤマル「そうね 最近はかなり忙しかったから、こうしているのも久しぶりね」

シヤマルもとても嬉しそうにそう言う

カイト「そうなんだ、それは良かったね。ところではやて、聖王教会って言うのはどんな所なの？」

はやて「せやな 簡単に言えば名前の通り教会とかあるんやで？他にも病院や学校もあるんや」

カイト「へえ、それは凄い」

ザフィーラ「それだけではなく、近代ベルカ式を使う騎士がいるのだ」

カイト「近代ベルカ式か。僕にはそういうのは関係けどね」

シグナム「確かグランツはベルカ式でもミッド式でもなかったな？」

カイト「うん、シャーリーに（強制的に）見てもらったところ、僕の使用する魔法はミッドとベルカの元になっているらしい。僕にはよくわからないけどね」

ヴィータ「だからあんなに、やりにくかったのか」

カイト「ヴィータは訓練の時、魔法陣を覚えるのに、かなりの時間がかかったのはそのせいかもね」

そうカイトが言うと

ヴィータ「おい、カイト！それは言わない約束だったろうが！」

ヴィータは言うより早く手を出しカイトの首を絞める

カイト「くっ、苦しい！？ごめん 僕が悪かったから離して」

はやて「ははは おもしろいな、カイト君は」

シグナム「ええ」

シャマル「そうね」

リン「はいです」

ザフィーラ「はい」

そんな光景を見てはやて達が笑い出すのであった

そして車に乗って数十分、カイト達は無事聖王教会に到着した

カイト「ここが聖王教会か」

はやて「せやで！なかなかいい所やる？」

カイト「うん、なんか懐かしい感じになるね」

ヴィータ「何でだ？」

カイト「僕が封印していた所はこんな感じだったからな」

リン「そういえば、そうでしたね」

そんな風に話していると

「八神部隊長にヴォルケンリッターの皆様、それにカイト、グラントさんですね？」

「お待ちしております」

1人は修道服を着た髪の長い女性と執事服を着た人が玄関の前で待機していた

シヤマル「あら デイードちゃんにオットーちゃんじゃない。元気にしてたかしら？」

この2人はJS事件でスカリエツティによって作られた戦闘機人今は聖王教会で修行中らしい

デイード「はい。私達は騎士カリム、シャツハに大変お世話になっ

ております」

シヤマル「そう よかったわ」

オットー「 皆さん騎士カリムのいる部屋までご案内します」

オットーはそう言いながら扉を開けカイト達を招き入れた

カイト達が廊下を歩いていると

デイド「カイト様、少しよろしいでしょうか？」

カイト「できれば」様”は止めて欲しいな。それで何かな？」

オットー「はい。あなたが姉上達を助けてくれた恩人だと聞きました」

デイド「なので是非ともお礼がしたくて」

カイト「”姉上”？」

何のことがよくわからないカイト

はやて「ほら、チンク達のことやで」

カイト「ああ！あの子達か」

はやてに言われてようやく思い出すカイト

デイド「 姉達を助けてくれて本当にありがとうございます」

オットー「 じぞいます」

カイト「いや、礼を言われるほど大したことしてないよ。それより、その話は誰から聞いたん「それは私だよ！」えっ？ってうわっ!？」

いきなり声が出たかと思いきやカイトの頭上から誰かがカイトに飛びつく

そしてカイトはそのまま倒れてしまう

カイト「君は 確か セインだったかな？」

カイトがゆっくりと立ち上がりながらそう言った

セイン「覚えててくれたんだ！」

カイト「まあね。僕はそう簡単には人の名前は忘れないからな。それより、何で君がここに？」

セイン「うーん、なんかわかんないけどシスターシャツハが修道騎士をやってみないかって誘われたから体験っつう感じでここに居るんだよ」

セインがそう説明していると

はやて「へえ、そうなんか つうかセイン！カイト君から離れんかい！」

はやてはセインがカイトに抱きついていてのを見て我慢出来ずセインに離れるように言う

セイン「えー やだ」

セインはそう言うと再びカイトに抱きつく

はやて「なっ!?!」

ヴィータ「てめえ!」

シグナム「貴様どういっつもりだ?」

シャマル「喧嘩を売っているのかしら」

それを見たはやて達は黒いオーラを出しセインを睨みつける

セイン「だってカイトに抱きついていて、とても気持ちいいんだもん」

はやて「それは確かにそうやけど」

カイト「いいから離してくれ」

カイトはたまらずセインを離す

正直回りの目がきつい　と言っより怖い

再び歩き出して数分

カイト「そういえば、オットー」

オットー「何？」

カイト「何で君は女の子なのに執事服を着ているの？」

オットー・デイド「!?!」

カイトの言葉を聞いて驚く2人

それはどうやらセイン達も同じようだ

オットー「何で僕が女の子だってわかったの？」

カイト「何でってどう見ても女の子じゃん？ねえ？」

はやて「ねえ？」言われてもなあ」

セイン「うん 私達姉妹でも最初は男か女かわからなかったんだよ」

カイト「ふーん？全く、失礼だな。こんなに可愛いのに」

カイトはそう言うとオットーの頭を撫でる

オットー「あ、ありがとうございます / / /」

「」

オットーはカイトに”可愛い”と言われたことと頭を撫でられたために顔を赤らめる

それを見ていたはやて達は黒いオーラを出していた

デイド「どつぞ、こちらです」

カイト達はカリムのいる部屋の前に到着する

カイト「やっと着いたね」

はやて「せやな」

はやてのご機嫌が悪いどうやらまだ怒っているようだ

カイト「何、怒ってるのさ、はやて？」

はやて「別に、怒っておらんので」

カイト「怒ってんじゃない まあいいや、入ろう」

そう言っつてカイト達が部屋に入る

カリム「お待ちしておりました。カイト＝グランツさん」

そこには椅子に座っているカリムがいる

カイト「あなたが騎士カリム？」

カリム「はい。どうぞ、座って下さい」

カリムに言われ椅子に座るカイト達

カイト「それで、僕に話と言つのはなんですか？」

カリム「カイトさん。せっかく来て下さったのですから少しお話で
もしませんか？」

カイト「別にいいですけど」

そう言つて話を始めようとするが

シグナム「あの騎士カリム。騎士シャツハの姿が見えないのですが
？」

カリム「シャツハなら仕事で出かけていますよ」

シグナム「そうですか」

はやて「なんや、シグナム。やっぱり話の合うシスターシャツハが
いないと寂しいんか？」

ちよつと、からかうように言つはやて

シグナム「いえ　そういうわけではないのですが」

カリム「大丈夫ですよ、騎士シグナム。じきに帰って来ますから
それではカイト様」

カイト「ちょっと待って。その”カイト様”と言つのを止めて欲しいんだけど。」

カリム「そうですか？ではカイトさん、と呼ばせていただきますね。」

カリムは笑顔でそう言う

カイト「ありがとうございます。それでもお話と言つても何を？」

カリム「そうですね。ではカイトさんの好きな食べ物は何でしょうか？」

カイト「えっとね、肉じゃがとか好きかな？って何してるの、はやて？」

カイトの隣に座っているはやてが何やらメモを取っている

はやて「へっ？あつ、何でもあらへんよ！」

カリム「それでは女性の好きなタイプは？」

カイト「えっ！？何ですか、その質問！」

カリム「ふふつ あくまでもタイプですから答えて下さいね」

カイト「拒否権は？」

カリム「カイトさんは今の状況であると思います？」

「
」

カリムにそう言われ見てみるとそこにはカイトの答えが気になるはやて達がじつと見ている

カイト「僕のタイプは 笑顔が素敵で一緒にいると心が暖かくなる女性かな」

カリム「心が暖かくなる、ですか？」

笑顔が素敵というのはわかるが心が暖かくなるというのはあまり聞かない言葉だ

カイト「うん、実際にここにいるみんなは心が暖かくなる感じがするんだ」

「／／／／」

カリム「
」

カイトの純粋な答えと笑顔に思わず顔を赤らめるはやて達しかし何故かカリムだけは表情を曇らせる

カイト「どうかしましたか、カリム？」

カリム「い、いえ！何でもありません。では次はこの中にいる女性で一番の好みの人は」

カイト「もう勘弁して下さいー！」

これから数十分程、他愛のない会話が続いたのだった

カリム「そういえば、はやて。夜天の書の調子はどうかしら？」

はやて「えっ？うーん 最近使ってないからわからへんな？」

カリム「そうなの？出来れば見せてほしいのだけどいいかしら？」

断る理由がないので、はやてはカリムに夜天の書を渡す

カリム「ふーん これが夜天の書ね」

カイト「？」

カイトはカリムの様子が変なことに気づく

はやて「カリム？」

どうやら、はやても様子がおかしいことに気づき始めたようだ

カリム「いえ 何でもありません これをお返ししますね」

はやて「あっ うん」

そう言ってカリムから夜天の書を受け取ったそのときだった

カイトが急に立ち上がり

カイト「はやて！カリムから離れるんだ！」

はやて「!？」

受け取ったそのときカリムの手から黒い泡AIDAが現れる
はやてはすぐに離れる

ヴィータ「はやて！」

シグナム「主、ご無事で？」

はやて「大丈夫や けど、これは」

カイト「姿を現したらどうだい、ドゥーエ？」

するとカリムの体が光出し、現れたのはドゥーエだった

デイド「ドゥーエ姉様」

ドゥーエ「お久しぶりね？」

カイト「そうだね、本物のカリムはどうした？」

ドゥーエ「ふふ 聞こよ」

ドゥーエが指を鳴らすと一つのAIDAが風船のように割れたかと思いきやそこからカリムとシャツハが現れる
セイン・デイド・オットーはすぐに2人の下へ駆け寄る

セイン「オットー、騎士カリムとシャツハは？」

オットー「大丈夫 気絶してるだけ」

デード「よかった」

カリムとシャツハが無事なことがわかり安心する3人

カイト「どういづつもりだ、ドゥーエ？」

2人にA I D Aに取り憑かれていないことに怪しむカイト

ドゥーエ「私の狙いはあの人達じゃないのよ。だから少し眠ってもらったのよ」

シグナム「どういう意味だ？」

シグナムがそう言うと同時にカイト達はデバイスを起動させる

ドゥーエ「あーあ やっちゃったわね」

カイト「えっ？」「キヤアアアア！？」「はやて！？」

カイトが、はやての悲鳴で振り向いた時、そこにはA I D Aに襲われたはやての姿だった

夜天の書

夜天の書「プログラム起動」

はやてが持っていた夜天の書がそう言うのとそれと同時に空に浮かぶ

カイト「これは」

カイトが夜天の書を見ているとその回りにはAIDAが取り憑いている

はやて「

リン「はやてちゃん？ きゃっ!？」

リンははやての様子がおかしいことに気づき近付こうとするがバリア的なもので弾き飛ばされてしまう

カイト「リン!？ドゥーエ、これはどういうことなんだ？AIDAはあの本に取り憑いたはずだ」

ドゥーエ「あら、知らないの？あの子とあの本は精神が繋がっているのよ」

カイト「

カイトはそれを言われてすぐに理解した

セイン「どっぴいっぴいとっ」

ドゥーエ「つまり、あの本が取り憑かれれば、あの子が取り憑かれたのと同じ意味になるのよ」

はやて「あああああ！」

カイト「!？」

ドゥーエが説明し終えた瞬間、はやての叫び声が聞こえ、振り向くとそこには夜天の書の前にいた

しかも足下にはいつもの白銀の魔法陣が漆黒の魔法陣になっている

はやて「ユニゾン イン」

次の瞬間、はやてと夜天の書がA I D Aに包まれる

ライン「ユニゾン まさか!？」

ラインが驚愕しているとはやてを包んでいたA I D Aは風船のように割れる

出て来たのは、はやてではなく白銀の長髪でまるでライン大人になったような姿をしている

カイト「あれは、はやてなのか？」

ライン「はいです あれは初代ラインフォースの防御プログラムが暴走した時の姿 けど」

カイト「？」

リイン「有り得ないです！初代リインフォースは10年前に消滅した筈です！」

リインは泣きそうな顔をして言う

ドゥーエ「ヘルバ様はこう言っていたわ。”例え消滅しても、そこに想いがあれば再生できる”って A I D A って凄いのね？」

カイト「くっ！」

カイトは虚空の双牙を取り出し、はやてに突っ込むのだが

ガキーン！

シグナム「」

何故かカイトの行く道を妨げるシグナム

カイト「なっ！？ うわぁ！」

それだけではなく、ヴィータが横からデバイスでカイトを叩きつける

そして2人は、はやての前に立つ

それは、シャマルとザフィーラもだった

その姿はまるで、主君を守る騎士のように

オットー「なっ！？」

セイン「あんたら、何やってんだよ!？」

その姿を見たセイン達は、ただ驚くことしかできなかった

リイン「これは「守護騎士プログラムが乗っ取られたようね」
!？」

カイト「守護騎士プログラム？」

リイン「はい。それは夜天の書の主　つまり、はやてちゃんを守るために発生するプログラムです」

カイト「ということは、シグナム達もAIDAに取り憑かれた状態に」

ドゥーエ「それじゃ、頑張ってね　守護神さん」

そう言つてドゥーエは消えてしまう

カイト「逃げたか　セイン、オットー、デイド！カリム達を連れて早く逃げるんだ!」

セイン「わかった！行くよ、2人共!」

オットー「えっ!？」

デイド「けど」

セイン「今、私達がいたらカイトの邪魔になっちゃう　ほら行くよ!!--」

オットー「 わかった」

デイド「 はい」

セインはオットーとデイドと共に気絶しているカリム達を連れて行った

それを見届けたカイトは、はやての方に向く

カイト「そういえば、リインは何で平気なの？」

リイン「リインは独立行動が可能なよう、はやてちゃんに作ってもらったからです」

カイト「へえ」

カイトは聞いておきながら興味が無さそうに言う

リイン「 あんまり驚かないのですね？」

カイト「何が？」

カイトは首を傾げながらリインを見る

リイン「何が？」って私達のことですよ！」

カイト「ああ、そんなこと？」

リイン「そんなことって！！」

カイトの発言に少し怒るリイン

カイト「まあ、僕も似たようなものだし それに」

カイトが一息いれ

カイト「リインはリインだろ？」

リイン「リインはリイン？」

カイト「もちろん、シグナム達も一緒。プログラム？そんなの知った事じゃない。君達はプログラムじゃない 僕の大切な仲間だ！」

リイン「カイトさん」

リインは感動して涙目になってしまっている

カイト「リイン、泣くのは後だよ。まずは」

カイトは虚空の双牙を構える

カイト「はやて達を助け出す！！」

リイン「はいです！！」

そう決意したカイトとリインは、はやて達に向かう

カイト「ハアアア！」

カイトはA I D Aに取り憑かれているはやてに突っ込むのだが

ガキイン！

シグナム・ヴィータ「」

それをシグナムとヴィータが止める

カイト「舞武 夢幻繰武！」

だが、カイトはすぐに2人を弾き飛ばし、壁に打ちつける

カイト「まだまだ！蒼炎球！」

そして壁に打ちつけられたシグナム達にトドメと言わんばかりの追
い討ちを与え、爆風が起こる

リイン「問答無用ですね」

カイト「まあ、このくらいしないとシグナム達は倒せないからな」

そしてカイトは再び、はやての下へ向かおうとするのだが

カイト「ぐわあ！？」

倒したと思っていたシグナムが背後から斬りつける

なんとか避けたが直ぐにヴィータが追い討ちされ避けきれず吹き飛ばされる

リン「カイトさん、大丈夫ですか!？」

カイト「うん、とは言え無傷とはねっ！」

シグナム・ヴィータ「!？」

カイトは言い終えた瞬間、シグナム達の懐に潜り込む

カイト「百花繚乱！」

カイトはシグナム達を何度も斬りつけ、再び弾き飛ばす

カイト「」

カイトは弾き飛ばしたシグナム達の方をじっと見る

シグナム・ヴィータ「」

シグナム達は何事もなかったかのように立ち上がる

カイト「これは!？」

カイトはシグナム達を見て驚く

シグナム達に着いていた傷がみるみるうちに治ってしまう

リン「これは恐らく再生プログラムです。本来は夜天の書のマスタープログラムにしかないはずなのに」

カイト「まあ、もしかしくなくてもAIDAの仕業だね　と言つことはシグナム達に攻撃しても意味がない　か」

リイン「どうするですか？」

リインがそう聞くとカイトは蒼炎舞を発動する

カイト「シグナム達は無視して夜天の書についたAIDAを断つ！」

そう言うときカイトは、はやてに向かって突っ込む

シグナム・ヴィータ「!？」

当然のようにシグナムとヴィータが止めにかかるのだがカイトはいとも簡単に2人を抜く

カイト「ハアア”ドガン!”　何っ!？」

そのまま、はやてに突っ込む筈が白い壁に阻まれてしまう
下を見てみるとそこには狼形態から人型に変わったザフィーラの姿

カイト「くっ!あっ!？」

そして、すぐさまカイトはバインドされてしまう
バインドをかけたのはシャマルだ

シグナム「紫電」

ヴィータ「ラケーテン」

シグナム「一閃！」
ヴィータ「ハンマー！」

身動きができないカイトに2人の攻撃が迫る
もちろんカイトは何もできず吹き飛ばされた

リイン「カイトさん！」

リインは直ぐにカイトの下へと向かう
そしてリインが見たものは血だらけになって膝を着いているカイト
だった

カイト「大丈夫 ” 蒼炎の光”」

ポワッ！

カイトの回りに蒼炎が覆い、カイトの傷がみるみるうちに治っ
ていき、立ち上がる

カイト「これは消耗戦になりそうだ」

リイン「カイトさん、私もお手伝いを」

カイト「気持ちは嬉しいけどダメだ 足手まといになるだけだよ」

リイン「はいです」

カイトにそう言われて落ち込むリイン

カイト「その代わりに、六課に救援を呼んで欲しい。頼むよ、リイン」

カイトはそう言いながらリインに微笑む

リイン「はいです!」

カイトはリインの返事を聞いた後、はやて達に突っ込んでいった

機動六課 訓練所

スバル「おりゃ!」

ティアナ「はっ!」

エリオ「たあ!」

キャロ「」

現在スバル達、FW陣は各自、カイトに教わった技の練習をしている

なのは「ふうー」

フェイト「はあああ！」

それはもちろん、なのはやフェイトも同じで一生懸命に訓練をしている

なのは「うーん カイト君達は今頃どんな話をしているのかな？」

フェイト「そうだね 多分カイトについてのことだと思うけど」

なのはとフェイトがそう喋っていると

キャラ「それか今頃、皆さんでお出かけしているかもしれませんね

」

そのキャラの一言になのは達がピクリと反応する

エリオ「キャラ、キャラ！それは内緒だった」

キャラ「あっ!?!」

エリオに言われ、咄嗟に自分の手で口を塞ぐが既に遅し

なのは「エリオ、キャラ それはどういうことかな？」

フェイト「詳しく話してくれる？」

エリオとキャラは、なのはとフェイトの笑顔（目が笑っていない）
でエリオとキャラに聞いてくる

スバル「出来れば」

ティアナ「私達にも話してほしいわね？」

いつの間にか後ろに回り込んでいるスバルとティアナ（黒いオーラ付）

そんなのは達に反発出来る筈もなくエリオとキャラロは話し出す

回想

カイト達が聖王教会に出かける数十分前

エリオとキャラロは、訓練をするため訓練所に向かっていたが

リン「ふん ふうん」

鼻歌を歌いながら飛んでいるリンを見かける

エリオ「あっ！リン曹長」

キャラロ「おはようございます！何かご機嫌ですね？」

見かけたエリオとキャラロは、直ぐに挨拶をする

リン「はいです 実はずいぶん 今日、聖王教会でお話が終わった後に街でお買い物をするんですよ」

エリオ「そうなんですか」

キャラ「楽しそうですね」

そう会話をしていると

はやて「何やつとんねん！リイン！」

どこらからか現れたのかはやてがリイン達に話しかけて来た
しかも、かなり慌てている

キャラ「八神部隊長!？」

エリオ「一体どこから?」

はやて「そんなことは、どうでもいいんや！それより、さっきの話
なんやけど」

エリオ「あつ！お出かけのことですか?」

キャラ「楽しんで来て下さいね」

エリオとキャラは笑顔でそう言う

はやて「ありがとな でもちやうねん このことは、なのはちゃん
達には内緒にしておいて欲しいんや」

エリオ「えっ?でも」

ガシッ！

はやてはエリオとキャラロの肩を掴む

はやて「本当にお願いや！シグナム達もいるけど、こんなチャンス
を逃す訳にはいかないんや！」

2人は、はやての言葉に戸惑う

はやて「それとも2人はウチのお願いが利けへんちゅうんやな？
そうかそうか」

ガチャン！

はやては無言で2人にデバイスを向ける

エリオ・キャラロ「はい！誰にも言いません！」

2人は、はやてのお願い（脅迫）に応じたのであった

エリオ「と言う訳です」

なのは・フェイト・スバル・ティアナ「」

なのは達はエリオの話を絶賛、黒いオーラ噴出中

エリオ・キャロ」

それを見てエリオとキャロが怯えていると通信が入る

シャーリー「皆さん、大変です！？AIDA反応です！」

「！？」

なのは達は急なことに驚愕する

シャーリー「後、ライン曹長から通信が」

シャーリーがそう言うとモニターが現れ、そこにはラインの姿が

ライン「皆さん、早く来て下さい！カイトさんとはやてちゃん達
が！」

ラインの慌てようで状況を理解する

フェイト「うん、わかった」

なのは「みんな、出動するよ！」

「了解！」

そしてなのは達は聖王教会に向かったのであった

場所は戻って聖王教会

カイトは、はやて達と戦闘中なのだが

シグナム「」

ドガンー！！

カイト「ぐわあああ！？」

カイトはシグナムの一撃をくらい吹っ飛ぶ

戦い始めてから今まで、カイトはどうかにかしてAIDAに取り憑いているはやての下に向かう

だが、シグナムとヴィータが立ち塞がり、切り抜けてもシャマルとザフィーラに動きを止められ、そこを追いついたシグナムとヴィータに吹き飛ばされるの繰り返し

カイト「蒼炎の光」

リイン「！？」

カイトも傷ついたら蒼炎の光を使い回復するのだが、リインはあることに気づく

リイン「蒼炎が弱まっているです」

そうカイトが蒼炎の光を使う度に纏っている蒼炎が弱まっていく

カイト「（ヤバい！使いすぎた）」

カイトはそう思いながらも、はやて達に突っ込んでいった

カイト「ぐっ！」

しかしカイトは途中でまたバインドで捕まってしまう

カイト「！?」

カイトは来るはずの衝撃に備えていたのだが来ない
そして回りを見渡すとカイトはあることに気づく
それは、シグナム達が左右に別れて道を開けている
その先を見てみると

はやて「響け 終焉の笛」

そこには、Sランク砲撃魔法を詠唱しているはやて

カイト「くっ！　!?」

直ぐにバインドを壊し避けようとするがカイトは後ろにリインが
いることに気づく

しかもリインはカイトが邪魔で、はやてが詠唱していることに気づ
いていない

カイト「やばい!?!?」

カイトは急いでリインの下へと向かう

はやて「ラグナロク」

それと同時に、はやてのラグナロクが放たれる

リイン「!? カイトさん!？」

リインはカイトが、こっちに向かっていているときにようやく、はやてがラグナロクを放ったことに気づいた
そしてリインの下にたどり着いたカイトは何も言わずにリインをラグナロクが当たらないところまで投げる

ドガーン!

そしてカイトにラグナロクが直撃する

リイン「」

カイトに投げられ直撃を避けたリインはただカイトの無事を祈ることしかできなかった

カイト「はあ はあ」

爆煙が晴れ現れたのは血だらけで膝をつくカイトだった

リイン「カイトさん!なんで」

カイト「何で私を助けた？」かな？それは僕がそうしたかっただけだよ」

カイトはそう言つと蒼炎の光を使う
だが、傷は全く治らない

カイト「ぐっ」

しかもカイトは再び地面に膝をついつしまつ

カイト「これは、やばいな」

リン「カイトさん！あれ！？」

カイト「！？」

カイトとリンが見たもの

それは、涙を流しながらカイトとリンを見るはやて達だった

カイト「これは」

さすがのカイトでも、この状況を理解できずにいた

リン「はやてちゃん達が泣いているです 身体の痛みじゃなくて心の痛みで」

カイト「心の痛み」？」

リイン「私にはわかりますです　はやてちゃん達は傷つけない大切な人を傷つけてしまっているという悲しみがはやてちゃん達の心を痛めつけているです」

リインはそう言いながら涙を流す

カイト「　情けない」

リイン「えっ？」

カイト「情けない　僕俺のせいで、はやて達が心を痛め、涙を流させるなんて　僕は自分が許せない！」

「!？」

カイトがそう言った瞬間、消えかかっていた蒼炎が復活する

それだけじゃなく今まで見たことの無いほどの蒼炎がカイトを包み込む

シグナム「翔けよ　隼」

ヴィータ「轟天爆砕」

それを見た2人は、シグナムはデバイスを弓状にし矢が現れ、ヴィータはデバイスのハンマーヘッドが巨大化する

カイト「　」

それを見たカイトは逃げようとも、避けようともせず、ただシグナムとヴィータを見つめる

シグナム「シユツルムファルケン」
ヴィータ「ギガントシユラーク」

ドォーン！

2人の必殺魔法がカイトに直撃し爆風がまう

リン「あつ！」

爆風が晴れた先には無傷で立っているカイトの姿があった

カイト「」

シグナム・ヴィータ「!？」

次の瞬間、カイトがシグナムとヴィータを見たかと思っただらいつの間にかカイトは2人の前に立っていた

ガシツ！

そしてカイトは2人に抱きしめる

カイト「ごめんね」

シグナム・ヴィータ「!？」

カイトがそう言うと2人は蒼炎に包まれた

包まれた2人はゆっくりとカイトに倒れ込んだ

ザフィーラ「ガアア！」

倒れ込んだ2人を見てザフィーラはカイトに突っ込んだ

ザフィーラはそのままカイトに噛みついた

カイト「ごめん」

カイトが再び謝るように言うとシグナム達と同じように蒼炎に包まれ倒れる

シャマル「!？」

シャマルは距離をとろうと後ろに下がろうとするが、すぐそこには蒼炎の塊があった

カイト「蒼炎の影」

蒼炎の塊からカイトが現れ、シャマルを抱きしめ蒼炎に包み込んだ

カイト「みんな 本当にごめん」

倒れているシグナム達を見ながらそう言うとカイトは、はやてがいる方へと向かう

はやて「響け 終焉の !？」

はやては再びラグナロクを放とうとするが

カイト「ウオオオオ！」

カイトがいつの間にか、はやてのすぐそばにいた

ガキーン！

そのまま、はやてに突っ込むカイトだがはやてのバリアに防がれる

カイト「突き破れええええ！」

はやて「!？」

パキーン！

カイトは思いつ切り右腕を振りかぶりバリアを叩きつけ、バリアを破壊した

カイト「はやてええええええ！」

カイトはそのまま右手を、はやてに伸ばす

そして夜天の書に触れた瞬間、2人の周りに光が包み込んだ

少し時間を遡り

へりの中

通信を受けたなのは達は、今聖王教会に向かっている

フェイト「カイト達、大丈夫かな？」

ティアナ「そうですね あのリイン曹長の慌てよう。かなり大変なことになっているのは確かですね」

スバル「大丈夫だよ！カイトもいるし、八神部隊長達も付いている」

なのは「 そうだといいけど」

なのははそう言いながらも不安げな表情をする

フェイト「 うん。考えたくないけど最悪な事態を想定しながら行動した方がいいね」

エリオ「最悪な事態と言うのは？」

エリオは恐る恐る聞いてみる

なのは「一つは、はやてちゃん達の誰かがAIDAに取り憑かれたか これは絶対だね」

フェイト「 そうだね。あのリインの慌てようでそう考えるのが妥当

だね」

キャロ「そんな」

なのは「そしてもう一つは」

ティアナ「もう一つは？」

ティアナが繰り返すように聞く

フェイト「それは、カイトがAIDAにやられてしまっているかだよ」

フェイトの一言にみんなが驚愕する

なのは「これは、本当にありえるかもしれないから みんな気を引き締めて行こう」

FW陣「了解」

スバル達は暗い表情をしながら返事をする

もしカイトがない状態で私達はAIDAを倒せるのか、そう不安がスバル達にのしかかっていた

ヴァイス「高町隊長に、ハラオウン隊長！聖王教会の方角に巨大な光がある」

「!？」

それを聞いたなのは達は

なのは「ヴァイス君、急いで！」

ヴァイス「了解！」

急いで向かうのだった

祝福の風

カイト「ここは」

カイトが現在居るところは暗い暗い闇の中いつもの精神世界とは、どこかが違う

そして回りを見渡すとそこには1人の銀髪の女性が立っている

カイト「なっ!?!」

カイトが銀髪の女性を見た瞬間辺りが一変、まるで地獄のような焼け野原に変わる

「ここは私の過去の記憶」

カイト「過去の記憶 あなたは?」

リインフォース「私の名前はリインフォース。この見ている世界は昔、私とそのときの主がしたものです」

カイト「酷いもんだね」

リインフォース「私が存在する時から私の力を欲し、このような事が幾たびと続きました」

カイト「そして はやてと出会った」

カイトがそう言った瞬間、回りの空間が再び闇に戻る

リインフォース「そうです。私に名を付け、因果の鎖を断ち切ってくれた主はやては、今までの者達とは違い、私の力を欲せず、ただ我々と一緒に居ることを望んだ。だが、その望みは直ぐに破り去られた」

リインフォースがそう言った瞬間、空間が変わる

カイト「暴走」

リインフォース「そうです。あそこに映っているのが私と主はやてがユニゾンした姿」

そしてまた映像が変わる
映ったのは巨大な化け物

リインフォース「これは私の中から、引き離した防御プログラムです。そして主はやて達は防御プログラムを無事、消滅することに成功しました」

カイト「それで？」

リインフォース「そして私はもう二度と主はやてを傷つけないように私自身を消滅することを望み、消滅しました。だが防御プログラムはAIDAのおかげでまた復活してしまった。だから 私を殺してください」

カイト「!？」

カイトはリインフォースの言葉に驚く

リインフォース「私が死ねば主や騎士達も解放され、AIDAも消えるはずです」

カイト「」

リインフォース「さあ、早く」

カイトはゆっくりとリインフォースの下へ歩いていく
そしてカイトはリインフォースの前に立つ
リインフォースは目を瞑る

リインフォース「？」

しかし来るはずの衝撃が来ない

カイト「嫌だ」

リインフォース「なっ!?!」

リインフォースは断られるとは思っていなかったらしくかなり驚く

カイト「私を殺して下さい」？ふざけるのもいい加減にして下さい
「」

リインフォース「しかし、それしか方法がありません!」

カイト「僕は誰かを犠牲にして助かる方法なんて嫌なんです!そんな方法をするより違う方法を考えます!」

リインフォース「ではどうす うっ!?!」

急に頭を抱え膝を付くリインフォース

カイト「!?!」

カイトが駆け寄ろうとした瞬間2つの影が現れる

リインフォース「烈火の将、紅の鉄騎　カイト!! グランツ、逃げて下さい　もう制御が」

リインフォースがそう言うのと足下からベルカ式の魔法陣が現れる
ちなみに烈火の将がシグナム、紅の鉄騎がヴィータ

カイト「やはり」

カイトがそう呟くと虚空の双牙を取り出す

カイト「はあっ!」

カイトはかけ声とともにシグナム達に向かう
擦れ違った瞬間、シグナムとヴィータは倒れる

カイト「これを見てみて」

リインフォース「なっ、なんですか、それは!?!」

いつの間にかリインフォースの背後に廻っていたカイト
そしてリインフォースはカイトが掴んでいた自分と繋がっている蜘蛛の糸のようなものを見て驚く

カイト「」

シュパアン！

カイトは無言のまま繋がっていた蜘蛛の糸を引きちぎる

リインフォース「これは 一体？」

リインフォースはまるで羽のように軽くなる感覚を覚える

カイト「さつさと、ここから出て行け！」

カイトが掴んでいた蜘蛛の糸を蒼炎で燃やす
蒼炎は糸にそつて燃え上がる
燃え移った先に何か大きな物体が

「」

そして何か奇声を上げ居なくなってしまう

リインフォース「今のは？」

カイト「AIDAだよ 君やはやて達をあの糸で操っていたんだ」

リインフォース「そうですか。では主達は大丈夫なんですか？」

カイト「うん」

リインフォースはカイトの言葉を聞いてホッと安心する

リインフォース「では私を「嫌だ」って言うんじゃないか！」

リインフォースの言葉を遮るように叫ぶ

カイト「君は、はやてを傷つけないために死ぬことを選んだと言っただよね？けど、それは逆に傷つけることになるのはわかってる筈でしょ？」

リインフォース「しかし」

カイト「君は望んでいたはず　はやて達と一緒に暮らす光景を」

リインフォース「」

リインフォースは、はやて達と一緒に暮らす光景を思い浮かべる

リインフォース「　私は主達が幸せになれるのなら喜んで死を受け入れます」

カイト「そう　なら、その溢れ出す涙は何なんだ？」

リインフォース「!？」

リインフォースは直ぐに自分の顔を確認する

リインフォース「私が泣いている？」

カイト「その涙が君の正直な心を表しているんだ」

リインフォース「あっ」

カイトは優しくリインフォースを抱きしめる

カイト「もつと自分に正直になつて 誰も文句なんて言わないからさ」

リインフォース「 私は 主はやてと 一緒にいたい」

カイト「うん」

リインフォース「 私も 騎士達とともに 主をお守りしたい」

カイト「うん」

リインフォースの言葉に優しく答えるカイト

そしてカイトはゆっくりとリインフォースを離しお互い向き合つ

カイト「なら、僕を信じて」

リインフォース「」

カイト「君に”祝福の風”をはやて達に吹かせてあげる」

リインフォース「!?!」

カイト「だから 一緒に行こう!”祝福の風”リインフォース!」

カイトは笑顔でリインフォースに手を差し伸べる

リインフォース「はい 蒼炎の騎士 カイト」

リインフォースは差し伸べられた手を掴み、笑顔になる
その瞬間、2人は優しい光に包まれたのであった

新たなる力

リイン「カイトさん」

リインは倒れていたシグナム達を介抱しカイトとはやての無事を祈っている

なのは「リイン！」

リイン「あっ！皆さん！」

機動六課の面々が到着する

フェイト「リイン、状況は？」

リイン「今、夜天の書に取り憑いたAIDAをカイトさんが駆除している所です」

なのは「夜天の書に！？」

予想外なことに驚くなのは達

リイン「はいです そのせいで守護騎士プログラムが暴走、カイトさんが止めてくれましたです」

フェイト「だから、シグナム達は倒れているんだね」

そう話しているとカイト達を包んでいた光が収まっていく

なのは「えっ!?!」

フェイト「嘘」

光が収まった先を見てみると、そこにはカイトとはやてだけではなかった

約10年前に消えたはずの女性の姿を見て驚くなのはとフェイト

スバル「カイト!」

エリオ「兄さん!」

スバルとエリオは直ぐにカイト達の下へ向かう

なのは達もスバルとエリオを追ってカイト達の下へ向かった

なのは「カイト君!」

カイト「みんな　来てくれたんだね」

カイトはもう喋るのも辛そうな状態だ

ティアナ「カイト!喋っちゃ駄目よ!」

キヤロ「今、回復魔法を使います!」

カイト「　その前にAIDAを何とかしないと」

「#&#&#&#」

カイトがそう言つと上からAIDAの奇声が聞こえる

なのは「何 あれ？」

リイン「気持ち悪いです」

なのは達が見たA I D AはA n n aでもH e l e nでもない
その姿はまるで蜘蛛と人間が合体した姿

カイト「 奴は”O s w a l d” 僕が最も大嫌いなA I D A」

スバル「 それじゃ」

ティアナ「 私達のデバイスじゃ対抗出来ない」

カイト「 その通り しかも僕の体は殆どが動かない せいぜいデー
タドレインが一発放てるくらい さらにその一発で奴に当てるのは
不可能」

カイトのその言葉を聞いて驚愕する

カイトが居なければA I D Aを駆除出来ないし、相手はインストー
ルされていないA I D Aであるからだ

カイト「 なのは、フェイト」

なのは「何？」

カイト「 2人に選択肢を与える 一つ、僕を置いてここから離れる」

フェイト「 そつ、そんなこと出来るわけじゃない！」

カイト「 二つ、”憑神”を使う」

ティアナ「そんなの使ったらカイトの体が保たないわよ！」

カイト「そして最後は 2人に八相の力を分ける」

「!？」

なのは達はカイトの最後の選択肢を聞いて驚く

フェイト「それってどういうこと？」

カイト「つまり、八相の力を使えるようになる」

スバル「そんな凄いことが出来るならなんで最初から教えてくれなかったの？」

なのは「もしかして”蒼炎の光”みたいに何かデメリットが？」

なのはが真剣な顔でカイトに聞く

カイト「その通り 八相の力にはそれぞれ扱うにはその力の”適格者”でなければいけないんだ」

ティアナ「”適格者”？」

カイト「そう もし”適格者”ではない者が八相の力を扱うとその力に呑み込まれ最後には喰われる」

フェイト「喰われる”って？」

カイト「簡単に言えば精神がズタズタにされ最後には植物人間みたいになってしまっんだ」

キャロ「そんな 危険です」

エリオ「けど、もし僕達の中に適格者が居なかったら」

ティアナ「それはそれで、かなりヤバい状況ね」

カイト「大丈夫」

なのは「えっ？」

カイト「僕が何で面倒くさい訓練を受け持っていたと思ってるんだ？」

カイトがそう言うとなのは達はわからないらしく首を傾げる

カイト「それは万が一のために適格者を探すためだったんだよ。そしてその力を扱えるように鍛えて来た」

なのは「それじゃ、私達の中に適格者がいるの？」

カイト「うん」

カイトの一言を聞いて笑顔が見えるなのは達

カイト「けど、適格者とは言え扱うのはかなり難しいんだ いろんな状態じゃなかったらこんなことは絶対に言わないのに」

カイトは悔しそうに言う

なのは「しょうがないよ、カイト君。そんなボロボロな体じゃ」

フェイト「そうだよ、カイト。もっと私達を頼ってよ」

フェイトが真剣な顔でそう言うとなのは達も真剣な顔でカイトを見る

カイト「ありがとう」

カイトが嬉しそうにそう言つと

Oswald「££££££」

「!?!」

Oswaldの蜘蛛の糸がなのは達に降り注ぐ

なのは「カイト君!」

フェイト「くっ!」

なのはとフェイトは何とかボロボロなカイトを連れて避ける

FW陣「うわああ!」

なのは・フェイト「!?!」

スバル達は避けきれず蜘蛛の糸に捕まってしまう

カイト「くっ！」

なのは「どうしよう、カイト君!？」

なのはは慌てた様子でカイトに聞く

カイト「大丈夫。運良く、僕の目の前に適格者が2人居るからね」

フェイト「それって私達のこと？」

カイト「そうさ！時間がない、始めるよ！」

そう言うとカイトは黄昏の碑文を取り出す

カイト「八相の力 この者達に一相と二相の力を与えたまえ」

なのは・フェイト「!？」

いきなり黄昏の碑文から赤い光と水色の光が現れる

そしてその光は赤の方はフェイトに、水色の方はなのはの体の中へ入った

ドクン！

次の瞬間2人の体に異変に気づく

なのはには水色の、フェイトには赤色の紋様が現れる

さらに2人は体の中で何かが暴れている感覚が襲う

なのは「うあああああ！」
フェイト「いやあああ！」

そして2人は激しい頭痛が起こり膝を着く

カイト「くっ！やっぱり、まだ早かったのか！」

なのはとフェイトの様子を見て無理と判断したカイトは手を差し伸べようとす

フェイト「カイト！」

カイト「!？」

なのは「大丈夫だから！」

カイト「だけど」「££££££!？」

そう言っているうちにOswaldが魔弾を放たれた

カイト「仕方ない!？」

カイトがどうにかしようとするがカイトの前になのはとフェイトが立つ

カイト「何やってるんだ！そこを退いて！」

そう言つとなのはとフェイトは振り向く

なのは「大丈夫」

フェイト「私達を」

なのは・フェイト「私達を信じて！」

カイト「!？」

魔弾がカイト達にぶつかる寸前

カイトが見たものは笑顔で自分を見るなのはとフェイトだった

ドガン!!!

そしてOswaldの魔弾がカイト達に当たり爆風がまう

カイト「はあ間に合った」

Oswald「？」

爆風が晴れた先にはバリアを張って魔弾を防ぐなのはとフェイトの姿だった

なのは「ごめんね、カイト君。待たせちゃったかな？」

フェイト「うん、そうだね　それにしても、凄いよー力が溢れて来る」

なのはとフェイトの体を見てみるとなのはには水色の、フェイトには赤色のオーラを纏っている

カイト「よかった 無事、第一段階終了 よし、これならいける！」

カイトがそう言うので

なのは「うん！行こう、フェイトちゃん！」

フェイト「うん！なのは」

なのはとフェイトはOswaldに向かって飛んで行く

カイト「頼むよ、なのは、フェイト」

そう言うときカイトはデータドレインの準備にかかる

なのは「フェイトちゃん、速攻で決めるよ！」

フェイト「うん、わかってるよ。なのは！」

そう言うときフェイトが前に出て、なのはが詠唱を唱える

フェイト「バルディッシュ！」

BD『ハーケンフォーム』

フェイトはデバイスを鎌状にし、Oswaldに斬りかかる

フェイト「ハアア！」

Oswaldの8つある腕がまるでゼリーのようになり裂かれる

なのは「惑乱の嵐気楼」

キイイーン！

なのはのデバイスからまるで叫び声のような音が響く

Oswald「ㄟㄟㄟ」

Oswaldは急に暴れ出し、誰もいない所に攻撃している

なのは「やった、成功した！」

フェイト「よし 今だ！」

フェイトはOswaldが混乱しているのを確認し突っ込む

そしてフェイトは円陣を描くようにOswaldを斬る

その円陣からは金色の魔法陣が現れる

そのまま流れのように斬撃を繰り返す、最後には上空へとなぎ払う
フェイト

フェイト「環伐乱絶閃」

なぎ払われたOswaldより上にいたフェイトはデバイスを振り
下ろす

そして金色の魔法陣からカイトの時とは違い雷を纏った巨爪が現れ
Oswaldに突き刺さった

フェイト「はっ！」

フェイトのかけ声とともに雷爪はOswaldを引き裂くように離れる

引き裂かれたOswaldは再生しようと引き裂かれた部分が一つに集まるうとしている

なのは「カイト君！」

フェイト「今だよ！」

カイト「うん！」

カイトは八つの光剣を展開し、光の粒子を集める

カイト「データド うっ!？」

カイトが急に膝を着く

それと同時に光の粒子が散り始める

カイト「くそ！まだダメージが！」

それでも立とうとするカイトだが

カイト「くっ！」

力が入らず倒れそうになる

ガシッ！

カイト「？」

だが、カイトは地面に倒れることはなかった

カイト「はやて リイン リインフォース」

そうこの3人が倒れるカイトを支えていたのだ

はやて「頑張るんや、カイト君」

リイン「私達がしっかり支えるです」

リインフォース「あなたが私を救ってくれたように私はあなたの力になります」

カイト「」

カイトは、はやて達を見て自然と笑みがこぼれる

カイト「うおおおお！」データドレイン”！”「！」

カイトは集めた光の粒子をOswaldにぶつける

Oswald「###」

Oswaldは奇声とともに消滅した

カイト「ふう」

カイトはドサツと仰向けに倒れる

なのは「カイト君!」

なのはとフェイトはそれを見て直ぐにカイトの下へと向かう

スバル「カイト!」

Oswaldが消滅したため糸がなくなり動けるようになったスバル達も直ぐにカイトの下へと向かった

はやて「カイト君、大丈夫なんか!?!」

一番近くに居たはやてがカイトに話しかける

カイト「大丈夫 そんなことより リインフォースを」

カイトがそう言うと全員、リインフォースの方を向く

なのは「リインフォースさん 体が!?!」

フェイト「透けて!?!」

そうリインフォースの体が透けているのだ

さらに回りには光の粒子が体から飛び出ている

リインフォース「どうやら、時間のようですね」

はやて「どうということなんや?リインフォース!」

リインフォース「私は先程のAIDAによって生み出されました。なので、そのAIDAが消滅すればそれと同時に私も消滅してしまうのです」

リイン「そっ、そんな!？」

はやて「 また 」

はやてが消えかかっているリインフォースの手を掴む

はやて「 また 消えてしまうんか? せつかく 会うことが出来たのに 」

リインフォース「主はやて。私は少しの間でもまた会うことが出来てとても嬉しかったです」

そう言うとリインフォースは、はやての頭を撫でる

はやて「そんな 嫌や、そんなの嫌や!リインフォース消えないで!」

はやては大粒の涙を流しリインフォースを見る
そんな中

カイト「リイン フォース 」

カイトが途切れ途切れにリインフォースを呼んでいる

なのは「カイト君!駄目だよ、喋っちゃ!」

リインフォースは、はやてを優しく離しカイトの下へ向かった

リインフォース「蒼炎の騎士よ。あなたのおかげで私はとても幸せな気持ちになれました　ありがとうございます」

カイト「何　言ってんのさ　君は　はやて達と一緒に暮らすんだろっ?」

リインフォース「もう、いいのです。私はもう十分楽しめました」

ガシッ!

カイトはリインフォースの手を掴む

カイト「ふざけるな」

リインフォース「えっ?」

カイト「僕は言ったはずだ　君に”祝福の風を吹かせてやる”って
」

カイトがそう言った瞬間、リインフォースの体を蒼炎が覆う

カイト「うっ」

カイトの顔が激痛により歪む

なのは「カイト君、それは！」

フェイト「無茶だよ！そんな体で”蒼炎の光”を使うのは」

はやて「カイト 君」

はやては不安そうな顔でカイトを見つめる

カイト「ごめん、はやて。約束の一つ目、使わせてもらっつよ？リインフォースは絶対に助けるからさ」

そう言うとリインフォースに覆う蒼炎がよりいっそう激しくなる

カイト「うおおおお！」

リインフォース「これは？」

みるみるうちにリインフォースの透けかけていた体が戻っていく
蒼炎が消える頃には体は完全に治っていた

はやて「リインフォース？」

リインフォース「主はやて 私」

はやて「リインフォース！」

リインフォースが信じられないといった表情をしていると、はやてが泣きながらリインフォースに抱きつく

はやて「よかった、本当によかった！」

リインフォース「主　「カイト君！」　!？」

感動の最中、なのはの叫び声が響く

フェイト「どうしたの、なのは？」

なのは「カイト君が　カイト君が息をしてないの！」

「!？」

なのはの一言に全員は血相を変えてカイトを見る

スバル「そんな　カイト！」

ティアナ「ちよっと　カイト、起きなさいよ！」

エリオ「兄さん！」

キャロ「カイトさん！」

スバル達のかけ声は虚しく、カイトは何の反応もしない

フェイト「どうすればいいの？どうすれば」

「私が診ます！」

はやて「シヤマル！大丈夫なんか？」

シヤマル「はい！それにシグナム達も」

シャマルの後ろにはシグナム達が立っていた

リイン「みんな、無事でよかったです！」

シグナム「ああ。だが、それよりもグランツだ！」

リインフォース「その通りだ。頼む、風の癒し手！」

シャマル「ええ！」

シャマルは直ぐにカイトの治療にかかる

シャマルはカイトの胸元辺りに治療魔法を展開するが

シャマル「!？」

ヴィータ「どうしたんだよ、シャマル!？」

シャマル「治療魔法が全く効かないの このままじゃカイト君は

」

なのは「そんな !？」

次の瞬間だった

カイトの周りを光が覆う

そしてカイトの体から黄昏の碑文と

一人の少女が現れた

A u r a

なのは「あなたは？」

「私の名前はアウラA u r a」

フェイト「アウラ？確かカイトが言っていた女神？」

フェイトがそう呟くとアウラはカイトの方を向く

アウラ「やはりこうなっていましたか、”蒼炎を受け継ぎし者”カイト」

アウラはカイトを見ながらそう呟く

はやて「どういふことなんや？」

アウラ「私はいずれカイトが限界を超え倒れることを予期していたのです」

「!？」

アウラ「心優しきカイトならば、例え自分の身に何が起きようともあなた達を守るであろうと」

アウラがそう言うとなのは達は俯いてしまう

実際にカイトはみんなのために身を粉にして戦って来た

なのは達はアウラの一言でカイトの足手まといになっていることを再確認してしまう

アウラ「あなた達には本当に感謝しています」

なのは「えっ、なんで？」

アウラ「カイトは昔、あなた達のように大切な人達がいきました。だけどカイトは守りきることが出来なかった。しかし、今はあなた達を今みたいに救い守ることが出来ています。カイトにとってそれは何よりも嬉しいことなのです」

フェイト「カイトがそれで嬉しくても、それでカイトが死んじゃ誰も喜ばないよ！」

フェイトは大きな声でアウラに言う

アウラ「　　どうやら早とちりをしているようですね？」

ヴィータ「どういうことだよ？」

アウラ「カイトは死んでいません」

「!？」

アウラの一言にまたもやなのは達は驚いた表情に変わる

シャマル「けど、確かにカイト君の心臓は止まっているんですよ？」

アウラ「それは今、カイトは仮死状態にあるからです」

シグナム「仮死状態？」

アウラ「カイトは身体の90%以上のダメージを与えられた時、カイトは仮死状態へとなるのです。そもそもカイトは例え腕がもげようが、頭が消え去ろうが再生するので死ぬことは決してありません」
ティアナ「それは凄いわね」

アウラのグロい発言に戸惑うティアナ

アウラ「しかし、このままではカイトが目を覚ますことはありません」

スバル「えっ!?!どうしてですか?」

アウラ「それはとりあえず、まずは安全な場所で説明しましょう」

はやて「せやな」

なのは「ひとまず、カイト君を病院に「待つて下さい」「えっ?」

なのはの言葉に割りこむアウラ

アウラ「あなた達の部隊の施設でお願いします」

フェイト「わかりました。行きましょう」

なのは達はアウラに言われた通りにカイトを六課に運んで来た
仮死状態のカイトはベッドで横になっている

アウラ「それではまず、カイトの治療に入りましょう」

フェイト「はい。お願いします」

フェイトがそう言つとアウラはカイトが寝ているベッドの前に立つ
そして

チュツ

「!?!」

カイトの周りが急に光り出しベッド以外無かつたはずが棺桶みたい
なものが現れ、カイトはその中に入っていた

アウラ「これで大丈夫です 何でしょうか？」

なのは達（キャロ以外の女性陣）がアウラのことを睨みつけていた
（しかも黒いオーラ付）

アウラはそれに気づき平然な顔でなのは達を見る

なのは「女神アウラ？」

アウラ「アウラで良いですよ？」

はやて「あのな、アウラ？なんでカイト君にキスを　しかも”唇に
”キスしたんや？」

そうなのは達（キャラ以外の女性陣）は棺桶の出現だけではなくア
ウラがいきなりカイトにキスをしたことにも驚いていた

フェイト「　なのは、はやて落ち着いて　治療のためなんだから仕
方ないよ」

フェイトはまるで悪m　少し怒り気味の2人を落ち着かせようとし
ているがそのフェイトも2人と同じ顔をしている

アウラ「関係ありませんよ？」

フェイト「えっ？」

アウラは平然とした顔でなのは達に言った

スバル「　それって」

アウラ「さっきのキスは治療には何の関係もありませんよ？ただ手
を翳せば出来ましたし」

ティアナ「それじゃ何でキツ、キスなんてしたのよ？」

アウラ「　それは私の趣味です」

ブチッ！

どこからか何かが切れる音が聞こえた

なのは「ちょっとお話ししようか？ いや、頭冷やそうか？」

フェイト「それともバラバラに斬り刻んであげようか？」

はやて「それか、塵も残さず吹き飛ばしたるか？」

それはどうやらデバイスを取り出したなのは達の堪忍袋の緒が切れた音らしい

アウラ「カイトはこんな沢山の人達に愛されているんですね」

アウラは微笑みながらなのは達を見る

なのは「えっ！？／／／」

フェイト「いやっ！？／／／」

はやて「そのー！？／／／」

「／／／」

なのは、フェイト、はやては一気に顔を赤らめる

それはなのは達だけではなくシグナムやヴィータ、スバルにティアナも顔を赤らめていた

アウラ「ふふふ」

リインフォース「どうやらアウラの方が一枚上手のようですね」

リイン「はいです」

アウラ「冗談はさて置き、そろそろ本題に入りましょう」

「
」

なのは達はそのアウラの一言に表情がキリツとなってアウラを見る

アウラ「それではまず、”混沌帝王”ヘルバの目的についてです」

はやて「それはウチらが一番知りたかったことやな」

アウラ「ヘルバの目的、それは冥王ケルヌノスの復活です」

なのは「”冥王ケルヌノス”？」

アウラ「邪神が生み出したと言われている怪物です。1日で一つの星を消し去るほどの力を持っています」

フェイト「ヘルバはその力を狙っているんだね」

アウラ「はい。ヘルバは封印されていた魔剣ガルバジークを持っていますので間違いありません」

シグナム「魔剣ガルバジーク」とは？」

アウラ「封印する時に落ちたケルヌノスの欠片を使い、加工した剣です。しかしその剣を使う者には天災に陥ってしまう。それだけではなく封印を解くほどの力を持っています。なので、どこかに封印したのですが、どんな手を使ったのか、ヘルバが手に入れてしまいました」

はやて「それじゃ、ケルヌノスが復活するんわ時間の問題なんやな」

アウラ「そうですね。けど、普通なら復活させるのに、かなりの魔力が必要とします。それがたったの数週間で集まろうとしています。それが何故なのか、わかりますか？」

アウラ「なのは達は達を見つめながらそう言う」

なのは「それは」

なのは達はわからず黙り込む

アウラ「その主な理由は A I D A です」

「!?!?」

アウラ「A I D A には取り憑く以外にもう一つ、特性があります」

フェイト「何ですか？」

アウラ「それは取り憑いた者から魔力を吸い取ることです。後、気づきませんでしたか？」

エリオ「何をですか？」

アウラ「A I D Aが現れた場所は常にあなた達の管轄内、そして取り憑くのはあなた達か知り合いの誰かであったことです」

キヤロ「確かにそうですね」

ティアナ「それに取り憑かれた人達はみんなかなりの魔力を持っていたわね」

そう今までA I D Aに取り憑かれたのは、なのは、ギンガ、スバル、フェイト、はやてにヴォルケンリッターである
平均してもニアスランクは下らない

アウラ「あなた達の魔力が目的だったのでしょう けど、まだもう一つの目的があるのです」

なのは「 えっ？ 」

アウラ「ヘルバにとって邪魔な存在 それがカイトなのです。だからカイトの直ぐ近くにいたあなた達にA I D Aを取り憑かせカイトと戦わせた」

フェイト「そんな」

アウラ「そしてカイトはヘルバ思惑通りにA I D Aに取り憑いたあなた達を救うために戦った。自分の身を削りながら それがへ

ルバの狙い「その通りですよ」！？」

急にどこかから声が聞こえる

その声は、なのは達にとってはかなり嫌な者の声だ

シャーリー「八神部隊長！今すぐメインルームへ！」

直ぐにシャーリーから通信が入る

そしてカイトを医務室に置いたままメインルームへ向かった

はやて「一体どうしたんや　！？」

ヘルバ「こんにちは。機動六課の皆さん」

はやて達が見たものは全モニターに映っているヘルバだった

シャーリー「いきなり画面が黒い泡に覆われたかと思ったらヘルバが現れて　しかもコンピュータのコントロールが全て利きません」

アウラ「どうやらAIDAを使って、このコンピュータを操っているみたいですね」

アウラがそう呟くと

ヘルバ「その通りです、女神アウラ。相変わらずのお美しい。おやおや、女神を守る騎士様がないようですが？」

ヘルバはわざとらしく辺りを見渡す

なのは達はそのヘルバの行動に激しく苛つき睨みつける

アウラ「白々しい。これが狙いのくせに」

ヘルバ「ええ、その通りですよ。ですが、まさかここまで簡単に事が進むとは思っていませんでしたが、それも六課の皆様方のおかげですね」

ヴィータ「てめえ！」

シグナム「落ち着け、ヴィータ！これは挑発だ」

ヘルバの挑発に思わず怒鳴るヴィータを抑えるシグナムだがシグナムも内心では今すぐにでもたたっ斬ってやりたい気持ちだった

アウラ「ヘルバ。あなたは一体、何が目的なのですか？」

ヘルバ「おっと、失礼。本来の目的を忘れてしまっ所でした。今回は皆様方にお知らせしたいことがあるのです」

フェイト「お知らせ？」

なのは「何ですか？」

ヘルバ「その前に一つ。この映像は六課の皆様方だけではなく、このミッドチルダ全体に流されています。もちろん管理局だけではなく一般人の人にもね」

はやて「何やて!?!」

はやて達はヘルバの言葉を聞いて驚きを隠せない

ヘルバはそんなはやて達を無視して話を続ける

ヘルバ「それでは、話しましょう。冥王ケルヌノスに必要な魔力は集まりました。これも皆様方の協力のおかげです」

ティアナ「何ですって!?!」

エリオ「そんな!?!」

ヘルバの言葉を聞いて慌て出す

アウラ「落ち着いて下さい。冥王を復活させるには最低2週間はかかるはずですよ」

ヘルバ「まあ確かに、普通ならそのくらいかかるでしょう。しかし、私なら約1週間で復活させることができます」

アウラ「なっ!?!」

さすがのアウラもヘルバの言葉に驚く

ヘルバ「さて、この映像を見ているミッドチルダの皆様方、1週間幸せに過ごして下さい。あっ! そうそう、ミッドチルダから逃げようとしても無駄ですよ? 転送機は全て消しましたので」

ヘルバがそう言うと映像が変わる

それは各地にある転送機が無惨に壊されている映像だしかも、その近くには管理局員らしき者が倒れていた

ヘルバ「それでは、また1週間後」

そう言うと映像が消える

はやて「何ちゆう奴や」

なのは「これはスカリエッティ以上だね」

フェイト「そうだね　？アウラどうしたの？」

フェイトはアウラの表情が重たくなっているならに気づき話しかける

アウラ「はい　もしヘルバの言うとおり、冥王が1週間後に復活するのならば最悪な状況です」

キャラ「どういうことですか？」

アウラ「実は　カイトが完全回復するには最低でも1週間以上かかってしまうのです」

「!?!?」

なのは達はアウラの衝撃的な一言を聞いて驚く

はやて「何やて!?!?」

フェイト「それは本当何ですか？」

アウラ「はい。さっき言いましたが冥王が復活するには最低2週間はかかるはずなのです。ですから私はカイトが完全回復するまで時

間があると安心したていたのですが、ヘルバの言つとおり、たった1週間で復活出来るのが本当であれば」

なのは「カイト君無しで、ヘルバと冥王ケルヌノスと戦わないといけない」

スバル「だったら、ヘルバが現れた時にカイトを起きてもらえば、それは無理です」えっ!？」

アウラ「私が出したあの棺桶はカイトが完全回復しないと出れない仕組みになっています」

シャマル「そんな」

アウラ「それに完全ではない状態でヘルバ、ケルヌノスと戦うのは、いくらカイトでも無謀です」

ティアナ「確かにそうかもしれないけど」

エリオ「だからこそ、兄さんがいない状態であるヘルバ達と戦うのは」

アウラ「そうですね。確かにそれも無謀なのかもしれませんが」

アウラがそう言うとみんな黙り込んでしまっ

なのは「だったら 私達がカイト君が戻ってくるまで頑張るしかないよ!それにカイト君だったら”落ち込んでる暇があるのなら少しでも出来ることを探そう!”って言うだろうしね」

なのは笑顔でみんなに言う

ヴィータ「そうだな、なのはの言うとおりだ！」

フェイト「そうだね」

シグナム「ああ」

シャマル「そうね」

スバル「そうですね、なのはさん！」

ティアナ「はい。それにカイトにそんなこと言われたらなんだか無償に腹が立つわね」

エリオ「ははは、僕もこんなじゃ兄さんに怒られちゃいますね」

キャロ「私達も頑張らないとね、フリード」

フリード「キュクル〜」

はやて「せやな。カイト君が戻ってくるまでウチらがしっかりせなあかな」

リインフォース「そうですね、主」

リイン「はいです！」

みんながなのはの言葉で活気を取り戻した

アウラ「どうやら皆さんと一緒に居たことは無駄ではなかったようですね カイト」

アウラはそんななのは達を見てそう呟いた

はやて「アウラ、ちょっとええか？」

アウラ「何でしょう？」

はやて「最悪な事態 カイト君が戻って来なかったとき、どうヘルバ達と戦えばええん？」

アウラ「そうですね。今、ヘルバ達を倒せる可能性があるのはあなた達だけです」

アウラは視線をある方へ向けた
その方向には

なのは「えっ？」

フェイト「私達？」

アウラ「そうです。あなた達2人ですよ」

なのは「なっ、何で？」

なのはとフェイトはいきなりのこと慌ている

アウラ「あなた達は前回の戦いでカイトからある力を授かりました」

フェイト「あつ！八相の力！」

アウラ「その通りです。フェイトさんには第一相”死の恐怖”スケイス、なのはさんは第二相”惑乱の塵気楼”イニスが入っています。その力を自在に使うことが出来れば 希望があります」

なのは「私達に希望が フェイトちゃん！」

フェイト「うん！頑張ろう、なのは！」

はやて「なのはちゃんやフェイトちゃんばかりに任せては置けへん！ウチらも頑張るで！」

「はい！」

なのは達、六課は僅かな希望とともに気合いを入れるのであった

それぞれの覚悟 はやて&リイン&リインフォース

そして、事件から数日

この数日でミッドチルダ全域はかなりのパニックが起こり、管理局に一般人が殺到した
もちろんそれは六課も同じで本部からいろいろと事情を言わされる羽目になった

それでロングアーチ分隊とはやては徹夜で働いたのは言うまでもなく、はやて曰わく地獄の日々だったとか

はやて「あゝゝ！ホンマに疲れたで」

リインフォース「大丈夫ですか、主？」

ちなみにリインフォースは、はやての秘書として六課に所属するこ
とになった

リインフォースは机にうつ伏せでグターとだらけているはやてに「
ーヒーを淹れる

リイン「姉さん、私も疲れたです」

リインはふわふわ飛びながらリインフォースの頭の上に乗る

ラインフォース「そうか、よく頑張ったな」

そう言うとラインフォースはラインの頭撫でる

ラインはとても嬉しそうだ

はやて「それにしても、まさか一般人の避難や本部との会議で数日かかるなんてな」

ラインフォース「そうですね。そのおかげで訓練もろくにしていま
せんからね」

ライン「はいです。せめて、なのはさんとフェイトさんには訓練を
して欲しかったのですが」

はやて「しょうがないんよ。2人とも立場上から考えて、せなあか
ん事がたくさんあるんやからな」

ラインフォース「しかし、六課がヘルバ捕獲の任に就けて良かった
ですね」

はやて「せやな。本部の上の連中にウイルスコアを提供したら”ヘ
ルバ捕獲は我々が行うから貴様らは支援に渡れ”なんて言い張りお
つたからな」

ライン「でも三提督の皆さんのおかげで事なきを得ましたからね」

はやて「せやな」

ラインフォース「主？」

コーヒーを飲みながらいきなり黙り込むはやて

はやて「リインとリインフォースは先日の話覚えとるか？」

リインフォース「先日」と言うと女神アウラが黄昏の碑文に戻る前に言っていたことですね？」

先日

アウラ「それでは私は戻ります。私が戻れば少しですがカイトの治す時間が早まりますので」

スバル「あつ！待って下さい」

戻ろうと黄昏の碑文に触れようとするアウラを呼び止めるスバル

アウラ「何でしょうか？」

スバル「カイトが言っていたんです。私達に八相の適格者がいるってだから、なのはさんとフェイトさん以外にも適格者が居るはずなんです」

ティアナ「だから私達にも八相の力を分けてほしいんです」

はやて「それは興味深い話やな」

シグナム「詳しく聞かせて欲しい」

スバルとティアナの話聞いて歩み寄る

そして2人はあの時カイトと会話したことを話す

ヴィータ「そいつは、すげえな」

シグナム「ああ。しかも、それさえあればヘルバ達と十分に渡り合える」

はやて「アウラ。ウチらにも八相の力を分けてくれへんか？」

はやてがアウラにそうお願いするのだが

アウラ「ごめんなさい。それは出来ないのです」

スバル「えっ!？」

ティアナ「どうしてですか？」

アウラ「八相の力を扱うには”適格者”でなければならぬのと言いましたね？」

キャロ「はい」

アウラ「その適格者が一体誰であるのか私にはわからないのです」

エリオ「けど、兄さんはなのはさんとフェイトさんが適格者であることがわかっていましたんですよ？」

アウラ「私は正直、それに驚いているのです。いくら訓練で適格者

であることを予測していたとは言え、何相の適格者であるのかはカイトでもわからない筈なのですが　よっぼど、なのはさんとフェイトさんを信頼していたのでしょう」

なのは「ニヤ、ニヤハハ／＼／」

フェイト「そ、そうなんだ／＼／」

アウラがそう言うとなのはとフェイトは顔を赤らめる

「
」

それを見て面白く思わないはやて達

アウラ「それでは私はこれで　あつ、皆さんちよつと集まって下さい」

アウラにそう言われ集まる

アウラ「皆さんに夕暮竜の御加護があらんことを」

「！？」
」

アウラがそう言うといきなり光り輝いてなのは達を包み込む

しばらくして光が治まる

はやて「何をしたんや？」

アウラ「今、ここにいる人達に夕暮竜の御加護を与えました」

なのは「どづいつこと?」

アウラ「簡単に言つとあなた達はAIDAに取り憑かれないうつに
なりました」

フェイト「本当!?!」

アウラ「はい。ですが攻撃は喰らつてしまつので気をつけて下さい」

シグナム「ああ。わかつた」

アウラ「皆さん 次の戦いは命に関わります。だから お気をつけ
て」

アウラがそつ言つと黄昏の碑文に触れる

アウラ「あつ、言い忘れましたが」

なのは「何ですか?」

アウラ「カイトは渡しませんから」

「!?!」

消える寸前にアウラが言つた言葉に驚くなのは達
最後には”また会いましょう”と言いながら消えて行つた

リイン「　　と言っ感じでしたね？」

はやて「せや！」

リインフォース「それで主はこれのどこに疑問を？」

はやて「　　リイン、リインフォース。2人はカイトのことどう
想っとる”ん？」

はやてのオウム返しにリインとリインフォースは

リイン「えっ？カイトさんは優しくとても強い方です」

リインフォース「カイトは私を現在ののように主達と一緒に過ごさせてくれた言わば恩人です。何度お礼を言っても足りない位に」

はやて「なるほどな　　でもウチが聞きたいのはそっちの”思っ
じやないねん」

はやてがそう言うつが2人ははやてが何を聞きたいのかわからず首を
傾ける

はやて「ウチが聞きたいんはカイト君を異性としてどう”想っとる
”んかや」

リインフォース「えっ！？」

はやての発言に思わず声を上げて驚くリインフォース
だがリインは平然な顔をしている

リン「そうですね リンはカイトさんにそう言う感情はありませんですね。どっちかと言うとお父さんかお兄さんみたいな感じに想ってますね」

はやて「なるほどな。リンフォースは？」

リンフォース「えっと 私もリン同じだ」嘘はあかんで？」

リンフォースの言葉を直ぐに嘘だとわかったはやて

はやて「リンフォース。ウチは本当の想いを聞きたいんや」

リンフォース「 私は」

主であるはやてのお願いでも話せずに戸惑うリンフォース

はやて「リンフォース。ウチはカイト君のことが好きや。誰にでも厳しくて誰にでも優しい、時にはみんなを笑顔にしてくれるそんなカイト君が好きなんや」

はやてはリンとリンフォースに自分の想いを伝える

はやて「リンフォースはどうなんや？」

リンフォース「 私は確かにカイトに好きと言う感情があります。ですが私にはそんな資格はありません」

リン「何ですか？」

リンフォース「私はカイトをあんな状態にしてしまうきっかけと

なっってしまった。だから私はカイトを好きになる資格は」

スパーン！

リインフォースが”ない”と言おうとした瞬間、どこから出したのか、はやてはハリセンでリインフォースを叩く

リインフォース「痛っ！？主、何を？」

はやて「何を？」じゃあらへん！リインフォース、カイト君はそんなこと気にする人じゃないんよ？それにそんなこと言ったらウチにも責任がある」

リインフォース「主には何の責任もありません！悪いのは私です」

はやて「リインフォース。ウチらは家族や。一人の責任はみんなの責任なんや。だからウチにも責任があるんよ」

リイン「もちろん、リインにもです！」

リインフォース「ですが」

はやてとリインにそう言われるが俯いてしまう

はやて「それともリインフォースの想いは”責任”ちゅう2文字の言葉で締められる程の想いやったんか？」

リインフォース「違います！私はカイトと出会って間もないですが

この想いは本物です！」

リインフォースは思わず大きな声で怒鳴ってしまう

はやてはそんなリインフォースを見て少し驚いた表情を見せるが直ぐに笑い出す

リインフォース「主？」

はやて「ウチはそれが聞きたかったんよ。だけど、まさか怒鳴られるとは思ってへんかったけどな」

リインフォース「あっ！？もっ、申し訳ありません、主！」

ハッと自分がしたことに気づき直ぐに謝るリインフォース

はやて「ええんよ。むしろ、リインフォースの本当の想いを聞けて嬉しかったしな」

リインフォース「うっっ／＼／」

リインフォースは顔を赤らめて俯いてしまう

リイン「けど、はやてちゃん。何でそんなこと聞くんですか？」

はやて「それはやな、数日後に起こる戦いはそれなりの覚悟が必要やと思うんや」

リインフォース「覚悟”ですか？」

はやて「せや。アウラが言うてたやろ”次の戦いは命に関わります

”つてな。せやからリインとリインフォースに今の覚悟はどんな感じなんか聞いて置きたくてな」

リイン「それが何でカイトさんへの気持ちと繋がるんですか？」

はやて「うーん 確証はないんやけど次の戦いはさっきのリインフォースのような強い気持ちが必要やと思ったんや。今アウラのおかげでAIDAに取り憑かれなくなったてはいるけど何が起こるか分からへんしな？だから自分の気持ちをぶちまけてスッキリしようと思ったんよ」

リインフォース「なるほど、そんな意図があっただんですか」

はやて「まあね」

またもやいきなり黙り込むはやて

リインフォース「どうかしましたか？」

はやて「いやな？次の戦いが終わってもまたさらなる戦いに勝たなければならへんなど考えるとどうもな？」

リイン「さらなる戦いですか？何ですか、それは？」

はやて「それはやな」

はやて「カイト君争奪戦”や!!”」

リインフォース・リイン「」

何やら背後に炎のようなものを出しながら言うはやてを見て呆然とする2人

はやて「リインフォースも頑張るな!」

リインフォース「えっ? あっ はい」

いきなり話しかけられ戸惑いながら返事をしてしまうリインフォース

リイン「あの〜 はやてちゃん?」

はやて「なんや?」

リイン「何でさらなる戦いが”カイト君争奪戦”なんですか?」

はやて「ウチが見る限りカイト君に気がある人はたくさんいるねん。なのはちゃんやフェイトちゃん、シグナムにヴィータにシヤマル、スバルにティアナ 下手したらエリオにもフラグが!?’」

リインフォース「主、落ち着いて下さい!」

リイン「それに最後のは、さすがに無いですよ!」

話している途中から興奮状態になり取り乱すはやてを止める2人

はやて「はぁ はぁ ごめん。少し取り乱し過ぎたわ」

ラインフォース「それに今はヘルバ達のことか先決だと思うのですが？」

はやて「確かにそうなんやけど、考えてみ？カイト君がウチら以外とイチャイチャしている姿を」

ラインフォース「」

はやて「そしてカイト君とその人は腕を組んでデートをし」

ラインフォース「」

ライン「!？」

はやての話を聞いているラインフォースを見ると何やら黒いオーラを出しながら鋭い目つきをしている

ラインはそんなラインフォースを見て怯えている

はやて「そしてデートの最後にはカイト君とその人が熱いキス「もういいです」そうか？」

ラインフォースがため息を尽きながらはやてを止める

はやて「それでどうや？今の気持ちは？」

ラインフォース「何と言えはいいでしょうか？なんかカイトを吹き飛ばしたいと言う衝動に駆られました」

はやて「せやろ？それにカイトはあれで天然の女誑しやからライバ

ルが多いねん」

リン「そうですね。確かに六課だけでなくギンガもそうですし下手したらナンバーズの何人かも好きになっているかもしれないです」

はやて「聖王教会にいるセインとオットーは確實やしな」

リンフォース「なるほど、ライバルは多いと言っことですね？」

はやて「せや。ヘルバの事も大事やけどカイト君の事も大事ちゅう訳や。だからさっさとこの事件を終わらすで！！」

リンフォース「はい！」

リン「はいです！」

理由はともかく最後の決戦に燃えるはやて達だった

それぞれの覚悟 シグナム&ヴィータ&シャマル

早朝

ヴィータ「はあああ！」

ドーン！

朝早くから訓練場でガジェット数体を相手に訓練をしているヴィータ

ヴィータ「はあ はあ まだまだ！」

そう言いながら出現するガジェットに突っ込む

ドガン！

ヴィータ「！？」

だがどこからか烈火の斬撃が飛んで来てガジェットを一掃する

シグナム「精がでるな、ヴィータ」

ヴィータ「なんだよ、シグナムか？」

声が聞こえた方を向くとそこにはデバイスを展開したシグナムだった

シグナム「なんだよ」とはご挨拶だな？」

ヴィータ「うつせえ　それで何かようか？」

シグナム「いやなに、この時間帯はいつも私とグランツが”2人で”模擬戦をする時間だからな。習慣みたいなものだ」

ヴィータ「えっ？”2人で”？」

ヴィータはシグナムの”2人で”と言う言葉に反応する
シグナムはしまったと言う表情をする

シグナム「どっ、どうした？」

ヴィータ「いつも毎日、この時間帯でしかも”2人で”模擬戦をしていたのか？」

シグナム「ああ」

観念したようで正直に答えるシグナム

ヴィータ「おい！アタシはそんなこと聞いてないぞ！」

シグナム「当然だ。誰にも言っていないし、グランツには秘密にしている」

ちなみにカイトはそのとき何故かと理由を聞いたのだがシグナムは顔を赤らめながら”うるさい”と一喝
カイトは仕方なく承諾したのだ

ヴィータ「はあ？何でだよ？」

シグナム「別に何だって良いだろ？お前こそ、何故一人で訓練を？」

ヴィータ「アタシのせいでカイトをあんなにしまったからだからアタシはカイトが戻って来るまで頑張んねえと行けねえからよ」

そう言つて再び訓練に入ろうとする

シグナム「ちよつと待て、ヴィータ」

そんなヴィータを引き止めるシグナム

ヴィータ「あ？何だよ、シグナム？」

シグナム「グランツがああなってしまったのは私のせいだ。お前のせいではない」

ヴィータ「はあ!？」

シグナム「私をもつと早くにドゥーエに気づいていねばあんなことにはならなかった」

ヴィータ「待てよ!」

少し怒鳴った風にシグナムに話しかける

ヴィータ「アタシがはやとカイトの直ぐ近くにいのたに気づけな

かった。だから悪いのは私だ」

シグナム「いや、私だ」

ヴィータ「私だ！」

まるで子供の喧嘩のような言い争いが続いた

シグナム「はあ はあ」

ヴィータ「ぜえ ぜえ」

言い争いが始まって数十分

どうやら今までずっと言い争っていたようだ

ヴィータ「しっ しっけえな」

シグナム「それは こっちの セリフだ」

息を尽きながら睨み合う2人

シグナム「どうやら 話し合いでは決まらないようだな」

ガチャン！

ヴィータ「そうだな」

ガチャン！

2人はデバイスを展開する

シグナム「ならば」

ヴィータ「戦って決める！」

ドガン！

次の瞬間、2人のデバイスがぶつかり合う

シグナム「そう言えばお前とはあまり戦ったことはなかったな」

ヴィータ「へっ！だったら、それも含めて決着つけてやるぜえええ
！」

シグナム「臨むところだあああ！」

ドオン！

そしてまた轟音が訓練場に鳴り響き、模擬戦が始まったのだった

シャマル「それで？2人はどうして喧嘩なんてしていたのかしら？」

シグナム・ヴィータ「」

現在、シグナムとヴィータは至る所を包帯で巻かれながら正座をしている

ちなみにここは医務室

2人はあの模擬戦から数十分間の戦闘の末結局は相打ちと言う形で意識を失う

その後、訓練のために来たスバル達に医務室まで運ばれたのであった

シャマル「どうしたのかしら、2人とも？黙ってたらわからないわよ？」

シグナム・ヴィータ「」

どうして2人は黙っているかと言うとシャマルの顔を見ればわかる
一見いつも通りの優しい笑顔のだがよく見てみると背後に般若が見えるのだ

ヴィータ「あの シャマル？」

シャマル「何かしら？」

シグナム「もしかして 怒っているのか？」

シャマル「ええ もしかなくても怒っていますよ」

それなのにも関わらず笑顔なシャマル
それが逆に怖い

シャマル「それで何で喧嘩してたのかしら？」

ヴィータ「けっ、喧嘩じゃねえよ！」

シグナム「そっ、その通りだ！我々はただ」

シャマル「いいから話しなさい！！」

シグナム・ヴィータ「はい！！」

シャマルの余りにも凄い気迫に恐れる2人だった

シャマル「はあ」

2人の話を聞いたシャマルは思わずため息をつく

シャマル「あなた達ね そんなくだらないことで喧嘩してたの？」

ヴィータ「だってよ、シグナムがしつこいのが悪いんだよ！」

シグナム「なっ！？それは責様だろ！」

ヴィータ「んだと！」

シグナム「なんだ！」

シャマル「止めなさい！」

ピタッ！

2人はシャマルの一言で直ぐに止める
それ程今のシャマルは怖いのだ

シャマル「あなた達ね 今は運良くはやてちゃんを出かけていないし、カイト君は棺桶ごと違う場所で居なかったから良かったものの、居たら何て言ったかしらね？それにもしこれが原因で怪我でもしたらどうするつもりだったのかしら？」

ヴィータ「それは」

シグナム「面目ない」

シャマル「それに悪いのは誰でもないわ。悪いのは”ヘルバ”エルデイ”私達が捕まえなくちゃならない奴よ。そのヘルバがもうすぐ攻めてくると言うこんな時に仲間割れしている場合じゃないわ」

もしかしたらこれもヘルバの狙いの一つだったのかも知れない
そう考えると末恐ろしい

シャマル「それに、もしカイト君が居たら”悪いのは全部僕だ。だから2人が気にする必要はないよ”って言いそうだけどね？」

そう笑いながら言うシャマル

ヴィータ「確かに言いそうだな？」

シグナム「だからこそ、我々がしっかりしなければならぬ。グラントン一人に責任を背負わせる訳にはいかないからな」

シャマル「その通りよ。そのためには、まず来るべき時に備えて体を休めてね。模擬戦は極力控えるように」

ヴィータ「わくたよ」

シグナム「ああ、そうしよう」

シャマル「お願いね。もし模擬戦で怪我したら。分かってるわね？」

シグナム・ヴィータ「はい！」

2人はシャマルを見て怯えてしまう

それ程シャマルの笑顔が怖い

それだけではなくシャマルが手に持っているものに怯えていた

シャマル「ふふ」

シャマルが手に持っているもの、それは鋭い針がやけに目立つ注射器であった

これは怖い

シャマル「ふう〜」

ヴィータ「おっ??うめえな、このお菓子?」

シグナム「ふむ、たまにはこういうのも悪くないな?」

取りあえず一息入れお茶を飲んでいる3人

シャマル「それにしても2人は本当にカイト君のことが好きなのね
」

シグナム・ヴィータ「ブー!!」

急な発言に噴き出してしまふ2人

ヴィータ「なっ、何言ってるんだよ!」

シグナム「そうだ!ふざけるにも程がある!」

シャマル「あら?違うの?よかつたわ ライバルが減って」

シグナム・ヴィータ「何?」

2人は声を揃えて驚く

シグナム「シャ、シャマル。それはどういう意味だ？」

シャマル「あら、言葉通りよ。私はカイト君のことが好き。だからライバルが減ってホッとしてるのよ。そうだ！この任務が終わったらカイト君をデートに誘ってみようかしら？」

シャマルは笑顔で2人にそう言う

ヴィータ「何言ってるんだよ、シャマル！」

シグナム「そうだ。そんなことは許さん！」

シャマル「あら？2人はカイト君のことは好きでも何でもないのだから別に良いじゃない？」

ヴィータ「うっ」

シグナム「それは」

シャマルの言葉に言葉を失う
そんな2人を見たシャマルは

シャマル「ヴィータちゃんにシグナム。2人とも、もっと素直になりなさい。本当はカイト君のことが好きなんでしょ？」

シグナム・ヴィータ「 / / / 」

2人は顔を赤らめながら俯いてしまう

シャマル「私は最初、カイト君のことは面白い子だと思っていたけど徐々にカイト君の良さが分かかってきて好きになったのよ」

ヴィータ「アタシは別に／＼」

シグナム「私はグランツの模擬戦を見たときからだな 気になり出したのは そのときのあいつの目はとても透き通っていてあの目を見ると何だか暖かい気持ちになるのだ／＼」

シグナムは少し顔を赤らめながら自分の気持ちを伝える

シャマル「ほら、ヴィータちゃん！」

ヴィータ「んだよ」

シグナム「私とシャマルはちゃんと話したぞ。お前も話せ」

シグナムとシャマルはそっぽを向いているヴィータを睨みつける

ヴィータ「よくわかんねえけどカイトに撫でられたり、笑顔見るととても嬉しく感じちまう。はやてやなのはとは違う優しい気持ちを感じたんだ／＼」

ヴィータは顔を赤くしながらそっぽを向くかなり恥ずかしかったのだろう

シャマル「そう それじゃ私達はライバルね けどライバルは他にもいるわ」

シグナム「だが負けん！特にテストロッサにはな」

ヴィータ「アタシだってはやてやなのはには負けねえぜ！シグナム、模擬戦しようぜ？」

シグナム「ああ」

シャマル「2人とも程ほどにね？」

ああと返事をし2人は出て行った
自分達の気持ちを再確認して

それぞれの覚悟 スバル&ティアナ

エリオ「はあああ！」

スバル「うおりゃああ！」

ドォーン！

現在、FW陣は訓練場でスターズ対ライティングで模擬戦をしている

エリオ「はあ はあ」

スバル「はあ はあ ふう〜」

ティアナ「よし 今回はこの辺にしましょう」

スバル「そうだね それじゃみなでお風呂に行こう」

スバルは笑顔になりながらそう言う

エリオ「すみません。僕、もう少し続けたいので残ります」

キャロ「私もエリオ君の付き添いで残ります。ごめんなさい」

ティアナ「別にいいわよ。けど、さっきのヴィータ副隊長やシゲナ
△副隊長みたいに無茶しちゃ駄目よ?」

エリオ・キャロ「はい」

スバル「うん それじゃ先に上がってるね。行こう、ティア」

ティアナ「はいはい、わかったから腕を引っ張らない！エリオ、キャロ。先に上がるわね？」

エリオ「はい！お疲れ様です」

キャロ「私達も終わったら直ぐに行きますね」

2人の返事を聞いたスバルとティアナはお風呂がある隊員寮に向かった

バスルーム

カポーン！

スバル「ああ〜！生き返る〜」

ティアナ「ちよつとスバル。おやじ臭いわよ」

スバルとティアナは体を洗い、湯に浸かっている

スバル「まあ、いいじゃん。誰も見てないし」

ティアナ「それはそれで駄目でしょう？　はあ」

スバル「ティア？　どうしたの？」

いきなり壁しかない天井を見上げながらため息をつくティアナ

ティアナ「うん？　別に何でもないわよ」

スバル「ティアくため息ついといて”何でもない”はないんじゃない？」

ティアナ「別に何だっていいじゃない」

スバル「ふん　そんな態度するんだ」

ティアナ「!？」

スバルがそう言うとティアナは悪寒を感じた

感じた方を向いてみるとそこには目を光らせ近づいてくるスバル

スバル「それじゃ、体に聞くしかないね」

ティアナ「ちょ、ちょっと　待ちなさい、スバル！　目が怖いし、手も怖い！」

スバルは一步また一步とティアナに近づくと目を光らせ、手をワキワキと動かしティアナのある部分にロックオンしながら

スバル「大丈夫　痛いのは最初だけだから」

ティアナ「そんなこと、聞いてなああい！」

スバル「ティア」

ティアナ「イヤアア!？」

この次の展開はティアナのご希望によりお書きできません
期待していた読者の皆さん申し訳ありません
非常に残念

ティアナ「はあ はあ わかったわよ。言えばいいんでしょう」

少し息を乱しながらスバルに言う

スバル「さっすがティア！」

スバルは笑顔で言ってるがよく見てみると頭にはたんこぶが出来て
いた

ティアナ「前の戦いのときのことを考えていたのよ」

スバル「ああ。それ、私も考えてたよ。正直、私達何の役にも立
たなかったからね」

ティアナ「ましてやAIDAの攻撃で身動きができない始末 私達
これでいいのかな？って思ってたね」

スバル「確かにこのままでいいとは思わないよ」

スバルはうーんと腕を組ながら考える

ティアナ「でしょ？だから、どうすればいいかなくなって思ってたのよ」

スバル「難しいね」

ティアナ「それに私 なんか一番役に立ってない気がするのよね。
前回だって前々回でだって私は」

スバル「ティア」

ティアナ「!？」

ティアナはスバルに呼ばれ振り向いてみるとその瞬間、スバルに頬
を掴まれる

スバル「そんなこと言っちゃ駄目だよ。マイナス面に考えちゃうの
はティアの悪いところだよ」

ティアナ「ひひはらははひはひ(いいから離しなさい)！」

スバル「え〜？何て言ってるか分からないから離せない」

バシッ！

ティアナ「わかってんじやない！このバカスバル！」

ティアナはスバルを叩き離させた

スバル「うゝ」

スバルは叩かれた所を抑えながら唸っている

ティアナ「たく、自業自得よ」

スバル「だって、もしカイトだったらこうしそつだったから」

ティアナ「確かにね」

スバル「でしょ？」

ティアナ「あいつだったら”そんな風に考えてたら出来るものも出
来ないぞ”って笑いながら言いそうね」

スバル「そうだよ！だから次の戦い、頑張ろう」

苦笑しながらだが元気を取り戻すティアナを見て笑顔になるスバル

ティアナ「そうね！私達の出来ることをしないとね」

次の戦いに気合いを入れる2人だった

スバル「話が変わるけどいい？」

ティアナ「何よ？唐突ね？」

スバル「ティアはカイトのこと 好き？」

ティアナ「なっ！？」

本当に唐突なことに驚きを隠せないティアナ

スバル「好き？」

ティアナ「私は別に / / /」

スバル「それじゃ嫌いなんだ？」

ティアナ「そっ、そんなこと言っていないでしょ！…！」

スバル「それじゃやっぱり好きなんだね」

ティアナ「うっ / / /」

スバル「もうティアは素直じゃないんだから」

ティアナ「うっさい！このバカスバル！ / / /」

ティアナは怒ってなのか恥ずかしさからなのかはわからないが顔を真っ赤にしながら言うティアナ

スバル「ティアは何でカイトのことが好きになったの？」

ティアナ「そう言うあなたはどつなのよ？」

スバル「私？ そうだね。私とギン姉がAIDAに取り憑かれた時かな？あのときカイトはギン姉だけじゃなく私にも優しく頭を撫でてくれたんだ。その手はとても暖かくとても気持ち良かったんだ」

スバルは幸せそうな表情をして言った

スバル「ティアは？」

ティアナ「私はカイトと一緒にベッドで寝たときかしらね／／」

ティアナは頬を赤くしながら言う

その時の話は希望してくれれば書くつもりだと思います

スバル「あのときか」。カイトの背中が暖かかったな。それで？何があったの？」

ティアナ「何でそこまで言わなきゃならないのよ！」

スバル「ふん そっか」

ティアナの否定的な態度を見てなにやら手をワキワキと動かし始める

ティアナ「わかった わかったからその手を止めなさい！」

それを見たティアナは直ぐに観念した

ティアナは頬を赤らめながら言うのであった

スバル「ふうん あのと看、抱き合っていたのはそんな事があったからなんだね 私、びっくりして殴っちゃったけど悪いことしちゃったかな？」

ティアナ「別にいいんじゃない？もし逆だったら私はクロスミラー
ジユで撃ち抜いてたかもしれないしね」

スバル「ははは」

ティアナ「ふふふ」

スバルとティアナはお互いの気持ちを言いスッキリした2人は同時に笑い出す

スバル「それじゃ私とティアはライバルだね」

ティアナ「まあ、他にもたくさんいるけどね しかもみんな強敵ばかりだけどね」

はあとため息をつくティアナ

スバル「ははは、それじゃそろそろ上がるつか？」

ティアナ「そうね？このままじゃ逆上せそうだしね」

2人はそう言ってバスルームから出ようとするが、

ガラガラガラ！

ヴィータ「よう、スバル、ティアナ！」

スバル「ヴィータ副隊長にシグナム副隊長！？」

開けようとしたドアが急に開き、そこからバスタオルを巻いたシグナムとヴィータが入って来た

ティアナ「何故ここに」

シグナム「いやなに、エリオの訓練を見たり、ヴィータと模擬戦をしていたら汗をかいてしまったな？それで汗を流そうと来たのだが中々どうして、面白い話が聞こえたのでな？」

スバル「盗み聞きしていたんですか？酷いです！」

ヴィータ「うるせえ！聴いているのに気づかなかったお前らが悪い！」

ティアナ「そんな、理不尽ですよ！」

シグナム「御託はいい それでは話して貰おうか？」

ヴィータ「一緒に寝たこととか一緒に寝たこととか一緒に寝たこととか な？」

スバルとティアナは黒いオーラを出し笑っている2人を見て震え出す

シグナム・ヴィータ「さあ、話を聴かせて貰おうか？」

スバル・ティアナ「イヤアアアアア！！！」

それぞれの覚悟 エリオ&キャラ

スバルとティアナがシグナムとヴィータに尋問されている頃
エリオとキャラは訓練場で訓練中だった

エリオ「てやあああ！」

キャラ「」

今はガジェットを相手にしている

エリオ「迅雷！サンダーレイン！」

ドドドドーン！

雷を纏った雨のごとし無数の突きがガジェットを貫き破壊する

エリオ「はあ はあ 次お願いします！」

キャラ「待つて、エリオ君！」

再びガジェットに向かおうとするエリオを止めるキャラ

エリオ「何？キャラ？」

キャラ「何？」 じゃないよ、エリオ君！一体いつまで訓練する気なの？」

エリオ「もう少し」

キャラ「もう少し”ってさっきも同じこと言って、もう30分だよ！それにろくに休憩もしてないし」

ちなみにスバル達と別れてから2時間は経っている

エリオ「僕なら大丈夫だよ。キャラはもう先にスバルさん達の所に行っていていいよ。僕はもう少し続けるから」

キャラ「駄目だよ！ティアさんも無茶はしないでねって言ってたし、シグナム副隊長も程々にしとけよって」うるさい！」「！？」

滅多に怒鳴らないはずのエリオが怒鳴り驚くキャラ

エリオ「あっ！？ごっ、ごめん」

ハツとなりすぐに謝るエリオ

キャラ「ううん、大丈夫 けど、どうしたの？エリオ君。らしくないよ？」

エリオ「うん 自分でもよくわからないんだ なんか体を動かしてないと頭の中が霧がかかったように、もやもやしちゃって」

キャラ「エリオ君」

キャラは心配そうにエリオを見る

エリオ「それじゃあ、後一回！一回やったら止めるから　ね？」

キャロ「うん、わかった」

エリオのお願いに渋々承諾するキャロ

エリオ「ありがとう、キャロ！よしっ！それじゃ行くよ！ストラー

ダ
」

ドサツ！

キャロ「エリオ君！？」

エリオは振り向いてガジェットに向かおうとしたがその瞬間、崩れるように倒れ込んでしまった

キャロ「エリオ君！エリオ君！！」

エリオ「
」

いくら呼んでも返事がない

どうやら気絶しているようだ

それに顔色がかなり悪い

キャロ「大変！フリード！急いでエリオ君を運ぶよ！！」

フリード「キュクル！！」

キャロとフリードは急いでエリオを医務室に運ぶのであった

医務室

エリオ「すう すう」

エリオは今医務室のベッドで眠っている

シャマル「ひとまずはこれで大丈夫」

キャロ「本当ですか？」

シャマル「ええ けど、珍しいわね？エリオ君がこんなになるまで訓練を続けるなんて」

寝ているエリオを見てそう言うシャマル

キャロ「はい」

シャマル「最近エリオ君に何か変わった様子はなかったかしら？」

キャロ「えっ？ わからないです」

シャマル「そう？あっ！私ちよつと出かけないといけないからエリオ君を見ててくれないかしら？」

キャロ「あっ、はい！わかりました」

断る理由もないので快く引き受ける

シャマル「お願いね」

そう言つて医務室からシャマルは出て行った

10分後

エリオ「うっ　ここは」

キャロ「あつ！エリオ君、起きた？大丈夫？」

エリオが起きたことに気づきキャロはすぐに話しかける

エリオ「キャロ　僕は一体？」

キャロ「覚えてない？エリオ君がまた訓練をしようとしたらいきなり倒れちゃったんだよ。原因は訓練による疲労がたまっちゃったからだって」

エリオ「そうなんだ」

落ち込んだように下を向くエリオ

キャロ「エリオ君、何か悩み事でもあるの？」

エリオ「えっ？何で？」

キヤロ「だって、エリオ君さっきからずっと様子がおかしいんだもん」

エリオ「多分」

キヤロ「えっ？」

エリオ「僕は多分怖いんだ」

キヤロ「怖い」？」

エリオ「うん 最近夢を見るんだ。とても怖い夢」

キヤロ「どんな夢なの？」

キヤロは恐る恐るエリオに聞いてみる

エリオ「誰なのかはわからないけど僕の目の前からまるで光のように消えてしまうんだ。その人は一体誰なのかはわからない けど、大切な人であるのは間違いないんだ」

エリオは自分の右手を見ながら握りしめる

エリオ「だから、僕は無理をしても強くなろうとがむしゃらに訓練をした 情けないよね 夢なのに怖がっちゃって、拳げ句の果てにはキヤロに八つ当たりしたり、疲労で倒れてしまった。兄さんが見たら笑われちゃうよ」

キヤロ「そんなことないよ！」

苦笑しながら言うエリオを見て大きな声で否定するキャラ

キャラ「そんなことない。エリオ君は大切な人を護るために頑張ったんだよ。ただ、やり方を間違えちゃっただけ。カイトさんだって怒りはすれど笑ったりはしないよ」

キャラは真剣な顔でエリオに言う

エリオ「 そうだね。兄さんはそんなことしないよね？」

キャラ「 そうだよ！だからエリオ君、元気だして？そんなんじゃないか。イトさんに笑われちゃうよ！」

エリオ「 ！」

キャラにそう言われて啞然としていると

エリオ「 はは そうだね。逆にこんなこと言ってちゃ笑われちゃうね」

エリオは笑いながらそう言う

キャラ「 エリオ君、やっと笑ってくれたね 」

エリオ「 ごめん、キャラ。僕 」

キャラ「 いいよいいよ！私達はライトニング分隊のパートナーでしょ？だからどんな悩み事でも助け合わなくちゃ 」

エリオ「うん、そうだね！」

エリオはキャラの優しさのおかげで悩みが吹っ切れたのだった

キャラ「はい、エリオ君」

キャラは置いてあったリンゴを剥きエリオに渡す

エリオ「ありがとう、キャラ」

そしてリンゴを食べていると

キャラ「あの エリオ君」

エリオ「何？」

キャラ「エリオ君に聞きたいことがあるんだけどいいかな？」

エリオ「うん、いいよ」

エリオは何の躊躇なく答える

キャラ「あのね？エリオ君は何でカイトさんのことを”兄さん”って呼ぶの？」

エリオ「えっ？何で？」

キャロ「なんとなく聞きたくなくて」

エリオ「そうだね　フエイトさんにも聞かれたけど兄さんはフエイトさんと始めて出会った時みたいな暖かい優しさを感じたんだ。キャロは？」

キャロ「うん。それは私も感じたよ。とても居心地がいいんだよね」

エリオ「それに僕の憧れでもあり、尊敬する人なんだ。とても強いし格好いい　だけどそれを自慢したりしない。まるで僕の思い描いた騎士のような人なんだよ」

キャロはうんうんと顔を縦に振る

エリオ「それだけじゃないよ　兄さんは僕がF計画で作られた人造魔導師ですと言ったらどうしたと思う？兄さんは嫌な顔一つせず僕に微笑んでくれたんだ。そのときはとても嬉しかったんだ。そして僕は思っただこの人が本当の兄さんだったらいいのってね」

キャロ「そうなんだ。私もね？カイトさんに褒められたり撫でられたりすると、とても嬉しい気持ち、幸せな気持ちになるよ」

エリオ「うん。僕もだよ！」

キャロ「けど」

エリオ「？」

キャロ「私は違つと思つの」

エリオ「何が？」

エリオが首を傾げながら聞く

キャロ「私は”お兄さん”より”お父さん”の方がいいと思つの」

エリオ「へっ？」

キャロが予想外なことを言つたため間抜けな声を出してしまうエリオ

キャロ「エリオ君？」

エリオ「あつ！ごめん けど、どうして？」

呆然としていたエリオは直ぐに我に返りキャロに質問する

キャロ「私にとってカイトさんはエリオ君と同じでフェイトさんと同じ感じがしたの。けどね、私にとっては”お兄さん”と言うより”お父さん”と言う感じなの。頭を撫でられたり褒められたりしたときは”お父さん”ってこんな感じなのかなって思つもん」

エリオ「けど、僕的には”兄さん”なんだけどな」

エリオはキャロの主張にうーんと考え込む

キャロ「エリオ君。もしフェイトさんがカイトさんと結婚したらカイトさんは私達の”お父さん”になるんだよ？」

エリオ「!？」

エリオはキャラのまたもや予想外な言葉を聞いて驚く

エリオ「確かにそうだけど」

キャラ「エリオ君はカイトさんとずっと一緒に居たいでしょ？だから私達でフェイトさんの応援をしよう！」

キャラはいつにもなく真剣な表情で言う

エリオ「けど」

他の皆さんに悪いなとエリオは考えているだがそれは直ぐに崩される

キャラ「ダメ？」

エリオ「!?!?!」

そう言ったキャラを見てエリオはボツと顔を赤くする

何故ならばキャラは上目つかい+涙目の最強コンボをエリオに喰らわしていた

エリオ「わっ、わかったよ。僕もフェイトさんの応援をするよ／／」

ただでさえ押しに弱いエリオがキャラにそんな事されて適うわけもなくエリオはフェイトの応援をする事になったのだった

エリオ「キャラ」

キャラ「何？」

エリオ「どうして急にフェイトさんの応援をしようと思ったの？」

キャラ「えっ？」

エリオにそう言われるとキャラは少し困った表情をする

エリオ「どうしたの？」

キャラ「実はね、フェイトさんに言われて」

エリオ「フェイトさんに!？」

キャラ「うん」私とカイトが付き合えるように協力して!」って
必死に言われて、それに」エリオにはキャラから言えば大丈夫だから!
」って言われたから」

エリオ「そっ、そうなんだ」

苦笑しながら言うエリオ

キャラ「でっ、でもフェイトさんとカイトさんには幸せになって欲しいからね？」

エリオ「もちろんだよ うん」

エリオは思った

”恋する女性は怖い”と

さらにフェイトの思い通りになった自分が情けないと思ったのだっ
た

それぞれの覚悟 なのは&フェイト

ヘルバのミッドチルダ襲撃予告のときまで残り2日

訓練場

なのは「はああああ！」

フェイト「はああああ！」

各自が自分の気持ちや覚悟を決めた中、なのはとフェイトは訓練の最中だった

2人の回りには赤と水色の光が纏っているしばらくするとその光が弱まり最後には消えてしまった

フェイト「はあ はあ」

なのは「はあ はあ ふう〜、約50秒 後ちよつとで一分だね」

フェイト「うん けど、それじゃあまだ足りないね？」

なのは「そうだね。最低三分は欲しいよね」

なのはとフェイトはどうやら憑神の持久訓練をしているようだ
2人は目を瞑る

なのは「イニス！」

フェイト「スペース！」

2人がそう言った瞬間、再び2人の回りに光が纏う

なのは「フェイトちゃん！この状態で模擬戦してみよう？」

フェイト「えっ？ガジェットじゃ駄目なの？」

なのは「別にいいんだけど 私かフェイトちゃんのどっちかがヘルバと戦わないといけないから出来る限り近いシチュエーションで模擬戦したいの。それにこの力を振るえる相手はフェイトちゃんしかないし」

フェイトは腕を組みながら考え込む

正直、なのはとは模擬戦をしたくはない

昔は嫌という程していたがある理由により全くしないようになった
しかしそんな事言っている場合ではない

フェイト「うーん わかった、やろう。なのは」

なのは「ありがとう、フェイトちゃん」

なのはは笑顔でお礼を言う

フェイト「うん けど、程々にだよ？無理して怪我したら元も子もないんだからね？」

なのは「わかってるよ、フェイトちゃん 相変わらずの心配性なんだから」

フェイト「だって」

なのは「それじゃあ始めようかフェイトちゃん」

フェイト「うん」

なのはとフェイトは同時にデバイスを展開し飛び上がる

なのは「デバイスシューター！」

なのはの回りに複数の魔力弾が現れる

フェイト「プラズマランサー！」

フェイトも同じくらいの複数の魔力弾が現れる

なのは「シュート！」

フェイト「ファイア！」

ドドドーン！

2人の魔力弾はぶつかり合い相殺する

BD『ソニックムーブ』

なのは「!？」

ぶつかり合ったために起こった爆風で互いに相手を見失ったかと思いきやフェイトの高速移動魔法でなのはの背後に回り込む

フェイト「はああああ!」

フェイトは鎌状にしたデバイスでなのはに斬りかかる

なのは「甘いよ、フェイトちゃん!」

フェイト「!?!」

なのはがそう言うとフェイトの頭上から魔力弾が現れフェイトを襲う

フェイト「くっ!」

フェイトはなんとかデバイスで防ぐ

その隙になのはは間合いを取る

なのは「行くよ、フェイトちゃん!」

RH『ロードカートリッジ』

なのはは二発をカートリッジする

フェイト「バルディッシュ!」

BD『ロードカートリッジ』

フェイトも同じように二発をカートリッジする

なのは「デバイス」

フェイト「トライデント」

なのは「バスター!!」

フェイト「スマッシュャー!!」

ドカーン!

2人の放った砲撃魔法はぶつかり合い再び相殺された
そして2人は地面に下り纏っていたオーラが消える

なのは「ふう〜、こんなところかな?」

フェイト「そうだね。そろそろ上がるう」

なのは「うん」

訓練を終えた2人はデバイスを戻し隊舎へと戻ったのだった

安置室

ここには棺桶に入ったカイトがいる
医務室では邪魔になると言い移動したのだ

それはどうかとなのは達が反対したがシャルが”これじゃ遺体と
変わらないから問題ないわ”と言いなのは達も渋々承諾
本人が聞いたら怒りそうな理由だ

そしてそのカイトの前に一人の少女が立っていた

ヴィヴィオ「カイ兄」

その少女はヴィヴィオだった
すると

なのは「ヴィヴィオ　ここに居たんだ」

ヴィヴィオ「なのはママ」

なのは「駄目だよ、ヴィヴィオ。急に居なくなったりしちゃ」

なのはは「どうやらヴィヴィオを捜していたようだ」

ヴィヴィオ「ごめんなさい」

なのは「いいよ、怒ってないから」

なのははそのままヴィヴィオの隣に座る

ヴィヴィオ「ねえ、なのはママ」

なのは「何？ヴィヴィオ？」

ヴィヴィオ「カイ兄は何でこの箱の中に入ってるの？」

なのは「それはね。カイト君が大怪我しちゃったからこの箱の中で傷を治してるんだよ」

ヴィヴィオ「それじゃあ何でカイ兄は大怪我なんてしちゃったの？」

なのは「!？」

ヴィヴィオにそう聞かれたなのはは笑顔だったのが一変し泣きそうな顔をしてしまう

ヴィヴィオ「なのはママ？」

そんなのを見たヴィヴィオは心配そうになのはの顔を覗き込む

なのは「それは」

フェイト「カイトは無茶をしすぎたんだよ、ヴィヴィオ」

なのは「フェイトちゃん！」

なのはが答えにくそうにしていると入り口からフェイトが現れ代わりに答えた

ヴィヴィオ「無茶」？」

フェイト「うん カイトは私達を護るために頑張ったから怪我しちゃったの」

フェイトはカイトが怪我をした理由を簡単に答える少し辛そうな顔

をしながら

ヴィヴィオ「そうなんだ　カイ兄はいつ起きるの？」

フェイト「わからない　明日かもしれないし、明後日かもしれない　もっと先かもしれないの」

ヴィヴィオ「それじゃあ、私お祈りする！」

フェイト「えっ？」

ヴィヴィオ「朝・昼・夜、毎日ここに来てカイ兄の怪我が早く治って起きますようにって女神様をお願いするの」

なのは「ヴィヴィオ」

ヴィヴィオが笑顔でそう言うとそんなヴィヴィオを見ていたなのは笑顔が戻る

なのは「そうだね、それがいいよ」

フェイト「それじゃあ、今から女神様をお願いしようか？」

ヴィヴィオ「うん」

三人はカイトの目の前に立ち手を合わせる

ヴィヴィオ「カイ兄の怪我が早く治りますように」

なのは「カイト君が早く起きますように」

フェイト「カイトが早く元気になりますように」

各自の願いを伝える

なのは「ヴィヴィオ。部屋に戻るうか？」

ヴィヴィオ「うん　おやすみ、カイ兄」

なのはとフェイトもカイトにおやすみを言って部屋から出た

早朝

ヴィヴィオ「すうすう」

ここはなのは達の寝室ヴィヴィオは幸せそうな顔で眠っている

フェイト「なのは。ヴィヴィオ寝てる？」

なのは「うん　寝てる」

フェイト「そう」

ヴィヴィオの寝顔を見て笑顔になるフェイト

なのは「ねえ、フェイトちゃん」

フェイト「何？なのは」

なのは「相談したいことがあるんだけどいいかな？」

フェイト「うん 私も、なのはに相談したいことがあったし」

真剣な顔で聞いてくるなのはを見てフェイトは真剣な顔で答える

なのは「えつとね 私達、本当にヘルバに勝てるのになって」

フェイト「なのは それは私も思っていたよ 私達は一回ヘルバと対峙したことがある その実力は凄まじいものだった」

なのは「うん 今の私達じゃ適わないかもしれない。憑神を使っても、二人がかりでも適うかわからない」

二人がそう話しているとどんどん空気が重くなる

なのは「次はフェイトちゃんの番」

フェイト「あっ うん 実は”冥王ケルヌノス”についてなんだけど」

なのは「あの1日で星一つ破壊出来るほどの力を持つ怪物のことだね？」

フェイト「うん もしヘルバを倒したとしてもその背後にはケルヌノスがいる。それに名前は知っていてもどんな姿・能力をしているのか、私達は知らないでいるでしょう？だからどうすればいいのになって」

なのは「そうだね　せめて姿だけでも知っていればね」

フェイト「このままじゃ私達」

二人は最悪な光景を思い浮かんでしまう

そしてただでさえ重かった空気がさらに重くなる

ヴィヴィオ「うくん？」

うるさかったのか、ヴィヴィオがムクリと起きる

なのは「ヴィヴィオ、起きちゃった？」

フェイト「ごめんね、うるさかった？」

ヴィヴィオ「ううん　どうしたの？なのはママ、フェイトママ？
元気がないよ？」

ヴィヴィオは心配そうに二人の顔を見る

なのは「　大丈夫だよ、ヴィヴィオ」

フェイト「私達は元気だよ」

二人は笑顔でヴィヴィオに言う
当然無理をしながら

ヴィヴィオ「」

ヴィヴィオはそんな二人を見て無言で睨みつける

なのは「どうしたの、ヴィヴィオ？」

ヴィヴィオ「んっ！」

なのは「えっ？」

睨みつけて来るヴィヴィオを見て近づくなのはにヴィヴィオはなのはの頭を撫でる

ヴィヴィオ「元気になれ〜元気にな〜れ！」

なのは「ヴィ、ヴィヴィオ？」

急に頭を撫でられ戸惑うのは

ヴィヴィオ「フェイトママにも〜」

フェイト「えっ!?!？」

撫で終えたヴィヴィオは直ぐにフェイトの前に座りフェイトの頭を撫で始める

ヴィヴィオ「元気になる〜元気になる!〜」

まるで呪文のような言葉を言いながらフェイトを撫でる

フェイト「」

ヴィヴィオに撫でられたフェイトは無言になってしまっただが、とても幸せそうな表情をしている

それはなのも同じだったようだ

ヴィヴィオ「元気でした？」

フェイト「うん ありがとう、ヴィヴィオ」

フェイトは今日一番であろう笑顔でお礼を言いながらヴィヴィオの頭を撫でる

ヴィヴィオ「えへへ よかった、カイ兄のおまじないが効いて」

なのは「カイト君の？」

ヴィヴィオ「うん 私が泣きそうになったときにいつもカイ兄が頭を撫でってくれるの」これは悲しいときや不安なときになると元気になるおまじないなんだよ”って言ってたよ

なのは「そうなんだ」

ヴィヴィオ「なのはママ？」

なのは「何？」

ヴィヴィオ「カイ兄のこと好き？」

ヴィヴィオはいきなりの爆弾発言

だが、なのはは平然としている

なのは「うん 私はカイト君のことが好き、大好きだよ フェイトママもね」

フェイト「!?!」

ヴィヴィオ「本当？フェイトママ？」

エリオとキャロにしか言っていないカイトへの想いをなのはに知られていたことに驚くフェイト

ヴィヴィオはそんなフェイトに気づかず質問する

フェイト「」

フェイトはチラツとなのはの方を向く

なのは「」

なのはは真剣な眼差しでフェイトを見ている

そしてフェイトは何かを決心したかのようにヴィヴィオの方へと向く

フェイト「うん。私もカイトのことが大好きだよ」

フェイトがそう言うとそれを見たヴィヴィオは嬉しくて抱きつく

なのはは笑顔でフェイトを見ている

フェイト「なのは、よく知ってたね？私がカイトのことが好きだった」

なのは「フェイトちゃん 六課に居るたいいていのはみんな知っ

てるよ。フェイトちゃんはカイト君のことが好きだっていうことは

フェイト「えっ!?!?!」

なのはにそう言われて顔を真っ赤になるフェイト

なのは「えっ!?!?!」ってやっぱり気づいてなかったんだね、フェイトちゃん」

フェイト「うっっ / / /」

なのはの言葉にさらに顔を赤くするフェイト

なのは「フェイトちゃんだって六課にいる人達の中でカイト君のことが好きな人は大体はわかってるでしょ?なら、フェイトちゃんがカイト君のこと好きだって言うのがわかってても不思議じゃないですよ?」

フェイト「確かにそうだけど」

なのは「ニヤハハ お互いカイト君への気持ちを知ったことだし今日から私達はライバルだね。フェイトちゃんカイト君は渡さないからね!」

フェイト「うん だけど、いくらなのはでもカイトは渡せないよ!」

二人はそう言いながら睨み合っている

ヴィヴィオ「フェイトママ、なのはママ何のお話?」

フェイトに抱きついていたヴィヴィオは話を聞いてはいたようなのだよく意味がわかっていないようだ

なのは「なのはママとフェイトママは優しくてカッコイイカイト君が大好きだって言う話だよ　ねえ、フェイトちゃん」

フェイト「うっ、うん。そうだよ、ヴィヴィオ／＼」

ヴィヴィオの問いかけに笑顔で答えるなのは
フェイトは少し顔を赤らめている

ヴィヴィオ「そうなんだ　私もね、頭を撫でてくれたり」おでこに
チュー”してくれるカイ兄が大好き」

ピシッ！

ヴィヴィオの”おでこにチュー”という発言を聞いて笑顔だったなのはとフェイトが石のように固まってしまっ

なのは「　えっ？」

フェイト「　ヴィ、ヴィヴィオ？それって」

ヴィヴィオ「えっとね。たまになんだけど頭を撫でてくれた後におでこにチューしてくれるの」

恐る恐る聞いたフェイトの質問に無邪気に答えるヴィヴィオ

なのは「へえ〜」

フェイト「そうなんだ」

今まで笑顔だった筈のなのはとフェイト

それが今では黒いオーラを纏い笑っているもちろん目は笑っていない

ヴィヴィオ「あのね、”このことはみんなには秘密だよ”ってカイ兄が言ってたからなのはママもフェイトママもみんなに秘密だよ」

笑顔でそう言うヴィヴィオ

だが、実際カイトは”六課にいる”みんなに秘密と言ったのだがヴィヴィオには伝わっていなかったようだ

なんせ、特に言っではいけない二人に言ってしまったのだから

なのは「うん わかったよ、ヴィヴィオ」

フェイト「みんなには秘密にしとくよ」

そうは言ってるが秘密にする代わりにカイトには地獄を見せようと企んでいる二人

まあ、自分の娘にそんな事されて怒るのはわかる

理由はそれだけではないのだが

ヴィヴィオ「ホント？よかった」

そんな事を考えているとはわかるわけもなくヴィヴィオは安心して
いる

すると

ヴィー！ヴィー！ヴィー！

なのは・フェイト「!?」

いきなり六課全体に響きわたるアラーム音

直ちにスターズ分隊、ライティング分隊は部隊長室に集合して下
さい

なのは「これは」

フェイト「急ごう、なのは！」

なのは「うん！ヴィヴィオ、おとなしくしててね？」

ヴィヴィオ「あっ うん 行ってらっしゃい」

ヴィヴィオは不安げな表情をしながらそう言う

なのは・フェイト「行ってきます！」

二人は直ぐに着替え、部隊長室に向かうのだった

決戦！ 新たなる仲間

部隊長室

なのは「はやてちゃん！」

フェイト「これは一体？」

緊急アラームが鳴り、直ぐに部隊長室に向かったなのはとフェイト全員いるところを見ると2人が最後のようだ

はやて「落ち着きいな。なのはちゃん、フェイトちゃん。それを今から話すところや、リイン」

リイン「はいです」

リインははやてに言われモニターを出し映像を映す

スバル「なっ！？」

エリオ「何ですか、これは！？」

スバルとエリオはその映像を見て声を上げ驚く驚いているのは二人だけではなく全員（はやて・リイン以外）がその映像を見て驚いている

全員が見たもの

それはキャラ口が召還する”真竜”ヴォルテールの倍以上の竜が

しかも街のど真ん中にそびえ立っている

フェイト「急いで向かわないと！」

はやて「大丈夫や、フェイトちゃん。あの巨大な竜は現れてから何もしておらん それに下手に手を出したら何が起きるかわからへん」

ティアナ「けど、あんな巨大な竜 キヤロ、どうしたの？」

映像を見てる中、ティアナはキヤロの様子がおかしいことに気づく

キヤロ「まさか、あの竜は」

「あなたの思っている通りだと思いますよ」

エリオ「アウラさん！」

声が聞こえた方を向くとそこにはカイトの治療のために黄昏の碑文に戻った筈のアウラが居た

シグナム「何故ここに？カイトの治療は？」

アウラ「まだ、かかります。ですが私の力を使っても治療時間は変わらないと判断し、出て来たのですか まさか、こんなことになってるなんて」

ヴィータ「これはやっぱりヘルバのヤローの仕業なのか？」

アウラ「その通りです。それにしても”闘竜”とは」

はやて「 闘竜 ”？」

はやて達は” 闘竜 ”と言う言葉に首を傾げるだがキャラロだけがかなり驚いた表情をする

キャラロ「 闘竜 ” って まさか” 闘竜 ・マグメルド ” ですか!？」

アウラ「 ええ。 神の使いとも言われた ” 闘竜 ・マグメルド ” です」

キャラロ「 そんな 何千万年前に滅びたと私の一族の文献に書いていたはずなのに 」

フェイト「 どう言う事? 」

アウラとキャラロの会話についていけないフェイト達

キャラロ「 はい ” 闘竜 ・マグメルド ” その神の使いとも言える圧倒的な力で人を襲い最後には私の御先祖様達が石化させ混沌の深い闇に封じ込んだと言われています 」

シグナム「 それがあのだと巨大な竜と言うことか 」

アウラ「 安心して下さい。 あれはもう二度と動くことはありません。 むしろ問題はそこではなく竜の背中にある遺跡です 」

はやて「 ” 遺跡 ” ? どういうこと ” 八神部隊長! ” どうしたんや、 シャーリー? 」

話をしている最中、 シャーリーから通信が入る

シャーリー「本部の人達がしびれを切らし特攻隊を出動させました！」

はやて「何やて!?!」

ヴィータ「あの連中」

リインフォース「どうやら相当私達に手柄を捕られたくないようですね?」

フェイト「シャーリー、映像を」

シャーリー「はい!」

シャーリーがそう言うとシャーリーが映っていた映像が代わり映ったのは石化した闘竜・マグメルドに突入する数人の管理局員だ

隊長「A班はこれより突入する!」

「了解!」

隊長「では「&&&&」なにっ!?!」

突入しようとして動き出したとき奇声が聞こえ彼らの前に黒い泡が無数に現れた

そしてその泡からAIDA・Annaが現れる

しかも特攻隊の倍の数はいる

隊員A「隊長！」

隊長「怯えるな！このまま突入する！」

そう言うと特攻隊はA n n aに突っ込む

A n n a「&&&&」

隊員B「なっ!?!」

だが、いつの間にか特攻隊の回りにA n n aが囲い込んでいた

隊員C「うわあああ!?!」

トガン!

囲い込んでいたA n n aのレーザーにより撃墜された

ヴィータ「チツ！血迷いやがって！」

シグナム「しかし、あのA I D Aの数は」

フェイト「それにあの特攻隊の人達はA Aランクの人がいたのにあ

んな簡単にやられるなんて」

アウラ「仕方ないでしょう。ただでさえ初めて戦うのにあのAnnaの大軍に囲まれては適う筈がありません」

なのは「確かにそうかもしれないけど、あの動きは見たことないよ？」

アウラ「恐らくAnnaの大軍をまとめる”Gate Keeper”がいたからでしょう」

はやて「”Gate Keeper”？」

アウラ「簡単に言えばAnnaの亜種です。どこかに隠れ指示を出しているのです」

はやて「それは、厄介やな」

はやてが顎に手をあてながら考えていると

「いやはや、気が早いですね？私の記憶では一週間後と言ったはずですが？」

シャーリー「八神部隊長！ミッドチルダ全域に通信が！」

モニターに映し出されたのはヘルバだった

ヘルバ「まあ、いいでしょう。これで無闇に突っ込んだらどうなるかよくわかったでしょう？」

ヴィータ「あのヤロー」

ヴィータはものすごい目つきでヘルバを睨みつけている

ヘルバ「それでは、ミッドチルダの皆さん。また明日お会いしましょう。あっ！そうそう、出来れば突入してくる人は六課の皆さんでお願いしますよ？ではお待ちしています」

ヘルバはそう言うとモニターが消える

はやて「大胆な奴やな？」

フェイト「今のはまるで宣戦布告だね？」

グリフィス「八神部隊長」

今度はグリフィスから通信が入る

はやて「どうしたんや？」

グリフィス「聖王教会の人とギンガ・ナカジマ陸曹達が来ました」

はやて「早かったな？会議室に通してえな？」

グリフィス「了解」

そう言うと通信が消える

なのは「はやてちゃん、どういふこと？」

スバル「それにギン姉まで」

はやて「実はやな？作戦会議と戦力補給を兼ねて来てもらったんや」
エリオ「作戦会議はわかりますけど戦力補給ってギンガさんのこと
ですか？」

はやて「それは会ってからのお楽しみや。そんじゃ、みんな早く会
議室に行くで？」

はやてにそう言われ会議室に移動する

会議室

はやて達が会議室に到着し中に入ってみるとそこにいたのは

ウエンディ「あっ！来たッスよ」

セイン「皆さん、こんにちは」

シャツハ「セイン、しっかり挨拶をしなさい。皆さんお久しぶりで
す」

ディエチ「こんにちは」

ノーヴェ「たくつ、遅えよ」

チンク「ノーヴェ！全く 六課の皆さん。お久しぶりです」

ギンガ「スバル、久しぶりね？」

ディード「こんにちは」

オットー「ちは」

各自、会議室に入ってきたはやて達に挨拶する

スバル「ギン姉」

ティアナ「それに元・ナンバーズまで」

エリオ「もしかして皆さんが戦力補給 新しい仲間ですか？」

キャロ「とても頼もしいです」

スバル達が喜んでいると

パパーン！

リイン「キャツ！？」

シグナム「これは」

いきなりリインとシグナムの目の前に小さな花火が現れる

「私もいるぜ！バツテンチビにシグナム！」

その声と共に現れたのは、リインと同じくらいの小さな小人が現れる

シグナム「アギトじゃないか、久しぶりだな？」

アギト「おう」

リイン「アギトちゃん！」

アギト「んだよ？」

リイン「」んだよ？」じゃないです！危ないじゃないですか！」

いきなりの花火に怒るリイン

ちなみにアギトはシグナムの融合騎だ

アギト「うっせえよ、バツテンチビ！今シグナムと喋ってんだから邪魔すんなよ」

リイン「何ですと！？」

リインとアギトが言い争っていると

カリム「ふふ 賑やかなね」

はやて「ごめんな？カリム。せっかく来てくれたに」

カリム「いいんですよ、はやて。みんな久しぶりに会えて嬉しいのだから」

はやて「せやな」

アウラ「なかなか良い光景ですね。こうして笑いあっている姿を見ると絆を感じます」

はやてとカリムが話している中、その光景を見て微笑むアウラ

カリム「あなたが女神・アウラですね？私は聖王教会の騎士カリム・グラシアです」

アウラ「はい。ですが私のことはアウラとお呼び下さい」

カリム「わかりました。アウラ　ではそろそろ会議を始めましょうか？」

はやて「せやね。みんな始めるで！」

はやての呼び声により全員が各自の場所に座る

はやて「それでは作戦会議を始めたいと思います。と言いたいくるなんやけどカリム、ロツサはどうしたん？」

カリム「ロツサはクロノ提督の所よ。今頃、あっちでも会議をしているわ」

はやて「そうなんか？ならええな？」

ちなみに” ロツサ” と言う人物はヴェロツサ・アコース考察官の名称だ

カリムとシャツハの家族でもあるし、クロノの親友だ

スバル「けど、どんな作戦を立てるのですか？ みんなで突入すればいいじゃないですか？」

ティアナ「あんだね、さっきの映像見てたでしょ？ みんなで突入して、もしも罠があったらどうするのよ？ 下手したら全滅するわ」

はやて「その通りや。それにヘルバがウチらが突入している間にミッドチルダに手を出さない保証はないんよ」

カリム「ですから、対策を立てなければなりません」

アウラ「ではまず、ヘルバの居場所ですが、あの竜の背中にある遺跡です」

ウエンディ「えっ！ そんな所に遺跡なんてあるんツスか？」

チンク「黙って聞いてろ」

いきなり大声を出すウエンディを注意するチンク

なのは「そう言えばそんな話をしたね」

アウラ「あれは” 背面都市マグニ・ファイ” です。そこにヘルバが居るはずですよ」

フェイト「けど、何故あんな所にヘルバが？」

アウラ「ちょうどよかったからです」

はやて「ちょうどよかった？」

リインフォース「何がですか？」

アウラ「ヘルバは”混沌の帝王”と呼ばれているのですが、ヘルバの能力は混沌を自在に操り混沌に潜むことができることから名付けられたのです」

キャロ「と言うことは」

アウラ「偶然だとは思いますが混沌に入ったときに見つけたのでしよう。混沌の中でならそう簡単には見つからないですからね」

シグナム「だが、それだけの理由でそこに滞在するものなのか？」

アウラの発言に不満を感じ質問する

アウラ「いいえ。ヘルバは身を隠すことが目的ではなく、遺跡にある転送装置が目当てだったのです」

ヴィータ「どう言うことだ？」

アウラ「あそこにはいくつかの転送装置があり、ある特定の場所に転送されます」

なのは「ある特定の場所」？」

アウラ「あなた達も行つたことがあるはずですよ。一つはカイトと出会つた場所、もう一つは罫が仕掛けられた場所」

そう言われ考えてみるのは達

はやて「”第28管理外世界グリーマ・レーヴ”と”第55管理外世界シフ・ベルグ”やな？」

アウラ「そうです。ヘルバはその転送装置を使い気づかれずに侵入したり罫を仕掛けたりしたのです」

全員がアウラの言葉を聞いてスツキリする

今まで先手を討たれていたのはその転送装置だと納得したからだ

アウラ「話が少しズレましたね？対策についてですが、私に提案があります」

はやて「何や？」

アウラ「突入・空戦・陸戦の3チームに分けるんです」

カリム「何故ですか？」

アウラ「恐らくヘルバは私達が突入した後、大量のAIDAをミッドチルダ全域に放つでしょう。ですからそれに対応するためです」

シャツハ「ですがその場合、管理局に聖王教会の全勢力で対応する話になっていますが？」

アウラ「戦つた事のない人達がAIDAと戦つても苦戦をするでし

ようし、突入チームは出来る限り少ない方がいいでしょう　です
よね、なのは？」

なのは「えっ!?!」

いきなり呼ばれて驚くなのは

アウラ「それにフェイト　あなた達の力を発揮するには彼女らは邪魔でしょう?」

ノーヴェ「ああ?どういう意味だよ!」

アウラの発言に苛つくノーヴェ

アウラ「少し言い方を間違えましたね?なのはとフェイトの八相の力に巻き込まれないようにするために出来る限り少ない人数にした方がいいでしょう?」

なのは「　うん、そうだね」

スバル「なのはさん!?!」

フェイト「確かにその方がいいかもね?」

エリオ「そんなフェイトさんまで」

アウラの提案に同意するのはとフェイトを見て驚くスバルに落ち込むエリオ

なのは「ごめんね、2人共。けど仕方ないの」

フェイト「八相の力はまだ私ものも使いこなせていないの。もしも暴走でもしたら何が起こるかわからない。だからみんなを連れて行く訳にはいかない」

はやて「せやな。そっちの方が動きやすいしな スバルとエリオもええな？」

スバル「はい」

エリオ「わかりました」

そう言うものの2人は納得出来てはいないようだ

カリム「3チームですが、どのようなチーム分けにするのですか？」

はやて「せやな」

作戦会議を始めて一時間後

カリム「それでは最後にチームの再確認をします

陸戦チーム スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、ギンガ、セイ
ン、ノーヴェ、ディエチ、ウェンディ

空戦チーム シグナム、ヴィータ、ザフィエラ、リイン、ディー
ド、オットー、アギト

突入チーム　なのは、フェイト、はやて、リインフォース、チンク

シャマル、シャツハは救護兼待機

で決定します。いいですね？」

「はい！」

カリムの再確認に大きな声で返事をする

ティアナ「まあ、よろしくね」

ウエンディ「よろしくッス」

ノーヴェ「何で私がこいつらと」

セイン「まあまあ」

ギンガ「頑張ろうね、スバル」

スバル「うん　ギン姉」

ディエチ「よろしくね」

エリオ「はい！」

キャロ「よろしく願いします」

ヴィータ「あーあ、アタシも突入チームがよかつたぜ」

シグナム「仕方あるまい。我々は任された任務を果たすのみだ。だ
ろ、アギト？」

アギト「おうよー！」

デイド「よろしく願いします」

ザフィーラ「うむ、頼りにしてるぞ」

オットー「うん」

リインフォース「本当にいいのか？私がこっち（突入チーム）で？」

リイン「はいです。私はヴィータちゃんとユニゾンするですから、
はやてちゃんをよろしく願いしますです」

なのは「よろしくね、チンクちゃん」

チンク「うむ だが”ちゃん”は止めて欲しいのだが」

はやて「久しぶりやな？3人で組むんは？」

フェイト「そうだね。だけど、私は嬉しいよ」
各チームの挨拶が終わる

アウラ「」

アウラはそんな仲良く話し合っているのは達を見て微笑む

カリム「どうかしましたか、アウラ？」

アウラ「いえ 本当に良い仲間達だと思ひまして」

カリム「はい。私もそう思いますよ」

アウラ「後はカイトの復活を待つのみです」

カリム「そうですね ですが」

アウラ「？」

カリムは話し合っているのは達を見つめる

カリム「カイト様が来なくても彼女らならヘルバを倒してくれそう
な気がしますよ」

アウラ「そうですね

えっ？」

危うく流してしまいそうになってしまったがカイト”様”と言う所に反応するアウラ

アウラ「カリム 今、カイト”様”って？」

カリム「えっ？あっ！／＼／」

言われて気づいたのかカリムは顔を赤らめる

カリム「あのですね？先日、セインが海上隔離施設の戦いのときの映像を見せてくれたのですが そのときのカイト様を見てとても凛々しく美しい あの方こそが理想的な騎士であると思いました」

アウラ「カイトは確かに素晴らしい騎士なのですが」

カリム「そして同時に私は あの人のことが好きになってしまったのです」

そう熱く語るカリム

アウラ「（会ってもいないのに新たなフラグを立てるとはカイトなんて恐ろしい人）」

アウラはそう思いながらため息をつく

カリム「あっ！アウラ。あなたに聞きたいことが アウラ!？」

カリムの声に一齐に振り向くのは達

アウラ「 どうやら時間のようですね」

なのは「アウラさん、体が透けて」

なのは達が見たものは体から白い粒子を散らしながら透け始めているアウラだった

アウラ「大丈夫です。実体化してられる時間がなくなっただけです。もうすぐしたら黄昏の碑文に戻ります。それよりもカリム、私に聞きたいこととは？」

カリム「はい。それでは簡潔に ”再誕” とはなんですか？私の未来を予言するレアスキルにでたのですが」

アウラはそれを聞いた瞬間、表情を変える

アウラ「それは本当ですか？」

カリム「はい」

アウラ「 ”再誕” それは全てを終わらし再び始める 初期化の力」

はやて「 ”初期化” ？」

アウラ「皆さん、カイトに ”再誕” を絶対に使わせないで下さい」

なのは「わかりました」

アウラはなのはの返事を聞き微笑む

アウラ「それでは皆さん最後に一つだけ伝えたいことがあります」
フエイト「何ですか？」

アウラ「世界を変えるのは強き”力”ではありません。世界を変えるのは強き”想い” 決して忘れないで下さい」

アウラはそう言うと光り輝いたとともに黄昏の碑文に戻っていった

エリオ「強き”想い”？」

キャロ「どついう意味でしょうか？」

ウエンディ「きつと、諦めずに頑張れってことッスよ！」

ディエチ「それはどうだろう？」

なのは「そうだね。アウラは私達に何を伝えたかったんだろう？」

ノーヴェ「んなもん。一々、考えてもしょうがねえだろ？」

スバル「そうですよ！今は私達が明日のために何をすればいいか考えるべきだと思います！」

ティアナ「スバルにしてはもっともなこと言うじゃない！」

スバル「酷いよ、ティア〜！」

はやて「せやな。それじゃあ今からチームごとに分かれて作戦を

立てるよつたー！」

「了解！ー！」

背面都市マグニ・ファイ

ドゥーエー」

今、ドゥーエはヘルバに呼び出され待っている最中

ヘルバ「お待たせしました、ドゥーエ」

いきなりドゥーエの背後から現れるヘルバ

ドゥーエ「ヘルバ様。女性を待たせるのは関心しませんね？」

ドゥーエはなんの反応もせず答える

ヘルバ「これは失礼、ちょっと準備に手間取りましてね」

ドゥーエ「それでどういったご用件でしょうか？」

ヘルバ「相変わらず、つれないですね？まあ、いいでしょう。あなたにはやっと思しい仕事があるのです」

ドゥーエ「管理局を撃退する仕事かしら？」

一応、予測をしてみてみるドゥーエ

ヘルバ「いいえ、むしろ、逆です。この都市に入って来た管理局の皆さんをここまで連れて来るのです」

ドゥーエ「相当、自信があるんですね？」

ヘルバ「自信は確かにありますが、それだけではありませんよ？私を見せてあげたいのです。冥王が復活する瞬間をね、それでは頼みましたよ、ドゥーエ」

ドゥーエ「畏まりました」

いよいよ、最後の戦いが始まる

勝つのはカイトがない六課かそれともAIDAとケルヌンノス率いるヘルバか

その運命は神

いや女神ですら、
わからない

決戦！ 始まり

ヘルバのミッドチルダ襲撃予告当日

なのは達、六課のメンバーは各チームごとの配置に付いて待機している

はやて「こちら、突入チームのはやて。空戦・陸戦チーム、そつちの状態はどうや?」

シグナム「こちら空戦チームのシグナムです。なんの問題もありません」

ギンガ「陸戦チームのギンガ・ナカジマです。こちらにも異常ありません」

各チームの代表が何の異常もないことを伝える

はやて「了解。こちらは現在ヘリで移動中や。ヴァイス君、あとどのくらいで着く?」

ヴァイス「予定通り、5分前には到着しますぜ」

はやて「了解。それじゃあ各チーム、現状維持。作戦決行に備えてな?」

シグナム・ギンガ「了解!」

通信を切るはやて

なのは「いよいよだね」

フェイト「うん。だけど結局、カイトは間に合わなかったね」

リインフォース「仕方ありません。このようなことになるのはわかっていたことですし」

チンク「うむ。予定通りに進めるしかあるまい　とはいえずまないな、フェイト殿。私が飛べないばかりに運んでもらうことになってしまつて」

突入チームで唯一飛べないチンク

話し合いによりフェイトに運んでもらうことになったのだ

フェイト「ううん、チンクは軽いから何の問題もないよ」

チンク「そうか」

なのは「そういえば、チンクちゃんは何で突入チームに志願したの？」

はやて「そうやな？空を飛べないチンクちゃんは陸戦チーム辺りにするはず、やったんやけど必死に頼まれてもうたから許可したんやけどちゃんとした理由を聞いてへんかったな？」

そのときのチンクは土下座でもしそうな勢いで頼み込んでいた
最後には泣きそうだったので許可したのだった

チンク「うむ 実はドゥーエ姉様のことなんだ」

フェイト「ドゥーエの?」

チンク「ああ」

なのは「だけど、ドゥーエはAIDAに」

チンク「わかっている。しかし私は信じたいのだ。ドゥーエ姉様はAIDAに取り憑かれていないと」

チンクはそう言いながら手を握りしめる

はやて「チンクちゃんの気持ちはようわかった。うちも信じるで」

なのは「私も信じるよ」

フェイト「私も」

3人は笑顔でそう言う

チンク「ありがとう」

リインフォース「もうすぐ着くようです」

なのは「いよいよだね!」

フェイト「うん!」

はやて「決着をつけるで!」

意気込みを入れるはやて達だった

そしてなのは達が乗っているへりは目的地に到着

そこは闘竜マグメルドの約2kmぐらいの距離の上空

ヴァイス「残り一分です」

はやて「わかったで、リインフォース！」

リインフォース「はい！」

はやて・リインフォース「ユニゾン インー！」

はやてとリインフォースはユニゾンし、デバイスとバリアジャケットを装備する

なのは「お願いね、レイジングハート！」

RH「all right my master」

フェイト「行くよ、バルディッシュー！」

BD「yes sir」

なのは・フェイト「set upー！」

RH・BD「set up」

2人はデバイスとバリアジャケットを装備

はやて「残り30秒前や」

なのは「手筈通り私からフェイトちゃん、はやてと続いて出るよ」

フェイト「うん。チンクはちゃんと掴まっけていてね？」

チンク「うむ。心得た」

はやて「残り10秒！」

” 9 ”

” 8 ”

” 7 ”

刻々と開始の時間に近づく

なのは達は緊張を隠せない

それは他のメンバーもこのミッドチルダにいる全員がそうだ

” 3 ”

” 2 ”

” 1 ”

なのは「突入チーム 高町なのは。行きます！」

フェイト「同じくフェイト・T・ハラオウン」

チンク「チンク」

フェイト・チンク「行きます！」

はやて「八神はやて」

リインフォース「祝福の風 リインフォース」

はやて・リインフォース「行きます！」

なのは達は順番にへりから飛び出した

ビルの上

ここは空戦チームの待機場

シグナム「始まった、ようだな」

ヴィータ「ああ、やってやるぜ！」

2人はデバイスを取り出す

デイド「こちら準備完了です」

オットー「いつでも行けます」

武器を取り出す

ザフィーラ「我もだ」

ザフィーラはいつもの狼形態ではなく人型だ

アギト「足引つ張んなよ？バツテンチビ」

リイン「それはこっちのセリフです！」

アギトとリインは笑いながらそう言う

シグナム「アギト、行くぞ」

ヴィータ「リインもな」

アギト「おう！」

リイン「はいです！」

シグナム・ヴィータ「ユニゾン！」

アギト・リイン「イン！」

街の中央区

ティアナ「始まったわね」

スバル「うん、頑張ろう！」

グツと手を握るスバル

ノーヴェ「チンク姉」

ウエンデイ「ノーヴェ、そんなに心配しなくても大丈夫ツスよ！」

セイン「そうだよ。なのはさん達がついてるんだからさ」

ノーヴェ「わかってっけど」

そうは言うものの不安げな表情をするノーヴェ

エリオ「僕達も頑張らないとね、キャロ」

キャロ「うん！頑張ろうね、フリード」

フリード「キユクル！」

ギンガ「みんな！気合いを引き締めて行くわよ！」

「はい！／＼おっ！」

上空

空戦・陸戦チームが準備・気合いともに万全になったころ

フェイト「なのは！」

Anna「؟؟？」

順調に進んでいたが目の前に大量のAnnaが現れる

なのは「うん！レッキング？」

フェイト「これは？」

撃退しようとしたがAnnaはなのは達を避けるように道を開けている

はやて「びっちら歓迎されているようやな？」

リインフォース「なめられたものですね」

チンク「通してくれるのなら願ってもない！」

なのは「そうだね。行こう！」

なのは達はAnnaの横を通りヘルバがいる背面都市マグニ・フィへと向かう

ヴィータ「どうやら行ったようだな？」

シグナム「ああ。ここからが我々の仕事だ」

Anna「eee」

大量のAnnaは奇声とともに上空から地上へと降りてくる

ヴィータ「一匹でも多く倒して下の奴らの負担を減らしてやらねえとな」

シグナム「ふっ 前にも同じことを言っていたな？」

ヴィータ「うっせえ、いいだろ別に／＼」

シグナムの言葉に頬を赤らめそっぽを向くヴィータ

デイド「数およそ30です」

オットー「来ます」

シグナム「行くぞ！」

ヴィータ「おう！」

ティアナ「やっぱり攻めて来たわね」

ギンガ「ええ。こちらの読みは合っていた」

Annaが降りて来たことによりそう確信する陸戦チーム

ウエンディ「あっ！何匹か抜けて来たツスよ」

スバル「行こう！空戦チームやなのはさん達も頑張っているんだ！」

エリオ「はい！」

ノーヴェ「へっ！」

スバル達、陸戦チームは降りてくるAIDAに向かう

こうして空戦・陸戦チームとAIDAの戦いが始まった

決戦！ 裏切り（前書き）

更新が遅れて申し訳ありません！

決戦！ 裏切り

背面都市マグニ・ファイ

なのは「ここが背面都市マグニ・ファイ」

そう言いながら回りを見渡すのは達

フェイト「建物はたくさんあるけど、どれもボロボロで今にも崩れそうだね」

はやて「せやな ヘルバはどこに居るんやろうな？」

リインフォース「それにここに来てからAIDAが一匹も出て来ていませんね？」

チンク「 ヘルバは何を考えているのだろうか？」

そう言いながら奥へと進むのは達

シグナム「アギト！行くぞ！」

アギト「おっよー！」

LT「エクスプロージョン」

二発をロードする

そして次の瞬間、デバイスから炎を纏う

ヴィータ「こっちも行くぜ！」

リン「はいです！」

GA「エクスプロージョン」

ヴィータ達も同じように二発をロードするそしてデバイスの先端部分
がドリルに変形する

シグナム・アギト「闇（炎）魔大車輪！！」

ヴィータ・リン「秘奥義 重装甲破！！」

シグナムの炎を纏った無数の斬撃を飛ばし次々Annaを斬りきざむ
ヴィータの特殊な魔法陣で強化されたデバイスを振り下ろし、その
瞬間大爆発が起きAnnaを破壊する

スバル「うおおお！！」

ノーヴェ「おらあああ！！」

ドガーン！

シグナム達を抜けて来たAnnaを次々と倒して行く陸戦チーム

スバル「これで最後だね？」

ノーヴェ「ああ　つか何で私はお前と組まなきゃいけないんだよ！」

スバル「いいじゃん　それに私達かなり良いパートナーじゃん」

ノーヴェ「なっ、何言ってたんだ、てめえ！私がお前に合わせてやっているから上手くいくんだよ！」

スバル「私に合わせてくれたんだ？嬉しいな」

ノーヴェ「なっ／＼／＼てめえ！」

顔を赤らめながら怒鳴るノーヴェ
しかしスバルは笑顔で見ている

ウエンディ「いや、何だかんだ言っただけ息ぴったりツスね？あの2人」

ディエチ「うん、いつもは仲悪いのに」

セイン「まあ、ノーヴェが一方的に嫌っているんだけどね」

そう言いながら苦笑するセイン

ティアナ「それにしても、やっぱり凄いわね？」

ギンガ「ええ。2人だけで半分以上倒しているわね」

ウエンディ「もっと、こっちによこしても？」

ウエンディが上を見上げる

そして表情が変わる

エリオ「どうしたんですか？」

ウエンディ「あれ」

ウエンディがゆっくりと上を指差す

シグナム「あれは」

デイド「一体、何!？」

オットー「」

あまり表情を変えないオットーとデイドですら驚きの表情に変える
シグナム達が見たものは

ヴィータ「なんだよ、あの黒い空間は」

それはシグナム達がいる街全体を覆う程の黒い穴が現れたのだ

ティアナ「何が起きてるの」

キャロ「まるでここだけが夜みたいです」

スバル「けど、この感じ　ギン姉」

ギンガ「ええ　これは「㊦㊦㊦」!？」

いきなり街全体に奇声が鳴り響く

鳴り響いた所は黒い空間

そしてその奇声は絶望の始まりでもあった

Helenn「\$\$\$\$\$」

Oswald「ssssss」

Anna「㊦㊦㊦㊦」

黒い穴からHelennにOswald、さらにはさっき倒したAnnaまでもが現れる

その数は一匹や二匹ではない

デイド「数はOswald”10”、Helenn”20”、Anna”50”!？しかもまだ、殖えています」

ヴィータ「なんだって!？」

リイン「多すぎます!？」

ザフィーラ「だがやるしかあるまい」

シグナム「その通りだ　行くぞ!」

シグナム達はデバイスを握り直しAIDAに向かう

セイン「これはヤバくなりそうだね？」

ノーヴェ「お前のせいだぞ、余計なことを言うから」

ウエンディ「ええっ！？ウチのせいじゃないツスよ！確かに少し物足りなかったから、ついあんなこと言っちゃったツスけど」

デイエチ「それもどうかと」

ティアナ「何、ぶつぶつ言ってるの！来るわよ！」

ティアナの一喝で直ぐにデバイスを構える四人

H e l l e n 「 \$ \$ \$ \$ \$ \$ 」

一番先に降りて来たのは魚型のA I D A ・ H e l l e n だ

エリオ「ここからは一步も通さない！」

キャロ「頑張ろう、エリオ君！フリード！」

フリード「キュクル！」

ギンガ「やらせはしない！」

スバル「行くぞ！」

スバル達は降りてくるAIDA達に向かうのだった

背面都市マグニ・ファイ 深部

なのは達は入って結構時間が経ったにも関わらず今だにヘルバ達を見つけれずにいた

なのは「うーん どこにいるのかな？」

フェイト「予想以上に広くて見つけれないね。それに通信が妨害されているみたいだから連絡もできない」

はやて「あゝ、ムカつくわ！ただでさえ時間がないっちゅうのにイライラしながらそう呟く

リインフォース「主、時間がないのは確かですが落ち着いて下さい」

チンク「その通りだ。冷静さを欠いたら相手の思う壺だ」

冷静な2人がはやてをなだめる

はやて「まあ、わかってはいるんやけどな」

なのは「うん。通信ができないということは外の状況もわからない

からね」

フェイト「みんな大丈夫かな？」

フェイトが心配そうな表情をしていると

リインフォース「！主、ここから500m先に生体反応です」

はやて「ほんまか！？みんな！」

なのは「うん！行くっ」

チンク「畏の可能性もあるが？」

フェイト「それでも行くしかないよ」

はやて「せや！行くで！」

なのは達は生体反応があった場所に向かう

外

エリオ「迅雷！サンダーレイン！」

Anna「☄☄☄☄」

エリオの雷を纏った無数の突きでAnnaを倒す

Helena「\$\$\$\$\$」

ティアナ「行かせない！」

ドドドーン！

無数の魔力弾がHelenaの行く手を遮る

ティアナ「今よ！スバル！」

スバル「うおおおお！」

ドガン！

スバルの先天系魔法のウイングロードを使い動きが止まったHelenaに近づき重い一撃を喰らわす
全長30mあるHelenaはあまりの一撃に吹き飛ばされる

スバル「どうだ！カイトさんに鍛えられた力を！」

キャロ「（スバルさん！後ろ！）」

スバル「えっ？うわっ！？」

キャロの念話で後ろを向くとそこにはAnnaがいた
Annaはレーザーをスバルに放つがギリギリで避ける

キャロ「フリード！ブラストフレア！」

フリード「ガアアア！」

いつもの小さな体ではなくキャロの竜魂召喚で大きくなったフリードが炎弾でAnnaを倒す

スバル「ふう〜、助かったよ。キャロ！」

キャロ「いえ、無事でなによりです」

順調にAIDA達を倒すが一向に減る気配がない

ヴィータ「ちくしょう！全然減らねえ！」

リン「原因はわかっているのですが」

シグナム「ああ だが」

上を見てみるとそこには黒い空間

その空間からはAIDAが次々と現れる
それはわかっているのだが

アギト「あの蜘蛛の糸が邪魔しやがる」

そこには複数のOswaldが糸を張って待ち構えている

セイン「あれじゃあ無闇に近づけない」

エリオ「どうすれば」

ウエンディ「カイトつちがいれば」

ウエンディがそう呟くと回りにいるみんなが暗い雰囲気になる

ティアナ「何言ってるのよ！そんなこと言っていないで集中する！」

デイエチ「うん」

スバル「わかったよ」

ウエンディ「ごめんッス」

そう言いながら戦いを続けるスバル達
だが雰囲気は暗いままだ

ティアナ「カイト」

なのは「はやてちゃん、リインフォースさん。この辺？」

なのは達は生体反応があった場所に到達する

はやて「そのはずなんやけど」

フエイト「見あたらないね？」

辺りを見渡していると

チンク「！みんな、あそこに」

チンクの指示した方を見てみる

フエイト「あれは!?!」

はやて「ドゥーエ!」

そこには腕を組みながらなのは達を見ている

なのは達は直ぐにドゥーエの居るところへ降りる

ドゥーエ「待っていたわ、六課の皆さん　そしてチンク　あなたまで来るとは思わなかったけどね」

チンク「ドゥーエ姉様」

なのは「あなたは何故ここに？」

はやて「ここでやるつもりなんか？」

なのはとはやてはデバイスを構える

ドゥーエ「違うわ、私は案内役。まったく血の気の多い人は本当に

嫌だわ」

ふうとため息をつくドゥーエ

フェイト「案内役”?”」

ドゥーエ「そうよ」

パチン！

なのは「えっ!?!」

チンク「これは」

ドゥーエが指を鳴らした瞬間、なのは達の目の前に大きな門が現れる

リインフォース「どうやら幻術魔法で隠していたようです」

ドゥーエ「さあ、こっちよ」

チンク「ドゥーエ姉様!」

チンクが案内しようとするドゥーエを呼び止める

チンク「ドゥーエ姉様は本当にAIDAに取り憑かれてしまったのですか?」

ドゥーエ「早く来なさい」

ドゥーエは無視して奥へと進む

なのは「」

なのは達も警戒しながらも奥へと進む

機動六課 安置室

ヴィヴィオ「」

ヴィヴィオは今、カイトが入った棺桶がある安置室にいる
そしてモニターを展開し何かを見ているようだ

シャマル「ここにいたの？ヴィヴィオちゃん」

ヴィヴィオ「シャマルさん」

ドアからシャマルが入って来る
何故、待機を命じられたシャマルが居るかと言つと六課が待機場所
だったからだ

シャマル「何を見てるの？これは」

シャマルがヴィヴィオが見ているモニターを覗くと映っているのは
大軍のAIDAを相手に苦戦している空戦・陸戦チーム

ヴィヴィオ「みんな、大丈夫かな？それにママ達も」

シャマル「そうね」

シャマルはどう言うべきか迷う

”大丈夫”と言うべきなのだろうが映像を見る限り、誰が見ても大丈夫ではない

空戦・陸戦チームは苦戦、なのは達は通信が繋がらないヤバい状況だ

そんな中

ヴィヴィオ「カイ兄」

ヴィヴィオはカイトの前に立ち、手を合わせる

ヴィヴィオ「カイ兄 ママを みんなを助けて」

ガタガタガタ！

ヴィヴィオがそう願うといきなり棺桶が激しく揺れ出す

シャマル「これは!？」

背面都市マグニ・ファイ 階段

なのは「 まだ、着かないの? 」

今、なのは達はドゥーエに案内され階段を登っている最中、なのは少し疲れてきたようだ

フェイト「大丈夫、なのは? 」

チンク「情けないぞ? この程度の階段で」

なのは「うっっ」

自分より小さいチンクに言われ何も言い返せないなのはまあ、戦闘機人の体力は普通の人の倍はあるから言われてもそのまま落ち込む必要はないのだが

ドゥーエ「着いたわ」

はやて「ここは」

なのは達が階段を登り終え着いた所はなにもない中央広場辺りを見渡していると

ヘルバ「ようやく来て頂けましたか」

フェイト「ヘルバ! 」

いきなり中央からヘルバが現れる

はやて「悪の親玉が直々にお出ましちゅう訳かいな」

ヘルバ「悪の親玉」とは聞こえが悪いですね？まあ、いいでしょう。あなた方を見る限りですと蒼炎の守護神は間に合わなかったようですね？」

ヘルバはなのは達を見ながらそう言う

なのは「それが狙いのくせに」

なのははそう言いながらヘルバを睨みつける

ヘルバ「いえいえ、私としては非常に残念なのですよ。カイト「グ
ランツには見て欲しかったのですがね 冥王の復活する瞬間を」

なのは「えっ！？まだ復活していないの？」

予想外なことに驚くなのは

ヘルバ「ええ。準備は終わりましたので、後は発動させるだけです
よ」

フェイト「（なのは、はやて、チンク）」

はやて「（わかつとる。これはチャンスかもしれへん）」

なのは「（うん そうと決まれば）」

念話で話し合い、デバイスを握りしめるのは達

ヘルバ「言っておきますが今ここで私を倒そうと考えていられるのなら止めていただきたい」

「!？」

まるで聞いていたかのようになのは達の考えを当てるヘルバに驚く

ヘルバ「せめて、あなた方には見せて差しあげたいのですが？」

フェイト「ふざけるな！そんなことはさせない！」

はやて「その通りや！ヘルバ！エルデイ、あなたを拘束します！」

そう言うとなのは達はデバイスを構える

ヘルバ「仕方ありません。ドゥーエ」

ドゥーエ「はい」

ヘルバに呼ばれ直ぐ隣に移動するドゥーエ

チンク「ドゥーエ姉様!？」

ヘルバ「死なない程度に痛めつけてあげなさい。なんなら腕の一本や二本ちぎり飛ばしてもかまいません」

ヘルバは笑いながらそう言う

ドゥーエ「了解しました」

そう言うとドゥーエの爪型の武器を装備
さらに体の回りにはAIDAを纏っている

チンク「姉様」

ザシュ！！

チンクが呟いた瞬間に何かを貫いた音がする

ヘルバ「これは 何の真似です！」

ドゥーエ「」

なのは「えっ！？」

はやて「どういうことや？」

なのは達が見たものはヘルバの腹部を貫いているドゥーエだった

ドゥーエ「元からあなたの配下になるつもりは毛頭ないわ。私は待
っていたのよ、あなたを殺すときをね」

チンク「ドゥーエ姉様！」

ヘルバ「ふっふっ、あーはははは！」

チンクがドゥーエの行動に笑みを浮かべると急に笑い出すヘルバ

ドゥーエ「何がおかしいのかしら？」

ヘルバ「いえ。まさかここまで予想通りになるとは思っていません。たもので、ね！」

ズバツ！

ドゥーエ「ぐっ！？」

チンク「姉様！？」

ヘルバが言い終えた瞬間、ヘルバの体は黒い泡となり、そして直ぐ隣にヘルバが現れ、ドゥーエを斬り飛ばす

チンク「姉様、大丈夫ですか！」

チンクはヘルバに斬られたドゥーエの下へ向かう

ドゥーエ「平気よ」

ヘルバ「ほう？AIDAを使って私の斬撃を防ぎましたか。惜しい人材に裏切られました。非常に残念に思います」

ドゥーエ「裏切るとわかっていたくせによく言っわね？」

ドゥーエはそう言いながら立ち上がる

ヘルバ「ふふふ、それは、さておきそろそろ始めましょつかね？」

フェイト「させない！バルディッシュュ！」

BD『ソニックムーブ』

ガキーン！

フェイト「くっ！」

ヘルバ「ふふふ」

フェイトの高速移動魔法でヘルバの目の前に移動し攻撃するもAI
DAが盾になり防ぐ
フェイトは間合いを開けるため後ろに下がる

ヘルバ「それでは皆さん、着いてきて下さいね」

ヘルバがそう言った瞬間、居なくなってしまう

リインフォース「どうやらあの中央に転送装置があるようです」

ドゥーエ「その通りよ、さあ早く行くわよ」

なのは「そうだね、行いっしょ！」

ドゥーエ「」

チンク「ドゥーエ姉様？」

歩き出そうとしたドゥーエがいきなり止まり疑問に思うチンク

ドゥーエ「いいえ 何でもないわ」

なのは達はヘルバを追うため転送装置に入る

フェイト「ここは」

リインフォース「すごいですね」

はやて「神秘的やな」

転送されたところは薄暗い洞窟のようなところ

地面は土ではなく砂地だ

奥へと進むとそこには湖の中心に白銀に輝く大樹があった

ドゥーエ「ここは”死世所エルディ・ルー”死者の国へとつながる湖がある所よ」

なのは「それじゃあの大きな木は？」

ドゥーエ「名前は”フラドグド”ヘルバから聞いた話ではあの木が

枯れたときこの世の終わりと言われていたらしいわ」

なのは「そうなんだ あれ？」エルディ・ルー”って」

なのははこの場所の名前に疑問を持つ

フェイト「ヘルバの名前が入ってるね」

チンク「何か関係があるのだろうか？」もちろん、ありますよ」！
「？」

全員が声が聞こえた方を向く

そこには魔剣・ガルバジーングを持ったヘルバだった

ヘルバ「私はここで生まれたのでこの名前を拝借したのです」

はやて「」ここで生まれた”やって!？」

ヘルバ「ええ。ですが、この話はまたいづれ話しましょう。今は冥王復活をお見せする方が先ですね」

ヘルバがそう言うところの石碑が現れる

決戦！ 復活と反撃

石碑を見たドゥーエは顔色を変える

ドゥーエ「あれは”冥王の石碑”！急いで！あれに魔力を注がれたら冥王が復活しちゃっわ！」

なのは「うん！フェイトちゃん！」

フェイト「行こう！」

なのは達は急いでヘルバの所へ向かう

ヘルバ「させません。”デモンズハンド”」

チンク「なっ!?!」

はやて「しもつた!?!」

無数の黒い手がなのは達を襲い捕まえる

なのは「うっっ、びくともしないよ!」

フェイト「また、喰らっちゃうなんて」

ヘルバ「そこでゆっくりとご覧になって下さい」

ヘルバはそう言うと石碑の方を向く

はやて「前回もせやっただけど何で魔法が発動しないんや？」

リインフォース「恐らくこの黒い手は魔法を封じる能力を持っていると思われます！」

チンク「くっ！我々はただ見ていることしかできないのか！」

なのは達は身動きができず悔しがっているとヘルバはガルバジグを天にかざす

なのは「なにつ！この感じ？」

はやて「すごい量の魔力があのかに集まっとる！」

ドゥーエ「あれは今まであなた達がA I D Aに取り憑かれたときに吸収された魔力よ」

フェイト「あんなに」

あまりの魔力に唾然としているなのは達

ヘルバは大量の魔力を纏ったガルバジグを石碑に向ける

ヘルバ「古来より封じられし冥王の力よ その姿を現し君臨せよ！

”冥王ケルヌノス”！！」

ヘルバがそう唱えるとガルバジグを纏っていた魔力は石碑に移る
そして石碑は湖の中に落ちていってしまった

しばしの沈黙

ゴゴゴゴッ！

するといきなり地響きが鳴り響く

リインフォース「主！湖の方から強力な魔力反応です　しかもさっきの集められた魔力の倍以上あります！」

はやて「なんやて！？」

フェイト「みんな、あれを見て！」

フェイトの視線の先を見てみると湖に黒い影が現れる

そして

「オオオオオオッ！」

なのは「何　あれ　」

はやて「まさか　あれが　」

現れたのは単眼の巨神

芋虫のような灰色の体

体中には棘のついた金属の輪を無数にまいている
なのは達はあまりの恐ろしさに言葉がでない

ヘルバ「これが”冥王ケルヌノス” 想像以上の力ですね」

ヘルバも驚いた表情を見せたが直ぐに笑みをこぼす

ケルヌノス「」

ケルヌノスはまるで何かを探すかのように辺りを見渡す

ケルヌノス「我を蘇らせた者はどいつだ？」

ヘルバ「この私ですよ。冥王ケルヌノスよ！」

ケルヌノス「」

ヘルバがそう言うとケルヌノスは品定めをするかのようにジロジロと見る

ケルヌノス「そうか 我を蘇らせて何が望みだ？」

ヘルバ「話が早くて助かりますよ。あなたの力をお借りしたいのです。まず手始めにあそこにいるお嬢さん達を消してもらいたい」

フェイト「なっ!?!？」

チンク「ヤバいぞ!」

ケルヌノスはゆっくりとなのは達を見る

ケルヌノス「よかるう」

ケルヌノスは拳を作り振り上げる

なのは達はヘルバの魔法によつて身動きが取れない
絶体絶命の危機

なのは「くっ」「ぐあああ！？」えっ！？」

身構えた瞬間、いきなりヘルバの叫び声が聞こえる

見てみるとそこにはケルヌノスに握り締められているヘルバが居た

ヘルバ「これは どういう つもり だ！」

ケルヌノス「貴様ごときに我が従う訳がなかるう？身の程を知れ、
小童」

ヘルバ「貴様！ ガルバジীগ！」

G Z 『 『

反撃しようとするがガルバジীগが反応しない

ヘルバ「何故だ！何故反応しない！？」

ケルヌノス「ほう？その剣」

ヘルバの持っている剣に興味を示す

ヘルバ「くっ！現れる 邪悪なる無数の刃 目の前の敵を撃ち抜け
”デモンズブレイド”！」

ドドドドガンー！！

ヘルバの回りに無数の魔力刃が現れ、一斉射撃する
当たった瞬間、爆散し煙がたつ

ケルヌノス「
」

フェイト「あれを喰らって無傷！？」

ドゥーエ「ありえないわね」

ヘルバ「 あっ！ 」

ヘルバの持っているガルバジীগをもう一つ空いている手で奪い取る

ケルヌノス「ほう これは我が体の一部から作ったものか？私に
共鳴している むっ？プロテクトがかかっているな はあ！」

ケルヌノスがガルバジীগに魔力を流し込む
するといくつかの部品が外れる

それだけではなくみるみるうちにケルヌノスに見合う程の大きさ
になる

それを見たなのは達は驚きを隠せない
それはヘルバも同じだった

ケルヌンノス「なかなかの業物だな」

ケルヌンノスは大きくなったガルバジグを見てそう言った

ヘルバ「貴様ああ!!」

いきなりヘルバが叫び出す

すると回りにAIDAが現れ、ヘルバの右手に集まり剣状に変わる

チンク「AIDAにもあんな使い方が!?!」

ケルヌンノス「ほう?」

ケルヌンノスは興味津々にヘルバを見る

ヘルバ「化け物め!くらいなさい!」

ヘルバはAIDAの剣をケルヌンノスに斬りおろす

ケルヌンノス「」

ケルヌンノスに反応がない

なのは「倒したの?」

なのはがそう呟くが

ケルヌンノス「なかなかの一撃だ。我を蘇らせたことはある」

フェイト「効いてない?」

ヘルバ「そんな バカな」

あまりにの強さに愕然とするヘルバ

ケルヌノス「貴様の使っているその力が欲しくなった。だから貴様を吸収してやるう」

ヘルバ「何っ!? ぐわあああ!!」

ケルヌノスが力を入れた瞬間、ヘルバは叫び出す

はやて「なんや!?!」

リインフォース「ヘルバの魔力とAIDAがケルヌノスに吸収されています! このままではヘルバは死んでしまいます!」

チンク「何!?!」

フェイト「どうして?」

ドゥーエ「当然だわ。今、ヘルバの体はAIDAによって動いているのよ そのAIDAが無くなってしまえば」

リインフォース「それは私と同じ現象と言っことですね?」

ドゥーエ「そうよ AIDAが無くなってしまえばしかばっ」「ドゥーエ姉様!」

いきなりチンクがドゥーエに呼びかける

チンク「それはもしかしてドゥーエ姉様も同じという訳なのか？」

ドゥーエ「 ええ そうよ。私もAIDAが無くなれば屍とかすわ」

なのは「ええっ!？」

フエイト「そんな!？」

なのは達はそれを聞いて驚いてしまう

ドゥーエ「何でそんなに驚くのかしら？ 私は何人も人を殺し罪を犯した犯罪者なのよ？喜びはすれど驚くことはないんじゃない？」

なのは「そんなことない！」

フエイト「そうだよ！それに罪を犯したのなら償えばいい」

はやて「せや！償えば必ず救われる。それにウチらも手伝っ！」

チンク「だからそんなこと言わないで下さい ドゥーエ姉様」

ドゥーエ「!？」

なのは達の言葉を聞いて黙り込む

だがその瞬間、黒い手が消えてしまう

チンク「消えた？」

なのは「何で？」

黒い手、ヘルバの”デモンズハンド”が消えたことに驚くのは達

ドゥーエ「恐らくヘルバが」

ドゥーエがそう言うとヘルバを握り締めているケルヌノスの方を
向く

なのは「そんな」

ケルヌノスに握り締められて足掻いていたヘルバはピクリとも動
かない

ケルヌノス「ふん！」

ケルヌノスはヘルバをなのは達めがけて投げる

そしてヘルバは体から光の粒子が出て最後には消えてしまった

リインフォース「これは」

チンク「くっ」

あまりのことに言葉を失う

ケルヌノス「これがAIDAかなるほど良い力だ。気に入った」

はやて「酷すぎる」

ケルヌノスの非道い行動にデバイスを強く握りしめるはやて

なのは「許せない フェイトちゃん！」

フェイト「わかってる やろう！」

ドクン！

なのはとフェイトの雰囲気は急に変わる

ケルヌノスもそれに気づき二人の方を向く

ケルヌノス「碑文使い」か」

なのは「私にみんなを護るための力を」

フェイト「来い！私はここにいる」

なのは「イニス」！」

フェイト「スケイス」！」

叫んだ瞬間、水色と赤色のオーラを纏う

ドゥーエ「この力は！？」

初めて憑神を見て驚くドゥーエ

ケルヌノス「第一段階か まあ暇つぶしにはなるか」

なのは「ケルヌノス！あなたは私達が倒す！」

フエイト「行くぞ！」

はやて「ウチらは二人の援護にまわるで！」

リインフォース「はい、主」

ドゥーエ「わかったわ」

チンク「了解した！」

外

Heleen「\$\$\$\$」

シグナム「ぐっ」

ヴィータ「シグナム！うわっ！？」

Oswald「ssssssss」

なのは達がケルヌノスと激闘を繰り広げている頃
シグナム達はかなりヤバい状況に陥っている
今となつては空戦、陸戦関係なくAIDAに攻め込まれていた
さらに現在戦える状態であるのはシグナムとヴィータのみ
そんな二人もHeleenとOswaldに押されている

ヴィータ「シグナム！後ろだ！」

Oswald「ssss」

気づくのが遅くOswaldはシグナムの目の前に現れ攻撃しようと振りかぶっている

シグナム「ここまでか」

「諦めるにはまだ早いよ！」

Oswald「ssss」

「!?!」

目の前にいたOswaldがいきなり蒼い炎に包まれ消滅する

Helenn「\$\$\$\$\$」

Anna「\$\$\$\$\$」

そして回りにいたHelennとAnnaが次々蒼い炎に包まれ消滅していく

スバル「あの蒼い炎は」

ティアナ「ええ もしかしくなくても」

全員声が聞こえた方向を向く

カイト「みんな無事か？」

「カイト（さん）／兄さん！！」

そこには双剣を持ち、みんなを優しい笑顔で見ているカイトであった

カイト「元気良く返事しているし大丈夫だね。シグナム、今の状況は ってなんだか格好変わってない？」

アギトとユニゾンしたシグナムのバリアジャケットを見てそう思うカイト

シグナム「ふっ 相変わらずだな 私達はこのAIDAの駆除をしているのだが一向に減る気配がない あの黒い空間のせいだな」

カイト「なるほど、あの黒い空間を破壊すればAIDAは増えなくなるんだね？」

ヴィータ「でもよ、Oswaldの系のせいで近づけないんだ」

カイト「あつ、ヴィータ！ あれ、ヴィータも少し変わってるね？まるで脱色したリンゴのように真っ白だ」

リンとユニゾンしたヴィータのバリアジャケットは服装は変わっていないが色が赤から白に変わっている

ヴィータ「誰が脱色したリンゴだ！」

カイト「ははは ごめんごめん」

ヴィータ「お前わかってないだろ／＼／」

シグナム「それでどうするのだ？」

カイトはヴィータの頭を撫でながら謝る

ヴィータは文句を言いながらも嬉しそうだ

そんな二人を見て怒りを感じるシグナム

だが怒っている場合ではないので睨みつけながらカイトに相談する

カイト「とりあえず、みんなは回りにいるAIDAを駆除してくれ

あの黒い空間は僕が倒す」

シグナム「ああ、わかった！」

ヴィータ「頼むぜ！」

カイト「うん！」

二人にそう言われたカイトは双剣を強く握り締めて猛スピードで黒い空間に向かう

カイト「蒼炎舞」

目の前にOswaldの糸を確認すると直ぐに蒼炎を纏う

カイト「邪魔だ！」

カイトは糸を気にせずそのまま直進する

糸は蒼炎により燃えてしまったため絡みつくことはなかった

Oswald「ssss」

無駄だとわかったOswaldはカイトに襲いかかる

カイト「蒼炎”夢幻繰武”！」

Oswald「ssss」

襲いかかって来たOswaldはカイトの夢幻繰武により斬りきざまれ消滅する

Oswald「ssss」

カイト「はあああ！」

次々とOswaldが襲ってくるがカイトはもろともせず倒す
そしてカイトは黒い空間の前にたどり着く

だが

「φφφ」

ウエンディ「何スかあれ？」

セイン「Annaみただけど」

ディエチ「けど色が違う」

現れたのはAnnaの形をしているのだが色は灰色ではなく薄緑色だった

カイト「時間がないから速攻で終わらせる！はあああ！」

「
φφφ」

カイト「”三爪炎痕”」

炎を纏った三爪の斬撃が黒い空間ごと現れたAIDAを斬りきざんだ

「
φ φ φ」

現れたAIDAは黒い空間ごと消滅した

カイト「よし！「グランツ！」ん？どうした？」

シグナム「さっきのAIDAは何だったんだ？」

カイト「あれは”Gate Keeper”だ」

ヴィータ「あれがか？」

カイト「アウラから聞いたと思うけど、あれはAnnaと同じ位のカシかないが自分以外のAIDAを出現させ操ることができる能力があるんだ」

デイド「あの黒い空間はあのAIDAが出していたものなんですね？」

オットー「」

カイト「その通り　　うわっ！？オットーにデイドー！いきなり現れるないでよ！」

後ろから現れる二人に驚くカイト

カイト「って、こんなことしてる場合じゃなかった。早くなのは達の所へ行かないと！」

シグナム「待て、グランツ！」

カイトは背面都市マグニ・フィがある闘竜マグメルドに向かおうとするがシグナムが止める

カイト「なに？」

シグナム「アウラからの伝言だ　”再誕の力は使つな”だそうだ」

カイト「　　善処するよ」

カイトは苦笑しながら答える

ヴィータ「カイト！はやて達を頼んだぞ！」

カイト「任せて！みんなは残ったAIDAを頼んだよ！」

さっきとは違いはつきりと答えてカイトはなのは達の下へ向かった

スバル「行っちゃったね？ティア」

ティアナ「そうね」

こっちに挨拶もなしに行ってしまったカイトを怒っているティアナ

セイン「オットーとディードはちゃっかり喋って、ずるいな」

キャロ「こっちに気づかなかつたのかな？」

エリオ「いや 時間がないからだと思うんだけど」

ティアナ「とにかく！カイトが帰って来たらじっくりと話を聞かせてもらおうわ！」

スバル「ははっ そうだね なのはさん、カイト頑張ってる」

カイト達の無事を祈る

死世所エルディ・ルー

カイトが復活した中、なのは達はケルヌンノスと激闘を繰り広げていた

なのは「デイベイ〜ンバスター！」

フェイト「ハーケンセイバー！」

ドガン！

ケルヌンノス「

なのはとフェイトの攻撃はあたりはするもののダメージを与えていないようだ

はやて「行くで！リインフォース！」

リインフォース「はい！」

はやて・リインフォース「ラグナロク！」

ドガン！

ケルヌンノス「

はやてとリインフォースのS級砲撃魔法も全く効いていない

なのは「くっ」 惑乱の塵気楼”！」

キイイイン！

ケルヌンノス「むっ！？」

なのはの”惑乱の塵気楼”でケルヌンノスの動きを止める

フェイト「環伐乱絶s「ガアアア！」キャツ！？」

なのは「フェイトちゃん！」

フェイトが攻撃しようとしたがケルヌンノスの咆哮により吹き飛ばされる

ケルヌンノス「効かぬわ！愚か者共め。この力の差がわからぬか？」

なのは「くっ」

ケルヌンノス「それに”碑文使い”の貴様らもとんだ期待はずれだ。まだ第一段階で我に挑んでくるとはな」

フェイト「第一段階？」

何のことがわからないフェイト

ケルヌンノス「そんなことも知らんのか？ますます期待はずれだ」

そう言いながらドゥーエの方を向くケルヌノス

ケルヌノス「貴様の中にAIDAがあるな？」

ドゥーエ「それがどうかしたかしら？」

ケルヌノス「貴様のAIDAをもらい受けよう」

ブワァ！

ドゥーエ「なっ！？」

チンク「ドゥーエ姉様！」

ケルヌノスの巨体に見合わない速さでドゥーエを捕まえる

ドゥーエ「あああ！？」

その瞬間、ドゥーエは叫び声をあげる

ヘルバのときと同じ状態だった

チンク「ドゥーエ姉様、今助け「止めなさい！」「！？」

ドゥーエ「いいのよ。これで」

はやて「何言ってるんや！？」

なのは「そうですよ！このままじゃドゥーエさん」

ドゥーエ「いいのよ。私は元々死んでいた存在　それがただ元に戻るだけよ」

ドゥーエは笑いながらそう言う

ケルヌンノス「良い心がけだ。なら　さっさと逝け！」

ドゥーエ「あああ！？　最後に姉妹達に会えて嬉しかったわ」

チンク「姉様！」

「だから諦めるにはまだ早いなだよ！」

みんなが諦めかけた瞬間一人の男の声が響き渡った

決戦！ VSケルヌノス

ズバツ！

ケルヌノス「なっ！？」

声が聞こえた瞬間ドゥーエを掴んでいた右手を手首辺りから一刀両断されている

そして切り口には蒼い炎が燃えついている

カイト「はあ 何で僕の友達はネガティブな人が多いのかな」

なのは「カ カイト君！？」

フェイト「治ったの！？」

カイト「話は後 まずは 無事かな？ドゥーエ」

カイトはドゥーエの居るところへ向かい様子を伺う

ドゥーエ「これが 無事に 見えるのかしら？」

チンク「姉様喋らないで！」

途絶え途絶えに答えるドゥーエ

かなりの重体のようだ

カイト「待ってて、今助けるから」

そう言いながらドゥーエの頭に触れようとする

パシン！

ドゥーエ「止めなさい！」

ドゥーエはカイトの手を振り払う

フェイト「ドゥーエさん、何を!?!」

ドゥーエ「私はここで死ぬ。邪魔はさせないわ」

なのは「何を言ってるんですか!」

ドゥーエ「さっきも言ったはずよ？私は罪を犯した者。そんな私が生きていて良いはずがないわ」

はやて「ウチらもさっき言ったはずやで？ウチらが力になるって」

ドゥーエは下を向く

ドゥーエ「これは私なりの”けじめ”なの」

フェイト「”けじめ”って」

ドゥーエ「これだけは譲れないわ　あなた達のその思いやり　嬉しかったわ　それに」

ドゥーエは隣にいるチンクを見る

ドゥーエ「最後に 大切な妹に会えて嬉しかったわ」

チンク「ドゥーエ 姉様」

ドゥーエの言葉に涙を流すチンク

カイト「ふざけるな！」

ドゥーエ「えっ!?!」

カイト「蒼炎の光」!

感動的な雰囲気を一瞬にして破壊するカイト
そしてドゥーエの失い欠けていた生気が蘇ってくる

フェイト「カイト!それは」

はやて「」

”蒼炎の光”がどんな能力でどんなデメリットがあるかを知っているフェイトは心配そうな表情をする
はやては何も言わずただ見ていた

はやて「これで”二回目”やな」

カイト「わかってる「待ちなさい！カイト！」」

ドゥーエは怒声でカイトを呼ぶ

ドゥーエ「どうして 私を死なせてくれなかったの？」

カイト「」

ドゥーエ「答えなさい！」

ドゥーエは黙り込むカイトに睨みつける

カイト「ドゥーエ 君は確か 自分は”罪を犯した者”と言っていたね？」

ドゥーエ「そうよ」

カイト「そんなお前は既に死んでいる！」

ドゥーエ「え？」

カイトは両腕を組みながらはつきりとそう言う（ の拳のパクリではないです）

カイト「君の妹達から聞いたよ。君はJS事件とやらで戦死したらしいね？だったらそのときのドゥーエはいないと言う事になる」

ドゥーエ「それは」

カイト「それにドゥーエは妹達に会えて嬉しかったんだろ？それはチンク達も一緒 でしょ？」

カイトはチンクにそう聞く

チンク「その通りだ 私達姉妹はみんな、あなたに死んで欲しくない！」

カイト「だそうだよ。今の君は”罪を犯した”ドゥーエでなく、”妹達を誰よりも愛している”ドゥーエなんだ」

ドゥーエ「」

カイト「それでも死にたいと言うならば勝手にすればいい 僕が必死に止めるけどな」

カイトは笑顔でドゥーエに言う

ドゥーエ「ふう〜、そんなこと言われちゃね」

チンク「それじゃあ！」

ドゥーエ「生きるわ。そして待っている妹達に会うために」

ドゥーエはケルヌノスの方を見る

カイト「うん、そのために 奴を倒す！」

なのは「うん そうだね！」

フェイト「ケルヌノスを倒そう！」

張り切るなのはとフェイト

カイト「　なのは、フェイト」

カイトは二人の前に出て二人を止める

なのは「えっ　」

フェイト「どうしたの？カイト」

カイト「悪いとは思うけど、ここは僕一人で奴と戦う」

「!？」

カイトの言葉にその場にいる全員が驚く

はやて「何言うとるんや、カイト君！」

なのは「そつだよ！無茶だよ！」

カイト「正直言って奴の強さは下手したら僕より上かもしれない」

フェイト「だったらなおさら、みんなで戦った方がいいよ！」

カイト「みんなは奴に少しでもダメージを与えられた？」

なのは「それは」

実際全くダメージを与えられていない

カイト「さっきの一撃だつて不意打ちだったから斬れたんだ」

フェイト「でも」

カイト「お願い！僕を信じてくれ！」

ドワーエ「私は信じるわ。ねえ、チンク？」

チンク「はい！私も信じます！」

なのは「ちよつと二人とも！？」

信じると言い出す二人に驚く

リインフォース「主。私もカイトを信じたいのですが」

はやて「なっ！リインフォースまで何言つとるんや！」

リインフォース「私は自分を絶対的絶望から救ってくれたカイトならやってくれると思っっているんです！」

フェイト「 うん！私も信じるよ、カイト！」

なのは「フェイトちゃん!？」

あの心配性のフェイトが同意することに驚くのは

フェイト「私もカイトに救ってもらった だから、なのはもカイトを信じてみよう?。」

なのは「 そうだね カイト君ならやってくれるよね 」

はやて「 はあ しゃあない けどなカイト君、ヤバくなったら無謀でも助けに行くかで?。」

はやては観念しカイトの意見に同意する

カイト「うん ありがとう!。」

カイトはケルヌノスの前に立つ

カイト「待たせたね」

ケルヌノス「お別れの挨拶は済んだようだな?。」

カイト「そんな必要ないよ。だって僕は 」

ボワア！

カイト「お前を倒して、みんなの下に帰るからさ！」

カイトは蒼炎を纏い構える

ケルヌノス「良い度胸だ カアッ！」

ドーン！

ケルヌノスは口から衝撃波を放つ

カイトは難なくそれを避ける

カイト「蒼炎球！」

カイトは避けながら蒼炎をケルヌノスに放つ

ケルヌノス「むっ！」

ドカドカーン！

カイトの蒼炎球は全弾命中する

ケルヌノス「」

だがケルヌノスは左手で防いでいた

カイト「やっぱり右手がないときついようだね？」

ケルヌノス「ぬっ？　そういえばそうだったな？」

ズボツ！

ケルヌノスがそう言うのと右手首辺りからAIDAが現れ居なくなった瞬間、なかった筈の右手が再生している

チンク「何だと!？」

ドゥーエ「再生能力　そんな能力が」

ケルヌノス「まさか、この程度の事で驚いた訳はなかるうな？」

ケルヌノスはニヤリと笑いカイトを見る

カイト「当然さ!」

ケルヌノス「ならば良い」

ケルヌノスはガルバジークを振り回す

カイト「当たらないよ!」

ケルヌンノス「ならば、これでどうだ？」

ブオワア！

ケルヌンノスはガルバジークを地面に叩きつけ砂埃を発生させる

カイト「くっ！目隠しか！」

その砂埃のせいでカイトはケルヌンノスを見失う

カイトは砂埃の中無闇に動けず警戒していると

ガキイン！

いきなり横からガルバジークが現れカイトを襲う
だがカイトはなんとか双剣で受け止める

カイト「うわぁ！？」

ドガン！

しかし、力の差がありすぎたためカイトは吹き飛ばされ壁に激突してしまふ

ケルヌンノス「ガアアアア”ドゴン!”むっ?」

ケルヌンノスは追い討ちをかけようと振りかぶるが、ガルバジークが大きすぎるため天井にガルバジークが刺さってしまう

カイト「蒼炎”舞武”!」

カイトはその隙を見逃さずケルヌンノスの懐に潜り込み斬りきざむ

ケルヌンノス「ぐはあっ!?!」

効いたらしくケルヌンノスは後ろに下がる

カイト「どうやらここで戦うには狭いようだね?このまま、一気に終わらせる!」

カイトがそのままケルヌンノスに突っ込む

ケルヌンノス「そうはさせん!」

ケルヌンノスの手からOswaldの糸が吐き出されカイトを捕まえる

カイト「くっ!燃えないし、引きちぎれない!?!」

ケルヌンノス「その糸は通常の何百倍も強化した糸だ 貴様なら後、数秒で逃れるだろうが、それだけあれば十分だ」

ケルヌンノスがそう言つと湖の中に入ろうとしている

カイト「お前、まさか!？」

ケルヌノス「貴様に”死者の国”に連れて行ってやるっ」

なのは「カイト君!？」

カイト「うわあああ!？」

カイトは湖の中に引きずり込まれてしまった

数分後

はやて「どっなってるんや?。」

フェイト「上がってくる気配がないよ!？」

カイトが上がって来ないことに慌て始める

リインフォース「落ち着いて下さい、主。カイトの反応は消えていません!。」

はやて「どっいっつとや?。」

リインフォース「恐らくこの湖の下に広い空間があるのだと思います!。」

なのは「なるほど！カイト君はそこでケルヌノスと戦っているんだね？」

ドゥーエ「なら急ぎましょう。カイトが危ないかもしれないわ！」

フェイト「うん！行こう！」

なのは達はカイトを追うため湖の中へと入っていった

なのは達が湖の中へと入った頃

カイト「はあ はあ」

ケルヌノス「どうした？もう終わりか？」

カイト「まだまだ！」

現在カイトとケルヌノスが戦って居るところは湖の下にあるとは思えない

辺りは地面もなく、ただ大きな浮遊城が立ちそびえている

カイト「“蒼炎流星弾”！」

カイトは無数の蒼炎の塊を出現させケルヌノスに放つ

ケルヌノス「無駄だ “魔風”！」

邪気に包まれた風によって蒼炎が消えてしまう

カイト「きりがない」*ssss*「なっ!?!」

いきなりカイトの背後からH e l e nが現れる

O s w a l d「\$\$\$\$」

A n n a「\$ \$ \$ \$」

カイト「なにっ!?!」

H e l e nだけではなく他のA I D Aも現れる

カイト「どういつつもりだ?」

ケルヌノス「いささか飽きた。貴様はそいつらと遊んでいろ」

カイト「お前はどつするつもりだ?」

カイトはケルヌノスを睨みつける

ケルヌノス「適当にいろんな星を壊して廻る」

カイト「そんなこと させるかあああああ!」

カイトはケルヌノスに突っ込む

しかしその行く手をA I D A達が遮る

カイト「邪魔だ!」

カイトはA I D Aを次々と倒して行くが数が全く減らない

カイト「くそっ！」

いつものカイトらしくなく焦りを見せる

カイト「早くあいつを倒さないと」「ディバインバスター！」 !?」

いきなり桜色の光弾がカイトの前にいたA I D Aを蹴散らす

「プラズマザンバー！」

A I D A「ssss」

さらに金色の光剣がA I D Aをなぎはらう

カイト「なのは！フェイト！」

攻撃が飛んできた方を見るとそこには憑神状態のなのはとフェイト
だった

なのは「カイト君！ここは私達に任せて！」

フェイト「カイトはケルヌノスを」

カイト「けど」「いいから行かんかい！」」

スパーン！

カイト「へぶしっ!?!」

いきなり上からはやてのハリセンチョップがカイトに炸裂

はやて「今、カイト君がしなければあかんのはAIDAを倒す事じゃなくケルヌノスを倒す事や。こんな所で油売っている暇はないんやで?」

カイト「それは」

はやて「カイト君はウチらの いや、みんなの想いを託しているんや!」

カイト「!?!」

カイトははやての言葉に何かを気づく

カイト「くくくっ あはははは!」

なのは「カイト君?」

いきなり笑い出すカイトに戸惑う

カイト「ごめんごめん ちょっと慌て過ぎていたみたいだ ここは任せるよ」

フェイト「うん」

はやて「任せとき」

カイトは返事を聞いた後、直ぐにケルヌノスの下に向かう

カイト「待て！ケルヌノス！」

カイトはケルヌノスの前に立つ

ケルヌノス「貴様が 貴様にはもう用はない」

カイト「そっちにはなくてもこっちにはあるんだ！」

ケルヌノス「貴様にはわかってる筈だ。我と貴様の力の差が」

カイトはそれを聞いて目を瞑る

カイト「 だけど僕には譲れない” 想い” がある！」

ポオツ！

カイトの回りに蒼炎が発生する

カイト「僕の大切な仲間の” 想い” がここにある！」

ポポッ！

自分の手を胸に当てながら言つとさらに蒼炎が燃え上がる

カイト「そして その”想い”が僕を強くする！」

ポワァッ！

さらに蒼炎の勢が増す

それだけではなく、カイトの双剣がカイトぐらいの大きさに変化している

ケルヌノス「ほう」

カイト「行くぞ！」

カイトはケルヌノスに突っ込む

ケルヌノス「むんっ！」

ケルヌノスはガルバジークでカイトを突き刺そうとする

カイト「蒼炎”百花繚乱”！」

ケルヌノス「グオオオオ！？」

カイトの巨大化した双剣で何度も斬りつけケルヌノスを吹き飛ばす

カイト「まだまだ！蒼炎”虎輪刃”」

カイトが双剣を振り回すと同時に巨大な手裏剣が現れケルヌノスを突き刺さる

ケルヌノス「ガアアアア！」

ケルヌノスは突き刺さった手裏剣を抜き叫ぶ

ケルヌノス「どうやら、わかっていなかったのは我の方だったようだ」

カイト「はあ はあ」

どうやら両者ともかなりの力を使ったため疲れて来たようだ

ジャキーン！

カイト「それじゃあ、次の一撃で終わりにしようか？」

ガシャン！

ケルヌノス「良かろう」

互いに武器を構える

カイト・ケルヌノス「」

そしてお互いに睨み合い沈黙する

それはAIDAを倒し終えたなのは達も同じだった

カイト「蒼炎”三爪炎痕”！」

ケルヌノス「”ナイツオブデストロイ”！」

ガガガガ！

お互いの攻撃がぶつかる

ミシッ！

ケルヌノスのガルバジークにひびが入る

ケルヌノス「なんだと!？」

再誕く別れるとき

カイト「はあ はあ」

カイトは息を切らしながら浮遊城の上に降りる

ドゥーエ「カイト！」

チンク「大丈夫か？」

浮遊城で待機していたドゥーエとチンクがカイトの所へ向かう

なのは「カイト君！」

フェイト「カイト！」

AIDAを倒し終えたなのは達もカイトの所へ向かう

はやて「やったんやな？とうとうやったんやな？」

カイト「 いや、まだだ」

フェイト「 えっ？」

カイトがケルヌノスを倒したと思いき喜んでいたのだがカイトの言葉聞いて笑顔が消える

なのは「どういうこと？」

リインフォース「主！」

はやて「どうしたんや？」

リインフォース「はい 外への通信がつながるようになったので外
の状況を確認したのですが 沢山のAIDAがミッドチルダから
離れて行き違う世界を襲っています」

リインフォースの報告にカイト以外の全員が驚き青ざめる

ケルヌノス「くくくっ どうやら気づいたようだな？」

チンク「なっ!?!」

ドゥーエ「ケルヌノス！」

そこには壁に背をつけて倒れているケルヌノスがいた
その軀には三爪の傷痕が痛々しく残っている

ケルヌノス「貴様に吹き飛ばされた後、直ぐにAIDAをいろん
な世界に飛ばした」

はやて「何やて!?!」

カイト「」

ケルヌノス「さすがの貴様でも宇宙にある全世界に飛んだAID
Aを駆除するのは不可能だ！はははっ！」

カイトは黙ってケルヌノスの前に立つ

カイト「残念だったね、ケルヌノス。僕にはまだこの状況を打破する秘策が残っているんだよ」

カイトは何故かケルヌノスだけに聞こえるように喋る

ケルヌノス「なっ！？そんなこと 出来るわけが ……！？貴様、まさか！」

カイト「気づいたかな？」

ケルヌノス「貴様正気か？それを発動すればこの世界に何が起きるかわかっている筈だ？それを承知でやるつもりか？」

カイト「もちろんだ！」

ケルヌノス「面白い この先どうなるか、あの世でじっくりと見させてもらっぞ」

ケルヌノスがそう言つと塵となり消えてしまふ

チンク「今度こそやったようだな？」

フェイト「けど、まだ問題が ……」

ゴゴゴゴゴ！

なのは「何！？地震？」

いきなり浮遊城が いやこの空間が揺れ始める

カイト「ヤバい！ひとまず上に戻るぞ！」

カイト達は空間が崩れる中、急いで来た所から戻った

死所エルディ・ルー

なのは「ふう〜」

はやて「危機一髪やったな〜」

フェイト「そうだね、いきなりあの空間ごと崩れ出すなんて」

ドゥーエ「恐らくケルヌノスが死んだせいであの空間がおかしくなって壊れ出したんだと思うわ」

チンク「それよりも早く外に出た方が良いのでは？」

なのは「うん！急ごう、みんなが心配だよ」

なのは達は出口へと急ぐ

カイト「」

背面都市マグニ・ファイ

はやて「こちら、突入チーム 八神はやて。 応答して下さい」

無事に戻って来たカイト達は早速、本部に通信を繋ぐ

カリム「はやて！それに皆さんも！」

応答したのはカリムだった

しかし様子がおかしい

なのは「どうしたんですか？」

カリム「実は今、本部がA I D Aに襲われているのです！」

フェイト「そつ、そんな！？シグナム達はどうしたんですか？それに他の管理局や聖王教会人達は？」

カリム「騎士シグナムとヴィータは今もなんとか戦っていますがつまで保つかわかりません。それに管理局や聖王教会の大半は復旧した転送装置で他の世界に行っているのです」

はやて「それならしゃあないか みんな！急いで向K「ちよつと待つて！」 カイト君？」

カイトがはやてを止める

カイト「カリム。今いるAIDAの数は？」

カリム「えっ？あつ はい！Annaが15体、Heleenが10体、そしてOswaldが5体です」

フェイト「カイト！そんなこと聞いている場合じゃないよ！急いで行かないと」

カイト「いや、大丈夫だよ」

チンク「えっ？」

そう言うとカイトは蒼炎を纏う

なのは「どうするの？」

カイト「はやて！」

はやて「何や？」

カイト「三回目”使わせてもらっよ？”

はやて「なっ！？」

カイトの”三回目” それは蒼炎の光を使う最後の限度回数だ

カイト「蒼炎の 祝福”！」

カイトがそう言った瞬間、光り輝く蒼炎がまるで火山のように上空

に噴出される

ミッドチルダ 本部

ガキーン！

シグナム「ぐっ！」

ヴィータ「はあ はあ 畜生！後少しなのに」

現在シグナム達は無数のAIDAに囲まれている

シグナム「諦めるな！ まだチャンス が ！？」

ヴィータ「何だ これ？」

いきなり上空から蒼い光がまるで雪のように降り注ぐ

スバル「ティア！これ！」

ティアナ「ええ 何が起きてるのかしら？」

キャロ「でも、とても綺麗です！」

エリオ「うん、これ！？」

エリオが光に触れるといきなり輝きだす

ノーヴェ「うおっ!？」

ウエンディ「何スか、これ？」

それはエリオだけではなく、光に触れた人はみんな輝きだす

シグナム「これは」

ヴィータ「すげえ 怪我が一気に治っちまった」

リイン「それだけじゃなくて魔力も回復してるです」

アギト「何が起きてるんだよ!」

ジャキイン!

シグナム「考えるのは後だ。今の我々ならこの程度の数、相手ではない」

ヴィータ「おう!お前らもいけるな?」

ギンガ「はい!大丈夫です」

セイン「いつでもいけるよ！」

完全回復したシグナム達は再びAIDAに向かっていった

カリム「シグナム達だけではなく戦線を離脱していた他のメンバーも復帰した！そして次々とAIDAを倒しているわ！」

なのは「そうですか」

フェイト「よかった」

ホツと一安心する二人

はやて「カイト君！どういっつもりや！」

しかし、はやてはものすごい形相でカイトを怒鳴っている

カイト「ははは」

はやて「ははは”じゃあらへん！体は大丈夫なんか？それに約束が違うで！”

カイト「いやいや、僕は約束を守ったよ。むしろ、あれは”蒼炎の光”じゃないからノーカウントにしてくれてもいいくらいだよ」

カイトは笑いながら言う

なのは「それでカイト君　身体は平気なの？」

カイト「もちろん、平気s」嘘を言わないで下さい！」「うっ」

カイトが喋りきる前にリインフォースがユニゾンを解き割り込む

リインフォース「今のあなたの身体機能は約50%以上低下しています。それで平気なんてありえません！」

はやて「だそうやで？カイト君」

フェイト「何で嘘をつくのかな？」

なのは「少し頭冷やそうか？」

三人が黒いオーラを出しながらカイトに近づいて来る

カイト「いや　それね？え」と　えっ？」

かなり慌てていたカイト

だが、いきなり抱きついてきたなのは達に驚く

なのは「何で　カイト君はいつもそうなの？」

フェイト「みんなのためなら構わず自分の身体を痛めつけたりして」

はやて「もっと もっとウチらを信じたり頼ってくれたりしてもええやんか」

三人は泣きながらカイトに訴えかける

カイト「」

カイトはそんななのは達を優しく抱きしめる

カイト「ごめん 別に僕はみんなを信じたり、頼ったりするのが嫌という訳じゃないんだよ」

なのは「うん わかってる わかってるよ!」

フェイト「カイトは優しいから自分で何とかしようとするのは」

はやて「それでも ウチらを信じたり、頼ってくれてええんやで?」

カイト「うん」

カイトはそう言うつと優しくなのは達を離す

カイト「また 会うときにね?」

ブウン!

ドゥーエ「なっ!?!」

チンク「これは!?!」

いきなりなのは達の足元に魔法陣が現れる

リインフォース「主!これは強制転移魔法です!」

はやて「なんやて!?!」

フェイト「カイト!?!」

なのは「何をするの!?!」

なのは達はカイトの方を見る

カイト「今から全宇宙にいるAIDAを駆除する　そのためには
みんなが近くにいと　その　危険なんだ」

はやて「危険”って　また一人で背負う気なんか!?!」

はやては怒鳴りながら睨みつける

カイト「ごめん」

フェイト「謝らないでよ!なんで　なんで一人で決めちゃうの!」

フェイトは涙を流しながら言う

なのは「カイト君」

カイト「なに？」

なのは「また 会えるよね？」

カイト「直ぐには言えないけど 必ず！」

なのは「カイト君 絶対」

なのはが喋りきる前に転移されてしまう

カイト「うん 絶対」

カイトは誰もいない場所を見つめながら呟く

カイト「さあ 始めようか！」

ドクン！

カイト「来たれ 再誕！」

ドクンドクンドクン！

カイト「コルベニクウウウー！！」

カイトがそう言った瞬間回りは光に包まれる

ミッドチルダ

現在シグナム達は全てのAIDAを倒し終え集合したのは達の帰りを待っている

シグナム「これでAIDAは全て駆除したな？」

ヴィータ「ああ。後は、はやて達が帰って来るのを待つだけだな」

スバル「なのはさん カイト」

ティアナ「大丈夫よ、スバル！カイトやなのはさん達は無事に帰って来るわよ！」

エリオ「そうですよ！きっと！？皆さん、あれ！」

みんなが心配そうに待っているとエリオが何かを見つける

ギンガ「魔法陣！？」

キャロ「しかも転移魔法のようです」

シグナム達が警戒していると現れたのは

ヴィータ「はやて！なのは！フェイト！」

ノーヴェ「チンク姉！ドゥーエ姉も！」

魔法陣から現れたのはカイトに強制転移をされたなのは達だった

シグナム「主！リインフォース！テストロッサ！無事か？」

ヴィータ「みんな 無事のようにだな？」

シグナム達は直ぐに駆け寄りなのは達に怪我がないようで安心する
しかし、ある人物が居ないことにシグナム達は直ぐに気づく

エリオ「あれ？フェイトさん 兄さんは？」

キャロ「そういえば居ませんね？」

ティアナ「どうせ、どっかで油売ってんじゃない？」

スバル「あはは そうかもね」

なのは「」

スバル達はかなりお気楽気分

しかしなのは達は何も答えずただ俯いているだけだった

シグナム「 どうやら訳ありのようだな？」

ギンガ「皆さん 何があったんですか？」

なのは「 実はー」

なのは達は何があったのか詳しく話す

バンツ！

シグナム「そんなことが」

シグナムはなのは達の話聞いて思わず壁を叩きつける

ヴィータ「あのヤロー」

ヴィータは歯を食いしばりながらそう呟く

ノーヴェ「あのバカは何をするつもりなんだよ！」

チンク「わからん だが恐らく、アウラの言っていた”再誕”を使
うつもりなのは」

ディエチ「”再誕”って確か」

セイン「使わせるなって言われてたやつじゃん!？」

ゴゴゴゴゴゴ!

デイド「何!？」

オットー「世界が 次元が揺れてる」

まるで世界の終わりのように揺れ始める
しかしなのは達はこれが何なのか理解するのに時間はかからなかった

背面都市マグニ・フィ 中央広場

身体に紋様が描かれたカイトが居た
その紋様は蒼く輝いている

カイト「」

「やはり使ってしまうのですね?」

誰かがカイトの頭に直接話しかけてくる

カイト「アウラ うん、これしか手はなかったからね 止めに来たの?」

アウラ「いいえ、止めようとしてもあなたはやるでしょう?」
で

すが一つだけ　あなたはまた　自分の”影”と戦う覚悟がありますか？」

カイトはゆっくりと目を瞑る

カイト「正直　怖いよ？でも、次こそは、ちゃんと決着をつけられると思うんだ。今の僕と仲間達　そしてアウラがいればね」

カイトは微笑みながらそう言う

アウラ「　そうですか」

アウラの姿は見えないが微笑んでいるようにカイトは感じた

カイト「アウラ　またね」

アウラ「はい　また」

アウラの声が聞こえなくなる

カイト「みんな　またね」

カイトは笑顔でそう言う
すると紋様がいつそう輝き出す

カイト「”再誕”　発動!!」

ミッドチルダ

ノーヴェ「一体何が起きんだよ！」

チンク「わからない だが」

ギンガ「この感じる力の正体はあの人しかいないわ」

ドゥーエ「カイトIIグランツ ” 蒼炎の守護神”」

みんなは力を感じる方を見る

ゴゴゴゴゴゴ！

再び大きな力を感じる

しかも、闘竜・マグメルドを包み込むほどの光が現れる

ピカッ！！

その光を確認すると同時にミッドチルダ
れた

いや全宇宙が光に包ま

エピソード（前書き）

最終回です！

エピソード

再誕発動後、A I D A が現れたと言う報告はなかった

そしてまた、ミッドチルダに平和が訪れた

と言いたいところだけど、A I D A だけではなく全システムや機械が全て初期化されてしまい、特にミッドチルダ全域がかなりの損害を受けました

直るにはかなりの時間がかかるらしい

だけど、それだけで済んだだけでもよかったですと私は思います

だってもしかしたら世界の二つや二つ いや、それ以上がなくなっていたかもしれない

それに比べたらどうてことない

そしてこの事件は”ヘルバ”エルディ事件”もしくは”H E 事件”、”A I D A 事件”と呼ばれることになった

また、私たち機動六課は一部からは”天下無双の部隊”と呼ばれている

けど、私達だけで解決したわけじゃない

一人の優しくて身勝手な男のおかげで解決したのだ

管理局の人やこの事件の関係者くらいしか知る人はいない

”蒼炎の騎士” ”蒼炎の守護神” って言った方がいいかな？

”カイト” “グランツ”

この人のおかげでAIDAは全て駆除出来たのだ

ほんの少しだけあのときの続きを話します

光が収まった後、なんとあの巨大な闘竜が崩れ去っていたのだ

私達は直ぐにそこへ向かった

だけど残っていたのは瓦礫の山

そしてカイト君の双剣”虚空の双牙”が瓦礫の山の天辺に突き刺さっていた

必死に探したけど、結局見つけることができなかった

私達は泣いた

だけど信じている

カイト君は必ず帰って来ると

これで報告を終わりにします

機動六課部隊長 八神はやて

第108管理外世界モーリーバロウ

崖の奥深く

「ガアアアアアアア！！！！！！」

そこには大きな声が鳴り響く

邪悪な影と不気味な光

・
・

・ ・ ・ ・ ・

戦いは終わったのか？

いや、終わっていない

むしろ始まったばかりなのだ

それをなのは達、機動六課が気づくのはもっと後のことだった

魔法少女リリカルなのは 蒼炎の守護神

END

エピソード（後書き）

後書きコーナー

皆さん、おはよう・こんにちは・こんばんは作者のトライエッツTEです

この作品”魔法少女リリカルなのは 蒼炎の守護神”を見て下さってありが

ドガン！

ぎゃあああ！？

なのは「作者さん！これはどついつことかな？」

なっ、何がでしょうか？

フェイト「何がじゃないよ！この後どつなっちやつなの？」

はやて「せや！こんな中途半端に終わらせてもつてー！」「

いや待って下さい三人共、話はちゃんと続くからね

はやて「ホンマか？」

もちろんです！さすがにこんな気になる所で終わるわけないですよ

フエイト「カイトは？カイトはどうなっちゃったの？」

大丈夫 ですよ？

なのは「何かな？そのまた中途半端な答え方は？」

はやて「しかも疑問系やし」

待って待って！その凶器を早くしまつて！

これを言ったらネタバレになっちゃうかもしれないでしょ？

はやて「ならへんから早よ言いや」

はい！カイトは次の作品でも大活躍します！

フェイト「早っ!?!」

そして次はなのは達、機動六課のメンバーも大活躍する予定です!
はい!これ以上は言えません!

はやて「ほう?それは楽しみやな」

なのは「そうだね 私達なんだかんだ言っってそんなに戦闘してないし、私ももつとSLBを撃ちたいから嬉しいね」

そんなこと言ってるから”白い悪魔”って呼ばれるんだよ(ボソッ)

ドガン!

グボヘエ!?

フェイト「いきなりどうしたの!?!なのは?」

なのは「わからないけど、なんだかSLBを撃ちたくなっちゃって

」

はやて「こほん!えー、この後書きコーナーまで見てくれている読者の皆さん!」

フェイト「今までの閲覧」

なのは・フェイト・はやて「ありがとうございました」

なのは「次の作品も私達は大活躍します」

フェイト「ですので楽しみにしててください」

はやて「もちろん！ウチ達のカイト君とのラブラブシーンもな」

ふっ！あるといいけどな？

なのは・フェイト・はやて「ええっ!？」

短編集も書く予定です！何かリクエストがあったら是非書き込んで
下さい

なのは「それはどういうことなの?」

それでは

フェイト「ちょっ ちょっど!」

次の作品も

はやて「待たんかい！」

よろしくね〜

なのは・フェイト・はやて「待って〜〜!?!?」

はやてとの一夜(前書き)

番外編というか短編を書いてみました

良ければ読んで下さい

はやてとの一夜

カイト「はあ」

いきなりため息をするカイト

今カイトが居る場所ははやての部屋の前である
言うことを聞くとは言ったがさすがに女性の部屋に入り寝るのはかなり抵抗があるようだ

カイト「まあ 約束しちゃったし 入ろう」

プシャー プシャー

カイト「 何だ今のは？／／／」

ドアを開けたカイト、何を見たのか顔を赤らめて呆然としている
すると

プシャー

はやて「カイト君！何で入らんのや？」

カイト「うわっ！？はやて、服っ！服を着て！／／／」

ドアから現れたのは風呂上がりなのかバスタオル一枚しかつけていないはやてだった

はやて「何や？遅れてきたくせに文句を言っんか？」

カイト「いや、遅れたのは悪かったから早く服を着て下さい」

数分後

なんとかはやてに服を着させることに成功しホツとするカイト

はやて「それでカイト君、何で遅れたん？」

カイト「いや、ちょっとシャーリーに会っていたんだ」

はやて「ほう？ カイト君はウチとの約束をほっぽりだしてシャーリーと会ってたんか？」

いきなり黒いオーラを出しながらカイトを睨みつけるはやて

カイト「そんなわけないじゃないか。ちょっとやって置きたいこと

があってね」

はやて「ふん。ならえんやけど」

嘘はついていないと感じたはやてから黒いオーラが収まる

カイト「それじゃあ、そろそろ寝ようよ。明日に響く」

はやて「せやな　ってカイト君、何しとるん？」

カイト「えっ？いや、寝るところを作っているんだけど」

カイトはソファで寝るために枕などを用意をしていた

はやて「何言つとるんや？カイト君はウチと同じベッドに寝るに決まっとるやないか」

カイト「えっ!？」

カイトははやての発言に驚く

カイト「ほ、本当に？」

はやて「当たり前や！早くこっちに来てや」

カイト「いや、さすがにそれは」

はやて「ええから早よ来んかい！」

カイト「うわっ!？」

抵抗するカイトにはやてはカイトの腕を掴みベッドに倒れこむ
今、二人の状況はお互い向き合って寝ている

カイトは脱け出そうとするもはやての一言により諦めることに

はやて「　ウチと一緒に寝るんわ、そんなに嫌か？」

カイト「うっ！」

はやてはカイトに体を密着した状態で上目遣い＋涙目でカイトを見
つめている

しかも、ベッドの上なので威力は倍になる

カイト「はいはい　わかったよ」

そんな状況で断れる筈もなく承諾するカイト

はやて「ありがとな」

涙目だったはやては直ぐに笑顔になる

カイトはそのときに思った女性の涙には適わないなと

カイト「すうすう」

はやて「はあ」

二人が一緒に眠り始めて数十分後

カイトはすでに夢の中なのだが、はやてはまだ起きていた

はやて「こんな筈やなかったんやけどな」

そう呟くとはやてはカイトの顔を見る

はやて「そもそも最初のあれやって上手く行かへんかったし」

”あれ”とはもちろんカイトの前でバスタオル姿を見せたことだ

はやて「ただでさえ、なのはちゃんやフェイトちゃんにスタイルが負けるんやから大胆に見せてカイト君をメロメロにしたろうと思つてたんに」

それは呆気なく失敗に終わり、はやての心はかなりのダメージを与えていた

はやて「やっぱり魅力ないのかな」

はやてが一人落ち込んでいると

カイト「うん」

ギュッ!

はやて「えっ? / / /」

いきなりはやてに抱きついてくるカイト

はやて「だっ、駄目やでカイト君！まだ心の準備が ってあれ？」

カイトは抱きついたらま動かかない
どうやら寝ぼけているのだろう

はやて「なっ、なんや 期待して損したわ／＼」

と言っではいるものの実際は残念であるが半分はホッと安心して
いると言っ複雑な気持ち

そして、しばしの沈黙が続く

はやて「／＼／」

はやては抱きつかれて身動きがとれないが顔を赤らめ幸せそうな顔
をしている

はやて「寝顔はこんなに可愛いんやけどな」

はやてはカイトの顔を見ながら呟く

はやて「そして普段はおもしろくて優しくて格好良くて そんなカ
イト君に私は 「うーん」「？」

カイトがいきなり何かを呟き始める

はやてはそれを聞こうと耳を傾ける

カイト「みんなは 僕が 必ず 守るから 安心して ね」

チュツ！

はやて「！？／／／」

カイトはそんな寝言を言いながらはやてのおでこにキスをする

はやて「お願いな ウチのヒーローはん」

はやては笑顔になりながら眠りについた

カイト「ああ 恥ずかしかった」

実はカイトは起きていた

寝た振りをしていたのだが途中、はやてが何かを呟いていたので聴いてみたがメロメロとか意味がよくわからなかった

しかし、はやてが落ち込んでいるのはわかったのでとりあえず抱きしめてみた

顔はよく見えなかったが喜んでいたのは理解できた

なので最後にはあんな言葉とキスをしたのだがやっぱり恥ずかしかったようだ

カイト「さっさと寝よう」

カイトはそう呟いて目を閉じたのであった

はやて「まさか起きていたとは思わへんかったわ／＼／＼」

なんと抱きしめられて眠っていたかと思っていたはやてはまだ起きていた

はやて「（なんか負けたようでなんか悔しいな）」

はやてはうーんと何かを考える
そして、何か思いついたようだ

はやて「（明日覚えとき）」

と思いながら眠りにつくはやて

その顔はとても幸せそうだったとか

はやてとの一夜（後書き）

どうでしたか？

楽しく読んでいただけただけでしょうか？

たまに、こんな短編を書かせていただきます

リクエスト募集します！

どんどんご連絡下さい！

もちろん、違う作品でも構いません！

親子の絆（前書き）

短編第2弾！

楽しんでいただけたら嬉しいです！

親子の絆

陸士108部隊 入り口

ギンガ「」

そこには少し暗い表情をしたギンガがいた

ギンガ「まだかな」

どうやら誰かを待っているようだ

「おゝい！ギン姉〜！」

誰かがギンガを呼びかけている

ギンガ「スバル！」

それはスバルだった

ギンガは直ぐにスバルの下へ駆け寄った

スバル「ギン姉、ごめん！少し遅れちゃって」

ギンガ「いいのよ それで カイトさんは？」

ギンガは辺りを見渡す

スバル「えっと カイトは 少し遅れるって」

ギンガ「そう」

ギンガはカイトが居ないことに落ち込む

カイト「僕ならここにいるけど？」

ギンガ「キャッ!？」

バキィッ!

カイト「ぐはっ!？」

いきなりギンガの背後から現れたカイト

しかし、背後から現れたのが仇になり、ギンガの左ストレートが気持ちよく決まり吹き飛ばす

スバル「ギっ、ギン姉!」

ギンガ「えっ? あっ! ? カイトさん、ごめんなさい!」

ギンガはスバルの呼びかけで我に帰り吹き飛ばしたカイトに謝る

カイト「いや 落ち込んでいるだろうギンガを元気付けようと驚かせようとした僕が悪かった」

ギンガ「えっ」

スバル「そうだよ、ギン姉！私達がここの近くに着いたとき入り口付近に落ち込んだギン姉がいるんだもん！だから私とカイトが元気付けようしたんだよ！」

カイト「もつとも、スバルは何もしてないけどね」

スバル「あつ！酷い！ちゃんと時間稼ぎしたじゃん！」

カイト「あれくらいなら犬にでもできるよ」

スバル「うわっ！それはさすがに言い過ぎじゃない？」

ギンガ「ふっ　ふふふ」

思わず笑い出してしまうギンガ

カイト「どうやら元気が出たみたいだね？」

ギンガ「はい」

スバル「それじゃ早く行こ？」

スバルがそう言うとカイトとギンガの手を掴み中へと入っていった

陸士108部隊 応接室

「うーむ」

1人の年配そうな男性がソファーに座りながら考え込んでいる
この男性はゲンヤ・ナカジマ
階級は三佐

ここ108部隊の部隊長である

ゲンヤ「ギンガの奴、こんな忙しい時に話したいことがあるとか言
い出しゃがってどうしたんだ？」

うーむとまた考え込むゲンヤ

ゲンヤ「もしや、男が出来たから紹介したいと言っくんじやないの
か？」

そう呟いていると

ギンガ「父さん入るよ？」

ガチャ

ゲンヤ「!？」

ゲンヤは入って来たメンツに驚く
ギンガとスバルはまだいいとして、もう1人自分の知らない男が
緒に入ってきた

ギンガ「ほらカイトさん、ここに座って」

カイト「いや、僕は立ってるよ」

スバル「いいからいいから！ほら早く」

ギンガとスバルに座らされるカイト

そして何故か2人は挟むようにカイトの隣に座る

カイト「あの 何で隣に？」

スバル「いいからいいから」

ギンガ「気にしない気にしない」

ゲンヤ「」

戸惑うカイトに笑顔なギンガにスバル

そしてそんな3人を見て呆然としているゲンヤ

ギンガ「あつ！父さん。この人はカイト＝グランツさん」

カイト「こ、こんにちは」

軽く会釈するカイト

ゲンヤ「ギンガ」

ギンガ「んっ？何？」

ゲンヤ「話したいこととはこの男のことなのか？」

ギンガ「うーん ちよつと違うけど似たようなものかな？」

ギンガの中途半端な答えにゲンヤは

ゲンヤ「（やはり、話したいこととは男のことだったのか！）」

かなりの勘違いをしていた

ゲンヤ「（一体どのような男なのかしつかり調べなければ）」

スバル「お父さん、どうしたの？」

ゲンヤ「いや、何でもない カイトと言ったか？」

カイト「あっ！はい！」

いきなり呼ばれ少し驚くカイト

ゲンヤ「お前さんはスバルとギンガどう思っている？」

カイト「えっ」

カイトはゲンヤの質問に考える

カイト「2人とも大切な人(仲間として)です」

スバル・ギンガ「／／／」

ゲンヤ「ほう (それはギンガとスバル、両方と付き合いたいと言
うことか?)」

カイトの無意識な返事にスバルとギンガは顔を赤らめる
そしてそんな2人を見たゲンヤはまたさらに勘違いをしてしまう

ゲンヤ「お前さんは俺の娘達を守れる自信があるのか？」

カイト「はい！もちろんです！」

ゲンヤ「そうか (ほう？なかなか良い目をしゃがるな)」

真剣に答えるカイトの表情をよく観察するゲンヤ

スバル「(ねえ、ギン姉?)」

ギンガ「(何？スバル)」

スバル「(何かお父さん、おかしくない?)」

ギンガ「(ええ 私もそう思っていた所よ)」

ゲンヤの様子がおかしいことに気づき始める2人

だがカイトは何も気づいていなかった

ゲンヤ「その様子だと娘達の秘密は知っているようだな？」

カイト「はい！でも大切な人（仲間として）を守るのにそんな些細なこと関係ないです！」

ギンガ「（カイトさん）／／／」

カイトのその言葉に喜ぶギンガ
それはスバルも同じだった

ゲンヤ「ふっ」

カイト「？」

いきなり笑い出すゲンヤを不審に思うカイト

ゲンヤ「お前さんなら娘達を任せられるか」

スバル「えっ？」

ギンガ「父さん、何言ってる」

ゲンヤ「娘をよろしく頼む、幸せにしてやってくれ」

カイト・スバル・ギンガ「

は？」

ゲンヤが深々と頭を下げながらそう言う

3人はあまりのことに全く同じ反応をしてしまう

ギンガ「ちょっと父さん！何言ってるの！」

ゲンヤ「それでいつ、式をあげるんだ？」

スバル「式”！？／／／」

スバルとギンガの話を全く聞かないゲンヤ
しかも話がさらに肥大していた

ゲンヤ「しかし、2人一緒に式をあげるとすると色々準備しない
といかな？」

カイト「いやいや、ゲンヤさん。まず法的にヤバくないですか？
違う世界であげないと」

スバル「カイト！突っ込む所が違つでしょ！？」

ギンガ「父さんもいい加減にしなさい！！」

バシッ！

ゲンヤ「くはっ!？」

ギンガは話を聞かないゲンヤを殴りつける

カイト「ちょっ!そこまでやる!？」

ゲンヤ「ははははっ!すまんすまん!ギンガが話したいことがある
って言うからてつきり彼氏でも紹介するもんだと思っていたからな。
お前さんもすまなかつたな」

カイト「いえいえ、誤解が解けて良かったですよ」

そう言いながら笑うゲンヤ
あれから数分、勘違いしたゲンヤを必死に事情を説明し説得するこ
とに成功

ゲンヤ「それにしてもよ、ギンガ お前いつもそんな事を考えてい
たのか？」

ギンガ「うん たまにだけどね？」

ゲンヤ「そうか」

ギンガ「あっ」

ゲンヤはそつとギンガの頭を撫でる

ゲンヤ「お前達は大事な娘だ。そんな大事な娘を恨む親がいるか？」

ギンガ「うん うん そうだよね？」

ギンガはそつと呟き笑顔になる

カイト「良かったね」

スバル「うん」

そんなギンガを見て笑顔になるカイトとスバルだった

そしてカイトはそのとき親子の熱い絆を感じたのであった

ゲンヤ「何だ？もう帰っちゃうのか？」

あれから数時間

カイト達は世間話や何やらを話していた

しかも、何故かカイトはゲンヤと話が合い仲良くなり敬語だったのが普段通りになっていた

カイト「うん。訓練もあるし、はやてには無理言っただけだからね」

スバル「うん！八神部隊長も早めに帰って来るようになって釘を刺されたし」

ゲンヤ「たく あのチビダヌキは相変わらず忙しいようだな？少しはゆっくりすればいいものの」

スバル「ははは（多分、理由は違うと思うけどね）」

スバルはそう思いながら苦笑する

ゲンヤ「おっ！そうだ、カイト。さっきの話だがお前さんなら大歓迎だぞ？」

ギンガ「ちょ ちよっと、お父さん／／／」

さっきの話とはゲンヤが勘違いして言った婚約の話だ

カイト「ははは、ゲンヤさん。僕なんかじゃ、美人で可愛い2人にっぴりあう訳ないじゃないか？」

スバル・ギンガ「／／／」

2人は顔を赤くしながらも少し落胆している

カイトの恋愛対象にされていないことに落ち込んだようだ

ゲンヤ「そうには思えないがな まあ、前向きに考えてくれ」

カイト「うん。それじゃ、またね」

スバル「バイバイ！父さん、ギン姉」

そう言いながら後ろを向き帰る2人

ギンガ「」

ギンガはそんな2人を羨ましそうに見ていた

カイト「　　お〜い！ギンガ！」

ギンガ「？」

いきなり振り向きギンガに声をかけるカイト

カイト「もし、何か心配事や悩み事があったら連絡してよ！また今日のように一緒に居てあげるから！」

そう言ったカイトは振り返り帰って行った

ギンガ「　カイトさん／＼／」

ギンガは顔を赤らめカイト達が見えなくなるまで見送っていた

ゲンヤ「良い男だな　ギンガ」

ギンガ「はい」

ギンガは今日、一番の笑顔を見せ隊舎に戻っていった

スバル「ねえ、カイト」

カイト「何？」

スバル「カイトってさ」

スバルはニヤニヤしながらカイトを見る

カイト「なっ 何？」

スバル「カイトってやっぱりとっても優しいよね」

カイト「何言ってるのさ そんなことないよ／＼」

恥ずかしいのか顔を赤らめ苦笑するカイト

スバル「それでさ もし私も心配事や悩み事があつたら一緒に居てくれる？／＼」

スバルは俯きながらカイトに聞く

カイト「さあね？スバルに心配事や悩み事は無縁そうだしね？」

カイトはさっきの仕返しとばかりにニヤニヤ笑いながらスバルに言う

スバル「ううっ」

ポンッ

カイト「ふふ、冗談に決まってるでしょ？スバルもなんかあったら僕に言いなよ」

カイトはスバルの頭を撫でながらそう言った

スバル「 うん ありがとう、カイト 」

そのまま2人は仲良く帰って行った

しかし、話はまだ終わっていなかった

カイト「 あの はやて？ 」

はやて「 なんや？ 」

カイト「何故、僕はこんな所で正座をさせられているんでしょうか？」

現在、カイトははやてに呼ばれて部隊長室に来たのだが来た瞬間、

有無を言わず正座をさせられている

もちろん抵抗しようとしたのだが、はやての背後から恐ろしい程のオーラを感じ取り何も言わず従うことにした

はやて「実はな？師匠ことナカジマ三佐が娘達が世話になったとお礼の連絡が来たんや」

カイト「えっ？それなのに何で僕は正座させられてんの？」

はやて「話はまだ終わってへんよ。そして師匠が最後にこう言ったんや」

”ゲンヤ「最後にカイトに言っといてくれスバルがギンガむしろ？人を選んでくれても構わないからなとではな」”

カイト「」

カイトはあまりのことに呆然としている

はやて「一体どう話したらこんな風になるんやろつな」

カイト「あー 僕用事を思い出したから行くね？」

シュツバ！

カイト「なっ！？バインド!?!」

逃げようとしたカイトをすぐさまバインドで捕まえる
誰がやったかと言うと

なのは「カイト君、どこに行くのかな？」

フェイト「逃げようとしても無駄だよ」

それはデバイスとバリアジャケットを装着したなのはとフェイトだ
った

はやて「それじゃカイト君。じっくりと細かく説明してもらおうか
？」

カチャン！

カイトは振り向くとなのは達と同じようにデバイスとバリアジャケ
ットを装着したはやてだった
しかも3人ともデバイスをカイトに向けている

カイト「一応聞いておくけど、僕に否定する権利は」

なのは・フェイト・はやて「ない!!--」

カイト「なんか、デジャヴうううう!」

ドガーン!

カイトは叫んだ瞬間光に包まれたのであった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2506k/>

魔法少女リリカルなのは 蒼炎の守護神

2010年10月11日18時51分発行